

ありふれない月の眷属がいるのは間違っているだろうか

クノスペ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

これはある男の話

どの物語にも英雄譚にも綴られない物語

男の胸に残るものは『女神との約束』

目次

序星：ある男の話	1
睦月：奈落の吸血姫	
1星：ありふれた日常からの別れ	4
2星：異世界トータス	10
3星：ハイリヒ王国にて	16
3・5星：ある男の話(2)	19
4星：ステータスとステイタス	22
5星：武器庫にて	30
6星：訓練といじめ	34
7星：月夜の約束	39
8星：迷宮の罟	43
9星：悲劇壊幕	49
9・5星：クラスメイトside 残された者たち	55
10星：奈落の底で光る星【上弦】	58
10星：奈落の底で光る星【下弦】	62
11星：分の悪い賭け	66
12星：宿敵との決着【上弦】	72
12星：宿敵との決着【下弦】	75
12・5星：クラスメイトside 失意と決意【上弦】	80
12・5星：クラスメイトside 失意と決意【半月】	84
12・5星：クラスメイトside 失意と決意【下弦】	88
13星：脱出のタイムリミット	91
14星：予想外の強敵	96

15星：奈落で照らす小さき月【上弦】 | 101

15星：奈落を照らす小さき月【下弦】 | 105

16星：封印が解かれし吸血姫 | 110

17星：休息と語らい【上弦】 | 116

17星：休息と語らい【下弦】 | 121

17・5星：クラスメイトside 悪夢との対峙 | 124

18星：怪物の宴 | 128

19星：宴の主催者 | 133

20星： ■ ■ の ■ ■ な ■ ■ 【上弦】 | 137

20星： ■ ■ の ■ ■ な ■ ■ 【半月】 | 144

20星：女神の無垢な加護【下弦】 | 148

21星：反逆者の住処 | 153

22星：オスカー・オルクス | 156

23星：旅立ちとランクアップ | 161

165
23・5星：クラスメイトside 帝国と勇者たち【上弦】

168
23・5星：クラスメイトside 帝国と勇者たち【下弦】

如月：峡谷の白兔

24星：谷にて跳ねる青兔 | 172

25星：兔少女の事情 | 177

26星：帝国兵とそっち側 | 182

27星：ハルツィナ樹海【上弦】 | 187

28星：ハルツィナ樹海【下弦】 | 192

29星：覚悟の引き金 | 199

30星	生まれ変わったハウリア【上弦】	203
30星	生まれ変わったハウリア【下弦】	209
31星	ブルツクの町【上弦】	215
31星	ブルツクの町【下弦】	219
32星	第2の迷宮	224
33星	ミレデイ・ライセン【上弦】	229
33星	ミレデイ・ライセン【下弦】	234
34星	迷宮最後の試練【上弦】	239
34星	迷宮最後の試練【半月】	244
34星	迷宮最後の試練【下弦】	248
35星	ライセン大迷宮攻略完了	252
36星	人工呼吸	259
36・5星	押して駄目なら押し倒せ	263

弥生：黒竜と海人の少女

37星	次なる目的地へ	267
38星	護衛任務	272
39星	冒険者ギルド	277
39星	冒険者ギルド	283
39星	冒険者ギルド	287
40星	冒険者ギルド	292
40星	恩師との再会【上弦】	298
40星	恩師との再会【下弦】	303
41星	深夜の密会	307
42星	北の山脈地帯へ	312
43星	彼女の本音	317
44星	忍び寄る気配	317
45星	黒竜【上弦】	317

45星：黒竜【下弦】	321
46星：テイオ・クラルス	326
47星：間が悪かった	330
48話：寂しく悲しい生き方	335
49星：人造の女神	339
50星：防衛 ウルの町【上弦】	344
50星：防衛 ウルの町【下弦】	348
51星：英雄の資格	353
52星：死と決着	358
53星：覚悟 そして別れ	362
54星：帰りの車内	366
55星：帰還 フューレンの町	371
55・5星：買い出しと観光	376
56星：救出作戦	381
57星：ハジメパパ	385
幕間：オリオンのいないオラリオ	
幕間：ある月女神の話	389
幕間：ある猫人の話	393
幕間：あるエルフの話	397
幕間：あるハイエルフの話	403
卯月：再会する少女たち	
58星：再び、ホルアドに	409
59星：友の下へ	413
60星：私の英雄	417
61星：魔人族戦	423

	6 2 星：再会	428
	6 3 星：想いを告げる少女たち【上弦】	433
	6 3 星：想いを告げる少女たち【下弦】	437
	6 4 星：決闘	442
	6 5 星：月と星	446
	6 6 星：二つ名	450
	6 6・5 星：三星と天之河【上弦】	454
	6 6・5 星：三星と天之河【下弦】	458
	6 7 星：砂漠のトラブル	462
	6 8 星：穢れたオアシス【上弦】	467
	6 8 星：穢れたオアシス【下弦】	471
	6 9 星：第3の迷宮	475
	7 0 星：大火山の最終試練【上弦】	480
	7 0 星：大火山の最終試練【下弦】	484
	7 1 星：一時の別れ	488
	7 2 星：アンカジ公国への帰還	495
	7 3 星：エリセンにて再会	500
	7 4 星：母と娘【上弦】	504
	7 4 星：母と娘【下弦】	509
皐月：海底の迷宮と壊れた正義		
7 5 星：次なる迷宮へ		513
7 6 星：第4の迷宮		517
7 7 星：忘れるな、その罪を		522
7 8 星：正義と星【上弦】		527
7 8 星：正義と星【下弦】		532

79星：彼の正義



538

80星：運命の日【上弦】



542

80星：運命の日【下弦】



547

81星：いつも通りの笑顔



552

序星：ある男の話

「くそっ！殺しても殺してもキリがない！」

「もうここまで…しまっ…うわああああ！」

「必要以上に戦うな！今は生きてオラリオに帰ることだけを考えろ！」

ここは【エルソルの遺跡】ここにはある怪物が封じ込められていた。その怪物の名はアンタレス、蠍のような姿の怪物であり子蠍を使役している。

かつてはある精霊がこの遺跡に封印していたが、その封印は解かれこの蠍は外界へ飛び出そうとしていた。

それを防ぐためアルテミス・フアリミアは万全の準備を整え、アンタレスの討伐へと向かった。

しかし、大蠍の力は彼女たちの想像を遥かに超えていた。

一人は、アンタレスに踏み潰され絶命した。

一人は、子蠍に囲まれて絶命した。

一人は、仲間を庇いに前に出てその仲間ごと貫かれ絶命した。

「おい！このままだと全滅だぞ！」

「諦めるな！こいつをここで仕留めないと外にまで被害が出てしまう！」

「なら黙ってあいつに殺されろって言うのかよ！」

「今は言い争っている場合でねえだろうが！」

仲間が一人、また一人と減っていくと共に戦線は崩壊してゆく。

「アルテミス様！このまま戦うか、撤退するかご判断を！」

「…仕方ありません。みんな！撤退しなさい！そしてオラリオに増援を求めます！」

「っ！聞いたかお前たち！女神を守り撤退しろ！決して恩恵を消させ

るな！」

こうしてアルテミス・ファミリアの冒険者たちはアンタレスとの戦いに敗北し撤退した。

しかし、みすみす獲物を逃すアンタレスでもなく子蠍と共に逃げる冒険者達を追い始めた。

そうして一人、また一人と追いつかれた者たちの命が奪われてゆく。

「このままだとオラリオに着く前に全員死んでしまう・・・ 奴らを足止めできる方法はないのか!？」

「そんなものがあれば初めからやってるさ!ないからこうして逃げるんだろ!」

「口を動かしてる暇があつたら走れ!追いつかれるぞ!」

もうダメなのか?アルテミスの脳裏に最悪の言葉がよぎってしまった。

そんな中、一人の男が口を開いた。

「アタランテ、アルテミスとみんなを頼むぞ。」

「何を言って・・・ まさか!？」

「ああ、俺が足止めをする。」

「ふざけ「ふざけないで!そんな馬鹿なこと私が認めると思ってるの!?!」

「けどアルテミス、あいつの足止めができるのはこの中で唯一 L V 4の俺だけだ。」

「でも!それじゃあ貴方は・・・」

「安心しろよ!俺のしぶときは水浴びを見られたお前が一番知ってるだろ?」

「こんな時に馬鹿な冗談はやめて!」

「冗談じゃねえよ、俺は必ず生きて帰る・・・ 約束だ。」

「・・・ 分かりました、ここは貴方に任せます」

「アルテミス様!？」

「しかし!必ず生きて帰ってきなさい、これは命令です。」

「その命令、しかと受け取りました。」

「…っ！アルテミス様たちは任せろ！先にオラリオで待っているからな！」

「必ず…必ず帰ってくるのよ！オリオン！」

男を残し、アルテミス・ファミリアは撤退した。

そして大蠍と子蠍の前に、男は立ち塞がった。

「よう、さつきぶりだな蠍野郎。」

「あいにく食われるのは嫌なんだな…全力で抵抗するぜ。」

「まあ、蠍に言ってもわかんねえか！」

そして男は、まるで自分自身が死ぬなんて思っていないように笑い弓矢を構え叫んだ。

「いらっしやいませええええええええ!!！」

こうして、多数の犠牲と一人の男の足止めによりファミリアの全滅は防がれた。

しかし、男がオラリオに帰ってくることはなかった。

これは、一人の男が紡ぐ物語

どの英雄譚にも綴られない物語である

睦月：奈落の吸血姫

1星：ありふれた日常からの別れ

「はあ…： またあの夢か…：」

そんな言葉と共に俺は、あまり良い目覚めとは言えない朝を迎えた。

近頃、同じような夢をよく見る。

アルテミスと呼ばれる女性やその仲間達が蠍の化け物から逃げ、オリオンと呼ばれる男が足止めし命を散らす、そんな夢。試しにネットで調べてみても出てくるのはギリシャ神話の話ばかりで、あのような物語には掠りもしない。

そして胸に残る、喪失感と罪悪感

これが何日も続けば嫌でも記憶に残ってしまう。知り合いに話そうものなら痛い奴扱い間違いなしであろう。

「つて、朝飯食って学校行かねえと」

こうして俺、三星弓人の1日はまた始まっていく。

この時にはあんなことになるとは欠片も考えていなかった。

「はあく、もういつそのことあの夢を書いて本でも出そうかなあ…：」
そんなくだらないことをボヤいていると、見知った背中が見えてきた。

「おっす、今日も眠そうだなハジメ」

「あつ、おはよう弓人」

こうして俺は友人の南雲ハジメと共に学校へ向かってゆく。

「その感じだと、また親の手伝いか？」

「うん、母さんの漫画の締め切りがギリギリだったからほぼ徹夜でベタ塗りをしてたよ」

「それは災難だったな、どうだ？ジュース1本でノートの写しを請け負うが」

「よし買った」

そんなことを喋りながら教室のドアを開けるとクラスから敵意を孕んだ視線がハジメに向けられた。そして

「よお、キモオタ！ また、徹夜でゲームか？ どうせエロゲでもしてたんだろ？」

「うわっ、キモ〜。エロゲで徹夜とかマジキモイじゃん〜」

何が面白いのかゲラゲラと笑う男たち

ハジメに話しかけてきた男子生徒は檜山大介といい取り巻きの齋藤・近藤・中野と共に飽きずにハジメを馬鹿にする小悪党達である

「朝から元気だな四馬鹿」

「ああん？なんだよ三星、お前には関係ねえだろ」

「こっちは朝から寝不足のせいもあってお前らの金切り声で頭がいてえんだわ」

「あ、あ!?! 喧嘩売ってんのか!」

このようにハジメが馬鹿にされたら、弓人が煽りハジメへのヘイトをそらす、これもいつもの事である。

ハジメは世間一般から言われる要素は無いと思う。身だしなみは最低限整っており、コミュニケーション能力は積極的では無いにしろできないわけではない。ではなぜここまで馬鹿にされているのか、それは近づいてきた彼女にある。

「南雲くん、おはよう！ 今日もギリギリだね。もつと早く来ようよ」

ニコニコと微笑みながら近づいてくる彼女の名は白崎香織、俺とは昔からの友人で俗に言う幼馴染というものだ。

学校では二大女神と呼ばれておりその端正な顔立ちから男女問わず人気である。そしてハジメにもフレンドリーに接してくれる数少ない例外であり、この事態の原因でもある。

それは、彼女はハジメによく構うのである、傍から見れば不真面目なハジメを気にかけているように見える。実際はそれだけでは無いのだが。

それに対してハジメは『趣味の間に人生』をモットーに生きているため授業中の居眠りなどの授業態度の改善をしようとしていない。

そのためクラスメイトから「なんであいつだけ」と嫉妬の対象に

なつてしまひ女子からは「不真面目な奴」と言う認識で侮蔑の視線を向けられるため、このような状態になっている。

「あ、ああ、おはよう白崎さん」

「なあ香織、俺もいるんだが？」

「あー弓人君、おはよう！」

「やっぱり気づいてなかったか・・・」

それに対して更にハジメへの眼光が鋭くなるクラスメイトたち、挨拶くらい別にいいだろうに・・・そう思わずにいられなかった。そんなことを思っていると2人の男子生徒と1人の女子生徒がこちらに歩いてくる。

「南雲君、弓人おはよう。毎日大変ね」

「香織、また彼の世話を焼いているのか？ 全く、本当に香織は優しいな」

「全くだぜ、そんなやる気ないヤツにやあ何を言っても無駄と思うけどなあ」

3人の中で唯一挨拶してきたのは女子生徒の名は八重樫雫。香織の親友であり彼女も幼馴染でポニーテールにした長い黒髪がトレンドマークであり彼女の実家は剣術道場をしているため、そこで彼女とは出会った。

次に少し臭い台詞を吐きながらきた男子生徒は天之河光輝、いかにも勇者の名前のようなこいつは容姿端麗・成績優秀・スポーツ万能の完璧超人だ。こいつとは雫の道場で出会ったのだが、あまりそりが合わない。そのため事あるごとにぶつかり雫や香織が間に入るのがお約束になっている。

最後に投げやりに話しかけてきた男子生徒は坂上龍太郎、脳筋である。

悪い奴では無いのだが努力といった根性論が好きなたため、基本的に努力をしないハジメみたいな人間は嫌いであり、基本どっちつかずの俺ともあまり良好ではない。

「おはよう、八重樫さん、天之河君、坂上君。まあ、自業自得とも言えるから仕方ないよ」

「おつす雫、俺はいつも通り思ったことを言ってるだけだ」

「それが分かっているなら直すべきじゃないか？　いつまでも香織の優しさに甘えるのはどうかと思うよ。香織だって君に構ってばかりはいられないんだから」

いつものごとく天之河がハジメに忠告して内心鬱陶しいと感じている時に香織から爆弾が投下された。

「光輝君何言ってるの？　私は南雲くんと話したいから話してるだけだよ？」

その爆弾により教室は騒然となりクラスメイトからはもはや殺意に似たものをぶつけられている。

「え？… ああ、ホント、香織は優しいよな」

それに対して天之河の中で香織の発言はハジメに気遣ったものだと解釈されたらしい。こいつは自分の正しさを疑わないせいで、変なご都合解釈が生まれてしまう、それが俺とそりの合わない原因の一つでもある。そんなことを考えているとその矛先が俺にも向けられた。「そして三星もだ、挨拶も返さないしいつもギリギリで学校に来てもう少ししっかりしたらどうだい？」

「はいはい、気をつけますよ」

「またそんな投げやりに応えて… 昔から君は「そんなことより席に座らせてくれよいい加減鞆持つてる腕が疲れるんだわ」

「いい加減にしろ！」

「それと早くしないと先生が来るぞ」

「つく！話は次の休憩時間だからな！」

こうして天之河とそばにいた坂上は自分の席へと戻っていった。

「ごめんなさいね？南雲君、二人共悪気はないのだけど…」

そう言って一人残り申し訳なさそうに謝る八重樫さんにハジメは苦笑いという回答をした。

「それと弓人、もう道場には帰ってこないの？」

「またそれか？何度も言っただろ」

「でも、あれはあなたが悪いわけじゃ無いし…」

「もう良いんだよ、勉強に集中したかったし」

俺は高校に進学する際に道場を辞めている、理由は天之河との対立である。天之河は道場でも人気があったこともあり、事あるごとに口論になっていた俺は、道場では肩身が狭かった。そのことが煩わしく感じた俺は雫や師範からの説得を受けたが辞めることにした。そのため雫からは道場へ戻ってくるように言われるが、今のところ戻るつもりはない。

そうこうしている内に始業のチャイムが鳴り教師が教室に入ってきた。そしていつも通りの授業が始まった。

「ほれ、これノートな」

「ありがとう、ジューズは放課後でいい？」

「ん？別に良いが教室出なくて良いのか？」

昼休みになり、俺はハジメに約束のノートを渡すと寝ぼけているのかハジメは10秒チャージのゼリー飲料を飲み即座に机に突っ伏して寝ようとしていた。

「南雲君珍しいね、教室にいるの。お弁当？ よかったら一緒にどうかな？」

香織は弁当を持ってハジメのところに来た。いつもはすぐに教室から出るハジメも徹夜明けの月曜日が効いていたのか今回は逃げそびれたらしい。

「あゝ、誘ってくれてありがとう白崎さん。でも、もう食べ終わったから天之河君達と食べたらどうか？」

「えっ！お昼それだけなの？ダメだよ、ちゃんと食べないと！私のお弁当分けてあげるね！」

最後の抵抗としてゼリー飲料のパッケージを見せながら断ったがそれを香織に即座に切り捨てられた、助けを求め俺の顔を見てきたハジメに向かい一言。

「強く生きろ」

「裏切り者！」

神はいないのか!?そんなことを考えていた中ハジメに思わぬ助け

舟が来た。

「香織、こつちで一緒に食べよう。南雲はまだ寝足りないみたいだしさ。せつかくの香織の美味しい手料理を寝ぼけたまま食べるなんて俺が許さないよ?」

爽やかに笑いながら気障なセリフを吐く天河に一種感心を覚える中、天然の香織は

「え?なんで光輝くんの許しがいるの?」

「ブフツ!」

素で聞き返し一刀両断した香織に思わず雫が吹き出し俺は笑いを堪える羽目になった。

しかし、学校で有名な4人組に囲まれているハジメが不憫なためそろそろ助け舟を出そうと腰を上げかけた時。

その瞬間、周囲が凍りついた。

ハジメの目の前、天河の足元に純白に光り輝く円環と幾何学模様が現れたからだ。その異常事態には直ぐに周りの生徒達も気がついた。全員が金縛りにでもあったかのように輝く紋様、俗に言う魔法陣らしきものを注視する。

そして俺の背中が熱を持ち、そのおかげもあり他より早く動くことができた。

「っ…なにポーっとしてんだ!早く逃げろ!」

俺は叫ぶように周囲に言うとうとうやく硬直が解け悲鳴を上げる生徒達。未だ教室にいた畑山先生が咄嗟に「皆!教室から出て!」と叫んだのと、魔法陣が教室全体を満たし光ったのは同時だった。

数秒か数分か、光によって真っ白に塗りつぶされた教室が再び色を取り戻す頃、そこには既に誰もいなかった。蹴倒された椅子、食べかけのまま開かれた弁当、散乱する箸やペットボトル、教室の備品はそのままにそこにいた人間だけが姿を消していた。

2星：異世界トータス

恐る恐る目を開けるとそこには巨大な壁画があつた。そこには後光を背負い長い金髪を靡かせうつすらと微笑む中性的な顔立ちの人物が描かれていた。一般的な感性から見ても美しいと感じられる絵なのだが、これに対して俺は妙な胡散臭さを感じた。

周囲を見渡すと、教室にいた俺たちは大理石の広間にいるらしい。隣にいるハジメに目を向けてみると、この手の漫画やラノベを読んでいることもあり呆然としているクラスメイトと違い比較的冷静でいられたようだ。

「なあハジメ…これって…」

「うん…多分そう言うことだと思う…」

「まじかよ…そんなファンタジーやメルヘンじゃあるまいし…」

そんなどこかで聞いたことのあるような台詞をぼやいていると。

「ようこそトータスへ。勇者様、そしてご同胞の皆様。歓迎致しますぞ。私は、聖教教会にて教皇の地位に就いておりますイシユタル・ラングバルドと申す者。以後、宜しくお願い致しますぞ」

と豪華な服を着た聖職者が、錫杖を鳴らしながら前に出て好々爺然とした微笑と共に話しかけてきた。

現在、俺たちはイシユタルと名乗った聖職者に連れられテーブルが幾つも並ぶ広間にいた。俺は雫の隣に座り、その隣にハジメが座ったあたりで全員が席に着いたのかメイド達がカートを押しながら入ってきた。

日本では一部の店でしか見ることができないメイド服、さらにそのメイド達の容姿が整っていることもあり思春期の男子生徒の大半は凝視しそれに女子生徒は冷たい眼差しを向けている。

そんな俺も思春期の男の子という業から逃れられず自分好みのメ

イドがいらないか目を向け…。 ようとした瞬間、背筋に悪寒を感じ咄嗟に振り返ったがそこには誰もいない。

「どうしたの弓人？急に振り返ったりなんてして」

「いや…。急に悪寒が…。」

「なにそれ？」

「でも…。いやすまん雫、俺も冷静じゃなさそうだ…。」

少々強引に話を終わらせた直後、イシュタルが口を開いた。

「さて、あなた方においてはさぞ混乱していることでしょう。一から説明させて頂きますのでな、まずは私の話を最後までお聞き下され」
そして話した内容を要約すればこうなる。

この異世界はトータスと言う

現在、人類と魔族の戦争が何百年も行われている

しかし最近になり、魔族の戦力が増大し押され始めた

どうしようかと困っていたところ、神エヒトからの増援として俺たちは呼ばれた

といったところだ。これを聞くとよくある異世界系の小説が思いつくがそれをされる立場になるとは思いもしなかった。

そしてイシュタルは神託を受けた時を思い出しているのか恍惚と
していた。

「ふざけないで下さい！ 結局、この子達に戦争させようってことでしょ！ そんなの許しません！ ええ、先生は絶対に許しませんよ！ 私達を早く帰して下さい！ きつと、ご家族も心配しているはずですよ！ あなた達のしていることはただの誘拐ですよ！」

そんな中、ぶりぶりと効果音が付きそうな怒りを表したのは畑山先生。彼女は転移する前、教室にいた中で唯一の大人である。彼女はその庇護欲をそその容姿から『愛ちゃん』という愛称で呼ばれているが、俺は彼女の生徒に対する真摯な思いを尊敬して、畑山先生と呼んでいる。

しかし、それに対するイシュタルの解答はある意味予測できる物で

あった。

「お気持ちはお察しします。しかし…あなた方の帰還は現状では不可能です」

「先ほど言ったように、あなた方を召喚したのはエヒト様です。我々人間に異世界に干渉するような魔法は使えませんのでな、あなた方が帰還できるかどうかもエヒト様の御意思次第ということですね」

「そ、そんな…」

畑山先生は脱力し、席に腰を落とす。どこか他人事であったクラスメイトも自身の状況を把握し始めたのか口々に騒ぎ始めた。

「うそだろ？ 帰れないってなんだよ！」

「いやよ！ なんでもいいから帰してよ！」

「戦争なんて冗談じゃねえ！ ふざけんなよ！」

「なんで、なんで、なんで…」

生徒達に動揺が走る中、俺は隣にいるハジメに話しかけた。

「なあハジメ、これは状況としたらどれくらいだ？」

「えっと、予測したパターンだと悪い方だけど…最悪のパターンではないよ」

「その心は？」

「最悪なのは召喚者を奴隷扱いするパターンだったりするからね、これは比較的マシな方だと思う」

そんなことをハジメに聞きながらイシュタルの方へ目を向けると、彼は特に口を挟むこともなく静観していた。しかし、その目には侮蔑が込められてると感じた。おそらく「エヒト様に選ばれておいてなぜ喜べないのか」あたりであろう。

未だパニックが収まらない中、天之河が立ち上がりテーブルを強く叩いた。その音に驚き注目する生徒達。そして全員の注目が集まったのを確認するとおもむろに話し始めた。

「皆、ここでイシュタルさんに文句を言っても意味がない。彼にだつてどうしようもないんだ…俺は、俺は戦おうと思う。この世界の人達が滅亡の危機にあるのは事実なんだ。それを知って、放っておくなんて俺にはできない。それに、人間を救うために召喚されたのなら、

救済さえ終われば帰してくれるかもしれない…。イシユタルさん、どうですか?」

「そうですね。エヒト様も救世主の願いを無下にはしません」

「俺達には大きな力があるんですよね? ここに来てから妙に力が漲っている感じがします」

「ええ、そうです。ざっと、この世界の者と比べると数倍から数十倍の力を持っていると考えていいでしょうな」

「うん、なら大丈夫。俺は戦う。人々を救い、皆が家に帰れるように。俺が世界も皆も救ってみせる!!」

その瞬間、彼のカリスマが発揮され絶望していた生徒たちに活気と冷静さが取り戻され、それに続くようにまた席を立つものが現れた。

「へっ、お前ならそう言うと思ったぜ。お前一人じゃ心配だからな…。俺もやるぜ?」

「龍太郎…」

「今のところ、それしかないわよね…。気に食わないけど…。私もやるわ」

「雫…」

「え、えっと、雫ちゃんがやるなら私も頑張るよ!」

「香織…」

いつものメンバーが天之河に賛同する。愛子先生は涙目で駄目だと訴えているが光輝の作った流れの前では無力でクラスメイト全員が賛同するのは時間の問題だった。これはまずい、そう思った俺はおもむろに手を上げた。

「あのイシユタルさん…。話の腰を折るようで悪いんですが少し良いですか?」

「む?どうなされましたかな?」

「今回の件に関して、3つほどお願いがありました」

「ふむ、申してくださいませ」

「では、1つ目は戦争が始まるまでに訓練する場所と指導する人を用意して下さい。俺たちは戦争とは程遠い環境で育ってきたのでいきなり戦えと言われてもおそらく不可能です」

「それには問題はありません、皆様にはハイリヒ王国にて訓練を受けていただきます」

よし、1つ目はOK。これでいきなり戦争しろなんて状況にはならないのが分かった上訓練の場所も用意してくれている。

「では、2つ目は戦争参加を志願制にしてその期間もある程度は用意して頂きたい」

「なっ!?おい三星！お前はこの世界の人たちがどうなっても良いって言うのか！」

「天之河、今俺はイシユタルさんと話してるんだ、だから黙っててくれ」

「…理由をお聞かせ下さりますか？」

「理由はここにいる全員が戦争で戦えると思ってるからですよ。今はその場の流れで参加しようとしてる奴もいるでしょうし、訓練してみても戦力にならない奴も出るでしょう。戦えない兵士ほど士気を下げる物はないと思いませんか？」

「…良いでしょう、では1ヶ月です。それまでに参加するか選んで頂きたい」

これで2つ目もOKだ。今は異世界に連れてこられたシヨツクや天之河のカリスマで勢いそのまま参加しようとしてたクラスメイトも1ヶ月あれば冷静な判断はできるだろう。

「ありがとうございます。では3つ目はあなた達が崇拜するエヒト様についてです。俺たちの住んでいた世界では様々な宗教がありましたがエヒトを崇拜する宗教どころかエヒトという神も聞いたことがありません」

「なっ!？」

「そのため、そちらの教えに背くようなことをしたとしても大目に見てほしく、他にはこちらの世界の宗教に入っていた者を異教徒として排除したり改宗を促すようなことはしないで頂きたい。」

「…良いでしょう…確かに聞き入れました…」

よし！これで最初の全員参加をしようとした時に比べてかなりマシになった。

イシユタルの目の奥には「余計なことをしやがって」といった感情が見てとれた。だが、このおかげで戦争が始まるまでの間の安全はとれたはずだ。

「ちなみに……あなた様は、信仰している神はいますのですか？」

「俺ですか？……俺の信仰している神は……」

「月の女神アルテミスです」

3星：ハイリヒ王国にて

戦争に参加するか1ヶ月までに決める間、俺たちは戦う術を学ぶ必要がある。いくら強大な潜在能力を手に入れたとしても使い方がわからなければ宝の持ち腐れだからだ。

俺たちの訓練場所として選ばれた「ハイリヒ王国」はこの聖教教会本山がある【神山】の麓にあるらしい。

そこへ向かうため俺たちは聖教教会の正面門にやって来た。そしてそこには雲海が広がっていた。俺達は、太陽の光を反射して煌めく雲海と透き通るような青空という雄大な景色に呆然と見蕩れ、息を呑んだ。

それを見てどこか自慢気なイシユタルに促されると、柵に囲まれた白い台座がそこにはあった。おそらく大聖堂で見たものと同じ素材で作られているであろうそれに乗ると、イシユタルは詠唱を始めた。

「彼の者へと至る道、信仰と共に開かれん——『天道』」

その瞬間、台座に刻まれていた魔法陣が輝き出し、ロープウェイのように滑らかに、地上へ向けて下っていく。

俺はこれが魔法なのかと思わず感心してしまった。そしてクラスメイト達も初めて見る魔法に興奮が抑えられないようである。

そして俺たちはまさに神の使徒と言わんばかりの演出で王国に辿り着き王宮へと足を運んだ。

王宮にたどり着くと、俺たちは真つ先に玉座の間へ案内された。

その時に王は立って待っておりイシユタルがおもむろに出した手に触れない程度の口づけをしたことにより、この世界では国王より教皇が上であるということを知った。

それから自己紹介が始まり、その流れのまま晩餐会が始まった。

俺は食事を早々に済ませるとこの国の王子にしきりに話しかけら

れている香織を尻目にベランダへと向かい夜空を見ていた。すると「お口に合いませんでしたか？」

「いえ、とても美味しかったですよ。リリアーナ女王殿下」

声をかけて来たのはこの国の王女であるリリアーナであった。

「リリイで構いませんよ。あと言葉遣いも崩してください。」

「良いんですか？なら、そうさせてもらうけど」

「構いませんよ。星、好きなんですか？」

「星というより月が好きなんだ。月はいつでも夜を照らしてくれるからな、まあこの世界の月が俺らの知ってる月と違うかもしれないけどな」

軽く笑いながら俺は言うとりリイは悲しそうな顔をしながら口を開いた。

「申し訳ございません。あなた様達にも帰る家や家族がいるにも関わらず、私たちの勝手によりこの地へ呼んでしまい…」

「ここに呼んだのはこの世界の神であつてリリイのせいじゃないだろ？」

「ですが… この世界の問題は私たちでどうにかしないといけないのに…」

「どんどん暗くなるリリイに対し、俺はなんと声を掛ければいいのかわからない… いや、あるじゃないか」

「正直なところ、俺はこの世界の人間がどうなつても別にどうでも良いって思ってる」

「っ!?!… はい」

「でもさ、こうして美味しい食事や雨風凌げる場所を用意してくれたりリイ達のためなら戦つてもいいかなとも思ってる」

「えっ…」

「俺たちの世界には一宿一飯の恩義って言葉がある、だからこの飯代と宿代くらいは働けよ」

「… ふふっ、優しいんですね。えっと… お名前は」

「弓人。三星弓人だ」

「はい！ユミトさん。お代しっかり稼いできて下さいね！」

「くくくつ… ああ！しつかり稼いできますよ。王女殿下」

こうして晩餐会は終わり、俺たちは各自与えられた部屋へ行き、俺は疲れていたこともあり現実から逃避するように眠った。

「おかしい！なんで所々雑な貴方が私より大きい獲物を捕らえてくるのよー！」

「そんなこと言ったってしらねえよ、たまたま俺が見つけた獲物が大きかったんだろ」

「もう一回勝負よ！今度はあそこで飛んでいる鳥を撃ち落とした方の勝ちよ！」

「はあ!?約束違うぞ！この勝負に勝ったらお前のファミリアに入らせてくれる話だろ！」

「うつ… わ、分かったわよ！入れてあげるからもう一回勝負しなさい！」

「へへっ、入らせてくれるなら問題ねえよ！今度も俺が勝つからな！アルテミス！」

「様をつけなさい！オリオン！」

3. 5星：ある男の話（2）

ここは、オラリオから離れた森の中。そこに1柱の女神と1人の男がいた。

「不服ながら… 非常に！不服ながら貴方に【神の恩恵】^{ファアルナ}をあげるわ」「2回も言うなよ!? そんなに俺をファミリアに入れるのが嫌か!」

「当たり前よ！誰が好き好んで私の水浴びを覗いだ男を入れたがるのよ!」

「だからあれは事故だって言ってるんだろ！俺は魚を釣りに来ていただけだ!」

「事故だとしてもよ!」

「分かった！分かったからそのファアルナ？をくれよ」

「くくく!!!はあ… 分かったわよ、じゃあ上を脱いでそこにうつ伏せになつて」

「は？なんだよ、自分が見られたから今度は俺のを見ておあいこつてことか?」

「違う！【神の恩恵】^{ファアルナ}は【神の血】^{イコル}を媒介に【神聖文字】^{ヒエログリフ}を眷属の背中に刻むことでできるのよ!」

「ああ、そうなんだな。すまんすまん」

「分かったならさっさと脱いでそこに寝る!」

男のいい加減さに怒りを覚えながら女神は男の背中に自らの血を一滴落とした。

その瞬間男の背中は熱を持ちその背中には神による恩恵【ステイタス】^スが刻まれた。

「はい、これが貴方のステイタスよ、決して他人には見せないようにね」

「じゃあステイタスについて説明するわねまず基礎ステ「おいアルテミス！俺のステイタスオール0ってなんだよ!?これ壊れてんじやねえのか!?!」

「話は最後まで聞きなさい！あと様をつける！基礎ステイタスが0な

理由はその恩恵は今の状態の貴方に刻まれたからよ。」

「と言うと今の俺の状態を0と扱ってるってわけか」

「その通り、だから貴方が強くなれば強くなった分の数値がステイタスに刻まれるわ」

「強くなるにはどうしたらいいんだ？体を鍛えるだけでもいいのかわ？」

「間違いではないわ。筋力を上げれば力が上がるし、走り込みをすれば俊敏が上がる。でもそれだと上昇は微々たるものよ」

「なら手っ取り早くあげるならどうすればいいんだ？」

「それはモンスターを倒して【エクセリア経験値】を得ること、そうすればただ体を鍛えたりするよりは効率が良いわ」

「なるほどな、モンスターを狩れば狩るほど強くなるってか」

自身が強くなることを知り、笑みを隠せない男に対して、女神は悲しげに口を開いた。

「ねえオリオン、貴方との関係はあの賭けによるものだけど1つ約束してほしいことがあるの」

「約束？なんだよ？」

「決して無理だけはしないで…。私は貴方にそんなことをして欲しくて恩恵を与えたわけじゃないから…。」

「…分かった、約束するよアルテミス。俺は決して君を悲しませるようなことはしない」

「…だから様をつけなさいよ…。ありがとうオリオン」

「…いつもの夢と違ったな…。」

知らない天井を見ながら俺は目を覚ました。

窓を見るとまだ太陽は登っておらず夜だと言うことを俺に教えてくる。

日本で見ていた夢に出てくる同じ男と女神、だけど場面は全く違っていた。

場面からして日本で見ていたものの過去の話が今日のこの夢なのだろう。

「約束…：守れてないじゃねえか…：」

頭に残るのは男と女神が交わした約束、そして男の最後。

それに対して俺は怒りと共に後悔が押し寄せてくる。

「…：だめだ、明日から訓練が始まるんだから寝ないと…：」

こうして俺は、無理やりに目を閉じ2度目の眠りへついた。

4星：ステータスとステイタス

「なあアルテミス。こここの【Lv】ってどうやったたら上がるんだ？」

「様をつけなさい。【ランクアップ】のことね。それには大きく2つの条件があるわ」

「条件？どんな？」

「一つは任意のアビリティが6段階以上、つまりD以上が必要よ」

「つまりある程度強くなってないと駄目ってわけか。もう一つは？」

「偉業を達成することよ」

「偉業だあ？」

「分かりやすい例としては自身より格上の相手に勝つ【ジャイアントキリング】ね」

「そうか… なら当分ランクアップはできそうにねえなあ…」

「あら？なんでそう思うの？」

「だって無理しねえって約束したからなあ…」

「…！コホンっ、ランクアップした際にはその時点の基礎能力値は一旦リセットされてまた0からスタートするわ。その際通常とは異なる、特殊なものか一芸に特化した【発展アビリティ】が手に入る場合があるわ。」

「んじゃあひとまずの目標は、『無理せずステータスを上げる』と『眷属になってくれるやつを探す』だな」

――――
晩餐会の翌日、早速座学と訓練が始まった。

集まった俺たちに銀色のプレートが渡された。不思議そうにして
いる俺たちに騎士団長メルド・ロギンスからの説明が始まった。正直
などころこんな待遇で良いのか気になったが「勇者様一行」の指導
のためという対外的な理由もあるのかもしれない。

メルド団長本人は、むしろ面倒な雑事を部下に押し付ける理由がで
きて助かったと豪快に笑っているのを見て副団長に同情してしまっ

た。

「よし、全員に配り終わったな？ このプレートは「ステータスプレート」と呼ばれている。文字通り、自分の客観的なステータスを数値化して示してくれるものだ。最も信頼のある身分証明書でもある。これがあれば迷子になっても平気だからな、失くすなよ？」

気楽な喋り方をするメルド団長に対して、俺は正直有難いと感じている。

年上の男性達に畏まった喋り方をされるよりも、指導者としていてくれる方が助かるからである。

プレートの一面に魔法陣が刻まれているだろう。そこに、一緒に渡した針で指に傷を作って魔法陣に血を一滴垂らしてくれ。それで所持者が登録される。？ステータスオープン”と言えば表に自分のステータスが表示されるはずだ。ああ、原理とか聞くなよ？ そんなもん知らないからな。神代のアーティファクトの類だ」

「アーティファクト？」

そのまま説明を続けるメルドに対して、聞き覚えのない単語に反応した天之河は質問をした。

「ああ、アーティファクトって言うのはな、現代じゃ再現できない強力な力を持った魔道具の総称だ。まだ神やその眷属達が地上にいた時代に創られたと言われている。そのステータスプレートもその一つでな、複製するアーティファクトと一緒に、昔からこの世界に普及しているものとしては唯一のアーティファクトだな。普通は、アーティファクトと言えば国宝レベルになるもんなんだが、これは一般市民にも流通している。まあ身分証として便利だからな」

それを聞きながら俺は、針の痛みで顔を顰めながら指から浮き出て来た血を魔法陣に落とした。するとステータスカードが淡く光り表示された内容には想像もつかないものが書かれていた。

|||||

三星弓人 Lv. 5

力： I : 0

耐久：	I	:	0
器用：	I	:	0
俊敏：	I	:	0
魔力：	I	:	0
頑健：	E		
対魔力：	G		
千里眼：	H		

【魔法】

【オリオン・オルコス】

・弓射魔法

・魔性・獣系に対する防御無視補正

・詠唱式『放たれしは必中、我が矢の届かぬ獣はあらじ』

【■■■■■・■■■■■】

・■■昇華

・発動対象は術者本人限定

・発動後、術者本人に反動あり

・詠唱式『

』

【

・対■魔法

・詠唱式『

』

【スキル】

【月■■■慕】

・■■■する

・■■の強さで自身の能力に補正

・魅了・洗脳の無効

【狩^{ザハンター}本能】

・効果範囲内における獣・鳥系の探知及び隠蔽無効

・獣・鳥系に対する攻撃強化

・一部の武器に器用補正

マシツク・ロード
【魔力装填】

- ・精神力を消費しストック可能（最大3つ）
- ・発動時ストックの消費量に比例して詠唱式の破棄が可能
- ・ストックは一定時間で消滅

|||||

これは、あの時の夢で男に刻まれていた「ステイタス」じゃないのか？

そして数々の疑問が俺の頭を埋め尽くした。

なぜ【神の血^{イコル}】を使つてないのに【神の恩恵^{ファルナ}】である【ステイタス】が刻まれたのか。

仮に何かしらの方法で「ステイタス」が刻まれたと想定しても。ここに書かれている俺の「Lv」は5、つまり最低でも4回の偉業をなし得たことになる。けど俺はこの人生で偉業と言われるような行いは1度もした覚えがない。

更には【魔法】や【スキル】に関しては夢ですら語られていないものの上に文字化けして読めないものもあるため俺には予想のしようがない。

頭を悩ませている俺をよそに、メルド団長からステイタスの説明がなされた。

「全員見れたか？ ステイタスの説明をするぞ、まず、最初に「レベル」があるだろう？ それは各ステイタスの上昇と共に上がる。上限は100でそれがその人間の限界を示す。つまりレベルは、その人間が到達できる領域の現在値を示していると思ってくれ。レベル100ということは、人間としての潜在能力を全て発揮した極地ということだからな。そんな奴はそうそういない」

え？ 【Lv】は偉業を成して上がるものじゃないのか？

「ステータスは日々の鍛錬で当然上昇するし、魔法や魔法具で上昇させることもできる。また、魔力の高い者は自然と他のステータスも高くなる。詳しいことはわかっていないが、魔力が身体のスベックを無意識に補助しているのではないかと考えられている。それと、後でお前等用に装備を選んでもらうから楽しみにしておけ。なにせ救国の

勇者御一行だからな。国の宝物庫大開放だぞ！」

モンスターを倒して【エクセリア経験値】を得ると効率よく上昇するんじゃないのか？

「次に『天職』ってのがあるだろう？ それは言うなれば『才能』だ。末尾にある『技能』と連動していて、その天職の領分においては無類の才能を発揮する。天職持ちは少ない。戦闘系天職と非戦系天職に分類されるんだが、戦闘系は千人に一人、ものによっちゃあ万人に一人の割合だ。非戦系も少ないと言えは少ないがまあ、百人に一人はいるな。十人に一人という珍しくないものも結構ある。生産職は持っている奴が多いな」

天職？技能？俺にはスキルと魔法しかないぞ？

「後はそうだな、各ステータスは見たままだ。大体レベル1の平均は10くらいだな。まあ、お前達ならその数倍から数十倍は高いだろうがな！ 全く羨ましい限りだ！ 後ステータスプレートの内容は報告してくれ。訓練内容の参考にしなきゃならんからな」

ステータスは0からスタートして増えてくものじゃないの？さらにステータスは他人に見せるのは駄目なのではないのか？

こうして俺の混乱をよそにクラスメイト達はメルド団長へステータスプレートを見せにいく、俺はどうしようかと悩んでいた時後ろから雫が声をかけて来た。

「ねえ弓人？あなたのステータスってどうなったの？私はどうなんだけど」

「へえ、普通はそんなふうに表示されてんだ」

「はあ？それじゃああなたのは普通じゃないみたいじゃない」

「まあ見てみればわかるさ、ほれ」

「えっ……なにこの表示……しかもステータス0ってこれ壊れてるんじゃないの!?!」

おお、夢の男と似た反応だ。そんなことを考えていると天之河の番になった時メルド団長の反応が大きかった。そんな彼のステータスはこうだ。

|||||

天之河光輝 17歳 男 レベル：1

天職：勇者

筋力：100

体力：100

耐性：100

敏捷：100

魔力：100

魔耐：100

技能：全属性適性・全属性耐性・物理耐性・複合魔法・剣術・剛力・縮地・先読・高速魔力回復・気配感知・魔力感知・限界突破・言語理解

||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||

「ほお、流石勇者様だな。レベル1で既に三桁か。技能も普通は二つ三つなんだがな。規格外な奴め！頼もしい限りだ！」
「いや、あはは。…」

メルド団長の称賛に照れたように頭を掻く天之河。ちなみに団長のレベルは62。ステータス平均は300前後、この世界でもトップレベルの強さだ。それに対して天之河はレベル1の時点で3分の1はありレベルの上昇次第ですぐに追い抜きそうである。

その後のクラスメイト達も様々な戦闘組織についており天之河ほどではないにしろ十分強力な戦力になるらしい。そしてステータスプレートの表記は俺だけがおかしい。

そしてハジメの番になった時に強力な戦力の誕生に喜んでいたメルド団長の笑顔が固まった。そして見間違えたと言わんばかりにプレートを軽く叩いたり光に翳していたが、最終的に微妙そうな顔をしながらハジメへ返却した。

「ああ、その、なんだ。錬成師というのは、まあ、言ってみれば鍛冶職のことだ。鍛冶するときには便利だとか。…」

歯切れ悪くハジメの天職を説明するメルド団長。なるほど、ハジメの天職は非戦闘員の生産職だったのか。

だがメルド団長の反応に小悪党達が食いつかないわけもなく、案の

定ニヤニヤと笑いながらハジメに近づいていく。

「おいおい、南雲。もしかしてお前、非戦闘系か？ 鍛冶職でどうやって戦うんだよ？ メルドさん、その錬成師って珍しいんっすか？」

「…いや、鍛冶職の十人に一人は持っている。国お抱えの職人は全員持っているな」

「おいおい、南雲く。お前、そんなんで戦えるわけ？」

檜山が、実にウザイ感じでハジメと肩を組む。見渡せば、周りの生徒達——特に男子はニヤニヤと嗤っている。

「メルド団長にプレート渡してくるわ」

「えっ？ わかつ… って早!? 弓人って敏捷0じゃなかったの…？」

「ぶっはははっく、なんだこれ！ 完全「後が支えてるからどいてくれ」

「いつて！ つて三星!? またてめえか！」

「そもそも戦争は志願制で戦力にならない奴は参加しなくて良いはずだぞ」

「…ならてめえはどうなんだよ！ おい！」

「まあすぐにわかる、メルド団長、俺のステイタスです」

「あ、ああ… は？」

俺のステイタスを見たメルド団長は素っ頓狂な声をあげ、そのせいでクラスメイト達の視線がメルド団長に集中した。

「なっ、なんだこの表記は!?!? 現時点でレベル5なのにすべて数値が0!? しかも天職もない… 技能はこの3つか?… その横のEや

Gはなんだ?… 魔法も見たこともないものに一部読めないものもある… この【スキル】とは何だ?… ?… わからない… 何もわからない…」

思わず出てしまったであろうメルド団長の言葉はここにいる全ての人に聞こえた。そしてしばらく静寂が包んだ後、誰かが堪えきれずに出した声が発端となり爆発した。

「ぎやはははははは、0って！0ってなんだよ！」

「一般人レベルの南雲ですら10あるのに0ってある意味すげーよ！」

「まって… お腹痛い… 笑いすぎてお腹いたい…」

確かにメルド団長の説明を受けたら0なんて数字は想像もつかなかっただろう。この状況に対して、思わず叫んでしまったメルド団長は後悔した顔で俺を見つめ、俺の前に馬鹿にされていたハジメは俺を心配した眼差しをむけていた。

「ひい… ひい… はあく笑った。おい三星よお、ステータス0のお前なんてすぐ死んじゃもうんじゃねえの？こんな風に蹴られたらよお！」
「おい！やめろ！」

日頃俺に煽られていた檜山は日頃の鬱憤を晴らすかのように俺に蹴りを入れて来た。メルド団長が止めようとしてももう遅く、俺の脛に強めの蹴りがぶつけられた。

「… 行ってええええええええええ！」

「は!?なんで蹴った方のお前が痛がつてんだよ!？」

「なっ!?… どういうことなんだ…」

まさかの蹴りを入れた檜山が痛みで声を上げ跳び上がらながら足を抑えていた。それを見たメルド団長は想定外の場面により驚き硬直してしまった。

俺も内心ではかなり驚いている。なぜなら全く痛くなかったからである。そしてその状況にクラスメイト達は笑うのをやめ、困惑した眼差しを俺にむけていた。

「えっ!?弓人大丈夫!？」

「おお… ハジメ、大丈夫だ…」

「でも弓人はステータス0なんじゃないの!？」

「ああ、俺のステータスはすべて0だ…」

心配して来たハジメに、表面上は冷静に返事をしていると、大慌てで走って来た畑山先生と硬直から解放されたメルド団長の指示の下今日は解散となり明日から本格的な訓練が始まることになった。

これも夢が変わった理由が関わるのだろうか？そんな俺の疑問に答えてくれるものは誰もいない。

5星：武器庫にて

俺がメルド団長からプレートを返却されて、部屋に戻っていた時。落ち込んでいた焔山先生を発見した。

「どうしたんですか？焔山先生」

「あつ… 三星くん… ちょっと自己嫌悪に陥ってまして…」

先生は懺悔するかのようには語り出した。

「あの時… 南雲くんと三星くんが馬鹿にされてた時… 私はなにもしできなかった… 本当なら… 私が真っ先に止めないといけないのに…」

「あく… 俺は別に気にしてないですよ？多分ハジメも大丈夫だと思いますし」

「だけど！馬鹿にされて良い理由にはならないです！」

困ったな… 真面目な先生にとって、あの件はかなりショックらしい。

「けど、俺らがこの世界に連れてこられた時、真っ先に俺らのことを考えてイシユタルさんに抗議してくれたじゃないですか。」

「ああいう時って、基本自分のことで精一杯になるのに俺ら生徒のことを考えてくれて… 結構嬉しかったんですよ？」

「けど… 結局帰すことができなかったですし…」

「それは先生が悪いわけじゃないですし」

「ステータスだって非戦闘系？って奴ですし… 数値も平均的ですし…」

「そういうえば先生って天職なんですか？」

俺が質問してみると焔山先生は素直にステータスプレートを見せてくれた。

|||||

焔山愛子 25歳 女 レベル：1

天職：作農師

筋力：5

体力：10

耐性：10

敏捷：5

魔力：1000

魔耐：10

技能：土壌管理・土壌回復・範囲耕作・成長促進・品種改良・植物系鑑定・肥料生成・混在育成・自動収穫・発酵操作・範囲温度調整・農場結界・豊穰天雨・言語理解

|||||

「こんなんじゃないよあ…みんなを守るって…」

「凄じやないすか！先生！」

「えっ…」

「先生がいれば食糧問題は解決ですし十分俺たちを守ってくれますよ」

「私が…みんなを守れてる…？」

「はい。戦争だから無事についていうのは難しいですがクラスメイト全員生きて日本に帰りましょう！先生！」

「っ！はい！」

こうして元気を取り戻した畑山先生は、自身の天職を伝えるべくメルド団長の元へ向かった。

ステイタスの件の翌日、俺たちは訓練を行う前にメルド団長が言っていた。各々の天職に合った装備を選びに宝物庫へ来ていた。

そこにはファンタジーとは？と言ったらイメージするような身長と同じくらいの大剣・拳大の宝石が埋め込まれた杖・煌びやかな装飾が施された鎧とあったものが区画によって仕切られていた。

これを見て興奮が抑えられるわけもなく、我先に宝物庫へ入っていくクラスメイト達へメルド団長は少し慌てながら止めに入った。

「待って待って！装備は俺たちが天職に合わせて選んでやるから少しは落

ち着け！」

「あの、俺はどうすればいいですかね？」

「む？あー、そうか…。お前の天職は不明だったな…。仕方ない、一人兵士を連れて行って手に馴染むものを選ぶと良い」

「良いんですか？」

「まあな、お前の【スキル】とやらにあった『一部の武器』がどれなのか検討がつかなくてな、特別処置としてだな。後武器が決まったら教えてくれ。それによって訓練内容を伝えるからな」

頭を掻きながら苦笑するメルド団長に申し訳なさを覚えながら、俺は部下の兵士さんに区画の説明を受けながら宝物庫へ入っていった。

しばらく物色をしていると偶然目に入ったものに俺の興味が注がれた。

「すみません、あれってどんな武器なんですか？」

「ん？ああ…。あの弓はおそらく神代で創られたと言われてる。恐ろしく硬い鉱石で作られていて、今の時代になっても風化や破損をしていない」

「そんなに丈夫な弓ならなんで誰も使っていないんですか？」

「使っていないんじゃない…。使えないんだ」

「先程も言った通り、素材の鉱石が硬すぎるせいで矢をつがえても引くことができないんだ。」

硬すぎるせいで誰も扱うことのできない弓…。それは武器としては欠陥品でしかない。けれど俺は、この弓から目を離さないでいた。

「試しに持って見ても良いですか？」

「あ、ああ…。別に構わないが、そいつは見た目以上に重いから無理だと思っただらすぐに離せよ」

こうして許可を得た俺はその弓へ吸い寄せられるように近づき。それを掴んだ。その瞬間、強い頭痛が俺を襲った。

「ぐあっ!？」

「おい!?大丈夫か!？」

しばらくすると頭痛は収まってきた。なるほど、確かにこれは俺以外には使えないな。

「はあ… はあ…」

「本当に大丈夫か!? なんなら今日の訓練は休んで医務室に行っても良いんだぞ?」

「いえ、もう落ち着いたので大丈夫です。あと、俺はこいつにします。」

「何?だがこれは説明した通り誰にも使うことができないと…」

「大丈夫です。こいつは俺なら… いや、俺にしか使えない…」

「この『月弓—アポロウ—サ』は」

「オリオン!ランクアップおめでとう!」

「ありがとよアルテミス!けど2年かかっちゃまったけどな」

「何を言ってるのよ!普通はこれでも十分早いんだから!」

「けどロキ・ファミリアの『あの子』は1年でランクアップだろお?」

「あれは『ワールドレコード世界記録』なんだから参考にしたらだめよ」

「それよりもこれ!ランクアップ記念のプレゼント!」

「おお!ってこれへファイストス・ファミリアのやつじゃねえか!? これいくらしただよ!」

「良いの良いの!今までの狩猟で稼いだお金を頭金にローン組んだから!」

「ローンっておまえなあ… で?この弓はなんで名前なんだ?」

「ふっふっふ… 聞きなさい!この弓の名前は…」

「『月弓—アポロウ—サ』よ!」

6星：訓練といじめ

「そういえば貴方、サポーターを雇ったりしないの？」

「サポーター？なんだそれ？」

「サポーターって言うのは文字通り冒険者のサポートをする職業よ」

「モンスター死骸が戦闘の邪魔にならないように退けたり、魔石の回収、荷物持ちをしてもらうの。その代わりに冒険者はサポーターを守る必要があるわ」

「なるほどなあ… まあ上層で稼いでるうちはいいかなあ」

「そう？まあサポーターを雇うときには相談してね」

「了解だ。アルテミス」

「様をつけなさい」

「ううむ… 2週間経つが変化する気配がいつさいないなあ」

「すみません、わざわざ時間を用意してもらって」

「いや、これは上手く指導できない俺にも問題があるからな」

現在俺はメルド団長と俺のステイタスについて話をしていた。

現在のステイタスはこうなっている

|||||

三星弓人 Lv. 5

力： I : 0

耐久： I : 0

器用： I : 0

俊敏： I : 0

魔力： I : 0

頑健： E

対魔力： G

千里眼： H

|||||

そう、全く上がらないのである。さらには俺にはこの世界の魔法の

適性が全くないのが分かり、初級魔法ですら使えない始末だ。

「何か心当たりはあるか？」

「…… いや、ちよつと心当たりがありませんね」

「ハア…… やはりか」

メルド団長には申し訳ないがステイタスが上がらないことに心当たりというより仮説がある。それは「ランクアップ」するとステイタス上昇のための要求値が高くなるのだと考えている。だがそれを話したとしても『夢で女神がステイタスの説明をしていた』なんて馬鹿正直に言ったら、変な奴だと思われるだろう。だから俺は心当たりがないとしらを切る。

「そういえば、今後の訓練の予定ってどうなってるんですか？」

「そうだな、そろそろ戦争に参加するか決める期日に近づいてきたから1度実践訓練として【オルクス大迷宮】へ遠征しに行こうと思ってる」

「なるほど、実際に魔物を殺して戦争への実感を欠片でも知ろうって訳ですね。」

「まあそんなところだ。基本的に準備は俺たちがするが何か要望はあったりするか？」

いきなり言われたとしてもそんなもの…… あつ、あれを聞いてみよう

「サポーターは雇ったりするんですか？」

「サポーター？なんだそれは？」

俺は夢で女神が説明していたサポーターについてのことをそのままメルド団長に伝えた。

「なるほど…… 確かにサポーターに徹するものがいれば効率があがるな…… よし！なら騎士の奴を何人かその役をやらせてみよう。だがよく思いついたな？」

「ははは…… まあ思いつきですけどね……」

「よし！早速部下たちに伝えようと思う、だから説明のために来てくれるか？」

「ええ、かまいませんよ」

こうして俺はメルド団長と共にサポーターについて説明すべく部屋を出た。その瞬間だった。

「何やってるの!？」

「っ！メルドさん！」

「訓練施設の方だ！行くぞー！」

こうして俺とメルド団長は叫び声のあつた訓練施設へと急いだ。

そしてたどり着いた先にはボロボロの姿で香織に治療を受けているハジメ、そしてメルド団長をみて顔を青くしている小悪党達がい

た。

「なんとなく予想はできるけど... どう言う状況だ？」

「檜山くん達が南雲くんの特訓に付き合ってたらしいわよ。それにしては随分一方的だったけど」

「ほう？お前達はいつの間の人に物を教えられるくらい強くなったんだ？」

「あの... えっと... そのお...」

「そんなに暴れたければお前らは特別メニューだ!!! さつさと向こうで並んでろ!!!」

「ひっ... は、はい！」

こうして烈火のような怒りを表したメルド団長に怒鳴られ、小悪党達は逃げるように離れて行った。俺はそれを見届けた後、香織に治療されたハジメのもとへ近づいた。

「あ、ありがとう白崎さん。助かったよ」

「本当に大丈夫か？ハジメ」

「うん、大丈夫だよ弓人。白崎さんのお陰で擦り傷一つもないよ」

「いつもあんなことされてたの？それなら私が...」

怒りの形相で檜山達が去った方を睨む香織を、ハジメは慌てて止める。

「いや、そんないつもってわけじゃないから！大丈夫だから、ホント気にしないでー！」

「でも...」

「香織、ハジメもこう言ってるんだ。これ以上はやめておこう」

「弓人くん…」

「けど南雲君、何かあれば遠慮なく言ってちょうだい。香織もその方が納得するわ」

「分かったよ、本当に困ったときには相談させてもらうね？白崎さん」
「うん！」

この、一段落つきそうな状況にも関わらず水を差す無粋な声が上がった。

「だが、南雲自身ももつと努力すべきだ。弱さを言い訳にしているのは強くなれないだろう？ 聞けば、訓練のないときは図書館で読書に耽っているそうじゃないか。俺なら少しでも強くなるために空いている時間も鍛錬にあてるよ。南雲も、もう少し真面目になった方がいい。檜山達も、南雲の不真面目さをどうにかしようとしたのかもしれないだろう？」

何を考えたら、そんなことが思いつくのか皆目検討がつかない。被害者のハジメどころか、香織や雫、メルド団長ですら呆然としてしまっている。

こいつのタチが悪いところは、悪意が全くないのだ。こいつは基本的に人間はそう悪いことはしない。そう見える何かをしたのなら相応の理由があるはず。もしかしたら相手の方に原因があるのかもしれないという性善説を信じており、これでも真面目にハジメを注意しているだけなのだ。

「おい天河、お前本気でそう思ってるのか？」

「何を言ってるんだ三星？檜山達は南雲のために特訓に付き合っただけだろう？」

「お前の頭の中だと集団リンチは特訓って言うんだな勉強になったよ」

「いったい何が言いたいんだ！」

「友人がボコられて、それに対してお前にも原因があるって言うてる奴に腹が立たないわけがねえだろうが！」

「待って弓人！光輝だって悪気あるわけじゃ…」

「悪気がなかったら何言っても良い理由があるわけないだろうが！」

「っ!... ごめんなさい...」

「くくっ!なんでお前が謝るんだよ...」

くそっ... 腹が立って仕方がない、頭を冷やさないと...

「メルドさん、例の件は俺が伝えとくんで後はお願いします... 後、今日の訓練は休みます...」

「... ああ、後のことは任せろ」

こうして俺は騎士たちにサポーターの説明をするべく訓練施設から離れた。

7星：月夜の約束

「申し訳ないが、ここはアルテミス・ファミアリアであっているか？」

「ん？確かにここがアルテミス・ファミアリアだが、あんたは？」

「単刀直入に聞く、私をファミアリアに入れてくれないか？」

「え！マジか！ちよつと待ってる！…おいアルテミス！遂に入団希望者だ！」

「え!?!嘘！本当!?!」

「マジだマジ！早く来いって！」

「ちよつと待ってよオリオン！あつ…ごほん！はじめまして、私はアルテミス・ファミアリアの主神アルテミスです。そして彼が団長のオリオン」

「どうした？急に似合わない敬語なんて使って」

「ちよつと黙ってて、貴方の名前を聞かせてくれませんか？」

「あ、はい！私の名前はアタランテと申します！種族は猫キャット・ビートル人です！」

【オルクス大迷宮】

それは、全百階層からなると言われている大迷宮である。七大迷宮の一つで、階層が深くなるにつれ強力な魔物が出現する。

逆にいえば浅い階層であれば弱い魔物ばかりであるため、新兵の訓練場所として人気がある。そして生活に必要な魔石が手に入ることもあり冒険者の多くが利用している。

俺たちはメルド団長率いる騎士団員複数名と共に、【オルクス大迷宮】へ挑戦する冒険者達のための宿場町【ホルアド】に到着した。そして俺たちは王国直営の宿屋に案内されそこに宿泊することとなる。

「ふう、ようやく休めるね」

「結構歩いたからな、でもハジメ…お前本当に参加するのか？」

「弓人の言いたいことは分かる…でも今回行く20階層までならメルド団長も十分カバーできるって言ってたし」

「まあ、お前が行くって決めたんなら俺はそれ以上は言わねえよ」
「あつ、そういえば弓人が頼んでたもの、やっと形になったから持ってきたよ」

「おつ、マジか！早速見せてくれ！」

俺はハジメにある物を頼んでいた。ハジメが渡してきた布に包まれていた物を受け取り、布を取るとそこには30センチ程の短剣があった。

これは錬成の訓練をするときにイメージするものが具体的である方がいいと思つた際、俺が作ってくれと頼んだ物だ。

「どうかな？今まで錬成した中で一番出来のいい物なんだけど…」

「うん…、イメージ通りだ。ありがとよハジメ」

渡された短剣に満足しつつハジメに礼を言うと、ハジメは照れ臭そうに頬を掻いていた。そして魔物図鑑を見たり下らない話をしていたら。扉を3度ノックする音が響いた。深夜の訪問者に俺たちは緊張するが、声を聞いた瞬間杞憂に終わった。

「南雲くん、起きてる？白崎です。ちよつといいかな？」

ハジメは一瞬驚いた後、慌てて扉に向かっていく。そして、鍵を外して扉を開けると、そこには純白のネグリジエにカーデイガンを羽織っただけの香織が立っていた。

「……なんでやねん」

「えっ？」

ある意味、衝撃的な光景に思わず関西弁でツツコミを入れてしまうハジメ。よく聞こえなかったのか香織はキョトンとしている。

…なるほど、そういうことか

「ハジメ、俺ちよつと外に出るわ」

「は？…えっ!?ちよつ!?なんで!？」

「外を見るといい月が出ててな。月見をしないのは月に失礼だと思つてな。なに1時間…いや2時間したら戻ってくる。」

具体的な時間を提示すると、ハジメは顔をトマトのように赤くしてしまい固まっていたので、俺は屋台で買っていた饅頭もどきの袋を手

に外へ向かった。

そして外へ出る際に、何も分かつておらずキョトンとしていた香織の肩に手を置き。

「ごゆっくり」

と言いつつハジメと同じく顔を赤くしたのを確認すると、俺は外へと歩いて行った。

さてと、どこで時間を潰そうかな。そんなことを考えながら俺はぶらついていると開けた場所を見つけたため、ここで時間を潰そうと近づくと先客がいた。

それは月の下で一心に剣の素振りをする雫だった。

あいつ…俺は袋から一つ饅頭もどきを取り出すと雫に向かって近づいていく。

「お待たせ、待った？」

「ひゃあ!? って弓人! なんでここに!？」

「月見をするために場所探しをしてたらお前を見つけてな。ほれ、屋台で買った奴だ」

「わっ…とっ…危ないでしょ!」

雫に向かい饅頭もどきを投げると何度かお手玉をしたが上手くキャッチする。そして俺たちは近くにあったベンチに腰掛け饅頭もどきを食べ、しばらくして俺は口を開いた。

「やっぱり眠れねえか？」

「…やっぱり分かる？」

「真面目なお前がこんな時間まで剣を振ってるってなると予想つくかな、伊達に長年幼馴染してねえよ」

「…怖い…命を奪うことが…」

「だろうな」

「それに…それに慣れないまま戦争になったら…」

「…それは、慣れないままの方が良いと思うぞ」

「…えっ?」

「もし、殺すところに慣れちまったら、その瞬間俺たちは人の形をした『ナニカ』になっちまう。そしてそのまま日常の生活には帰れないと思っただよ。」

「じゃあ…私はどうしたら…」

今にも心が折れてしまいそうな雫に対して俺は優しい声で言った。

「雫、お前は真面目すぎるんだよ。もうちよつと馬鹿になれ」

「…弓人?」

「別に全部を自分で抱えなきゃいけない訳じゃねえんだからよ、そう言う時は他人に頼れば良いんだよ」

「頼る…でも誰に…?」

「そんなのここにいるだろ?あと親友の香織がいるじゃねえか」

「でも…迷惑じゃあ…」

「そんなの迷惑だなんて欠片も感じねえよ、香織にも聞いてみな?同じこと言うからよ。けど、そんなに不安なら、約束しようぜ」

「約束?」

「どつちかが限界を迎えそうになったら。片方が支える。な?」

「弓人…ありがとう」

俺に向かって感謝を伝える雫の笑顔は、空に浮かぶ月に負けないくらい綺麗で美しい物だった。

8星：迷宮の罫

「…よし、今日はこんなもんでいいだろ」

「なんだ？もう疲れたのか？私はまだまだいけるぞ」

「駄目だ、ダンジョンは何があるか分かんねえんだ。余力を残して帰る必要がある」

「ふんっ、臆病者め。ならばお前だけが先に帰るがいい。私はさらに奥へ進むぞ」

「なっ!?アタランテ！お前はまだマップも碌に覚えてねえだろ！」

現在、俺たちはオルクス大迷宮の正面入口がある広場に集まっていた。

俺のイメージだと、大迷宮の入口はそのまま洞窟の入口のようなイメージだったのだが、流石に国民が生活の一部として利用している空間といったところか。入場ゲートのような入口があり、制服をきた職員らしき女性が笑顔で受付対応している。

説明を聞く限り、ここでステータスプレートをチェックし、人の出入りを記録することで、死亡者数を正確に把握しているらしい。つまり何日も音沙汰なく出てこなかったものは死亡扱いされるといわけだ。

こうして俺たちはメルド団長を先頭にカルガモの親子のように大迷宮に入ってしまった。

~~~~~

オルクス大迷宮は緑光石という発光する特殊な鉱物の鉱脈が光源の役割を果たしているため、松明などの明かりがなくても視界は問題ない。

大迷宮の中は外の賑わいと反対に静寂に満ちていた。しばらく足

音を響かせていると高さが7、8メートルほどありそうなドーム状の空間へとたどり着いた。そこには、灰色の体毛を持った魔物がおり、俺たちを目視すると威嚇し俺たちに立ち塞がった。

「よし……この際に座学の復習といこうか！誰でもいい！あの魔物の名前を答えてみる！」

「お、おい、お前分かるか？」

「いや……魔物の名前なんていちいち覚えてねえよ……」

「どうしよう……分からなかったらやっぱり怒られるのかな……」

いきなりのメルド団長の質問に対して、クラスメイト達は即座に答えることが出来なかった。そんな中一人が恐る恐るながら手を挙げた。

「えつと……多分ラットマンだと思います……」

「正解だハジメ！あいつは素早いけど、たいした敵じゃない。冷静に行け！そして他の者たちはキチンと勉強をしておけよ！」

ハジメの解答に満足気に笑みを浮かべたメルド団長は、天之川たちへ指示を飛ばす。そしてクラスメイトたちは、ハジメに向かって驚愕の表情を浮かべていた。今まで真面目に訓練に参加せず、図書館で本ばかりを読んでいる『無能』だと思っていたハジメが誰も答えられなかった魔物を答えたことが信じられなかったようだ。

そのことに男子生徒たちはどこか気に食わないような顔をしており、女子生徒たちはどこか感心したような顔をしていた。

「ハアアツ!!!」

「オラアツ!!!」

「フツ！セイツ!!!」

こうしてメルド団長の指示のもと、前衛組の戦闘が始まった。

天之川は純白に輝く大剣で一刀両断し、坂上は正拳突きで殴り倒し、雫は刀が無かったためカットラスに似た形状の剣による流れるような剣技で切り落とした。そして俺は

「ほいっ！」

拳でラットマンの首をへし折り、一撃で沈黙させた。

…… やっぱり駄目だな…… こんな浅い場所の魔物じゃあステイタ

スは上がりそうにない……。

メルド団長が試験的に採用したサポーターの人たちが魔石を回収しているのを見てみると後ろから呆れた顔をした雫が来た。

「弓人…… 弓矢はともかくなんで腰の短剣をつかわないのよ……」

「使うと汚れる、欠ける、すり減る。だからまだ使わない」

「どこのソルジャーよいったい……」

「なんだ、知ってんのか？」

「香織のせいだね…… ゲームや漫画を買いに連れ回されたせいで自然と覚えたのよ」

「あの暴走特急め……」

そんな幼馴染のあまり知りたくない情報を聞きながら、俺は雫の手がかすかに震えていることに気づいた。

「やつぱり…… 慣れそうにないわね……」

「大丈夫か？」

「うん…… まだ大丈夫…… けど駄目だと思った時にはお願いね」

「おう、任せろ」

この後、魔法の威力が高すぎて魔物を消し炭にしてしまい、メルド団長に注意されたり、ハジメがどこぞの錬金術師のように地面を錬成して魔物の足を止めて止めを刺し、メルド団長に戦い方を感じさせたり、弓の使い心地を知るために俺は後衛へ下がったりしながら俺たちは順調に階層を下って行く。

そして俺たちは当初の目的であった20階層へと足を踏み入れた。

俺たちの先導をしていたメルド団長が足を止めると、戦闘準備をする様に促した。魔物の数は1…… いや2体か？

「……には擬態した魔物がいる！ 周囲への警戒を怠るな！」

メルド団長が忠告した直後、前方でせり出していた壁が突如変色しながら起き上がった。壁と同化していた体は褐色となり、二本足で立ち上がる。カメレオンのような擬態能力があるらしい。

「ハジメ！ あの魔物の名前は!？」



斬撃が僅かな抵抗も許さずロックマウントを縦に両断し、更に奥の壁を破壊し尽くしてようやく止まった。

こうしてもう大丈夫だと言わんばかりに笑みを浮かべ香織たちに声をかけようとした。天之川には香織たちの礼ではなくメルド団長の拳骨と説教が待っていた。

「へぶう!？」

「この馬鹿者が。気持ちわかるがこんな狭いところで使う技じゃないだろうが！崩落でもしたらどうすんだ！」

「うっ… すみません…。」

その言葉に天之川は顔を顰め、声を詰まらせた。そして謝罪を入れていると香織たちが寄ってきて苦笑いしながら慰めていた。

その時、ふと香織が崩れた壁の方に視線を向けた。

「あれ何かな？ キラキラしてるけど…。」

その言葉に、全員が香織の指差す方へ目を向けた。

そこには青白く発光する鉱物が花咲くように壁から生えていた。まるでインディコライトが内包された水晶のようである。香織を含め女子達は夢見るように、その美しい姿に目を奪われていた。

「ほお、あれはグランツ鉱石だな。大きさも中々だ。珍しい」

グランツ鉱石は宝石の原石だったはずだ。その美しさから貴族から人気が高くこれを加工した指輪は求婚の際に選ばれる宝石として有名だ。

「素敵…。」

メルドの説明を聞いた香織は頬に手を置きながらうつとりとした表情を浮かべた。そして誰にも気づかれない程度にハジメに視線を向けていた。なお、俺と雫、そして『ある1人』には気づかれていたようだが。

「だったら俺らで回収しようぜ！」

そう言っって唐突に動き出したのは檜山だった。グランツ鉱石に向けて軽快に崩れた壁を登っていく。それに慌てたのはメルド団長だ。

「おい！勝手なことをするな！安全確認もまだなんだぞ！」

しかし、檜山は聞こえないふりをして、とうとう鉱石の場所に辿り

着いてしまった。

メルド団長は、止めようと檜山を追いかける。同時にサポーターの一人がフェアスコープという罫を見つけた道具で鉱石の辺りを確認する。そして、一気に青褪めた。

「団長！ トラップです！」

「ッ!？」

しかし、メルド団長も、サポーターの警告も一歩遅かった。

檜山が鉱石に触れた瞬間、鉱石を中心に魔法陣が広がってゆく。そして魔法陣は瞬く間に部屋全体に広がり、輝きを増していった。

「くっ、撤退だ！ 早くこの部屋から出る！」

メルド団長の言葉にクラスメイト達が急いで部屋の外に向かうが間に合わなかった。

まるで転移したあの日の再来のように感じた。



## 9 星：悲劇壞幕

「いやあ、なんとか帰れたなあ」

「…ぜだ…」

「ん？どうした？」

「何故!? 怒らないんだ！ 私のせいで… お前を危険に晒したんだぞ！」

「でもこうやって無事に帰って来れたんだ。怒る理由がねえよ」

「そもそも馬鹿なことをした私など… 見捨てておけばお前は大怪我をすることもなかったんだ…」

「… おい、お前ふざけた事言っつてんじゃねえぞ！」

「え…」

「アタラシテ、俺とお前はまだ付き合いが浅いかもしんねえ…。けどな！ 俺がその程度の理由で仲間を見捨てるわけねえだろうが！」

「…っ！」

「もし不安なら何度だって助けに行つてやる！ 俺は！ 決して！ 仲間を見捨てねえ！」

部屋の中に光が満ち、視界を白一色に染めると同時に一瞬の浮遊感に包まれる。そして光が収まると同時に地面に叩きつけられる。

クラスメイトの多くは尻餅をついていたがメルド団長を始めとした一部の人たちは既に立っており周囲への警戒を行なっている。

転移した場所は、巨大な石造りの橋の上だった。ざっと100メートルはあるだろう。天井も20メートルほどで橋の下は川などなく、落ちれば1発で奈落の底だ。

「お前達！ 直ぐに立ち上がりあの階段の場所まで行け！ 急げ！」

メルド団長の鬼気迫る声にクラスメイトたちは、慌てて動き出す。

しかし、おいそれと獲物を逃さないのがダンジョンという魔物である。

階段側の橋の入口と通路側にそれぞれ魔法陣が出現し、階段側からは大量の魔物、通路側には1体の巨大な魔物が現れた。そして、現れた巨大な魔物を呆然と見つめるメルド団長の呻く様な呟きが皆の間にやけに明瞭に響いた。

「まさか… ベヒモス… なのか…」

ベヒモス… 旧約聖書に出てくる陸の怪物と同じ名前だ…。俺は現実逃避に近い考えをしながら後ろにも目を向ける。そちらからは剣を持った骸骨の魔物『トラウムソルジャー』が無尽蔵に湧いて出てくる。けど、やばいのはやっぱりあっちだ…

「グルアアアアアアアアア!!」

「ッ!」

その咆哮で正気に戻ったのか、メルド団長が矢継ぎ早に指示を飛ばす。やはり経験の差と言うべきか。彼の飛ばす指示は実に迅速で的確であった。

しかし、いや、やはりと言うべきか天之河の正義感が悪い方に働いてしまった。

「アラン！生徒達を率いてトラウムソルジャーを突破しろ！カイル！イヴァン！ベイル！ 全力で障壁を張れ！ヤツを食い止めるぞ！光輝、お前達は早く階段へ向かえ！」

「待つて下さいメルドさん！俺達もやります！あの恐竜みたいなヤツが一番ヤバイでしょう！俺達！…」

「馬鹿野郎！あれが本当にベヒモスなら、今のお前達では無理だ！ヤツは六十五階層の魔物。かつて、『最強』と言わしめた冒険者をして歯が立たなかった化け物だ！さつきと行け！私はお前達を死なせるわけにはいかないんだ！」

「うっ… で、でも…」

問答を繰り返す中、ベヒモスはここにいる全員を轢き殺さんと咆哮と共に突進を行った。

「『全ての敵意と悪意を拒絶する、神の子らに絶対の守りを、ここは聖域なりて、神敵を通さず—— 聖絶!!』」

2メートル四方の最高級の紙に描かれた魔法陣と四節からなる詠

唱、さらに三人同時発動。

1回きりの、しかも1分のみ許される絶対防御がベヒモスの突進を阻んだ。衝突の瞬間、凄まじい衝撃波が発生し、ベヒモスの足元にヒビが入り粉碎される。橋全体が石造りにもかかわらず大きく揺れた。撤退中の生徒達から悲鳴が上がり、転倒する者が相次ぐ。

それでも諦めず、脱出を試みるが、それをトラウムソルジャーの軍勢が阻んでくる。彼らは知らない。トラウムソルジャーは本来38階層に現れる魔物だと言うことを。そのため今までの魔物から一線を画する強さを持っている。

俺は雪崩れ込んでくる、トラウムソルジャーを相手しながら周囲を見ていると、ハジメがメルド団長の元へと走っていくのを見た。

「ハジメ！お前なんでそっちへ行つてんだ!?!」

今すぐにも追いかけたくなかったが、俺がここを離れるとその分戦力が減るため俺は追いかけることができなかった。

「くそお！邪魔だああああ!!!」

俺は感情的になりながら、周囲のトラウムソルジャーを粉碎してゆく、近くにいるのは拳や短剣で粉碎し、遠くで襲われそうになっているクラスメイトを目視すると、即座に弓矢で撃ち抜き守る。それは、時間にすれば僅かだが、俺にとっては永遠に感じられた。

だがそのおかげもあつたのか、クラスメイト達も冷静さを取り戻し声かけをすることで少しずつであるが対応してゆく。

余裕が生まれたため、先程ハジメが走って行った方角の先を見ると衝撃の光景が写っていた。

ハジメが、ベヒモスと対峙していた。

自身が使えらる中で最も得意な魔法『錬成』、それを行いベヒモスを抑えている。だが彼の魔力量では時間の問題であつた。メルドは魔法の一齐射撃による足止めで彼が離脱する時間を稼ぐつもりだが、それでも賭けであつた。

彼の魔力が尽きる前に配置につく必要があるため、メルドは即座に指示を出す。しかし、出口という希望から離れることに未練のある者もいるため、配置に一瞬だけ時間がかかってしまった。

その一瞬がいけなかった。

陣形が揃う前にハジメの魔力が切れてしまったのだ。

ベヒモスは即座に起き上がり今まで邪魔をしていた者を視界に入れると咆哮と共に踏み潰そうとする。

もはや避ける余力の無いハジメ

避けると叫びを上げるメルド団長

悲鳴を上げるクラスメイト達

そんな中俺は、何か無いか思考を回し、そして絶望した。

『走って助けに行く?』『間に合うわけがない』

『弓矢で腕を撃ち抜く?』『届くわけがない』『仮に届いても止まるわけがない』

『誰かに防御の魔法を唱えてもらう?』『そんな都合よくいるわけがない』『仮にいても詠唱の時間が足りない』『足りたとしても耐えられるわけがない』

『何か無いのか?』『ない』

『なんでもいいんだ』『ない』

『ない...のか...?』『ない』

『俺は...仲間を...助けられないのか?』

『いいえ、救えるわ』『ああ、救えるとも』

『汝は私の命を救ってくれた』『貴方は私を永遠という退屈から救ってくれた』

『今こそ、その力を解き放つ時よ』『今こそ、その力を友の為振るう時だ』

『さあ、今こそ冒険をしよう！オリオン！』

-----

周囲が騒然としてる中、『それ』だけは全員の耳に何故かはつきりと聴こえた。

それは、英雄が己の名を響かせるかのように。

それは、英雄が己の力を誇示するかのように。

それは、この世界では存在することのない『魔法』だった。

『放たれしは必中、我が矢の届かぬ獣はあらず』

【オリオン・オルコス】

一閃

それは、一本の矢であった。

その矢は、凄まじき速さを持って今にも踏み潰さんとしている獣の腕に吸い込まれてゆく。

その矢は、獣の持つ硬い外皮を意に介すことなく刺さり、獣の腕を爆散させた。

少年が文字通り命をかけた足止めにより変化した地面

少年を狙ったことによる獣の歪な姿勢

放たれた矢による腕の消失によって起きる重心の変化

この3つの偶然が重なったことにより、獣は少年を踏み潰すことが出来ず転倒した。

その奇跡にも近い偶然により、少年は離脱することができ、騎士団長の合図と共に数々の魔法が放たれた。

---

良かった… 助けることができた…

俺は今にも倒れそうになっているハジメの元へと向かおうとした時、一つの火球がハジメにぶつかり吹き飛ばした。

ハジメはなんとか立ちあがろうとしていたが、ベヒモスが再び暴れ、ボロボロだった橋は限界を迎え、崩れていく。そしてハジメはベヒモスと共に落ちて行く。

気づいたら、体が勝手に動いていた。

俺は近くにいるサポーターが背負っていたリュックを無理矢理奪い取るとハジメが落ちていった場所へと走っていく。

俺が何をしようとしているのか察したメルド団長は必死に俺に止まるよう声を張り上げる。だが俺は足を止めない。落下に対する恐怖はない。今の俺の頭にあるのはただ一つ。

待っているハジメ！俺は！決して！仲間を見捨てねえ！

## 9. 5星：クラスメイト side 残された者たち

ベヒモスと共に落ちてゆく南雲

それに続くよう飛び降りる三星

そのことにクラスメイトたちは何処か他人事のように見ていた。しかし1人の少女の叫びとともにこれは現実なのだと自覚してゆく。

「離して！ 南雲くんの所に行かないと！ 約束したのに！ 私があ、私が守るって！ 離してえ！」

今にも飛び出さんとする白崎を羽交締めにして抑える天之河

「香織！君まで死ぬ気か！南雲と三星はもう無理だ！落ち着くんだけこのままじゃ体が壊れてしまう！」

「無理って何!?南雲くんは死んでいない！行かないと... きつと助けを求めてる！」

天之河は白崎を気遣い言葉を掛ける。しかしその言葉を聞いた香織はますます力を強めて行く。

「お、おい雫！俺たちも抑えるぞ!... 雫?」

「なんで... 弓人が... 約束は... 私...」

「おい！しっかりしろ！雫！」

坂上が自身も抑えに行こうと八重樫に声をかけるが返事がこない。そのことに疑問を持ち振り返ると顔を蒼白させ瞳に涙を溜めた八重樫がいた。

周りのクラスメイトはどうすれば良いか分からず右往左往していた時、メルドが近づき問答無用で香織の首筋に手刀を落とした。一瞬痙攣し、そのまま意識を落とす白崎。

意識を落とした白崎を抱え、メルドを睨み付ける天之河。しかしそれは、白崎のことを思った行いのため。頭を下げる。

「ありがとうございます...」

「礼など... 止めてくれ。もう一人も死なせるわけにはいかない。全力で迷宮を離脱する... 彼女を頼む」

「はい...」

離れてゆくメルドの背中を何処か納得のいかない視線を向けていた天之河に八重樫に肩を貸していた坂上が近づいてゆく。

「なあ光輝…俺馬鹿だけだよ…メルドさんのやったことは間違いじゃねえってのは分かるぜ…」

「ああ…そうだな…行こう」

目の前でクラスメイトが2人死んだのだ。クラスメイト達の精神にも多大なダメージが刻まれている。誰もが茫然自失といった表情で石橋のあつた方を眺めていた。中には「もう嫌!」と言って座り込んでしまう者もいる。

天之河がクラスメイト達に向けて声を張り上げる。

「皆!今は生き残ることだけ考えるんだ!撤退するぞ!」

その言葉にクラスメイト達は半ば無理矢理体を動かし始めた。

天之河が必死に鼓舞し、メルドが的確な指示を出し、サポーター達が周囲の確認をしながらサポートする。そのお陰で、クラスメイト達は転移する前の20階層まで戻ることが出来た。

「帰ってきたの?」

「戻ったのか!」

「帰れた…帰れたよお…」

クラスメイト達が次々と安堵の吐息を漏らす。中には泣き出す子やへたり込む生徒もいた。天之河達ですら壁にもたれかかり今にも座り込んでしまいそうだ。

しかし、ここはまだ迷宮の中。低レベルとは言え、いつどこから魔物が現れるかわからない。完全に緊張の糸が切れてしまう前に、迷宮からの脱出を果たす必要がある。

メルドは休ませてやりたいという気持ちを抑え、心を鬼にして生徒達を立ち上がらせた。

「お前達!座り込むな!ここで気が抜けたら帰れなくなるぞ!魔物との戦闘はなるべく避けて最短距離で脱出する!もう少しだ、踏ん張れ!」

少しくらい休ませてくれよ、という生徒達の無言の訴えを目を吊り上げて封殺する。



涖々立ち上がる生徒達。天之河が疲れを隠して率先して先をゆく。道中の敵を、騎士団員達が中心となって最小限だけ倒しながら一気に地上へ向けて突き進んだ。

こうして2人の犠牲を出し、オルクス大迷宮の遠征は終了した。

10星：奈落の底で光る星【上弦】

『起きなさいオリオン。今ならまだ間に合うわ』

『早く起きるんだオリオン。手遅れになってしまうぞ。』

『私たちはいつだって貴方を見守ってる』

『私たちはいつだって汝を信じている』

『さあ、起きて友を助けるんだ』

水の流れる音がする。

吹き抜ける冷気が頬を撫でる。

体に鈍い痛みを覚えながら、俺の意識は覚醒していく。

「くそっ… 近くにハジメはいないか…」

俺は周囲を見渡したが、人がいた痕跡は確認できなかった。

もしかしたらまだ流されている可能性を考え、所持品を確認した後、服が濡れていることも気にせず探索を始めた。サポーターから奪い取ったリュックには応急処置用の包帯、緑光石を加工して作ったラントン、休憩する際にクラスメイト全員に配るために用意していた、水筒と干し肉といった携帯食が入っていた。

よし、普通に食ってもいっても1週間ぐらいは持ちそうだ…

そして、川沿いに暫く進んでゆくと『あるもの』を発見した。

それは、地面に刻まれた魔法陣だった。

そして魔法陣の中心には燃えた後のように黒いシミが付いており消えて時間がそこまで経っていないのか煙が立ち昇っていた。

そんなものがある理由はただ一つ、ここに誰かがいたからである。

俺は周囲に何か反応が無いか意識を集中させた。すると、俺の索敵できる範囲ギリギリの位置に1つの反応があった。

それは何かを見ていた。

それは何かを狙っている。

急げ、手遅れになるぞ。

頭の中で警鐘が何度もなる。

胸騒ぎが収まらない。

1秒でも良い、早く辿り着いてくれ。

そうして辿り着いた先で俺の目に写っていたものは。

左腕を失い、夥しい量の血を流すハジメと、

ハジメの腕を貪る熊の魔物だった。

「っ!!!!ハジメエエエエエエエエエエ!!!!」

俺は叫びを上げ魔物に向かい矢を放った。しかし、反射的に叫んでしまったことが悪かった。

俺の声に反応した魔物は俺の方を向いたことで矢は魔物の額へ直撃した。

しかし、魔物の頭蓋骨は想像以上に硬く、矢は突き刺さることなく弾かれてしまった。

「ちっー!」

しくじった!そう思った俺は即座に短剣と包帯を取り出すとハジメと魔物の間に立った。

「ハジメ!これで腕を縛るんだ!」

「弓人...腕が...腕があああ...」

「今は話してる余裕はない!お前は後ろの壁に『錬成』で穴を開けて入るんだ!」

『錬成』... そうだ... 『錬成』! 『錬成』!! 『れんせええええ!!』

ハジメは半狂乱になりながら壁に穴を開けていく。それを、確認した俺は、短剣を構え魔物と対峙する。

魔物は食事の邪魔をされたことに苛立ちを覚え、目の前の男を次の標的に定めた。

暫く睨み合いが続いた後、先に仕掛けたのは俺からであった。

「注意が必要な部位はあの長い爪... あの巨体... だが熊と同じ骨格なら急所も同じはず!」

俺は全速力で魔物に近づいていく。

魔物は決して目を離すことなく姿勢を低くして待ち構える。

「3... 2... 1... 今だ!」

魔物は俺が肉薄するのに合わせてその長い爪を振り下ろす。

俺は爪が当たる直前に横に跳び紙一重で躲す。

その瞬間、剛風が吹き荒れ、俺の右腕に1本の爪痕がつき鮮血が噴き出す。

「何!? 距離を見誤った!?!: : : いや、固有の能力か.: : .」

俺は目の前の魔物から距離を取り、何度か掌を閉じたり開いたりする。

「.: : . よし、神経は繋がってる.: : . まだいけるな」

掌の状態を確認するとともに、ハジメがいた場所を一瞬だけ目を向ける。

そこには人一人が這いつくばれば入れそうな穴が空いており、かなりの深さになっていた。

「今やるべきことはハジメの治療。コイツは撃退するだけで十分」

俺は再び、魔物に向かい走りだす。今度は左右に移動しながら近づいていく。魔物は変わらず姿勢を低くして待ち構える。

そして爪を振り下ろしてくると、俺は先程より大きく回避した。

再び剛風が吹き荒れるが、今度は回避することができた。

その瞬間、俺は魔物の眼前に飛びつき、短剣を魔物の右目に突き立てた。

「グルウアアアア!!」

とてつもない痛みに絶叫とともに暴れ始める魔物。

俺はそのまま短剣から手を離しハジメが作ったであろう穴に向かって走り出す。そしてその穴に向かい頭から滑り込み入った。

-----

ランタンを取り出し、暫く匍匐前進で進んでいると、その先にはハジメがいた。

「っ！ハジメ！すっかりしろ！ハジメ！」

俺は無理矢理ハジメの隣に移動すると、声を掛けながら脈をはかる。

脈はある… 錬成の多用による精神疲弊か…  
マインドダウン

ハジメが気を失っているうちにハジメの応急処置をしようと切断された左腕を見ると、そこには、切断された断面の肉が盛り上がって傷が塞いでいた。

「馬鹿な… いくらなんでも早すぎる…」

ハジメの腕に疑問を持ってしているとハジメの頬や口元に水滴が落ちてきた。

俺はもしやと考え、怪我のしていない左手でその水滴を溜め、そして口に含んだ。そしてそれを嚥下すると、魔物によつてつけられた傷が修復され始めた。

「これは、もしかしてポーション？… いや、この回復量はエリクサーレベルだぞ…」

これは使える、そう考えた俺は水滴がハジメの口に入るようハジメの位置を動かすと、ハジメが起きるまで入り口に視線を向けて、外への警戒を強めた。

10星：奈落の底で光る星 【下弦】

暫くしていると、ハジメが意識を取り戻したのか、うめき声とともに体を動かし始めた。

「うう… ここは…」

「よう、気が付いたか。ハジメ」

「えっ… 弓人…？僕は… って痛!?!」

「気をつけろ、今お前は血を流しすぎてる。いつ貧血で倒れてもおかしくないんだ。」

ハジメは自身の作った穴の低い天井に頭を打ち、『錬成』によって天井を高くしようと手を伸ばしたが、片腕がないことに気づいた。

「えっ…？なんで…腕が…」

「… っすまなかつた…俺が… もっと早く辿り着いてたら…」

「大丈夫だよ… 弓人が助けに来てくれただけで僕は…」

俺の謝罪に対して、返事をしようとしたハジメに突如、無くなったはずの左腕から激痛が生じた。

「痛っ… ぐっ… があ、あ、あ！」

「ハジメ!?!くそっ！幻肢痛ってやつか…」

無くなったはずの部位から痛みが出るとされる幻肢痛、本来は鏡などを使い痛みを和らげたり、リハビリをするのだがそんな物は存在しない。

医療知識に乏しい俺が頭を悩ませていると、痛みがマシになったのかハジメが話しかけてきた。

「なんで腕が？… 血だって止まってるし…」

「腕が治ってるのと血が止まってる理由は恐らく、そこから落ちてる水滴だ」

「これが… もしかして…」

何かを思いついたハジメは、ふらつきながら水滴が落ちてくる方向へ向かって錬成し始めた。

まるで花の香りに誘われる虫のように、何かに取り憑かれたように

ゆっくりと、しかし確実に向かっていく。それに対して俺は何も言わずついていく。

錬成して、魔力が尽きそうになると水滴を飲む。

これをどれだけ繰り返しただろうか。

水滴だったものが小さいながら水流へと変わり始めた頃

石壁と同化するように『それ』はあった。

「こ…これは…」

「おそろく…こいつが水源だな…」

それは、バスケットボールほどの大きさのある青い鉱石だった。

それは、アクアマリンの青をもっと濃くして発光させた、言葉で表現するならばそのような言葉でしか表せない美しい雰囲気の花だった。

その神秘的な光景に俺たちは、思わず息を呑んだ。

そしてハジメは、まるで惹きつけられるように、手を伸ばし直接口をつけた。

「っておい！水が大丈夫だったからってこれが大丈夫だってまだ決まった訳じゃないんだぞ!」

「ご、ごめん…けどやっぱりだ…さっきまであった痛みや倦怠感が無くなっている…」

この鉱石の名は【神結晶】

大地の魔力が、数千年という時間を掛け結晶化した、歴史上でも伝説とされた秘宝である。

そしてこれから採取できる液体を【神水】といい、どのような怪我や病気を治すことができ、不死の霊薬ともされている。

「これがあれば、とりあえず死ぬことはない…か…」

「ハジメ、ここを錬成して貰えるか？ここを仮拠点にしたい。」

「う、うん…分かった」

こうしてハジメの錬成のお陰もあり、簡易的な休憩スペースが完成した。

「ハジメ、今俺たちが取れる行動は簡単に分ければ3つだ」

「1つ目は、このまま助けを待つ…けどこれは一番無しだ。理由は

外だと俺たちは死亡扱いで報告されるだろう…。助けが来る確率は絶望的だ。」

それに対して、ハジメは無言で頷く。

「2つ目は、2人で共に脱出のため行動する。出来たらこれが一番なんだが…。おすすめはしないな。」

「それは…。僕が弱いからだよね…。」

「…。ああ、そうだ…。この魔物はベヒモスと比較にならない強さだ。お前を守りながらはおそらく無理だ。」

俺はハジメの俯きながら吐き出した言葉に、否定せず肯定した。守ってやるという言葉にするだけなら簡単だが、それを実行できる力が俺にはない。

「それで…。最後の行動は…。?」

「3つ目、これが一番現実的だ。それはハジメにはここで残ってもらい、俺が脱出のルートを探す。そしてルートを確保できたら一度戻り、速攻で脱出する。」

「嫌だ!!!お願い!!!見捨てないで!!!」

俺が3つ目の提案した瞬間、ハジメはこの世の終わりのような顔をして必死に懇願し始めた。

当然であろう、クラスメイトの裏切りにより、腕を失い、死に直面したのだ。救ってくれた友が帰ってくるとはいえ、一時の間、再び孤独になることは彼には耐えられなかった。

「落ち着け!見捨てるわけないだろ!脱出ルートが確保できたらすぐに戻ってくる!」

「でも!!!でも!!!」

「甘ったれるな!!!今は選んでいる時間がねえんだよ!!!」

「ひっ…。」

「俺だつて友達をこんな所に置き去りにしたくねえよ!!けどな!!お前を守るほど俺は強くねえんだよ!!!」

「……………僕が弓人に守られなくて良いくらい強くなれば良いんだよね……………」

「何?」



「準備して欲しいものがあるんだ…  
一つ…  
僕が強くなる方法がある…」

## 11星：分の悪い賭け

俺は今、息を潜め岩陰に隠れている。

目の先には尾を二つ持つ狼のような魔物だ。

魔物は俺の存在に気づいていない。俺は矢を1本取り出し弓を引き絞る。

「ストック解放」

「解放数2、2節詠唱破棄」

「【オリオン・オルコス】」

一閃

白く輝く1本の矢は、魔物の首に吸い込まれ、そこから上を消失させた。

今行ったものが、俺のスキルの1つ【魔力装填<sup>マジックロード</sup>】

精神力を一定量消費することでストックを生成し、その数に応じて詠唱式を破棄することが可能になる。ストックは1度作ると10分ほど経過すると自動消滅するが詠唱中に妨害されることなどで発生する魔力暴発<sup>イグニスファトウス</sup>の心配がないので重宝している。

俺は仕留めた魔物を川まで持っていくとハジメに新しく作ってもらった短剣を使い皮を剥ぎ解体していく。

そして、爪や皮、少量の肉を持ち、残りを廃棄して仮拠点へと戻っていった。

「ハジメ、調子はどうだ？」

「おかえり、うん、やっと形になってきたよ」

ハジメが言った強くなれる方法、それは現代兵器の作成だった。

錬成の訓練を行い、錬度を高める。言葉にすれば簡単だが、ハジメは片腕だ。

現代兵器のような細かいパーツの多い武器を作るには、1ミリのズレも許されない精密さと、集中力が必要だ。

最初の頃は何度も失敗して、俺が鉱石の採集に出かけていた。

鉱石の知識のない俺は、洞窟内にある石を片っ端から集めた。

そのため、ただの石などがほとんどだったが、ハジメの鍛錬の賜物か、【鉱物系鑑定】の技能を手に入れることができた。

そして、この洞窟内で最も硬度のある『タウル鉱石』で構築した銃身と弾丸。

そして、燃焼すると爆発する性質を持つ『燃焼石』を粉末状にして圧縮したことにより。

ハジメがこの洞窟で生き残るための武器が完成した。

「これが僕の今作れる最高傑作：大型リボルバー『ドンナー』だよ。ありがとう、弓人がいてくれたからこれを作ることができた。」

「気にするな、俺もここでならステイタスを上げることが出来たからな、修練として丁度いい」

三星弓人 Lv. 5

力： I : 0 ↓ I : 3 2

耐久： I : 0 ↓ I : 1 5

器用： I : 0 ↓ I : 2 3

俊敏： I : 0 ↓ I : 2 4

魔力： I : 0 ↓ I : 1 8

頑健： E

対魔力： G

千里眼： H

そう、王宮の訓練では1度も増えることの無かった俺のステイタスがついに上昇したのだ。だがそれは、Lv5の俺のステイタスが上がるほどの【経験値<sup>エッセリア</sup>】があつた魔力たちにはあるということだ。

「なるほどな、確かにこのデカさなら破壊力には期待できる...けど、その分反動がデカいはずだ。」

「うん、恐らく今の僕じゃあ使いこなせない。だからもう一つの方法を使う。」

今、ハジメの目の前には俺が獲って来た魔物の肉と、神水がある。ハジメは、魔物の肉を食うつもりだ。

当然俺は止めた、それは余りにも分の悪い賭けだからだ。

まず、魔物の肉には毒がある。文献によると喰らったものは皆体が破壊され死亡している。ハジメはその毒を神水によって中和するつもりのようなのだ。

しかし、毒が神水の回復力を上回っていたらアウト、仮に回復力が勝ったとしても強くならなかつたら意味がない、そして一番最悪なのは毒と回復が同時に発生することだ。

「ハジメ… 本当にやるんだな？」

「うん… 馬鹿なことだとは分かっている… けど… これしか道がないんだ…」

「… はあ、分かったよ… この頑固者」

「ははは… 約束するよ、絶対に死なないって」

意を決して、肉にかぶりつくハジメ、何度か吐き出しそうになるが神水で無理やり流し込んでいく。

暫くして、『それ』は訪れた。

「うっ!? あああ!! があ あ!!!」

「くそっ! 足りなかつたか!? ハジメ! これを飲むんだ!」

俺は即座に、石で作られた試験管に入った神水をハジメに飲ませる。

飲ませた瞬間は、痛みが引いたのか落ち着くがすぐに痛みで暴れ始める。

ハジメの体から何かが壊れる音がする。

その直後神水によって修復される。

くそっ! よりによって1番のはずれを引きやがった!

「ハジメ! 意識をしつかり保つんだ! じゃないと先に心が死ぬぞ!」

「あ、あ、あ、が!!! く、ぎぎ、があああ!!」

「お前はこれ食ってでも果たしたいことがあるんだろ!? 死なねえって約束しただろが!!!」

俺は懸命に声をかける、少しでもハジメの意識が頭から離れられる

様に

「僕は……りたい……」

「何だ！エリクサーが欲しいのか!？」

「僕は！日本に帰りたいたい!!!」

「ああ!!!帰ろう!!!日本に!!!」

何分だろうか…… 何時間だろうか……

痛みにより、叫びのたうち回っていたハジメの動きがだんだんと小さくなって来た。

「っ!?ハジメ!?死ぬな！ハジメ!」

「だい…… じょうぶ…… もう…… 痛くない……」

毒の破壊と神水の再生の勝負は再生の勝利だったらしい。

そして、ハジメの体にはとてつもない変化が起きていた。

彼の日本人特有の黒髪は過剰なストレスにより白髪へと

彼の肉体はひと回り大きく筋肉質へと

そして、洞窟にいる魔物のように赤黒い血管のような線が浮き出ていた。

「良かった…… 生きてて本当に良かった……」

「ごめん…… でも、弓人が声を掛けてくれたから…… 僕は生きてる」

共に生きていたことに喜びを覚えながら

当初の目的だった、ハジメのステータスの変化を確認するため、ハジメのステータスカードを見た。

|||||

南雲ハジメ 17歳 男 レベル：8

天職：錬成師

筋力：100

体力：300

耐性：100

敏捷：200

魔力：300

魔耐：300

技能：錬成・魔力操作・胃酸強化・纏雷・言語理解

「こいつは… 想像以上の結果だな…」

「うん… でもこれなら、僕も戦える」

ステータスの予想以上の上昇に驚きながら、俺たちは確信する。

これならいける

「ステータスどころか技能も増えてるな、なんだ？この魔力操作は？」

「もしかして、今感じてるこの変な感覚かも… ちよつと使ってみるね」

ハジメはそう言うと、目を閉じて意識を集中させる。すると、ハジメの体に再び赤黒い線が浮かび上がって来た。

「おっ、おっ、おお〜？」

「なんだよ… その間抜けな声は…」

ハジメの何とも締まらない声に呆れていると、彼は地面に右手をついた。

すると詠唱をしてないのにも関わらず地面が盛り上がってきた。

「うお！ハジメ、お前いつの間に詠唱破棄なんてできるようになったんだ？」

「恐らく… これが魔力操作の力なんだと思う…」

ハジメは他に、自身に電気を纏わりつかせる『纏雷』を披露してくれた。

「確かにこの方法は良いが… 魔物の肉を食うたびにあんなのになるのは…」

「それは大丈夫だと思う、ここにある『胃酸強化』のおかげで、ほらっ」  
ハジメはいきなりそんなことを言うと、手元にあつた肉を食べ始めた。

俺は急いで神水を取り出し、いつでも対処できるように構えた。

10秒… 1分… 10分… 特にハジメに変化はない

「ね？大丈夫で… って痛あ！」

「こんの、馬鹿野郎！石の時といいもう少し警戒しろ！」

「ぐ…ぐめん…」

心配させたハジメに拳骨を食らわせて怒ると、流石に悪いと思った

のか、申し訳なきように謝罪して来た。

「まあ…：これで魔物の肉を食っても大丈夫って分かったんだ。また俺が新しい魔物を獲ってくるから、少し体を休ませてろ」

「待って弓人！次からは僕に…：いや、俺にやらせてくれ！」

「ハジメ…：お前…：」

「もう、守られてるだけの『南雲ハジメ』は嫌なんだ！だから…：やらせてくれ！」

ハジメは、真っ直ぐな目で俺を見つめてくる。そこには、決して譲らない強い意志を感じさせた。

「…：分かったよ、けど！暫くは俺の指示に従って貰うし、ちょっとでもヤバいと思ったらすぐに横槍を入れる！良いな！」

「っ！ああっ！」

## 12星：宿敵との決着【上弦】

「はあ… はあ… くそっ！当たらねえ！」

「だからといって、やけになるなよ。そして思考を止めるな」

ハジメは今、脚が異様に発達したウサギの魔物と対峙している。

ハジメは、ドンナーで狙い撃つが、的の小さい魔物に対して、苦戦を強いられている。

「目だけで狙うからそうなる。常に考えろ、次にあいつは何をするかと」

「予測しろ、相手が動く方向を。そして銃口を合わせろ」

「はあ… はあ… やつてやろうじゃねえか！」

こうして、ハジメの魔物の戦いは時間を掛けたものの遂に、ハジメの放った弾丸は魔物の右足を撃ち抜いた。

「よし！当たった！」

「当たったからと気を抜くな！相手が動きを止めたなら即座にとどめを刺せ！」

ようやく当たった事に喜んでいるハジメに喝を入れとどめを刺すよう指示する。こうして、ハジメの戦いは勝利を収めた。

「くそ… やつぱり動く敵だと勝手が違うな…」

「けど最初の時に比べたらかなり良くなった。最初なんて、明後日の方向に撃ってたしな」

「忘れるー！ああ… 恥ずかしい…」

当然だが、ハジメは銃を使った経験なんて無い、ドンナーの想像以上の反動や片腕撃ちが強制されてしまったため、バランスが上手くとれず、最初の頃はまともに当てることができなかった。しかし、何度も繰り返し訓練したこともあり、最近だと止まっている魔物に対してなら確実に撃ち抜くことができる。

「なあ、魔物の肉ってどんな味なんだ？」



「とにかく不味い。しかも獣臭がひどい」

俺はふと疑問に思ったことを聞いたら、ある意味予想通りの答えが来た。

それはそうかと考えていると、ハジメが口を開いた。

「なあ… 弓人は何でそんな戦闘の知識があるんだ？」

「ん？ああ… そうだな… 何て説明すればいいか…」

ハジメは、俺の魔物との戦闘に対して知識が豊富である事に疑問を持ったようだ。いつか来る質問だと思っていたが素直に言うべきか悩んだ。

「まあ… あれだな… 一段落ついたら説明するさ」

「？まあ良いけどよ…」

俺は、先延ばしにすることを選んだ。

ハジメなら素直に言っても気にしないだろう。

けれど、怖い。

もしかしたら、変な目で見られることが

もしかしたら、自分とは違うモノとして見られることが。

そして俺は、無理矢理話を逸らすことにした。

「それよりハジメ、ステータスの変化はあったか？」

「そうだな、ステータスカードを見てみるか」

|||||

南雲ハジメ 17歳 男 レベル：12

天職：錬成師

筋力：200

体力：300

耐性：200

敏捷：400

魔力：350

魔耐：350

技能：錬成「+鉱物系鑑定」「+精密錬成」「+鉱物系探査」・魔力操

作・胃酸強化・纏雷・天歩「+空力」「+縮地」・言語理解

|||||

「最近、二尾狼だとそこまで上がってなかったのに随分上がったな」

「今まで喰ったことない魔物の肉を喰うと上昇値が多いらしいな」

「んじゃあこの追加された天歩の縮地ってのを使ってみるわ」

ハジメはそう言うと、立ち上がり腰を低くして集中する。

次の瞬間、ハジメの足元は陥没し、ハジメは消えた。

そして、

「いってええええええ!!」

「これは想像以上の速さだな、出力を調整すれば戦闘の幅が広がるな」

壁に顔面から突っ込み、悶絶するハジメを傍目に俺はそんなことを口にする。それに対して顔をぶつけたせいかわ、それとも羞恥のせいかわ顔を赤くしたハジメが俺を睨むが無視する。

「じゃあ次は空力ってのをやってみてくれ」

「くっ… 分かった…」

ハジメは、再び集中する。しかし、イメージが掴めないのなかなか発動しない。

暫く黙って見ていると、ハジメは前方へと跳躍し、今度は地面に突っ込んだ。

「へぶうー!」

「なるほどな、空力は空中に足場を作る能力か。うまく使えば立体的な戦闘ができる」

「くっそ… 2回も恥かいた…」

「覚えたての技能なんだし、そんなもんだ。よし、今日はその技能を使いこなす訓練をするぞ」

「速攻で使いこなしてやる…」

宿敵との決戦は近い。

## 12星：宿敵との決着【下弦】

俺たちが落ちてから、おおよそ1週間ほど経過した。

ハジメと俺は今、『やつ』を探している。

本来であれば、出口を探すのを優先するべきだ、だがハジメは『やつ』との決着を望んだ。

「確かにあいつを食べれば、お前はさらに強くなる……けど、あいつはお前にとってトラウマそのものだ。やれるのか？」

「正直に言うとは分からない……けど、あいつから逃げるわけにはいかない！逃げたら……俺は前に進めない！一生弱い『南雲ハジメ』のままだ！」

俺はハジメの覚悟を尊重した。そして俺は、ハジメに対して条件をつけた。

戦うのは、魔物を喰って手に入れた技能を完全に使いこなせるようになってから

確実に勝てるプランを考えること

少しでも不味いと思ったら俺も戦闘に参加するのを認めること

最後に、死なないと約束すること

ハジメはそれを了承した。

自身が技能を使いこなすため、訓練した。

あいつを殺すためのプランを必死に考えた。

全ては前に進むために。

「ハジメ、前方に狼の群れが来ている。今のペースだと10秒後にぶつかる」

「了解だ。あいつと戦う前の準備運動といこうか」

ハジメはドンナーを取り出すと、前方を見据える。

「グルウア！」

二尾狼の1匹が飛びかかってきた。ハジメは冷静に、その場で跳躍し宙返りをしながら引き金を引いた。

ドパンツ！

乾いた破裂音が洞窟内を響かせる。

『燃烧石』の粉末による爆発と『纏雷』により電磁加速された弾丸は狙い変わらず最初の一頭の頭部を粉碎した。そのまま空中で『空力』を使い更に跳躍し、飛びかかってくる二尾狼に向かって連続して発砲し撃ち抜く。

俺の方に向かってくる二尾狼に対して、俺はナイフを取り出すとすれ違おうと同時に二尾狼の喉笛を切り裂いた。

「無駄撃ちもほとんど無し、絶好調だな」

「弓人も、リーチの短いナイフで急所に1撃かよ」

ハジメは肘から先のない左腕の脇にドンナーを挟み、素早く装填する。そして俺たちは死骸に目もくれず、索敵を再開した。

暫く襲ってくる蹴り兎や二尾狼を瞬殺していると、遂に『やつ』を見つけた。

『やつ』… 爪熊は自らが仕留めたであろう蹴り兎の死骸を貪っている。

俺が突き立てたナイフは既に抜けているが、右目は完全に潰れている。

「ハジメ… 行ってこい」

「ああ、すぐに終わらせる」

ハジメは短くそう言うのと、『縮地』を使い飛び出した。

「よう、爪熊… あの時以来だな」

爪熊はその鋭い眼光を細める。

今まで目に映るもの全てが獲物だった彼にとって、背を向けず自ら向かってくることなど無かったからだ。

「まずはお前に、俺を『敵』と認識させる」

ハジメはドンナーを抜き銃口を真っ直ぐに爪熊へ向けた。

恐怖は無いと言えば嘘になる。

目を閉じればあの時の痛み、絶望、恐怖を思い出す。

だが、それ以上にあるのは、友と故郷へ帰るといふ決意

「お前を殺して… 俺は前へ進むー」

叫びと共に引き金を引く。破裂音が響き、高速の弾丸が放たれる。

「グウウ!？」

爪熊は咄嗟に、身を投げ出し回避する。恐らく、ハジメの殺気に反応したのだろう。

しかし、完全に回避することは出来ず肩の中が抉られた。

爪熊の残った瞳に怒りが宿る。どうやらハジメを『獲物』ではなく『敵』として認識したらしい。

「ガアアア!!」

爪熊はその巨体からは想像できない速度で突進してくる。

ハジメは爪熊からのプレッシャーをその身に感じながら待ち構える。

これは、ハジメが最初から決めていたことだ。

自身の左腕を奪い、心を砕いた『あの魔法』

それを打ち破り勝利する。

そうしなければ、本当の意味で『前へ進めない』

一生、自身の中であの光景が残ってしまうからだ。

突進してくる爪熊に、再度、ドンナーを発砲する。超速の弾丸が爪

熊の眉間めがけて飛び込む。

しかし、爪熊はその巨体を側宙させて、弾丸を回避した。そして、勢いのまま爪腕を振るう。固有魔法が発動しているのか三本の爪が僅かに歪んで見える。

ハジメは俺から、固有魔法の範囲を聞いていたためギリギリで回避せず、全力でバックステップを行った。

その瞬間、暴風が吹き荒れる。ハジメがいた場所には、3本の爪痕が深々とつけられ、爪熊が獲物を逃がしたことに苛立つように咆哮を上げる。

その瞬間

カラン…

爪熊の足元で何か軽い音がした。反射的に爪熊はそこを見るとそこには、直径5センチほどの深緑色のボールが転がっていた。見慣れないものに疑問を持った瞬間、そこから強烈な光が放たれた。

これがハジメの秘策『閃光手榴弾』である。

奈落の暗さに慣れた爪熊の目には効果的面だ。

視力を奪われた爪熊は、パニックになり両腕を振り回しもがく。その隙を逃すハジメではない。再びドンナーを構えてすかさず発砲する。

弾丸が暴れまわる爪熊の左肩に命中し、根元から吹き飛ばした。

勝負ありだな…。俺はそう思いハジメの元へと歩いていく。

「まさか左腕に当たるとは…。偶然にしては…。出来過ぎだな…。」

「ハジメ、この位置からなら脇の下を狙え。そこが心臓だ」

「ああ…。分かった…。」

トラウマ  
宿敵との戦いが、終わった。

「相変わらず不味い…。けど他より旨く感じるな…。」

「強さによって味が変わるのか？」

「分からん、気持ちの問題かもな」

ハジメが爪熊の肉を喰ってる間、俺は周囲の警戒をする。

「…。漫画やアニメのキャラみたいな…。達成感とか、爽快感とかは無かった。」

「そうか」

「けど…。これで俺は前へ進める気がする」

「そうだな」

「ありがとな、お前が来てくれてなかったら…。俺は俺じゃ無かった」

「気にするな、友達だろ？」

「くくくっああ！」

|||||

南雲ハジメ 17歳 男 レベル：17

天職：錬成師

筋力：300

体力：400  
 耐性：300  
 敏捷：450  
 魔力：400  
 魔耐：400

技能・鍊成「+鉱物系鑑定」「+精密鍊成」「+鉱物系探查」「+鉱物  
 分離」「+鉱物融合」・魔力操作・胃酸強化・纏雷・天歩「+空力」「+  
 縮地」・風爪・言語理解

三星弓人 Lv. 5

|     |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |
|-----|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 力   | ： | I | ： | 3 | 2 | ↓ | I | ： | 8 | 7 |
| 耐久  | ： | I | ： | 1 | 5 | ↓ | I | ： | 4 | 6 |
| 器用  | ： | I | ： | 2 | 3 | ↓ | I | ： | 7 | 6 |
| 俊敏  | ： | I | ： | 2 | 4 | ↓ | I | ： | 8 | 1 |
| 魔力  | ： | I | ： | 1 | 8 | ↓ | I | ： | 6 | 5 |
| 頑健  | ： | E |   |   |   |   |   |   |   |   |
| 对魔力 | ： | G |   |   |   |   |   |   |   |   |
| 千里眼 | ： | H |   |   |   |   |   |   |   |   |

## 12. 5星：クラスメイトside 失意と決意〔上弦〕

時間は少し遡る。

ハイリヒ王国王宮内、召喚者達に与えられた部屋の一室で、谷口鈴は、暗く沈んだ表情で未だに眠る白崎を見つめていた。

ベヒモスの悲劇から、5日経過している。

あの後、宿場町ホルアドで一泊し、早朝には高速馬車に乗って一行は王国へと戻った。とても、迷宮内で実戦訓練を続行できる雰囲気ではなかった上、勇者の同胞が死んだ以上、国王にも教会にも報告は必要だった。

谷口は、王国に帰って来てからのことを思い出し、白崎に早く目覚めて欲しいと思いつつも、同時に眠ったままで良かったとも思っていた。

帰還を果たし南雲と三星の死亡が伝えられた時、王国側の人間は誰も彼もが愕然としたものの、それが『無能』の南雲と『ステータス0』の三星だと知ると安堵の吐息を漏らしたのだ。

死んだのが『無能』と『ステータス0』で良かった

神の使徒でありながら役立たずなど死んで当然だなどと言う声も聞こえる。

言葉が出なかった。人が死んだのに何故そんなことが言えるのかと。

実際、正義感の強い天之河が抗議したことで、国王や教会も悪い印象を持たれてはマズイと判断したのか、南雲と三星を罵った人物達は処分を受けた。

結局、勇者は無能にも心を砕く優しい勇者であると噂が広まり株が上がっただけで、南雲と三星の評価が変わることはなかった。

あの時、自分達を救ったのは、勇者も歯が立たなかった化け物をたった一人で食い止め続けた南雲とトラウムソルジャーに襲われか



けた時、矢を放ち守ってくれた三星だというのに。そんな彼らを死に追いやったのはクラスメイトの誰かが放った流れ弾だというのに。

結果、現実逃避をするように、あれは南雲は自分のドジで落ちて、三星も勝手に落ちていったと思うようにしている。死人に口なし。無闇に犯人探しをするより、南雲と三星の自業自得にしておけば誰もが悩まなくて済む。クラスメイト達の意見は意思の疎通を図ることもなく一致していた。

メルド団長が落ちた2人のため、真実を明らかにしようとしたが、教会と国王からの圧力によってそれは叶わなかった。

「カオリン… 私たち… どうしたらいいのかな？ シズシズも部屋に閉じ籠ったきり出てこないし…」

あの日から一度も目を覚ましていない白崎の手を取り、そう呟く谷口。

医者 of 診断では、体に異常はなく、おそらく精神的ショックから心を守るため防衛措置の一つだろうということだった。故に、時が経てば自然と目を覚ますと言っていた。

谷口は白崎の手を握りながら、「どうかこれ以上、優しい彼女を傷つけないで下さい」と、誰ともなしに祈った。

その時、不意に、握り締めた彼女の手が僅かに動いた。

「!?カオリン！鈴の声が聞こえる!？」

「… 鈴ちゃん?」

そして、目を覚ました白崎に涙を浮かべる谷口

白崎は、暫く焦点の合わないまま周囲を見ていたが、意識が覚醒してからは、手を握っていた谷口の方を見て声をかける。

「そっこだよ！鈴だよ！大丈夫？しんどくない?」

「う、うん。平気だよ。ちよつと怠いけど… 寝てたからだろうし…」

「そっか… そっこだよね、5日も寝てたんだから… 怠くもなるよね…」

「5日… ? 私… 確か迷宮にいて…」

親友が目覚めたことに安心して不意に出た言葉、それがいけなかつ

た。

徐々に焦点が合わなくなっていく彼女を見て、咄嗟に話を逸らそうとしたが、記憶を取り戻す方が早かった。

「それで…… あ……… 南雲くんは？」

「えつと…… そのお…… それは」

言葉を詰まらせる谷口を見て、あの光景を思い出す。

しかし、それを受け入れるほどの余裕は彼女には無かった。

「…… 嘘だよな？ そうでしょ？ 鈴ちゃん。私が気絶した後、南雲くんも助かったんだよな？ そうでしょ？ ここ、お城の部屋だよな？ 皆で帰ってきたんだよな？ 南雲くんは…… 訓練かな？ ああ…… 弓人くんにもお礼を言わなきゃ…… 私、ちよつと行ってくるね。だから離して…… 鈴ちゃん」

現実逃避するように次から次へと言葉を紡ぎ2人を探しに行こうとする白崎。

そして、そんな白崎の腕を掴み離そうとしない谷口。

彼女は意を決し、口を開く。

「…… カオリン…… あのね？…… 2人はもう……」

「やめて……」

「カオリンだって…… 実はもう……」

「やめてよ……」

「2人はあの時…… あの奈落に……」

「いや、やめてよ…… やめてったらー！」

「2人はもう…… 死んだんだよ……」

「ちがう！ 死んでなんかかない！ 絶対、そんなことない！ どうして、そんな酷いこと言うの！ いくら鈴ちゃんでも許さないよ！」

「鈴だって！ 信じたくないよ！」

「っ！ 鈴ちゃん……？」

「鈴だって……！ 信じたくないよ！ あの時一人で抑えてくれた南雲くんが！ 鈴達が骸骨に襲われそうになった時に守ってくれた三星くんが！ 死んだなんて信じたくないよ！ だから…… 辛いのはカオリンだけじゃないんだよお！」

谷口も、限界だったのだ。

迷宮で魔物に襲われる恐怖

クラスメイトが死んだことによる恐怖

人の死に対する貴族達の扱い

どうにか抑えていたものが、ついに爆発したのだ。

声を荒げ、涙を流す谷口を見て、白崎はその場でへたり込んでしまった。

認めてしまったのだ。あの光景は現実なのだ。

「鈴ちゃん… ごめんね… 私、自分のことしか考えてなかった…」

「もう… 鈴分かんないよ… カオリンは眠ってたし… シズシズは部屋から出てこないし…」

「え… 雫ちゃんが？」

「うん… 鈴達と呼んでも出てこないし… ご飯だって全然食べないし…」

「雫ちゃん！」

「あつ！待ってカオリン！まだ安静にしないと！」

白崎は走り出す。親友の元へと

12. 5星：クラスメイトside 失意と決意【半月】

彼との出会いは、祖父の開いていた道場だった。

その時の出会いは、別に特別なものでも無かった。

「あく、三星弓人って言います。ここには……まあ、剣術ってカッコいいな〜って思ってた入りました。よろしくお願いしま〜す」

実に男の子らしい理由だ。

第一印象は、普通の男の子だった。

「三星くんって、他の男の子みたいにアニメの真似とかしないよね」

「ん？まあ、そういうのしたくつて入ったわけじゃないしな〜」

「ふうん、変なの」

普通の男の子から、ちよつと変な男の子に変わった。

「なくんか、八重樫って変だよな」

「変？私のどこが変なの？」

「だって……なんでイヤイヤやってるんだ？」

私は彼の手を引っ張ると、誰も来ない道場の裏に走った。

「なんで……」

「なんでって……勘」

「勘……？」

「そつ、『なんかすげーつまんなそーにやってんなー』って思ってた

この時、私は誰かに話しかかったのだろうか

それともこの時点で、彼になら話してもいいと思っただろうか

私は自身の本音を話した。

本当は、剣術なんてやりたくない

本当は、女の子らしい服が欲しい

本当は、可愛いぬいぐるみが欲しい

けれど、期待してくれてる父や祖父を裏切りたくない

「……なあ八重樫。そのこと、ちゃんと師範代に言ったのか？」

「言っていない… 言つてがっかりされたくないし…」

「そっか、でも言わなきや駄目だ」

「えっ… なんぞ?」

「言わなきや、伝わらないことだつてあるんだ。だから、言わなきや駄目だ」

「でも… 怖いよ…」

「怖いならよ!俺もいつてやるよ!」

「でも… 悪いよ…」

「悪くなんかねえよ!ほら!行こうぜ!」

こうして彼に引つ張られ、父の元へ連れて行かれた。

「あのー、しはんだーい」

「うん?どうしたんだい三星くん?それに… 雫も?」

「あのさ、八重樫が言いたいことあるんだつて」

「えっ!?ちよつと!まだ心の準備が…」

「雫が?言つてみなさい」

父が優しく問いかける。けれど言葉が出ない、

怖い、怒られたらどうしよう、嫌われたらどうしよう

頭の中がぐちゃぐちゃになる。

ふと、彼に握られていた手から温もりを感じた。

「大丈夫」

彼の言葉に勇気を貰った。

私は、今まで溜め込んでいたものを全て吐き出した。

父は、静かに聞いてくれている。

暫くして、父が口を開いた。

「そうか… 雫」

「… っ!」

「良いんだよ」

「ごめんなさ… えっ?」

「剣術を辞めても、良いんだよ」

父は優しく、私の頭を撫でながらそう言った。

「けど… お父さんもお爺ちゃんも… 私に期待してるつて…」

「良いかい雫、お父さん達は確かに雫に剣術は続けて欲しい…。けどね、それ以上に雫には、好きなことをやって欲しいんだ」

「お父さんとお爺ちゃんはこの道場が好きだ。だから、雫にも好きになつて欲しかったんだ…。けどごめんね、そのせいで雫に我慢させちゃつてたんだね」

「お父さん…。良いの？お友達みたいに…。ヒラヒラの可愛い服を着ても…。可愛いぬいぐるみとかを集めても良いの？」

「ああ、良いとも…。今度の休みの日に買いに行こう」

私は涙が止まらなかつた。

良いんだ、もうイヤイヤやらなくても

良いんだ、可愛い服を着ても

良いんだ、可愛いぬいぐるみを集めても

私は勇気をくれた彼の方を見た、彼は笑顔を私に向けていた。

「な？言つて良かっただろ？」

「~~~~っ！うん!!!」

「ありがとう三星くん、雫の助けになつてくれて…。お礼をさせてくれないか？」

「お礼つて言つても、俺そんなつもりでやった訳じゃないし…。」

「お願い三星くん！私からもお礼をさせて！」

「八重樫まで…。そうだ！じゃあさ！」

「俺と友達になつてくれよ！雫！」

「…。うん！弓人くん！」

結局私は、剣術は辞めなかつた。父と祖父が好きなこの道場が好きになつたからだ。

そして、ここなら彼がいてくれるから。

ちよつと変な男の子から、友達になつた。

「ねえ弓人、今度の大会で相談があるんだけど」

「お？良いぜ、放課後でいいか？」

「ええ、ありがとう」

友達から、頼りになる幼馴染になつた。

「バレンタインのチョコ作り手伝つて！雫ちゃん！」

「はあ… それも彼のため？香織」

「うっ… け、けど丁度いいじゃん！雫ちゃんも弓人くんにつつあげようよ！」

「ちよー… なんで今弓人が出てくるのよー！」

頼りになる幼馴染から、気になる男子になった。

「そんなに不安なら、約束しようぜ」

「約束？」

「どっちかが限界を迎えそうになったら。片方が支える。な？」

「弓人… ありがとう」

気になる男子から、好きな人になった。

そして私は、1つ決めたことがある。

日本へ帰ったら、告白しよう

なんで… あなたはそっちへ走ってるの…？

そっちは… 橋が崩れてて危ないわよ…？

ねえ… 約束が違うじゃない…

まだ… 好きって言えてない…

あなたには… まだ話したいことが沢山あるの…

お願い… 弓人…

「助けて…」

「雫ちゃん!!!お願い!!!開けて!!!」

「香織…？」

絶望に沈む少女に、親友すくいが来た

12. 5星：クラスメイトside 失意と決意【下  
弦】

「雫ちゃん!!!お願い!!!開けて!!!」

私は、扉を何度も叩き、声をかける

彼女が弓人くんに向ける感情は知っていた。

私が、ハジメくんに対してそうだったように。

だから、あの時の絶望は痛いほどわかる。

今、彼女に必要なのは、側にいてあげることだ。

暫くすると、ゆっくりと扉が開く。

そこには、幽鬼のような顔をした雫ちゃんがいた。

「雫ちゃん!」

「香織... 大丈夫なの...?」

「それはこっちの台詞だよ!」

今の雫ちゃんは、お世辞にも大丈夫とは言えない。

涙を流しすぎて、赤く腫れた瞼

ろくに寝てないのか、目の周りがある黒い隈

手入れをしていないせいで、ぼさぼさになった髪

自分に嫌気がさす

親友がこうなるまで、呑気に寝てたことに

「鈴ちゃんから聞いたよ... 帰ってからご飯も食べてないって」

「もう... ほっといてよ...」

「いやだ! ほっとかない!」

「なんでよ...」

「だって! 親友だから! 親友がこんなになってるのを... ほっとける  
わけない!」

「香織...」

互いに、涙が止まらない

私が今から言うことは、彼女には酷だろう。



けれど、私は口を開く

「ハジメくんと、弓人くんは落ちたんだよね…」

「っ！……ええ」

彼女の体が震える

そして絞り出すように声を出す

「あの時… 南雲くんに誰かの魔法が当たって… それで… 弓人は南雲くんを助けようとして… うう… ゆみとお…」

「私、諦めないよ」

「え…」

「ハジメくんと弓人くんは死んでない」

「けど… 香織も見たでしょ… あんな高さから落ちたら…」

「それでも、2人は生きてる」

「なんでそんなことがわかるのよ…」

「勘」

「か… 勘？」

「うん、何の根拠もない… ただの勘」

「… なんで…」

「… なんでって… 勘」

「… 勘…？」

「… そつ、『なんかすげーつまんなそーにやってんなー』って思ってた今私には、助けに行ける力なんてない… だから！力を貸してくださいー！」

「無理よ… 私は弱いもの…」

「私も弱いよ！だから一緒に強くなろう！」

「もう… 私は立ち上がれない…」

「立ち上がれないなら！私が支える！」

「迷惑だっけかけるわ…」

「迷惑だなんて欠片も感じないよ！」

「っ！」

「… でも… 迷惑じゃあ…」

「… そんなの迷惑だなんて欠片も感じねえよ、香織にも聞いてみな」

?同じこと言うからよ。

「香織…」

「だから!力を貸して雫ちゃん!」

「私は… 私は!弓人に会いたい!会って好きだって言いたい!」  
「うん!会いに行こう!」

「香織… ありがとう…」

「親友だもん!当たり前だよ!」

こうして2人の少女は抱きしめ合い決意した。

1人は、守ると約束した、少年を助けるため

1人は、支えてくれると約束した、少年に想いを伝えるため

「雫! 香織がそっち…に…」

「おう、雫も調子はどう…だ…」

恐らく、谷口が伝えたのだろう

2人の幼馴染も此処へ、たどり着いた。

では、今の状況を説明しよう

2人の少女が抱きしめあつてる

頬が高揚し、瞳が潤んでいる

髪が乱れている

「あんた達、どうし…」

「す、すまん!」

「じゃ、邪魔したな!」

思春期の男子には、些か刺激的だったようだ

「はあ… あの馬鹿ども」

「え?雫ちゃん… どういうこと?」

「あなたは、知らなくて良いわ… ちょっと行ってくるわね」

「え?あ、うん」

こうして八重樫は、勘違いした馬鹿を追いかけていった

その表情は、暗い表情ではなかった。

「さっさと戻ってきなさい! この大馬鹿者ども!」

## 13星：脱出のタイムリミット

これは、ハジメが爪熊に勝利し、仮拠点に戻ってきた時

「ハジメ、俺たちはこれから本格的な脱出をするわけだが」

「どうした急に？」

「まあ聞け、それにあたって2つ問題がある… 1つ目は、俺の食糧問題だ…」

「ああ… なるほどな…」

俺の発言に、ハジメは納得する

「俺はハジメと違って魔物の肉は食えない、今はサポーターが持つてたりリュックの中にあつた携帯食糧で飢えを誤魔化してるが、それも時間の問題だ」

「あと何日ぐらい待つんだ？」

「神水のお陰で餓死はしらないと思うが… 空腹感で戦闘に弊害を出したくない… そうだな、どれだけ我慢しても… 『2週間』それが俺のタイムリミットだ」

「2週間以内で100層を登るのか… けど遠征の時はあのペースで20層は行つたんだ、急げば何とかなるか…？」

ハジメはぶつぶつと脱出までのペース配分を考えている。だが、その計画は無駄なものとなった。

「それで2つ目の問題は、恐らく… ここより上には登れない」

「は!?!なんでだよー!」

ハジメは声を荒げる、当然だろう、俺の発言はある意味『帰れない』と言つたようにも聞こえるからだ

「落ち着け、まだ話は終わってない」

「これが落ち着いていられるかよ!だって… 帰れないんだぞ!」

「最後まで話を聞け、俺が言ったのは上には登れないだけで帰れないとは言っていない」

「なら… どうやって帰るんだよ…」

「さらに下へ行く」

「下に…?」

「ああ、鉱石を集めてた時や、お前が訓練で魔物と戦っていた時、俺は脱出口がないか探していた。そしてあったのは、下の層へと行く道だけだった」

俺の説明を聞いていたハジメは、1つ疑問を口にした

「下にしか行けないことは分かった…けど、何でそれが脱出に繋が  
るんだ?」

「魔法陣だ。ここが攻略されることを前提としたものであるなら…  
外へ出るための魔法陣が最下層にあるはずだ」

「その根拠は?」

「七大迷宮は神代に作られたと言われている。作られた物であるなら  
作成者が外へ出るための方法もあるはずだ」

「なるほどな…待てよ、弓人!俺の『錬成』ならどうだ!壁を階段状  
にして登れば…」

「俺も考えたが多分無理だな。わざわざ上への階段を作らなかった奴  
がそれを対策してないわけがない」

「ちっ!」

『錬成』に可能性を持ったが、一瞬で却下され苛立ちを抑えられない  
ハジメ

俺も正直に言っ腹が立つ。此処の製作者の性格の悪さに

「はあ…分かったよ、それしか道が無いんなら仕方ねえ」

「最下層がどれほど深いかなんて想像できない。だから、必要最低限  
の攻略と行こう」

「了解だ」

「頼りにしてるぜ、ハジメ」

「こっちの台詞だよ、弓人」

互いに拳を合わせ仮拠点から出る。

2人だけの、迷宮攻略が始まった。

-----

暗い階段を下る。

壁に緑光石が無いため、光源は手元のランタンだけだ。

このような暗闇の中、ランタンといった光源を使うのは悪手だ。格好の獲物になってしまふ。けれど、それ以上に暗闇で戦闘を行う方が悪いと感じたため俺たちは光を灯した。

暫く歩みを進めると、暗闇で何かが光った。

「ハジメ！今すぐ横に飛べ！」

俺が叫ぶと、ハジメは反射的に横へ飛んだ。

ランタンを前に向けると、そこにはトカゲの魔物が壁に貼り付いていた。

「光の正体はこいつか！」

「ぐっ…！腕が…」

「ハジメ!？」

ハジメの方を見ると、彼の左腕がまるで石のようになっていた。乾いた音を出しながら、その侵食は肩の方へと進んでいく。

「急いで神水を飲め！こいつは俺に任せろ！」

「す…すまん…」

俺はハジメに指示を飛ばしトカゲと対峙する。くそ… まだ咄嗟の判断は出来てねえか…

トカゲは俺の方に目を向ける、恐らく石化の能力を使うつもりなのだろう

俺は手に持っているランタンを全力でトカゲの顔に投げつける

とてつもない速度で襲ってくるランタンに、トカゲは石化能力を中断し壁を這って回避する。そして今度こそ能力を使おうと目を見開くが、その時には、俺は既に弓矢を構えていた。

「馬鹿の一つ覚えみたいに使ってくれてありがとよ」

一閃

放たれた2本の矢は、寸分の狂いもなく、トカゲの両目を撃ち抜いた。

光を奪われたトカゲは、突如発生した痛みにより壁から落ちもがいていた。

俺はその隙を見逃さず、即座に近づきナイフを額に突き立てトドメを刺した。

「ふう… ハジメ！腕は大丈夫か！」

「あ、ああ… 神水を飲んだら元に戻った…」

「それは良かった… ああそうだ、咄嗟にランタンぶん投げちまったから新しいのを作って… ハジメ？」

「何も… 出来なかった…」

「それは仕方ねえよ、咄嗟の出来事だったんだしよ」

「けど！警戒していたらもう少し動けたはずだ！」

「実践経験が足りてないだけだ。次第に良くなる」

「こんなんじやあ… 僕はまた足でまといだ…」

口調と一人称が戻ってる… 完全に自信を無くしてやがる… 仕方ねえ…

「もつと… もつと強くならないと…」

「おい、ハジメ」

「もつと強い武器を… 強い魔物の肉を…」

「はあ… この馬鹿野郎！」

「いだだだだだだ!!!」

どンドン悪い方向へ傾いていったハジメにアイアンクローを決める

「な… 何すんだよ！」

「あのなあ… ハジメ、お前は強いよ」

「え？」

「爪熊を完封できてる時点でお前はクラスの中で一番強いんじやねえのか？」

「けど… さつき僕は…」

「それは実践経験がねえからだろ？なら仕方ねえよ」

「弓人…」

「無いもんは無い！それでいいじゃねえか」

「ごめん…」

「謝んなよ、お前は何も悪いことしちゃいない、それより！こいつ食って強くなりな！」

「うん！」

たく… 手間かけさせやがってよ…

「あと口調戻ってんぞ」

「え…？…あゝあゝ！忘れろ!!!」

南雲ハジメ 17歳 男 レベル：23

天職：錬成師

筋力：450

体力：550

耐性：350

敏捷：550

魔力：500

魔耐：500

技能・錬成「+鉱物系鑑定」「+精密錬成」「+鉱物系探查」「+鉱物分離」「+鉱物融合」・魔力操作・胃酸強化・纏雷・天歩「+空力」「+縮地」・風爪・夜目・気配感知・石化耐性・言語理解

三星弓人 Lv. 5

力： I : 87 ↓ I : 90

耐久： I : 46 ↓ I : 46

器用： I : 76 ↓ I : 80

俊敏： I : 81 ↓ I : 82

魔力： I : 65 ↓ I : 65

頑健： E

対魔力： G

千里眼： H

## 14星：予想外の強敵

トカゲの肉を食った後、俺が壊したランタンの製作に取り掛かるハジメ

それを横目に見ながら、周囲を警戒し始めに話しかける

「なあ、『夜目』の効果はどんなもんだ？」

「こいつはなかなか使える。ランタン無しでもある程度見れるようになったからな」

トカゲの肉を食ったことで、『夜目』を手に入れたハジメはどこか楽しげにそう言った。俺は変わらずランタン無しでは見えないため作ってもらう必要があるが。

「まあ、欲を言ったら『石化耐性』じゃなくて『石化の魔眼』みたいなのが欲しかったが……」

「まあ、良いじゃねえか。耐性があるって事は次からこいつに負けなかって事だしよ」

「それはそうだけだよ……っと、ほらよ」

「ありがとよ」

ランタンが完成し、俺に放り投げてきたハジメに礼を言い。俺たちは足をすすめる。食糧に余裕がある内に可能な限り降っておきたい。そう思いながらランタンの灯りを頼りに下っていく。

—————

次の階層の探索は、拍子抜けするほど順調に進んだ。

襲ってきた魔物も、トカゲの時ほど苦戦する事はなかった。

時々、消耗したドンナーの弾丸や閃光手榴弾の錬成する以外、俺たちは探索に時間を回したこともあるが、それでもかなり短時間で次の層への階段を見つけた。

そして、次の階層はタールのような泥沼が満たされた場所だった。

「うげ……マジかよ……」

「どうしたハジメ？そんなに汚れるのが嫌か？」

「そうじゃねえよ、この沼……鑑定したら可燃性だったって書いてあつ



た…」

「あ… 『電磁加速』させたドンナーと『纏雷』は使えねえな」

「はあ… めんどくせえ…」

「ここは任せな」

俺は、先導しようとして沼に足を踏み入れた。

その瞬間、沼から何かが飛び出した。

「うおお！」

「弓人!？」

もはや反射に近い反応で、体を逸らし回避する。

しかし、完全に回避する事は叶わず、体の一部が削り取られ血が噴き出す。

俺を襲ってきたものは、サメの様な姿をした魔物だった。

サメは再び沼に入ると体を沈めて姿を隠す。

「弓人！大丈夫か！」

「問題ない、掠っただけだ」

「俺の『気配感知』に反応しなかった… そっちは？」

「生憎、魚は対象外だ」

「くそっ！」

俺は、神水を飲みながら周囲を警戒する。

ハジメは足場の悪い沼地だと分が悪いと感じ、『空力』で足場を作り飛び乗る。すると、そのタイミングを見計らったかのように、再びサメが飛び出してきた。

「なめんなー！」

ハジメは空中で宙返りし回避する。そして頭上を通り過ぎるサメに向かい発砲した。ドンナーから乾いた音と共に弾丸が空を切る。そして、絶妙なタイミングで狙い違わずサメの背中に命中した。

しかし、

「ちっ！これを弾くのか！」

弾丸はまるでゴムにでも当たったかの様に一瞬、サメの肌を凹ませるも直ぐに弾き返された。どうやら、サメの表皮は物理衝撃を緩和する性質があるらしい。

サメは通り過ぎた勢いのまま反転させ、再びハジメへ襲い掛かる。ハジメは着地した瞬間のため、回避が難しい。

「俺を忘れるなよ！解放数2！2節詠唱破棄！」

「【オリオン・オルコス】」

白く輝く矢がサメを襲う

しかし、視界の悪い中、放たれた矢は完全に捉える事は叶わず。

サメの尾ヒレを貫いたが、致命傷とまでには行かなかった。

しかし、効果はあった

尾ヒレを失いバランスを失った事で、そのまま沼へと落ちていく。

そして再び潜ろうとするが、尾ヒレを失った事でスピードが落ちて  
いる。

そのお陰で、ハジメは体制を立て直し、こちらへ戻ってきた。

「助かった！」

「それよりどうするよハジメ、『あいつを殺す火力はあるが目の利かない俺』と『目が利くが決定打に欠けるお前』とききた」

「いや、いける」

「策はあるのか？」

「ある」

「じゃあ… 教えてくれ。その策を」

断言するハジメに、俺は笑みを浮かべその策を聞いた。

ハジメは今、『空力』を使って沼の中心部分で待機している。

その手には、俺が持っていたランタンがある。

ハジメの考えた作戦、それは自身が囿になりサメを誘い、俺が撃ち  
抜くというものだ

「却下だ、失敗した時、お前が危なすぎる」

「問題ねえよ、失敗しねえから」

「どこから来るんだよ… その自信は…」

「お前が外すことなんてありえねえからな」

「なっ… 分かったよ… そこまで断言されたらやるしかねえ

なあ…。」

サメはまだ気づいていないのか襲ってこない。

ハジメは俺の方にランタンを掲げる。これが作戦開始の合図だ。

ハジメはランタンを腰に付けるとナイフを取り出し、左腕を切り付ける。

血が流れ、沼に落ちていく。

すると、落ちた位置から波紋が浮かび、血の匂いに反応したサメが下から飛び出してきた。

「今だ！弓人！」

『放たれしは必中、我が矢の届かぬ獣はあらじ』

「オリオン・オルコス」

一閃

放たれた矢は、寸分の狂いもなくサメの胴体へ吸い込まれ

そして、表皮の緩和を無視し貫いた。

「お疲れさん」

「おう、そつちもナイス誘導」

お互いに拳を合わせ、勝利を分かち合った。

「んじゃあ、食って気配を感じなかった理由を知りますかね」

「お前… よくこんなドロドロな奴食おうと思えるな…。」

「ホントは俺も食いたくねえよ！」

|||||

南雲ハジメ 17歳 男 レベル：24

天職：錬成師

筋力：450

体力：550

耐性：400

敏捷：550

魔力：500

魔耐：500

技能：錬成「+鉱物系鑑定」「+精密錬成」「+鉱物系探査」「+鉱物

分離」[+鈦物融合]・魔力操作・胃酸強化・纏雷・天歩 [＋空力] [＋縮地]・風爪・夜目・氣配感知・氣配遮断・石化耐性・言語理解

|| || || || || || || || || || || || || || || || || || || || || || ||

|| || || || || || || || || || || || || || || || || || || || || || ||

三星弓人 Lv. 5

力 : I : : 90 ↓ H : 124

耐久 : I : : 46 ↓ I : : 75

器用 : I : : 80 ↓ H : : 103

俊敏 : I : : 82 ↓ I : : 95

魔力 : I : : 65 ↓ I : : 87

頑健 : E

对魔力 : G

千里眼 : H

|| || || || || || || || || || || || || || || || || || || || || || ||

15星：奈落で照らす小さき月【上弦】

もう、どれだけの時間が経っただろうか…

今は朝なのか…夜なのか…もう分からない…

私が、何をしたというのだ…

誰でもいい…

なんだつてするから…

だから誰か…

「助けて…」

俺たちが、本格的な脱出へと乗り出して1週間ほど経過した。

俺たちは50層手前にいるが、未だに最下層へ辿り着かない。

様々な出来事があった。

毒の痰を吐き出すカエルの魔物と、毒の鱗粉を撒き散らす蛾の魔物のせいで全体が毒に侵され、神水無しでは探索も出来ない階層。

ハジメが齒の奥へ神水を仕込むという提案をしなければ、毒で全滅していただろう。

洞窟にも関わらず。巨大な樹木に覆われていた階層。そこには人の身ほどの大きさのムカデが居たせいで、違う意味で苦戦した。

そして、トレントの様な魔物が実らせていた果実をハジメが美味しいと食って狩り尽くしたことが印象的だった。

その結果もあり、俺たちはかなりの成長を遂げた。

|||||

南雲ハジメ 17歳 男 レベル：49

天職：錬成師

筋力：880

体力：970

耐性：860

敏捷：1040

魔力：760

魔耐：760

技能：錬成「+鉱物系鑑定」「+精密錬成」「+鉱物系探査」「+鉱物分離」「+鉱物融合」「+複製錬成」・魔力操作・胃酸強化・纏雷・天歩「+空力」「+縮地」「+豪脚」・風爪・夜目・遠見・気配感知・魔力感知・気配遮断・毒耐性・麻痺耐性・石化耐性・言語理解

|||||

三星弓人 Lv. 5

力：E：478

耐久：F：326

器用：F：385

俊敏：E：440

魔力：F：357

頑健：E

対魔力：G

千里眼：G

|||||

長時間、暗闇で戦闘を続けた影響か【千里眼】のランクがHからGへと変化していた。その結果、ぼんやりとであるが、周囲の把握が可能になった。

そして現在、俺たちは50層手前の仮拠点にて、消費した弾丸と矢の補充及び装備の点検を行っていた。

その理由は、この階層は明らかに違う。

例えるなら、オラリオの迷宮ダンジョンに存在した、迷宮モンスターレックスの孤王がいる階層と同じ空気を纏っていた。

そんな空気を感じた俺は、同じくこの階層の異様さを感じていたハジメと話し。万全の状態で乗り込むと決めた。

「よし… 弾と矢の補充が終わったぞ。そっちはどうだ？」

「問題ない。いつでも行けるぞ」

準備を整えた俺たちは、50層へと足を踏み入れた。

しばらく歩みを進めると、そこには巨大な扉があった。

扉には装飾が施されており、その脇には二対の一つ目巨人の彫刻が半分壁に埋め込まれるように鎮座している。そして扉の中心には中央に二つ窪みのある魔法陣があった。

「ハジメ、あの魔法陣分かるか？」

「いや……わかんねえな。結構勉強したつもりだが……こんな式見たことねえぞ」

「座学に力を入れてたお前が分からんってことは……相当古いつてことか……」

俺たちはトラップに警戒しながら、周囲を調べる。

だが、特に成果もなく中に入るしかないという結論になった。

「じゃあハジメ、扉を錬成してくれ」

「了解だ」

押しても引いてもびくともしなかったため、ハジメに錬成するよう頼む。

ハジメは右手を扉に手を置き、錬成を開始した。

その瞬間

「うおっ!?!」

「ハジメ!?!」

扉から赤い放電が走りハジメの手を弾き飛ばし、ハジメの手からは煙が吹き上がっている。神水を飲ませ、扉の開け方について話そうとした時。

「オオオオオオオオ!!」

突如、低い咆哮が階層全体を響かせた。

壁に埋め込まれている彫刻だと思っていた存在が動き始めた。

2体の巨人は、扉の封印を解こうとする侵入者を排除するため、俺たちにその視線を向ける。だが

「オリオン・オルコス」

既に詠唱を済ませた俺は、矢を放つ。

白く輝く矢は、1体の巨人の眼を打ち抜き。一撃で沈黙させた。

「わざわざ待つてやる必要もないからな」

「まあ、それもそうか」

ハジメは相方がやられ、呆然としている巨人へドンナーを向ける。  
ドパンツ！

勝負は、一瞬でついた。

巨人の肉を解体していると、それぞれから1つずつ、拳大の魔石が出てきた。

ものは試しと魔法陣の窪みに持つていくと、魔石は元々そうであった様にはめ込まれる。そして、魔石の魔力が魔法陣を満たし輝かせる。しばらくすると、魔法陣の輝きが収まる。

「恐らくこれで開くはず・・・」

「ハジメ、肉を食うのは後だ。扉の先を見るぞ」

俺たちはそれぞれ扉に手を置くと、ゆっくりと開けた。

そこには、幾つもの石柱が並んでいた。

そこには、部屋の中央に立方体の石があった。

そこには、『なにか』が生えていた。

「確実にアレを封じてたな・・・」

「だな・・・ちよつと待つてくれ、今扉が閉まらない様に固定する」

「・・・だれ？」

ハジメが扉を固定するため大きく開けようとする。

その時、俺たちの耳に届いたのは弱々しい少女の声だった。

俺たちは即座に声の主である『なにか』に向け目を凝らす。

そこに生えていたものは『一人の少女』だった。

歳は恐らく、12か13ほどの、長い金髪と紅い瞳が印象的な美しい少女だった。

「ハジメ・・・」

「ああ・・・」

俺とハジメはお互いに見合わせ頷く。そして

「すみません。間違えま「待て待て待て待て」

どうやら、同じ考えではなかった様だ



15星：奈落を照らす小さき月【下弦】

「すみません。間違えま「待て待て待て待て」

そう言つて扉を閉めようとするハジメの肩を掴み、俺は止めに入る  
「何で止めるんだよ、弓人」

「いや止めるだろ。いきなり扉閉めるとか人の心ないのかよ」

「いやいや…こんな所に封印されてるなんてどう考えても厄ネタだ  
ろうが…」

「だからっていきなり閉める奴がいるかよ！あの子見てみろよ！突然  
のこと過ぎてポカンとしてるぞ！」

そう言つて少女の方に目を向けると、唐突な出来事に呆然としてい  
たが、自分が見捨てられそうになっている現状を理解したのか掠れた  
声で必死に懇願する。

「ま、待って！…お願い！…助けて…」

「嫌です」

「だからやめろ！…もういい、俺は行くぞ…」

「お、おい！弓人！」

少女の懇願を無視し、無慈悲に扉を閉めようとするハジメを放つ  
て。少女の所へ近づく。

封印されている少女が可哀想なためというわけではない。

ここに封印されているならある程度ここを知ってるのではないか。

助けることで、知つてることを話してもらおうという打算的な理由な  
だけだ。

「悪いな、お嬢ちゃん。ウチの連れが愛想悪くて」

「お願い…なんでもする…だから…」

「じゃあ、お嬢ちゃんについて全部話してくれ。助けるかはそれから  
だ」

少女はゆっくりと話し始めた。

少女は先祖返りの吸血鬼で、とてつもない力を持っていると

少女は国のために力を使ったが、叔父と家臣に裏切られたと

少女は自らの力で死なないため、ここに封印されたよ

「国のためについて言ってたが、お嬢ちゃん王族だったのか？」

少女は無言で首を縦に振る

「死なないって言ってたが、どう言う意味で死なないんだ？」

「勝手に治る。怪我しても直ぐ治る。首落とされてもその内に治る」

「実質不死ってことか？… すごい力ってそれか？」

「これもだけど… 魔力、直接操れる… 陣もいらぬい」

「なるほどねえ…」

少女の事については大体聞けたな…

「お願い… 助けて…」

「とのことだが… それでもお前は見捨てるのか？ハジメ？」

俺の後ろで、黙って聞いていたハジメに問いかける。

「この子は裏切られただけらしいぜ」

「お前… 俺の協力無しでこいつを助けること出来るのかよ…」

「無理だな、だからお前に聞いている。助けるのか、助けないのか」

「弓人… お前は助けたいんだろうな…」

「ああ、最初は脱出のための情報を聞き出すためのつもりだった。けど、この子のことを聞いて同情しちまった… 助けたいって思っちゃまった。だから頼む、ハジメ」

暫く沈黙が続いた

そして、

「ちっ！貸しーっだぞー！」

頭を掻き舌打ちと共に右手を少女を封印している石に置く。

「あっ」

女の子がその意味に気がついたのか大きく目を見開く。ハジメはそれを無視して錬成を始めた。

ハジメの魔力が放電する様に迸る。

しかし、いつもの様に、即座に変化しない。

まるで抵抗するかのように魔力が弾かれる。

「ぐっ、抵抗が強い！だが、今の俺なら！」

ハジメはさらに魔力を込める

部屋全体が魔力により照らされ、少女を封じる周りの石が徐々に震え出す。

「まだまだあー！」

最後にダメ押しと言わんばかりに魔力を込める。

今や、ハジメ自身が紅い輝きを放っていた。

その結果、少女を封印していた石が融解するように流れ落ちていく。

ついに、彼女の枷が解かれた。

少女は立ち上がる力がないのかその場で座り込んでいる。

俺は少女の方へ近づき、剥いでいた爪熊の皮を彼女の肩へ被せ、神水を口元へ持つていく。

「ゆっくり飲め、回復効果のある水だ」

「……ありがとう」

「礼を言うなら、あっちの素直じゃない奴に頼む」

そう言い、息を切らせ地面に座り込みながら神水を飲むハジメへ指差す

ハジメは、何処か照れ臭そうに頬を掻きながら口を開く。

「別に俺は……弓人がどうしてもって言うから……」

「2人とも……名前、教えて……」

「ああ、そういえば言っていなかったな俺は三星弓人、あっちのツンデレは南雲ハジメだ」

「おい！ツンデレって何だよー！」

「ユミト……ハジメ……」

俺たちが軽い漫才をしている横で、少女は何度も俺たちの名前を呟く。

覚えるために、決して忘れない様に。

「んで……ええと……お嬢ちゃんの名前は？」

「……名前、付けて」

「は？付けるってなんだ。まさか忘れたとか？」

長年封印されていたこともあり、ありえると思ったのかハジメが質問する。

しかし、少女は首を横に振り答える。

「もう、前の名前はいらぬ。…… 2人の付けた名前がいい」

「と言つてもなあ…… 弓人、お前なんかあるか？」

「ルナ…… セレネ…… うーん違うなあ……」

「もう考え始めてるし…… しかも何で全部月関連なんだよ……」

「いや…… だって、この子の髪と瞳が月みたいだろ？」

俺の言葉に、何処か納得したハジメが何か思いついたのか俺に話しかける。

「じゃあよ『ユエ』なんてどうだ？」

「中国語か…… それ、いいな」

「決まりだな、今日からお前の名前は『ユエ』だ」

「『ユエ』？」

聞きなれない名前のため、聞き返す少女

「ユエっていうのは、俺たちの故郷で月を意味する言葉なんだ。理由は…… さつき弓人が言ったみたいなお前の髪と瞳が夜空に浮かぶ月みたいだからさ」

何度か、自身の中で反芻させ、そして何処か嬉しげに顔を向けてくる少女…… いや、ユエ。そして

「…… んっ。今日からユエ。ありがとう」

「おう、取り敢えずだ…… 弓人」

「ああ…… 上からだな」

「？」

ユエは俺たちが何を言ってるのか分からないと首を傾げる。

そして、『俺たちの真上』から落ちてきた。

俺は咄嗟にユエを抱え、ハジメは『縮地』を使い、その場から離れる。

そして俺たちがいた位置に、そいつはいた。

そいつは、体長5メートルほどだろうか

4本の強靱な腕とハサミ、そして8本の足を動かしている

その背には、先端に針がある2本の大きな尾があった

そいつは、蠍の姿をした魔物であった。

「弓人！俺がこいつの気を引くからその内にユエを… 弓人？」

「… ユミト？大丈夫？」

「… くそっ！嫌なもん思い出させやがって！」

俺はユエをその場に置くと弓を取り出し構える。そして、

「覚悟しやがれ！この蠍野郎!!!」

俺の咆哮が開戦の合図となった。

## 16星：封印が解かれし吸血姫

オラリオの迷宮ダンジョンには迷宮の孤王モンスターレックスという存在がいる。特定の階層ダンジョンに存在する、いわゆるボスモンスターというものだ。そいつは、迷宮ダンジョンのモンスターの中でも一線を画す強さを持つときれ、少人数のパーティでの討伐は不可能とされている。

俺は眼前の蠍に向けて弓を引く。

引き絞られた弓から音速の矢が解き放たれた。

しかし、尻尾の針から放たれた毒液によって、届く事なく消滅する。その隙に、ナイフを取り出し蠍の足の一本を切り付ける。

金属同士がぶつかり合うような甲高い音が響き渡る。

しかし、足には傷ひとつ付かなかった。

「ちっ！想像以上に硬い！」

このままではナイフが先に壊れる。そんなことを考えていると、聞き馴染みのある破裂音が聞こえた。

ドパンツ！

ハジメのドンナーから放たれた弾丸は蠍の額に打ち込まれ火花を散らす。

「おい弓人！急にどうした！らしくもねえ」

「ハジメか……問題ない、俺はいつも通りだ」

「お前……終わったら聞かせてもらおうぞ……」

俺の違和感に何か勘づいたハジメは、俺の隣に立ちながら俺に全てを打ち明けるよう言う。俺はそのことをあえて無視し、話しかける

「それよりあいつをどうする、甲殻の硬さはこのナイフ以上ときた」

「……あの甲殻が鉱石由来なら、俺の『錬成』でいけるはずだ」

ハジメは俺を軽く睨みながらではあるが答える。

「なら俺がもう一度前が出る。ハジメはその隙にあいつの甲殻を鑑定しろ」

「……いや、俺が前が出る。弓人……お前は後ろにさがれ」

「…聞き間違いか？俺に下がれて聞こえたんだが？」

「いや、聞き間違えじゃない。下がるんだ」

恐らく、俺はかなり苛立っているのだろう、その苛立ちを隠すことなくハジメを睨みつける。

「ふざけてんのか？どう考えたって近接戦闘に慣れてる俺が前に出るべきだろうが」

「確かにその通りだ。それが、普段の弓人ならな」

「んだと？」

「今のお前は頭に血が昇ってる。それに…後ろを見ろよ」

俺は促されるまま後ろを見る。

そこには、心配そうに俺を見つめるユエがいた。

「俺の知ってる三星弓人は、あんな風に人を心配させる様な人間じゃない筈なんだが…おれの勘違いだったか？」

「…すまん、前衛は頼んだ」

「ああ、任せろ」

ハジメはドンナーを構え、『縮地』を使い前へ飛び出す。

俺は、蠍から一度離れるため後方へと下がる。そこへ、俺を心配したユエが近づいてきた。

「…ユミト…大丈夫？」

「ごめんな、心配させちまって」

俺が笑いながらそういうと、心なしかホツとした表情を浮かべてくれた。

そして、ハジメの援護をするため弓を構え蠍の方に意識を向ける。

ハジメが飛び出すと、蠍はハジメを迎撃するべく、毒液を放った方とは違う尻尾からとてつもない速度で1本の巨大な針を射出した。

その針は、空中で爆発したかと思えば、中から一回りほど小さな針が散弾の様に撒き散らされた。

俺は矢を連続で放ち、針を撃ち落とす。何本か撃ち落とせなかったが、ハジメは『風爪』と『豪脚』を使い冷静に対処する。

そして、懐から手榴弾を取り出すと蠍に向かい投げつけた。

蠍は、再び散弾針と毒液を使おうと尾を初めに向けた瞬間、手榴弾

が爆ぜ、爆炎が舞い上がった。

これは、サメの階層で手に入った『フラム鉱石』を利用した『焼夷手榴弾』である。

熱による攻撃で、蠍にダメージは入ったが蠍はまだ倒れない。

「キシヤアアアア!!」

怒りにより我を忘れた蠍は、針や毒液を撒き散らす。

ハジメは、『空力』や『風爪』を使いなんとか回避する。

俺は、飛んでくる針を撃ち落とすが、全てを撃ち落とすことは出来ず、オレとユエの所へ向かってくる。回避は不可能だと感じた俺は、ユエの前へ飛び出し針を何本かその身でうける。

針が体に突き刺さるが動けないほどではない。俺は失血の危険があるため針を抜かず弓を構えようとした時、ユエが問いかける。

「……なんで」

「なんでって、仲間だからな」

「……仲間？」

「ああ、お前を助けて、お互いに名前を知った。なら俺たちはもう仲間だ……だから俺は仲間を決して見捨てない」

「……ユミト……」

ユエに話しかけながら、俺は考える、このままだとジリ貧だと感じただからだ。

どうにかあいつの動きを止める方法がないか考える。

そして、閃いた。

「ユエ！お前、すごい力あるって言ってたよな！あの蠍の動きを止めることはできるか？」

「……多分、けど魔力が足りない……」

「神水……だと回復するのに時間がかかる……もしかしたら」

俺は即座にナイフを取り出すと左手の甲を軽く切る。俺の行動にユエが驚愕し俺を心配する様に叫ぶ

「ユミト!?何を!」

「ユエ、お前は吸血鬼だったよな……なら、血で魔力の回復は可能か？」



「…できるけど…まさか!」

「ああ、俺の血を飲め。それで…俺たちと戦ってくれ」

ユエは暫く、俺の差し出した左手と俺の顔を交互に見る。

そして、覚悟を決めた目で俺の手を取った。

「ん!信じて…」

その言葉と共に俺の手の甲に口をつけ舌を這わせるユエ。

そして、俺の血を啜り、嚙下する。

「…………ごちそうさま」

「よし!ハジメ!ユエが魔法を使うからそこから離れろ!」

「ユエが!?だが、了解だ!」

俺が声をかけると、ハジメは『縮地』を使い蠍から離れる。

それを確認したユエは、蠍に向けて片手を掲げた。

それと同時に、その華奢な身からは想像もできない莫大な魔力が噴き上がり、

黄金色の魔力が部屋全てを照らした。

そして、神秘に彩られたユエは

魔力と同じ色の黄金の髪をなびかせ

ただ一言呟いた。

『蒼天』

その瞬間、蠍の頭上に巨大な青白い炎が生まれた

蠍は、炎の熱にやられ悲鳴を上げて離脱を図る

しかし、それよりも早くユエが指を振り下ろす方が早かった。

突如、巻き起こる閃光

俺たちは、その閃光により前が見えず思わず腕で顔を覆う。

そして閃光が落ち着いた時、その場にいたものは、甲殻が赤熱化し表面が融解して悶え苦しんでいる蠍であった。

ハジメの手榴弾やドンナー、俺のナイフでも傷ひとつ付かなかった蠍の甲殻にダメージを与えた少女を称賛しようとしてユエの方に目を向けると、彼女は魔力切れにより肩で息をし、座り込んでいた。

「ユエ、大丈夫か?症状から見ると精神疲弊マインドダウン一歩手前だが…」

「…………マイン?…………最上級使ったから…………疲れた」

「お疲れさん、ありがとな。後は俺とハジメに任せてゆっくり休んでくれ。だろ？ハジメ！」

「ああ！ありがとよ、ユエー！」

「……ん、頑張つて2人とも」

お互いにユエに礼を言い、蠍にとどめを刺すべく俺は弓を構えた。

ハジメはポーチから閃光手榴弾を取り出すと、蠍の頭上へ向けて投げつける。そしてドンナーで打ち抜き、閃光を撒き散らす。

蠍の目が光で眩んだが、蠍は暴れることなく冷静にハジメを待ち構える。

しかし、ハジメは『気配遮断』と『縮地』を使い、気づかれることなく蠍の背に着地した。

「やっぱりこいつの甲殻の正体は、鉱石による鎧か……けど俺なら問題ねえ！『錬成』！」

ハジメが錬成魔法を使ったことにより、蠍の鎧は剥がれ、本来の甲殻が露出した。蠍は自身の背にハジメがいたことに気づき、振り落とそうと暴れる。

「ここまでできたら俺の出番は終わりだ……最後は頼むぜ、なあ！弓人！」

『放たれしは必中、我が矢の届かぬ獣はあらし』

【オリオン・オルコス】

一閃

放たれた白き矢は、蠍の肉を貫き、その胴体へ風穴を開けた。

50層の戦いは、俺たちの勝利で幕を閉じた。

|||||

三星弓人 Lv. 5

力： E : 478 ↓ E : 490

耐久： F : 326 ↓ F : 350

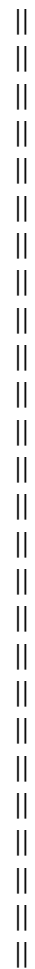
器用： F : 385 ↓ E : 400

俊敏： E : 440 ↓ E : 450

魔力： F : 357 ↓ F : 371

頑健： E

|| 千里眼 : G  
|| 对魔力 : G



## 17星：休息と語り【上弦】

蠍との決着後、俺たちは蠍と巨人からの戦利品を手にし仮拠点に帰還した。

あの部屋を仮拠点にしようかとも考えたが、ユエが嫌がったため却下された。

そんなこともあり、俺たちはハジメが消耗品を補充しているのを見ながら、お互いの事について話し合っていた。

「そうすると、ユエって少なくとも三百歳以上なわけか？」

「…… ハジメ、マナー違反」

「そうだぞハジメ、どの世界でも女性の年齢を聞くのは…… やめておけ……」

「お前は何かあったんだよ……」

ユエの種族【吸血鬼族】は300年前の戦争で滅んだとされている。

そのことを記憶していたハジメがユエに問いかけると、ユエは目を細めハジメを非難する。俺は脳裏に、年齢を聞いた時のアルテミスの顔が思い浮かんだ。

「けど、吸血鬼ってのは皆そんなに長寿なのか？」

「…… 普通は違う。『再生』の力がある私が特別なだけ…… 歳も取らないし……」

聞けば十二歳の時、魔力の直接操作や『自動再生』の固有魔法に目覚めてから歳をとっていないらしい。普通の吸血鬼族も血を吸うことで他の種族より長く生きるらしいが、それでも二百年くらいが限度なのだそうだ。

ユエは先祖返りで力に目覚めてから僅か数年で当時最強の一角に数えられていたそうで、十七歳の時に吸血鬼族の王位に就いたという。

しかし、欲に眩んだ叔父がユエを化け物として周囲に浸透させ、大義名分のもと殺そうとしたが『自動再生』により殺しきれず、やむを

得ずあの地下に封印した。

ユエ自身、当時は突然の裏切りにショックを受けて、碌に反撃もできず混乱したまま封印術を掛けられ、気がつけば、あの封印部屋にいたらしい。

「えげつねえな…。」

俺は、そう呟かずには居られなかった

その後、ユエの力について聞くと。彼女は全属性に適性があり魔力操作により全ての魔法を無詠唱で打てるらしい。

しかし、近接戦闘は苦手なため、1人だと身体強化で逃げ回りながら魔法を連射するくらいが関の山なのだそうだ。もっとも、その魔法が強力無比なのだから大したハンデになっていないのだが。

「それで話が変わるんだが、ユエはここがどの辺りか分かるか？ 他に地上への脱出の道とか」

「…：… わからない。でも…：… この迷宮は『反逆者』の一人が作ったと言われている」

「『反逆者』？」

聞きなれない単語が現れ、ハジメは作業を中断しユエに問いかけた。

そして、ユエは『反逆者』について話し始めた。

曰く、反逆者は神代で神に反逆した眷属だと

曰く、反逆者は7人いたのだと

曰く、反逆者は世界を滅ぼそうとした者達だと

曰く、反逆者は目論見が破られ世界の果てに逃げたのだと

曰く、その果てが【七大迷宮】だと

「…：… そこなら、地上への道があるかも」

「俺の仮定と同じか…：… やっぱり進む必要はありそうだな」

「だな…：… 分かっていたことだが、今のままじゃあ火力が心もとない。新しい武器を作るから時間をくれ」

「了解した。時間は気にしなくていい、納得のいくまでやってくれ」

会話を止め、作業に集中するハジメ。ユエはハジメのやっている事に興味があるのかじつと作業を見ている。

「ユエ、ハジメのやつてる事が気になるのか？」

「……ん、あんな武器……見たことない。魔法陣や詠唱もなかった……」

「ああ、ハジメもお前と一緒に魔力操作が出来るんだよ」

「……私と……一緒」

自身以外にも、魔力操作ができる者がいる事が嬉しかったのか、ユエの顔がどこか嬉しげだ。ハジメの作業を見ながらユエが俺たちに質問した。

「……2人は、なんでここに？」

当然の質問だろう。ここは奈落の底。正真正銘の魔境だ。魔物以外の生き物がいていい場所ではない。

「ハジメ、俺が答えようか？」

「いや……俺が言うよ」

ハジメは語った。

仲間と共にこの世界に召喚されたこと。

俺たちが無能だと言われていたこと。

ベヒモスとの戦いでクラスメイトに裏切られ奈落到ちたこと。

魔物を喰って変化したこと。

故郷の武器を参考にし、このドンナーを作成したこと。

ここに辿り着くまでのことを話していると、ユエの瞳には涙が溜まっていた。俺はユエの涙を拭きながら問いかける。

「なんで泣いてるんだ？」

「……2人とも……辛い、私も辛い……」

どうやら、俺たちのために泣いてくれたようだ。

ハジメは驚くと、微笑みながら口を開く。

「気にしなくていい。もう過ぎたことだし……俺は弓人が助けに来てくれたことで救われたしな。だから俺は強くなる……故郷に帰る為にな。」

「……帰るの？」

「うん？元の世界にか？そりゃあ帰るさ。帰りたいよ……色々変わったけど……故郷に……家に帰りたい……」

「……ユミトも？」

「……まあな、あつちでやりたい事とかも沢山あるしな」

「……そっか……」

ユエは沈んだ表情で顔を俯かせる。そして、ポツリと呟いた。

「……私にはもう、帰る場所……ない……」

「……」

そんなユエの様子に、ハジメは自分の頭を搔きながら言った。

「あゝ、なんならユエも来るか？」

「え？」

ハジメの言葉に、ユエは目を見開いた。

ハジメは気恥ずかしいのか、早口で捲し立てる。

「いや、だからさ、俺達の故郷にだよ。まあ、普通の人間しかいない世界だし、戸籍やらなんやら人外には色々窮屈な世界かもしれないけど……今や俺も似たようなもんだしな。どうとでもなると思うし……あくまでユエが望むなら、だけど？」

「……いいの？」

「良いに決まってるだろ？なあ、弓人」

「ああ、ユエが日本に来てくれるのは。俺も嬉しいしな」

「……2人とも……ありがとう」

俺たちの解答に、ユエは今までの無表情が嘘のように花が咲いた様な微笑を浮かべた。

「まあ、日本が居づらいと感じたらオラリオに行けばいいさ。帰る方法が、もしかしたら異世界を自由に行ける魔法かもしれないしな」

「それだよ」

俺がほぼ無意識に言った言葉に、ハジメが反応した。

「ちよくちよく無意識で言ってたが、その『オラリオ』ってなんだ？座学でも図書館の書類でもそんな単語は見たことも聞いたこともなかった。」

「……私も聞きたい事がある、あの魔法……何？あんな魔法知らない……」

「そろそろ教えてくれてもいいだろ？お前の雰囲気が変わったことも

含めてよ…」

ユエが仲間に加わったこともあり

そろそろ、伝えるにはちょうどいいのかもしれない

俺は、覚悟を決め2人に告げる。

「俺さ… 前世の記憶ってのがあるんだ」



## 17星：休息と語らい【下弦】

「俺さ… 前世の記憶つてのがあるんだ」

俺は、意を決して2人に告げた。

自分は、前世の世界で冒険者をしていたこと。

自分は、ある1柱の女神の眷属であったこと。

その女神から【神の恩恵<sup>フアルナ</sup>】を授かり、この【ステイタス】を手に入れたこと。

そして、女神と仲間達を逃す為に怪物と対峙し死んだことを

一通り語り終えると、ハジメがどこか納得した様子で口を開く。

「なるほどな… お前の戦闘知識は、冒険者としての経験からか…」

「ああ、俺がいたオラリオにも、ここみたいな迷宮<sup>ダンジョン</sup>があつたからな」

「前世の記憶は、日本にいた時からあつたのか？」

「いや、日本にいた時には夢で見えていたが… それが前世の記憶だとは思ってなかつたな。本格的に思い出したのは、この奈落に落ちた時だ」

「あー、そういうえばお前の雰囲気が変わつたのもそれくらいからか…」

俺の予想に反して、平然としているハジメに俺は驚きを隠せなかつた。

「いや… 驚かないのかよ？俺が前世の記憶を持つてるって言うて…」

「いや驚いてるぞ、けど予想はしてたからなあ」

「よ、予想…」

「舐めるなよ、俺はオタクのハジメだぜ」

ハジメはニヤリと笑う。

「ユエは… どう思った？」

「…正直、ユミトのことは全然知らない… けど、私を助けてくれたのは… 今のユミト… だから、私は気にしない…」

2人とも、俺に気を使っているという訳でもなさそうだ。

変わらず接してくれてる事が、とてもありがたかった。

「ユエ… ハジメ… ありがとな」

「気にすんな、仲間だろ？」

「… ン、気にしないでユミト」

2人が向けてくれる笑顔に、どこか照れ臭くなってしまい。

俺は無理矢理話題を変える。

「あ、あれだ！ハジメ！魔物の肉食って早く強くなりな！」

「なんだよ？照れてんのか？」

「うるせー！さっさと飯にすんぞー！」

俺は顔を赤くしながらハジメが食う為に魔物の肉を切っていく。

その時、ユエの食事について気になったため、ユエに話しかける。

「飯といえば… ユエ、お前飯はどうする？ちよつとなら俺のを分けるが」

「あー、たしかにユエが魔物の肉食うのはマズイよな… いや吸血鬼ならいいのか？」

「… 私に食事はいらない」

「ん？まあ、三百年も封印されて生きてるんだから食わなくても大丈夫だろうが… 飢餓感とか感じたりしないのか？」

「感じる… でも、もう大丈夫」

「大丈夫？何か食ったのか？」

ユエが俺たちと会って食ったもんと云えば…

「ああ、俺の血か」

「てことは、吸血鬼は血が飲めれば特に食事は不要ってことか？」

「… 食事でも栄養はとれる… でも血の方が効率的」

「さすが吸血… なんて弓人を見て、舌舐りするんだ？」

「… ユミト… 美味…」

「人によって味が違うのか？後、飲むか？」

「ん！飲む、ユミトの血の味は… 血の滴るステーキみたいな味」

俺は右腕をユエに突き出すと嬉しそうに飛びつき腕にかぶりつく。

右腕に針で刺された様な痛みが一瞬走り、血が吸われていく。

「弓人… お前躊躇なく差し出したな…」

「けど、これのお陰で俺達はアイツに勝てたしな」

「そうですかい……」

ハジメは呆れながら、俺が切り分けた魔物の肉を食い始めた。

ユエは俺の血をある程度吸うと、口を離し今度はハジメを見つめる。

「ユエ？……まさか……」

「……ハジメの血も、気になる」

「ま、待て！俺はこんな魔物の肉ばっか食ってるから血なんか飲んだら腹壊すぞ！」

「……飲んでみないと分からない」

じりじりと近づくユエ

ハジメは俺に救いを求める様な目を向けてきた

俺はそれに対して一言

「強く生きろ」

「裏切り者！ってこれ昔やったぞ！」

ちなみにハジメの血は、様々な素材を煮込んだスープの様な味だったらしい

## 17. 5星：クラスメイトside 悪夢との対峙

これは、三星達が蠍との戦いをしていた時

勇者一行は、「オルクス大迷宮」に再び挑戦していた。

しかし、参加していたものは、勇者一行、小悪党組、永山重吾を率いる5人組のパーティのみであった。

理由は当然、2人の死がクラスメイト達の心に深い傷を残した。

どこか、軽くみていた『死』を実感したことにより、戦争への不参加を選ぶ者が大半であった。

当然、聖教教会関係者はいい顔をしなかった。実戦を繰り返し、時間が経てばまた戦えるだろうと、毎日のようにやんわり復帰を促している。

しかし、それに猛然と抗議した者がいた。畑山先生だ。

彼女は、遠征には参加していなかった。作農師という特殊かつ希少な天職のため、実戦訓練するよりも、教会側としては農地開拓の方に力を入れて欲しかった。彼女1人で、糧食問題は解決する可能性が高いからだ。

そんな畑山先生は2人の死亡を知るとショックのあまり寝込んでしまった。

自分が安全圏にいる間に、生徒が死んでしまったという事実には彼と約束した、全員と日本に帰ることができなくなったということに

責任感の強い彼女は強いショックを受けたのだ

だからこそ、戦えないという生徒をこれ以上戦場に送り出すことなど断じて許せなかった。

愛子の天職は、この世界の食料関係を一変させる可能性がある。

その畑山先生が、戦闘訓練の強制に抗議したことに、関係の悪化を良しとしなかった教会側は、彼女の抗議を受け入れた。

結果、自ら戦闘訓練を望んだ勇者パーティと小悪党組、永山重吾のパーティのみが訓練を継続することになった。そんな彼等は、再

び訓練を兼ねて「オルクス大迷宮」に挑むことになったのだ。今回もメルド団長と数人のサポーター役の騎士が付き添っている。

今日で迷宮攻略6日目。

現在の階層は60層

確認されている最高到達階数まで後5層

しかし、勇者達は現在、立ち往生していた。

正確には先へ行けないのではなく、何時かの悪夢を思い出して思わず立ち止まってしまった。

彼等の目の前には何時かのものとは異なるが同じような断崖絶壁が広がっていた。次の階層へ行くには崖にかかった吊り橋を進まなければならぬ。それ自体は問題ないが、思い出してしまう。

特に、白崎と八重樫は奈落へと続いているかのような崖下の闇をジッと見つめたまま動かない。

「雫ちゃん…多分そろそろだよね…」

「ええ…香織、私も覚悟を決めたわ」

それは、この先へと進む覚悟を

それは、必ず2人を助ける覚悟を

けれど、変わらず空気の読めない者が横槍を入れる。

「香織…君の優しいところ、俺は好きだ。でも、クラスメイトの死に、何時までも囚われていちゃいけない！前へ進むんだ。きつと、南雲もそれを望んでいる！」

そう、天之河である。

彼の頭の中では、白崎がいつも気にかけていた南雲が死んだことを嘆いていると思っただけらしい。

因みに八重樫の方は、部屋から出た時点で三星の死を乗り越えたと思っただけ。

「香織、大丈夫だ！俺が傍にいる。俺は死んだりしない。もう誰も死なせはしない。香織を悲しませたりしないと約束するよ」

いつもどおり格好だけの台詞を吐いている勇者を、八重樫は止めず

無視した。

覚悟は決めた。けれど、他の人間を気にするほどの余裕は彼女には無かった。

それを感じた白崎は、適当に話を合わせて勇者を前線へ戻した。

その後、谷口とその親友の中村が励ましに来たり

谷口が暴走して中村がそれを諫めたりしながら先へ進む。

遂に、歴代最高到達階層である65層にたどり着いた。

「気を引き締めろ！このマップは不完全だ。何が起こるかわからんからな！」

付き添いのメルド団長の声が響く。光輝達は表情を引き締め未知の領域に足を踏み入れた。

しばらく進むと、大きな広間に出た。何となく嫌な予感がする一同。

その予感的中した。広間に侵入すると同時に、部屋の中央に魔法陣が浮かび上る。赤黒い脈動する魔法陣。そして、とても見覚えのある魔法陣だった。

「ま、まさか……アイツなのか!？」

「マジかよ、アイツは死んだんじゃないのかよ！」

「迷宮の魔物の発生原因は解明されていない。一度倒した魔物と何度も遭遇することも普通にある。気を引き締めろ！退路の確保を忘れるな！」

驚愕の表情を浮かべる一行に、険しい表情をしながらも冷静に答えるメルド団長。いざという時のため退路の確保の指示に従うサポートー達。しかし、

「メルドさん。俺達はもうあの時の俺達じゃありません。何倍も強くなったんだ！もう負けはしない！必ず勝ってみせます！」

「へっ、その通りだぜ。何時までも負けっぱなしは性に合わねえ。こらでりベンジマッチだ！」

勇者達の解答に、メルド団長は肩を竦め、確かに今の彼等の実力なら大丈夫だろうと、同じく不敵な笑みを浮かべる。

「グウガアアアア!!!」

そして、あの時の悪夢を生み出した者が咆哮する。

ベヒモスは、対峙する者たちへ殺意に満ちた目を向ける。

緊張が走る中、毅然とした表情で睨み返す2人の少女

「もう誰も奪わせない。あなたを踏み越えて、私は彼のもとへ行く」

「あなたを殺して・・・私は彼を助ける！」

今、過去を乗り越える戦いが始まった。

## 18星：怪物の宴

『怪物の宴』モンスター・パーティーというものがある

オラリオの迷宮ダンジョン10層以降から見られるモンスターの大量発生のことだ。

それは突然に、冒険者を絶望の淵へ突き落とす。

どこまでも悪辣な迷宮ダンジョン・ギミックの陥穽だ。

「だああーちくしよおおー!」

「…… 2人とも、ファイト」

「あのユエさん!?ちよくちよく血を吸うのやめてくれませんか!」

俺は、ユエを背負いハジメと共に走っている。

なぜこの様な状態になっているのか。

それは、

「「「「「シャアアア!!」」」」」」

100を超える魔物の群れに追われているからだ。

~~~~~

時は少し遡る

俺たちが準備を整えて、攻略を再開してから楽に10層ほど降りて来た。

蠍の甲殻を利用し、装備が充実したこともあるが。

1番の理由は、やはりユエの存在が大きい。

全属性の魔法を無詠唱で放つことができるため。2人の時に足りなかつた決定打と殲滅力が手に入った。

彼女は、回復と結界系の魔法は苦手だが、ユエには〔自動再生〕があり、俺たちには神水があるため些細な問題だ。

こうして俺たちは、樹海を思わせる現在の階層へ足を踏み入れた。そして探索をしていると、何故か頭に1輪の花を咲かせたティラノサウルスがいた。

そのシユールな光景に固まっていると、そいつは俺たちを見つけ咆哮と共に襲いかかってきた。

俺とハジメは迎撃しようと武器を構えるが、それよりも早くユエが動いた。

『緋槍』

ユエの放った炎の槍は、ティラノサウルスの口内目掛けて飛翔し、その勢いを衰えることなく焼き貫いた。

「……………」

いろんな意味で思わず押し黙る俺たち。

最近の戦闘はずっとこの調子だ。

始めの頃は、ユエは俺たちの援護に徹していた。しかし、途中からハジメに対抗する様に先制攻撃で瞬殺する様になってきた。

最近俺の役立たず感が否めない。

基本的に俺が前衛に立つのだが、俺が短剣で1体殺してる間に、ハジメとユエは魔法と銃火器で3、4体殺している。

魔法を使うにしても、詠唱している間に決着がつくことがほとんどでストックを作るにしても精神力マインドの無駄でしかない。

もしかして、自分が足手まといだから即行で終わらせているとかじゃないよな？と内心不安に駆られる。もしそんなことを本気で言われたら丸十日は落ち込む自信があった。

俺は構えを崩し、苦笑いしながらユエに話しかけた。

「あゝ、ユエ…… ちょっと張り切りすぎじゃないか？」

「そうだぜ、俺たち…… あまり動いてない気がするんだが……」

「どうやら、ハジメも同じく不安だった様だ……」

「…………… 私、役に立つ…………… 仲間だから」

ユエはどこか誇らしげな顔をしている。

「どうやら、援護だけしているのが我慢ならなかったらしい。」

その健気な姿を見て、不安が吹き飛び思わず笑ってしまった。

「はははっ、ユエはもう十分役に立ってるよ。でもユエは魔法がすごい分接近戦は苦手なんだから、前衛は俺に任せてくれ。このままじゃ役立たずだ」

「…… あっ、ちがつ、そんなつもりじゃ……」

「分かってるから気にすんな」

俺が役立たずになるという言葉に反応して、落ち込むユエに、俺は気にしないでいいと頭を撫でる。柔らかな髪質の髪を撫でていると気持ちが良いのかユエは目を細め、ハジメは暖かく見守っている。

しばらくそうしていると、ハジメの『気配感知』に反応があった。

「2人とも、複数の反応がこっちに来る。しかも統率が取れてるのか俺たちを囲む様に動いてる」

「了解だ。ここだと戦いつらいから移動しよう。ユエもそれでいいか？」

「……ん、分かった」

そうして、生い茂った木の枝を払い除け飛び出した先には、体長2メートル強のラプトルのような魔物がいた。

頭からチューリップのような花をひらひらと咲かせて。

「……かわいい」

「……流行りなのか？」

「……流行りというよりか……まさか」

俺は1つの仮定が生まれたため、ラプトルに向けて矢を放つ。

放たれた矢は、吸い込まれる様にラプトルの花を撃ち抜いた。

ラプトルは一瞬ビクンと痙攣したかと思うと、その場に倒れ込んだ。

「……死んだ？」

「いや、生きてるっぽいけど……」

ハジメの見立て通り、暫く痙攣した後、ラプトルは起き上がり辺りを見渡し始めた。そして、地面に落ちているチューリップを見つけると親の敵と言わんばかりに踏みつけ始めた。

「え、何その反応、どういことっ……」

「……イタズラされた？」

「そんな背中に張り紙つけて騒ぐ小学生じゃねえんだから……」

「いや、ある意味ではイタズラだぜ……寄生っていうな」

ラプトルは花を暫く踏みつけていると、満足したのかどこか嬉しそうに鳴いた。そして、周囲を見渡していると、俺たちに気づいて襲ってきた。

俺は再び矢を放ち、ラプトルの眉間を打ち抜き絶命させた。

「で？さっき言ってた寄生ってのは？」

「日本で聞いたことがあるだろ、冬虫夏草ってヤツ。おそらくあれに似たタイプのやつだな」

「……トウチユウ？」

「ん？ああ、冬虫夏草ってのは虫に寄生して繁殖するキノコの一ชนิด」

冬虫夏草を知らないユエに説明をしていると、ハジメは俺の仮説に理解を示した。

「つまりあれか、あの花にこいつらは操られてるってことか」

「そつ、そうじゃなきやあんな風に統率はとれないし、花が無くなつてあんな反応はしない」

「なるほどなあ、まあ結局殺さなきゃいけないっぽいけどな」

そう、花を撃ち抜いたとしてもアイツらは襲ってきた。襲ってきたなら殺さないといけないことには変わりはない。

探索を再開しようとした瞬間

空気が変わった。

これは、前世の時に体験した……あの空気だ。

「っ！ハジメ！ユエ！早くここから離れるぞ！！」

「どうしたんだよ急に……ってなんだよこの気配の数は！」

「……ユミト？ハジメ？」

『気配感知』を持たないユエはまだ気づかない

「ユエは俺が背負う！」

「了解した！」

「……え!?ユミト!?なんで!？」

「説明は後だ！急げ！『モンスター・パーティー怪物の宴』だ！」

19星：宴の主催者

こうして俺たちは、魔物の群れに追いかけられている。

このままだと、この階層全ての魔物を相手にしなければならぬ。操っている本体を叩くため、ハジメの『気配感知』と、魔物たちの行動パターンから予想された場所に走っている。

現在、追ってきている魔物達はユエが魔法で迎撃しており、魔力が無くなりそうになると、俺の血を吸っているのだが…

「ユエさん!いくらなんでも吸いすぎじゃないですかねえ!」

「…… やめられない、止められない」

「俺の血はスナック菓子かよ!」

「お前ら結構余裕あるよな… つ!あそこの洞窟だ!」

俺たちの先に、縦割れの洞窟があった。入口の大きさは大人2人がギリギリ横並びで入れる狭さのため、ティラノサウルスは入れず、ラプトルも1体ずつしか入れそうにない。

俺たちは滑り込む様に入ると、ハジメが即座に錬成し入口を塞いだ。

「ふう、これで取り敢えず大丈夫だろう」

「…… お疲れさま」

「撒いたことだしユエ、降りてくれ」

「……… ん、ありがとうユミト」

ユエは少し名残惜しそうだったが、素直に降りてくれた。

入口が塞がったため、薄暗くなった洞窟を俺たちは探索する。

しばらく道なりに進んでいると、やがて大きな広間に出た。

俺たちは警戒しながら進むと、中央の付近でそれは起きた。

全方位から緑色のピンポン玉のようなものが無数に飛んできたのだ。俺たちは一瞬で背中合わせになり、飛来する緑の球を迎撃する。

しかし、余りにも数が多い

ハジメは錬成による石壁で

ユエは風属性の魔法で防御する

「2人とも、おそらく本体の攻撃だ。どこにいるかわかるか？」

「……」

「どうしたんだ？2人とも黙って」

質問の返事が来ないことに、疑問を持ったハジメが俺たちの方に目を向ける。

それに対する返答は……

「…… ハジメ…… 逃げて」

ユエの手に風が集まってゆく。ハジメは咄嗟に回避した。その瞬間、ハジメのいた場所は風により挟られていた。

「ユエ!？」

思わぬ攻撃に、ハジメは驚愕の声を上げるが、俺たちの頭上を見ると事態を理解する。

俺たちの頭にそれぞれ1輪の花が咲いていたからだ。

ハジメは即座に、花を撃ち落とそうと引き金を引く。

しかし、操ってるものはハジメの武器を知っているのか、操り、花を庇うような動きをし出した。

俺は、ゆつくりと矢を取り出すと弓に宛てがい、ユエに向かって引き絞る。

それにハジメは、もし動いたら、俺がユエを撃ち抜くという警告だと理解する。

それは奥の縦割れの暗がりから現れた。

人間の女と植物が混ざった様な姿をした魔物だった。

そいつは、醜悪な顔を歪ませニヤニヤと笑っている。

ハジメはすかさず魔物に銃口を向けた。しかし、ハジメが発砲する前にユエが射線に入って妨害する。

「…… ハジメ…… ごめんなさい」

「ユエ、お前は悪くない…… それより弓人、お前は悔しくないのかよ！」

黙っている俺にハジメは発破をかけてくる。

それに対して、俺はただ一言2人に伝えた。

「俺を信じてくれ」

「っ！… 分かった、頼むぞ」

「… ん！」

2人の返事を聞くと、俺は矢を放った。

放たれた矢は、吸い込まれるかの様に、ユエに寄生する花を撃ち抜いた。

そこからは、一瞬であった。

ユエは、自身の体を動かし射線を開ける

そしてハジメは、即座にドンナーの引き金を引き魔物を撃ち抜いた。

魔物は、自身が倒れてゆく中、頭の中が疑問で満たされた。

何故、寄生したアイツが動けるのか

何故、花が撃ち抜かれたあと即座に動けたのか

何故、アイツは躊躇いもなくあの武器を使ったのか

魔物の疑問に答えるものは、ここには居ない

—————

「よし、上手く騙せてたな」

「なあ… 弓人はなんで動けたんだよ？」

「… 気になる、私… 動けなかった」

俺はハジメの様に魔物の肉を食っていないため耐性など持っていない。

ユエですら動けなかった寄生を無視したのが疑問に思うのは当然だ。

「俺の『発展アビリティ』の1つ『対魔力』だ。文字通り魔法に対する耐性だな。あいつの操作は、あくまで固有魔法だったらしい。」

「なるほどな… けどなんですぐ動けなかったんだよ？」

ハジメの疑問に、俺は頭の花を引きちぎりながら言った。

「魔法に対する耐性って言っても完全に無効化する訳じゃない。俺の対魔力のランクだと矢の射線をずらすのが限界だった… 悪かったなユエ、花を撃つためとは言え、矢を向けてよ。」

「… 大丈夫、信じてたから」

こうして攻略は、進んでいく

三星弓人 Lv. 5

力	:	E	:	:	:	:	:	:	:
耐久	:	F	:	:	:	3	4	4	5
器用	:	E	:	:	:	7	1	0	0
俊敏	:	E	:	:	:	↓	↓	↓	↓
魔力	:	F	:	:	:	E	D	E	E
頑健	:	E	:	:	:	:	:	:	:
対魔力	:	G	:	↓	F	:	:	:	:
千里眼	:	G	:	:	:	4	5	4	5
	:		:			0	0	5	3
	:		:			5	1	0	0

20星： ■■■の■■■な■■■【上弦】

おめでとう！新しい魔法が出てるわよ！

「お！マジか！早く見せてくれよ！」

「それにしてもねえ… ふくん」

「？何ニヤニヤしてんだ… ってなんだこりや!？」

「いや、あのスキルといいオリオンがこんなにも私のことが好きだなんてねえ」

「うるせえええ!!そんな優しい目で俺を見るなあああ!!」

俺たちが奈落に落ちてから、おそろく1ヶ月経過した。

携帯食も、そろそろ底が尽きそうだ。

しかし、ギリギリ間に合った様だ。

俺たちは、100層に到達した。

=====

南雲ハジメ 17歳 男 レベル：76

天職：錬成師

筋力：1980

体力：2090

耐性：2070

敏捷：2450

魔力：1780

魔耐：1780

技能・錬成「+鉱物系鑑定」「+精密錬成」「+鉱物系探査」「+鉱物分離」「+鉱物融合」「+複製錬成」・魔力操作「+魔力放射」「+魔力圧縮」「+遠隔操作」・胃酸強化・纏雷・天歩「+空力」「+縮地」「+豪脚」・風爪・夜目・遠見・気配感知・魔力感知・熱源感知・気配遮断・毒耐性・麻痺耐性・石化耐性・金剛・威圧・念話・言語理解

=====

=====

三星弓人 Lv. 5

力	:	B	:	7	1	4
耐久	:	C	:	6	3	0
器用	:	B	:	7	0	0
俊敏	:	C	:	6	0	0
魔力	:	D	:	5	3	0
頑健	:	E	:			
対魔力	:	F	:			
千里眼	:	G	↓	F		

|||||

ここに来た瞬間、空気で分かった。ここが最深部だと

ユエがいた階層と同じ…。いやそれ以上の空気の重さ

一瞬で理解した。この先には今までの比にならない強敵がいると。

現在、俺たちは1つ手前の99層に仮拠点を作り準備を整えていた。

ハジメは弾や矢といった消耗品の補充

俺は、装備の点検をしている

ユエは、いつもと雰囲気が違う俺たちが気になるのか、交互に俺たちを見ていた。

「2人とも… いつもより慎重…」

「まあ… な、あそこに恐らくいる迷宮の孤王は… モンスター・レックス 下手したら俺た

ち以上の強さがあるかも知れない…」

「それは… 前世の経験則からか？」

「ああ… あの空気は、俺を殺したアンタレスに引けを取らなかった…」

目を瞑ると、鮮明に思い出す。

仲間達が殺されていく光景が…

逃げるしか無かった悔しさが…

そして… 死ぬ瞬間の無力感が…

確かに、あの時に比べ俺は強くなった。

ハジメや、ユエだっている

けれど… 怖い…

2人を失うのが…怖い

俺の表情が強張っていることに気づいたユエが、俺を心配する

「ユミト…大丈夫？」

「…ああ、大丈夫だ。行こう」

「弓人、俺たちは仲間だ」

「いきなりどうした？そんな当たり前のこと言ってる」

「だから、俺たちを信じ頼ってくれ」

「……ありがとう」

そうだ、俺たちなら大丈夫だ。

こんなにも、頼りになる仲間がいるんだ。

こうして俺たちは、100層へと降っていく。

100層は、巨大な石柱によって支えられた広間だった。

石柱には彫刻が施され、規則正しく並んでいる。

暫く歩みを進めると、突如柱が輝き始めた。

俺たちは武器を構え警戒するが、特に何も起こらない。

警戒レベルを最大にし、奥へ進むと。そこには、彫刻が施された巨大な扉があった。

気配はない、けれど分かる。これ以上進むと『やつ』は出てくると

「ハジメ…ユエ…勝つぞ！」

「ああ！」

「んっ！」

俺たちは意を決して、足を踏み出した。

その瞬間、俺たちの前方に赤い魔法陣が現れた。

魔法陣には、見覚えがある。俺たちが落ちる原因となった忌々しい魔法陣だ。だが大きさが違う。この魔法陣はベヒモスの時の3倍はある。

「おいおい、なんだこの大きさは？マジでラスボスかよ」

「……大丈夫…私達は負けない…」

「ああ…そうだな」

ハジメが流石に引きつった笑みを浮かべるが、

ユエは決然とした表情を崩さず勝利を信じている。

俺はユエの言葉に肯定し、魔法陣を睨みつける。
魔法陣は一層輝きを放ち、そして生み出した。
30メートルを超える体格を持ち、6つの首を携えた。
神話の怪物ヒュドラを思わせる姿をした魔物を。

「クゥアアアン!!」

咆哮と共に、赤い紋様が付いた頭から炎が吐き出された。

俺たちはその場から飛び退き回避、ハジメがドンナーを炎が吐き出された頭に銃口を向け、引き金を引いた。

乾いた音と共に、赤の頭を打ち抜き爆散させた。

だが、白い頭が叫びと共に爆ぜた頭に光を灯す。

その瞬間、赤い頭が逆再生されたかの様に元に戻った。

「くそっ！白い頭は回復魔法持ちか！」

「なら狙いは一つ、あの白頭からだ！」

「んっ！私も狙う！」

ハジメは、即座に狙いを変え。白い頭にドンナーの弾丸を放ち、ユエは『緋槍』を放った。

弾丸と炎の槍が白い頭を狙う。直撃したかに思われたが黄の頭が射線に割り込み自身の体を肥大化させ、受け止めた。衝撃と爆炎の後には無傷の黄の頭が平然と睥睨している。

「盾役か… けど！」

「ああ、俺には関係ない！ストック解放 解放数2、2節詠唱破棄」

「【オリオン・オルコス】」

一閃

白く輝く矢は、黄の頭の防御など意に介さず白の頭ごと貫いた。

【オリオン・オルコス】俺が使える唯一の魔法、その効果は魔性・獣系に対する防御無視補正だ。あの蠍の様に鉱石による鎧などには効果がないが、目の前のヒュドラの様な防御系の技能や魔法に対して、絶対の強さを持つ。

この隙を逃す訳もなく、俺たちは同時攻撃を仕掛けようとした瞬間ユエから悲鳴が上がった。

「いやああああ!!」

「ユエ!？」

「弓人！ここは任せろ！」

前線をハジメに任せ、俺は急いでユエの元へ向かう。
そこには、顔を青くし体を震わしているユエがいた。

「ユエ！しっかりしろ！何をされた！」

声をかけても反応しないため、何度も体を揺すり神水を飲ませた。
すると、虚だった目に光が戻り始めた。

「………… ユミト？」

「大丈夫か？ 一体何された？」

ユエに何があったか聞くと、彼女は先ほどのことを思い出したのか
瞳に涙を溜め体を震わせた。

「………… よかった………… 見捨てられたと………… また暗闇に一人
で…………」

「ゆっくりでいい、教えてくれ」

ユエ曰く、突然、強烈な不安感に襲われ気がつけば俺たちに見捨て
られて再び封印される光景が広がってしまった、何も考えられなくなり
恐怖に縛られて動けなくなったらしい。

「相手にバッドステータスを与える… 呪詛カースみたいなものか…」

「………… ユミト………… わたし…………」

「そんな不安そうな顔をすんなよ、な？」

俺はユエの頭を撫で、笑顔を向ける。

あの植物の層以来、彼女は頭を撫でられるのが気に入っている。

暫く頭を撫でていると、落ち着いてきたのか目を細める。

「俺やハジメがお前を見捨てると思うか？」

「………… 思わない…………」

「だろ？けど不安なら何度でも言ってやるよ、俺は仲間を決して見捨
てない。約束だ」

「………… 約束…………」

「ああ、今はハジメがあいつを食い止めてくれてる。だから俺たちも
行こう」

「………… んっ！」

俺たちは、戦線に復帰するため走り出す。

「ハジメ！ユエはもう大丈夫だ！あの黒い頭は対象を恐慌状態にするらしい！」

「丁度いい！『シユラーゲン』を使う！ユエ！力を貸してくれ！」

「…… 任せて！」

いつもよりやる気に溢れているユエ。静かな呟くような口調が崩れ覇気に溢れた応答だ。先程までの不安が根こそぎ吹き飛んだようである。

『緋槍』！『砲皇』！『凍雨』！

連続で放たれる魔法、1つ1つがとてつもない破壊力を持ってヒュドラを襲う。

防御を担当する黄の頭、回復を担当する白の頭を失ったヒュドラは黒を除いた頭を前に突き出し魔法を放ち対抗する。

そして、黒の頭はユエに再び恐慌の魔法を使った。

再び不安が込み上げてくる。

けれど、彼女はもう大丈夫だ

あの暗闇から救ってくれた彼ユミトがいる

どこか素直じゃないけど本当は優しい彼ハジメがいる

彼に撫でてもらった頭が熱を持つ

彼との約束が勇気をくれる

「…… もう効かない！」

ユエは魔法の手を緩めず、放ち続ける。

そして、ハジメの準備が完了した。

「待たせた！」

彼は50層で開発した新兵器、対物ライフル『シユラーゲン』を脇で挟み標準を定める。

そして、引き金を引いた。

ドガンッ！

ドンナーの比にならない爆発音と共に、電磁加速された弾丸は、ユエの魔法と拮抗していた3つの頭を纏めて吹き飛ばした。

突然の状況に呆然とする黒の頭に向けて、俺は弓を引く。

「ユエを泣かせやがって、ストック解放 解放数1、1節詠唱破棄」

『我が矢の届かぬ獣はあらじ』

「オリオン・オルコス」

全ての頭は、破壊された。

2人の方に目を向けると、魔法を打ち続けて疲れたのか、その場でへたり込むユエと、ユエに神水を渡しているハジメがいた。

2人の元へ向かおうとした瞬間。

悪寒がした。

反射的にヒュドラの方を見ると、そこには、7つ目の頭を胴体部分から生やして、2人に向けて極光を放とうとしていた。

2人はまだ気づいていない。

そこからは、あまり覚えていない

ただ頭の中にあつたのは、『2人を助けないといけない』だけだった
気づいたら2人の前に、立ち塞がり極光をその身で受け止めていた。

不意の出来事に、2人は反応できず。余波により後方へ吹き飛ばされていった。

光が収まると、全身が痛む、意識も朦朧としている。

2人の方に目を向けると、神水を持って俺の方に走ってくる2人がいた。

特に怪我はない様だ。ああ…

「よかった…」

「弓人！」

「ユミトオ！」

こうして俺の意識は、闇に沈んでいった。

「よかった…。」

「弓人！」

「ユミトオ！」

弓人が倒れていく。神水を持って走る。ハジメの頭は自身に対する怒りに満ちていた。

なぜ、完全に死んだか確認しなかったのだと

なぜ、気を抜いてしまったのだと

なぜ、また守られてしまったのだと

三星の容体は、お世辞にも良いものではなかった。

彼の全身から血が流れ、ところどころに焼け爛れた跡がある。

体の欠損がなかったことは彼の『発展アビリティ』『頑健』があったお陰もあるが、それでも奇跡であろう。

ハジメとユエは2人がかりで弓人を抱えると、急いで柱の裏へと移動する。

そして神水の1本を傷口にかけもう1本を弓人に飲ませる。

意識は失っているが何とか飲み込んでくれた。

しかし、止血の効果はあったがいつもの様に即座に修復しない。

「どうして!?!」

「くそっ!あの光には回復阻害の効果があるのか… もっと飲ませるぞ!」

手持ちの神水をありったけつかう。

恐らく、この戦いの中で起きることはないだろう。

ハジメは、覚悟を決めた。

「ユエ… 弓人を頼む…。」

「ハジメ?」

「あいつは、俺に任せろ」

「ダメ!無茶だよ!」

ユエは必死に止める、弓人に続いてハジメまで傷つくことが耐えら

れなかった。しかしハジメは、止まらない。

「…俺はずつと…弓人に守られてばかりだ…日本にいた頃も…王宮にいた時も…ここに落ちた時だって…ずっと守られてた…だから！今度は俺が守る番だ！」

「…待って！…なら…私も行く…今度は…私が助ける番！」

「ユエ…分かった！力を貸してくれ！」

「んっ！」

ハジメはユエを背負うと、ヒュドラに向かって走り出す。

親友を守るために。

親友と故郷へ帰るために。

~~~~~

「…は…？」

俺は今、どこかの森にいる。

何か大事なことがあった気がするが、靄がかかったかの様に思い出せない。

何故か、この先へ進むべきだと感じたため。歩いていく。

暫く進むと、川へ出た。初めてくる場所のはずなのに、どこか懐かしさを覚える。だめだ、うまく思考が回らない。

「また私の水浴びを覗くつもり？なんてね」

「！」

背後から、女性の声が聞こえた。

何故か聞き馴染みがある…安心感を覚え…とても悲しくなる

声だ。

俺は振り向こうとするが、金縛りにあったかの様に動かない。

声も、何故か出ない。

女性は、構わず俺に話しかける。

「貴方には、まだやるべき事が残ってるでしょ？」

やるべき事…頭の靄が少し晴れる。そうだ、俺は仲間たちと戦っていた。

「今ならまだ間に合うわ、早く行きなさい」

まだ間に合う・・・頭の靄が少し晴れる。そうだ、ヒュドラはまだ生きています。

「約束・・・守るんでしょ？」

約束・・・頭の靄が完全に晴れる。その瞬間、浮遊感が襲う。

「貴方とは・・・もう会えないかもしれない・・・けど！ずっと帰りを待ってるから！」

「・・・行ってくるよ、アルテミス」

「っ！ええ、いつてらっしやい・・・オリオン！」

~~~~~

意識が、覚醒する。

体には、まだ鈍い痛みがある。けれど、動ける。

ヒュドラの方を見ると、ハジメがユエを背負い戦っていた、しかし、ヒュドラの弾幕が厚く。攻めあぐねている。

俺は、目を閉じて意識を集中させる。

何で・・・忘れてたんだろなあ・・・この【魔法】を・・・

『我が宿命、月女神に請い願う。』

『肉体に剛力を、精神に冷徹を。』

『そして我が運命をここに定めよう。』

『其は、女神の無垢な加護。』

【アルテミス・アグノス】

|||||

【アルテミス・アグノス】

・階位昇華

・発動対象は術者本人限定

・発動後、術者本人に反動あり

・詠唱式『我が宿命、月女神に請い願う。』

『肉体に剛力を、精神に冷徹を。』

『そして我が運命をここに定めよう。』

『其は、女神の無垢な加護。』

20星：女神の無垢な加護【下弦】

淡い光が、俺の体を包む。

月の光が、祝福するかのように。

体の奥底から、力が湧き上がる。

頭はどこまでも冷静に、脳が冴え渡る。

ヒュドラに向けて、俺は地を蹴る。

今度こそ、約束を果たすために。

――――

「くそっ！近づけねえ！」

「……受け止めるだけで……精一杯……！」

現在ハジメとユエは、攻めあぐねていた。

新たに生えてきた頭は、7本の時と比にならない強さを持っている。

無尽蔵に放たれる光弾により受けに回され、隙を付き、ドンナーの弾丸を放つてもかすり傷にしかならない。

シユラーゲンを使うおうにも、ヒュドラはその身で受けた経験からハジメに使わせまいと更に弾幕を張る。

ユエも攻撃をしようにも、弾幕を寄せ付けられない様受け止めるので精一杯の様だ。

ユエの魔力は、ハジメの血を吸う事でどうにかなるが、ハジメの方は別だ。

神水は弓人の回復にありつたけ使ってしまったため。体力と魔力の回復ができない。

そして、その時が来てしまった。

「がっ!？」

「ハジメ!？」

「大丈夫だ！掠っただけだ！」

ハジメの右目尻を光弾が掠めた

血が流れ込み、右目が赤く霞む

その結果、遠近感が狂い被弾が増えてしまい、ハジメは距離を取るため後方へと跳躍する

しかし、それを予測していたと言わんばかりに、ヒュドラは口を開け、極光を溜めていた。

「しま…」

弓人を一撃で戦闘不能にした極光。

回避は不可能。

ユエは弾幕の処理で手一杯。

ハジメはせめてユエだけでもと、背中に手を伸ばそうとした瞬間一筋の閃光が横切った。

「お前はさっさと… 寝てろおおおおおおおお!!!」

「弓人!?!」

「お前はさっさと… 寝てろおおおおおおおお!!!」

俺は、ヒュドラの目の前へと飛び出すと。ヒュドラの額を全力で殴り抜いた。

不意の攻撃に反応できなかったヒュドラは、地面へ顔を突っ込み、口内に溜め込んだ極光は放たれる事なく、ヒュドラの体内で爆発した
イグニス・ファクトラス
【魔力暴発】

体内で行き場を失った魔力が、暴走し爆発する現象。それが今起きたのだ

口内を自らの光で焼いたヒュドラは、絶叫を上げ暴れ回る

俺はヒュドラが暴れている間に、ハジメたちの方へ跳ぶ

「すまん! 気を失ってた!」

「それより弓人! お前傷は大丈夫なのか!?!」

「ああ! お前たちが神水を飲ませてくれたんだろ? おかげでもう動ける!」

「… それより… ユミト… なんで光ってる?」

「それはなユエ… 偉大な男とは輝いて見えるものだからだ」

「お前… ふざけてる場合じゃねえだろ…」

ハジメは呆れているが、笑みが浮かんでいる。どうやら2人には、

かなり心配させた様だ。

「こうして起きたのはいいが、この状態もそこまで持たない… ハジメ、あいつに勝てるプランはあるか？」

「… なんで俺に聞くんだ？」

「そんなん決まってるだろ、こういう時はお前を頼った方が良いからな。な？ユエ」

「… ん、ハジメに任せれば安心」

「お前ら… ああ、あるぜ！とっておきのプランが！」

俺たちは、ハジメから作戦を聞き、開始するために動き始めた。

~~~~~

『いいか？この作戦の肝はユエだ。ユエ、お前にドンナーを渡す。こいつでヒュドラの気を引いて、俺の合図で蒼天を使ってくれ』

『… ん！』

『弓人、お前はユエを背負って全力で回避に専念してくれ』

『了解した… ハジメ、お前は？』

『俺は… 下準備だ』

~~~~~

俺はユエを背負うと、ヒュドラの前へ再び立ち塞がった

ヒュドラは、極光の妨害を行った俺に対して憎悪に満ちた目を向けており喉が焼けたせいで、しゃがれた咆哮と共に弾幕を放ってきた

1つ1つの光弾を、紙一重で回避する

ただ回避すれば良いだけではない。ユエがヒュドラに向けてドンナーを向けられる様に、ハジメの方へヒュドラが意識を向けない様に、冷静に対処する

ユエはヒュドラに向けて、ドンナーを発砲する。ヒュドラは、弾丸を煩わしそうに頭を振って回避した

この攻防が終わりを迎えるのには、そう時間は掛からなかった

ハジメからの『念話』が俺たちに届く

(準備完了だ！ヒュドラから離れてくれ！)

ハジメの指示に反応し、後方へと跳躍する

その瞬間、天井に強烈な爆発と衝撃が発生した

崩落する天井は、落下の速度により勢いを増しヒュドラへと落ちてゆく

そして、ヒュドラに落とした岩盤を更に錬成させ拘束具へと変えてゆく

身動きが取れず、もがくヒュドラに最後の仕上げと焼夷手榴弾の入ったポーチを放り投げ、全力で叫ぶ

「ユエ!!!今だ!!!」

「んっ! 『蒼天』!」

青白い太陽が出現し、身動きの取れないヒュドラを融解させていく。中に放り込まれた爆薬の類も連鎖して爆発し、ヒュドラの硬い装甲を貫き致命傷を与えた

「グウルアアア!!!」

ヒュドラは断末魔の絶叫と共に、光弾を乱れ撃つ

壁が撃ち崩されるが、ハジメが錬成で片っ端から修復し妨害してゆく

極光は自身の喉が焼けてしまっており撃つことができない

叫び声が小さくなっていき、完全に沈黙した

「ハジメ……」

「今度こそ大丈夫なはずだ……『気配感知』に反応はない……」

「……お疲れ様」

俺はユエを下ろすと共に、体の輝きを失っていき……そして大の字に倒れ込んだ

「あゝ!!!しんど!!!」

「俺も……もう限界だ……」

「……疲れた……」

2人もその場にへたり込んでしまう

どうやら動くのには、少し時間が必要そうだ

ありがとう……君のお陰で守れたよ

21星：反逆者の住処

心地良い感覚が、頬を撫でる

それと共に、意識が覚醒していく。

目を覚ますと、俺は今ベッドに居ることを理解した。

軽く周囲を見渡していると部屋にユエが入ってきた。

「えっと… なんてベッドに… ていうか…何処だ？」

「…… おはよう」

「えっと… 俺はなんでここに？」

「…… ユミト… あの後気を失ってた」

混乱する俺に、ユエがああ後のことを説明してくれた

どうやら、あの戦いの後の俺はそのまま寝てしまった様だ

ただ、あの場所にいつまでもいる訳にも行かないため、俺を引っ張りながら連れて行ったらしい

奥の扉の先には、広大な空間に住み心地の良さそうな住居があったため、畏が無いことを確認した後、住居内の寝室を見つけ俺をベッドに投げ込んだらしい。そして俺が寝ている間、ハジメとユエが交代で俺の様子を見てくれていたらしい。

「ああ… そういえばそうだった様な…」

「…… あれから、2日経ってる」

「まじか… ハジメは？」

「…… 弾や矢の補充とか、新しい武器を作るからって籠ってる…」

「そうか… じゃあハジメのところに… ついでででで!!!」

「ユミト!?!」

俺がハジメの所へ行こうと体を動かした瞬間、全身が軋み痛みが発生した。

ユエは、俺の体にヒュドラの毒があると思ったのか神水を取り出す。

「ああ… 忘れてた… 反動のこと…」

「ユミト! 神水を飲んで!」

「大丈夫だ、ユエ… これは『あれ』使った時の反動なんだ」

慌てるユエを落ち着かせ、俺は『あの魔法』の説明をした。

【アルテミス・アグノス】

俺の持つ魔法の中で、最も強力な魔法

その効果は至ってシンプル『一時的なランクアップ』

だがそのシンプルな効果が最も強力な理由だ

【ステイタス】において、【Lv】というものは重要とされる

【Lv】が一つ違う、ただそれだけの理由で勝負が決することがある

一時的とはいえ、『Lvを上げる』といえはその強さがわかるだろう

だが、無条件で手に入れられるほど美味しい話はない。

あの魔法は、俺の体を無理矢理ランクアップさせるため、反動が発生する。

風船に必要な以上の水を入れれば破裂する様に、

注がれる力が、俺の体を壊すのだ。

「んで、今その反動で全身筋肉痛って訳だ」

「……逆になんで筋肉痛で済んでるの……？」

「俺の『頑健』とLv5の体だからだろうなあ……初めて使った時は本当やばかったけど……」

俺がこの魔法を手に入れた時は【Lv3】の時だ

初めてこの魔法を使った時には、負荷でまともに動くことができずそのまま意識を失ってしまった。

そして仲間たちに治療系ファミリアへ担ぎ込まれ診察を受けると全身の筋肉が断裂していたらしい。その時の戦場の^{デア・セイント}聖女の形相と

いったら……

その後、アルテミスからの説教を受け、『ランクアップして体が耐えられる様になるまで禁止』と言われた思い出がある。

「だから神水はしまっとけ。ほっとけば治るから」

「良いから飲む！ユミトは寝てて、ハジメを呼んでくるから」

ユエは神水の入った試験管を俺の口へ突っ込み、ハジメを呼びに俺の返事を待たずに部屋から出て行った。

暫く待っていると、ハジメと共に入ってきた。

「ようやく起きたか」

「悪いな、ここまで運んでくれたんだろ？」

「気にすんな、神水は飲んだんだろ？この案内するから来てくれ」

ハジメとユエに連れられ、部屋から出ると周囲の光景に圧倒された。

『太陽』がそこにはあった。

もちろんここは地下迷宮であり本物ではない。

頭上には円錐状の物体が天井に浮いており、その底面に煌々と輝く球体が浮いていたのである。

僅かに温かみを感じ、無機質さを感じないため、思わず『太陽』と
思ってしまった。

「……………夜になると月みたいになる」

「マジかよ」

そのほかには、大きな畑や川が流れており、そこに植えられている野菜や川に泳いでいる魚は俺でも食べられそうなものであった。

「他にも風呂とかあるんだが……先に来て欲しいところがある」

「え！風呂あんのかよ！」

「ああ、結構デカいから後で入ると良い」

思わぬ朗報に頬を緩ませながら、ハジメが来て欲しいといった場所へと進む

そこには、直径7、8メートルほどの今まで見たことない形をした魔法陣と、石によって作られた墓があった。

「……ここが……お前たちが来て欲しいって言った場所か？」

「ああ、あの墓があった場所には骨になった奴がいたが……俺が埋めて墓を作った……」

「そうか……あの魔法陣が外へ出るためのやつか？」

「いや、違う……けど、乗ってみれば分かる」

ハジメに言われて、俺は恐る恐る魔法陣の上へと乗る
その瞬間、魔法陣が輝き出し部屋を純白へ染め上げる

思わず目を閉じると頭に何かが入り込み奈落に落ちてからの記憶
が脳内で流れる

光が収まり目を開けると、俺の目の前に黒衣の男が立っていた

22星：オスカー・オルクス

「試練を乗り越えよくだどり着いた。私の名はオスカー・オルクス。この迷宮を創った者だ。反逆者と言えはわかるかな？」

黒衣の男：： オスカー・オルクスは淡々とした口調で話す。

「ああ、質問は許して欲しい。これはただの記録映像のようなものでね、生憎君の質問には答えられない。だが、この場所にたどり着いた者に世界の真実を知る者として、我々が何のために戦ったのか：：メッセージを残したくてね。このような形を取らせてもらった。どうか聞いて欲しい。：：我々は反逆者であって反逆者ではないということ。」

彼が語った内容は、聖教教会やユエに聞かされた反逆者の話とは全く異なるものだった。

曰く、この世界で起こっている戦争は神の遊戯として作られたものである

そして、それを良しとせず神を伐つべく立ち上がったのが『解放者』である

しかし、反逆を知ったその神の策略により、人間達を巧みに煽動し『反逆者』として追い詰められた

彼ら『7人の解放者』は、各大陸に迷宮を作りそこへ神代の魔法を隠した

全ては、未来の者たちへ託すために。

「君が何者で何の目的でここにたどり着いたのかはわからない。君に神殺しを強要するつもりもない。ただ、知っておいて欲しかった。我々が何のために立ち上がったのか。：：君に私の力を授ける。どのように使うも君の自由だ。だが、願わくば悪しき心を満たすためには振るわないで欲しい。話は以上だ。聞いてくれてありがとう。君のこれからが自由な意志の下にあらんことを」

彼は微笑むと、記録映像が止まり消え魔法陣の光も収まった。

「ハジメ。：：もしかしてあの墓に入れた骨つてのは」

「ああ、服装からしてオスカー・オルクス本人だろうな」
「そうか…」

俺はオスカーの墓の前へ行くと、目を瞑り黙祷する
彼の想いに、敬意を込めて…

「あと映像の後、頭に何かが侵入してくる感覚があった。その時に神代の魔法『生成魔法』が手に入ってるはずだぜ」

「何のことだ？そんな感覚無かったぞ？」

「は？どういう事だ？」

俺はハジメに急かされ、ステータスカードを見る

「だがそこには『生成魔法』という単語は一つもなかった

|||||

三星弓人 Lv. 5 『ランクアップ可能』

ランクアップ可能理由 : 少人数での迷宮制覇

力 : B : 745

耐久 : C : 680

器用 : B : 725

俊敏 : C : 624

魔力 : D : 570

頑健 : E

対魔力 : F

千里眼 : F

【魔法】

【オリオン・オルコス】

・ 弓射魔法

・ 魔性・獣系に対する防御無視補正

・ 詠唱式『放たれしは必中、我が矢の届かぬ獣はあらし』

【アルテミス・アグノス】

・ 階位昇華

・ 発動対象は術者本人限定

・ 発動後、術者本人に反動あり

・ 詠唱式『我が宿命、月女神に請い願う。』

『肉体に剛力を、精神に冷徹を。』

『そして我が運命をここに定めよう。』

『其は、女神の無垢な加護。』

【

・ 対■魔法

・ 詠唱式『』

【スキル】

セリーニ・ブラグマ

【月星敬慕】

・ 成長する

・ 想いの強さで自身の能力に補正

・ 魅了・洗脳の無効

【狩^ザ猟^{ハン}本能】

・ 効果範囲内における獣・鳥系の探知及び隠蔽無効

・ 獣・鳥系に対する攻撃強化

・ 一部の武器に器用補正

【魔力装填】

マジック・ロード

・ 精神力を消費しストック可能（最大3つ）

・ 発動時ストックの消費量に比例して詠唱式の破棄が可能

・ ストックは一定時間で消滅

【弓^{アロー}矢^{エン}作成】

・ 属性矢作成可能

・ 作成中における器用補正

|||||

「お！【ランクアップ】可能になってんじゃねえか！それに【スキル】も増えている！」

「マジでねえ…なんでだ？」

「そんなもん俺に言っただけで知らん、まあそもそもステータスの表記も違ってんだから今更だろ」

「気楽だな…」

【ランクアップ】出来ることに気を良くしている俺を横目にハジメは呆れた目線を向けている

「んで… 弓人はあれを見て、どうすんだ？」

「どうするって？」

「解放者たちのために狂った神とやらと戦うか？」

「いや… 別に、この世界のためにそこまでしてやるギリないし… けどまあ、戦うことにはなると思うが…」

「なんでそう思うんだ？」

「この神はこの世界を遊戯盤として見てる、その中で駒が勝手に盤上から出ようとするとその見逃すと思うか？」

「…なるほど」

俺の言葉にハジメは納得する。自身の思っていた動きと異なる行動をする駒に対して、俺たちを処分するにしろ、興味を持つにしろ、将来接触する可能性は高い

「俺たちが日本に戻るために行動する以上、狂った神との接触は避けでは通れないだろうな… だからあつちから攻撃を仕掛けてくるなら戦うつもりだ」

「そうか… そうだな、俺たちが無視したとして向こうから来る可能性も考えとかないとな…」

「ま、結局俺たちの目的は『地上へ出て故郷へ帰る手段を見つける』で良いな」

「あつ、それなんだが1つ相談がある… 地上へ出るのは直ぐじゃなくって良いか？」

理由を聞くと、オスカーが使っていたであろう工房には様々な鉱石、作業道具、理論書があり学ぶことが多いため暫くここを拠点にして以降の迷宮攻略の準備がしたいとのことだ

「ここにある畑の野菜や川にいる魚は弓人が食っても大丈夫だ。だから食糧も問題ない… だから」

「良いんじゃない？」

「たの… え？」

「だから良いんじゃない？ 食いもんには困らないなら俺は構わないぜ？」

「お… おう、なら良いんだが…」

あつさりと了承を得て、どこか肩透かしを受けるハジメ
こうして、俺たちは鍛錬と装備の強化、補充を図るためここを拠点
にした。

~~~~~

おまけ（没茶番）

「そういえばユエは？」

「ユエは弓人をここに連れて行く時に『私は一緒にいなくてもいい  
?』ってことで風呂に行った」

「そうか・・・ならやることは決まりだな」

「やること?」

「ああ・・・ハジメ、覗「待て待て待て待て」

「なんで止めるんだよ、ハジメ」

「いやいきなり親友が犯罪行為に走ろうとしたら止めるだろ」

「・・・ハジメ、神ゼウスは言った・・・『覗きは男の浪漫』だと」

「あの下半神なら言いかねんがそんなセリフはねえ!!!・・・よな?」



## 23星：旅立ちとランクアップ

オスカー・オルクスの住居を拠点にしてから2ヶ月ほど経過した現在、俺とハジメは武器を持たず対峙している。

「それじゃあ、この弾丸が地面に落ちたら開始だぞ」

「ああ、技能や魔法は禁止、勝敗はいつも通り生殺与奪の権を先に手に入れた方だ」

短い掛け合いを済ませると、ハジメは右手に持っていた弾丸を指で弾く。弾かれた弾丸は回転しながら上へと跳び、次第に地面へ落ちて行く。

そして、弾丸が地面へと落ちた瞬間。ハジメは俺の方へと飛び出した。

一瞬で目の前へ近づき俺に一撃を加えようとする。だが、それより俺の拳がハジメの腹へと突き刺さった。

「かはっ…」

「いくら速くてもお前のは直線的すぎる。何度も戦ってたら猿でも要領は掴めるぞ」

拳を振り抜いたことでハジメは後方へ飛ばされる。肺の中の空気が全て吐き出すことになり、ハジメは膝を突き咳き込む。

俺は追撃を加えるため、ハジメに近づき顔を蹴り上げる。それをハジメは地面を転がり紙一重で回避する。

ハジメは立ち上がり、左腕で俺の頬を殴り飛ばす。口全体に血の味が広がっていく。

「ぶほっ！」

「どうだ、俺の作った義手は。効くだろ」

「いっつく… お前！それは卑怯だろ！」

ハジメの失った左腕には、オスカー・オルクスの工房にあった希少な鉱石を大量に使った義手を装着している。そこにハジメが『生成魔法』で様々な改造を施したことで国宝級アーティファクトとなっている。

俺は文句を言っているが正直、そこまで卑怯だとは思っていない  
自身の持てる部分で最大の攻撃をすることは当然のことだからだ  
暫く体術のみの攻防が続いていく  
すると、ハジメが右手で俺の右手首を掴んだ。

その瞬間、電撃が俺を襲った。

「この野郎……『纏雷』使ったな……」

「なんのことかな？俺は掴んでるだけだぜ」

「そうかそうか……ならしつかり掴んでくれよお！」

俺は手首を捻り、ハジメの右腕を掴み返す。そして、全力でハジメ  
を地面に叩きつけた

思わぬ反撃に、ハジメは受け身を取れず。そのまま気を失ったらし  
い。

「ふん！ざまあみろ！」

「……ユミト、やりすぎ」

「うっ……でもよお、ハジメが反則したから……」

「……言い訳、め！」

「分かった！分かったから！」

こうして観戦していたユエから説教を受けていると、気を失ってい  
たハジメが目を覚ました。

「いてて……なんで『纏雷』使ったのにびくともしねえんだよ……」

「やっぱり使ってんじゃねえか！」

「……ハジメも、め！」

「うっ……すまん……」

こうして2人ともユエからの説教を受け。拠点へと戻っていった。

「なあハジメ、そのモノクルはどうしたんだ？」

「これか？これはな……」

ハジメの右目に、普段着けていないモノクルがあったため聞いてみ  
ると、前回ヒュドラとの戦闘で右目尻を光弾が掠め、ヒュドラの毒の  
影響で右目の視力が落ちてしまったため使ったらしい。

その際、ただ眼鏡を作るだけなのも芸がないため、神結晶を加工し

て、『魔力感知』と『先読み』を付与した物となっている。

「こいつを使えば魔物の核や使う魔法の属性が見えるから戦闘がかなり楽になる」

「それは良いんだが……『白髪』『義手』『モノクル』って属性盛り沢山だな」

「ぐふうっ！」

こうして俺の何気ない言葉がハジメを傷つけたりしながら

さらに10日ほど……経過した

—————

今俺たちは、地上へ出る魔法陣の前にいた。

魔法陣を起動すると、ハジメが口を開いた。

「弓人、ユエ……俺の武器や俺達の力は、地上では異端だ。聖教教会や各国が黙っているというのではないだろう」

「だろうな」

「ん……」

「兵器類やアーティファクトを要求されたり、戦争参加を強制される可能性も極めて大きい」

「そうだな」

「ん……」

「教会や国だけならまだしも、バックの神を自称する狂人共も敵対するかもしれない」

「まあ、ありえるだろうな」

「ん……」

「世界を敵にまわすかもしれないヤバイ旅だ。命がいくつあっても足りないくらいな」

「そんなもん今更だ。な？ユエ」

「ん……今更……」

「……ははっ！本当に今更だな」

俺たちの解答に苦笑するハジメ、そこに俺は自身の考えていたことを伝えた。

「簡単なことだ。ハジメが俺とユエを、ユエがハジメと俺を、そして俺

がユエとハジメを守る。そうすれば…俺たちは最強だ！だからよ…行こうぜ！日本に帰るために！」

「ああー！」

「んー！」

こうして魔法陣は輝きを大きくする。まもなく地上へと転移するだろう。

その前に俺はステータスカードを取り出して、「ランクアップ可能」と書かれていた部分を触る。

【発展スキル】が1つ手に入るらしい…当然選択する。

ステータスカードが光り、背中が熱を持つ。

俺たちは覚悟と共に、地上へと転移した。

|||||

三星弓人 Lv. 6

力： I : 0

耐久： I : 0

器用： I : 0

俊敏： I : 0

魔力： I : 0

頑健： E

対魔力： F

千里眼： F

直感： I

|||||

## 23. 5星：クラスメイトside 帝国と勇者たち 【上弦】

これは、弓人たちがヒュドラに勝利した頃まで遡る。

勇者一行は、一時迷宮攻略を中断しハイリヒ王国に戻っていた。ベヒモスに勝利した後、未踏の迷宮攻略は難航していたこともあり、一度体制を立て直すという結論が出た。

本来、休養だけなら宿場町ホルアドでもよかった。だが『ヘルシャー帝国』から勇者一行に会いに使者が来ることになったため王宮まで戻る必要があった。

しかしここで1つ疑問が生まれる。『何故このタイミングなのか』と

それは、元々エヒト神による『神託』がなされてから召喚されるまでほとんど時間などなかったかららしい。

そのため、同盟国である帝国に知らせが行く前に勇者召喚が行われてしまい召喚直後の顔合わせができなかったためだ。

もつとも、仮に勇者召喚の知らせがあっても傭兵が建国した完璧実力主義の帝国は動かなかっただろう。

そんな彼らが動いた理由は『勇者一行が「オルクス大迷宮」の最高攻略階層を更新した』ため興味を持ち王国と教会に掛け合った所、定期的にも丁度いいとのことでした。

馬車が入り、全員が降車すると王宮の方から一人の少年が駆けて来るのが見えた。10歳位の金髪碧眼の美少年である。光輝と似た雰囲気を持つが、ずっとやんちゃそうだ。その正体はハイリヒ王国王子ランデル・S・B・ハイリヒである。彼は犬耳や振り回された尻尾を幻視してしまう勢いで駆け寄ってくる。

「香織！よく帰った！待ちわびたぞ！」

「ランデル殿下。お久しぶりです」

どうやら彼の視界には白崎しか映っていないようだ。

彼は、勇者召喚の翌日からこんな風にアプローチを続けている。なお、白崎はランデル王子のことを弟のように思っているため一方通行のようだが。

白崎に傷ついてほしくないランデル王子は、どうにかして戦いから遠ざけるようアプローチするが、彼女の意志は強く遠回しに断られる。

その問答中、相も変わらず空気の読めない善意の塊が横槍を入れる。

「ランデル殿下、香織は俺の大切な幼馴染です。俺がいる限り、絶対に守り抜きますよ」

「香織を危険な場所に行かせることに何とも思っていないお前が何を言う！ 絶対に負けぬぞ！ 香織は余という方がいいに決まっているのだからな！」

自身にとって恋敵のような存在の天之河が割り込んだことで、敵意を剥き出しにして反論する。当の天之河本人は年下の少年を安心させるつもりで言ったただけなので、何故睨まれるのか分からない様子だ。

すると、涼やかだがどこか少し厳しさを含んだ声が聞こえてきた。

「ランデル。いい加減にしなさい。香織が困っているでしょう？ 光輝さんにもご迷惑ですよ」

「あ、姉上!?!:.. し、しかし」

「しかしではありません。皆さんお疲れなのに、こんな場所に引き止めて... 相手のことを考えていないのは誰ですか?」

「うっ... で、ですが...」

「ランデル?」

「よ、用事を思い出しました！ 失礼します!」

どの世界も弟は姉に弱いらしく、ランデル王子は踵を返し去って行く。

その様子を見て、リリアーナ王女は白崎たちへ謝罪する。

「香織、光輝さん、弟が失礼しました。代わってお詫び致します」

「ううん、気にしてないよ、リリィ。ランデル殿下は気を使ってくれた

ただだよ」

「そうだな。なぜ、怒っていたのかわからないけど…何か失礼なことをしたんなら俺の方こそ謝らないと」

2人の回答に苦笑いするリリアーナ王女、姉として弟の恋心を応援したい部分はあるが、白崎の反応を見て同情してしまう。

「いえ光輝さん、ランデルのことは気にする必要ありません。あの子が少々暴走気味なだけです。それよりも…改めて、お帰りなさいませ、皆様。無事のご帰還、心から嬉しく思います」

花の咲いたような微笑みに、男子たちは顔を赤く染め見惚れてしまふ。

整った容姿に、王族としての気品や優雅さが合わさった笑みには、女子たちもうつつすらと頬を染めてしまふ。

「ありがとうリリイ。君の笑顔で疲れも吹っ飛んだよ。俺もまた君に会えて嬉しいよ」

それに対してキザな台詞と共に爽やかな笑顔を返す天之河。

下心の無い本心からの台詞に多くの女性は頬を染めるだろう。だが、

「ありがとうございます。お食事の準備も、清めの準備もできておりますから、ゆつくりお寛ぎください。帝国からの使者様が来られるには未だ数日は掛かりますから、お気になさらず」

特に慌てることもなく、微笑みながら天之河たちを促す。

特に気にすることなく歩いて行く一行の中、1人だけ、彼女の反応に心当たりがある人物がいた。

「まさか…」

「どうしたの？ 雫ちゃん」

「いえ…何でもないわ」

天之河のあの笑顔に、特に反応しない人には2つパターンがある。

1つは、自身や白崎のように彼の悪い部分を知っている人

そしてもう1つは、個人的には嬉しくないパターンだ

「多分…気のせいよね…」

八重樫は、あまり考えないようにした

23. 5星：クラスメイトside 帝国と勇者たち

【下弦】

それから三日後、遂に帝国の使者が訪れた。

現在、勇者一行、迷宮攻略に赴いたメンバーと王国の重鎮達、そしてイシユタル率いる司祭数人が謁見の間に勢ぞろいし、レッドカーペットの中央に帝国の使者が5人ほど立ったままエリヒド陛下と向かい合っていた。

「使者殿、よく参られた。勇者方の至上の武勇、存分に確かめられるがよからう」

「陛下、この度は急な訪問の願い、聞き入れて下さり誠に感謝いたします。して、どなたが勇者様なのでしょう？」

「うむ、まずは紹介させて頂こうか。光輝殿、前へ出てくれるか？」  
「はい」

陛下に促され、勇者である天之河が前へ出る。それに続くよう、メンバーたちの紹介が行われた。

それに対して使者は、彼らに対して疑いの眼差しを向けていた。

「ほう、貴方が勇者様ですか。随分とお若いですな。失礼ですが、本当に六十五層を突破したのです？ 確か、あそこにはベヒモスという化物が出るかと記憶しておりますが…」

「えっと、ではお話ししましょうか？ どのように倒したかとか、あつ、六十六層のマップを見せるとかどうでしょう？」

天之河は、信じてもらえるよう何個か提案をするがそれに対して使者は首を横に振る。

「いえ、お話は結構。それよりも手っ取り早い方法があります。私の護衛一人と模擬戦でもしてもらえませんか？ それで、勇者殿の実力も一目瞭然でしょう」

「えっと、俺は構いませんが…」

天之河が戸惑いながらではあるが了承したことにより急遽、勇者対



帝国使者の護衛の模擬戦が始まった。

「この戦い、光輝の負けね」

「え？何でそう思うのシズシズ？」

模擬戦が開始される前から天之河の負けを確信する八重樫に、疑問をぶつける谷口。天之河と対峙している使者の見た目は平凡で、構えもとらず大剣を無造作にぶら下げているだけでお世辞にも強そうとは思えない。

「あんな隙だらけで… すぐにやられそうだけど」

「まあ… 見ていたらすぐに分かるわ…」

そうして視線を天之河たちの方へ向けると、天之河は『縮地』を使い使者へと肉薄し剣を振り下ろしていた。だが、その剣は届くことはなく。使者の振り上げられた大剣により天之河は後方へ吹き飛ばされていた。

「え!?!何で!?!」

「あれは構えをワザと取らないことで攻撃を誘って、突っ込んできた相手にカウンターをぶつけるのよ」

「へえ… シズシズよく分かったね…」

「弓人がよく使ってたのよ… 光輝の奴、何度か食らったことあるのに忘れてたわね」

八重樫は呆れを含んだ視線を天之河へ向ける。彼はもう一度と言っているが、これが試合では無かったらこの時点で死んでいる。それに対して彼は無意識に避けていることに。

結局、本気になった彼でも使者には勝つことができず。イシユタルの障壁により模擬戦は終了した。そうすると、使者はおもむろに自身の右耳に付けていたイヤリングを外した。

すると、まるで霧が晴れるように使者の姿を変えてゆく。

そして、姿が変わりきった時には、周囲は喧騒に包まれた。

「ガ、ガハルト殿!?!」

「皇帝陛下!?!」

そう、ヘルシャー帝国現皇帝ガハルト・D・ヘルシャーその人だっ

たためだ。まさかの事態にエリヒド陛下が眉間を揉みほぐしながら尋ねた。

「どういとおつもりですか、ガハルド殿」

「これは、これはエリヒド殿。ろくな挨拶もせず済まなかった。ただな、どうせなら自分で確認した方が早いだろうと一芝居打たせてもらったのよ。今後の戦争に関わる重要なことだ。無礼は許して頂きたい」

「はあ… もう良い」

謝罪すると言いながら、全く反省の色がないガハルド皇帝。それに思わず溜息を吐くエリヒド陛下。

天之河は、完全に置いてけぼりになっている。

「まあ、勇者殿のお手並は大体分かった… それよりも」と、ガハルド皇帝は八重樫の方を向く。

「模擬戦が始まる際、其方だけが俺を油断しなかった。理由を聞いてもいいか？」

「… 皇帝陛下と同じような戦いをする人物を知っていたので」

「なるほどな… 其方、名は？」

「八重樫… 雫です」

「そうかそうか… 気に入った！雫！俺の愛人になれ！」

突然の告白に周囲は驚愕する。女子たちは八重樫の解答に興味津々なようだ。

そして、八重樫の解答は。

「お断りします。私には心に決めた人がいますので」

即答で断った。それに対してガハルド皇帝は周りの男子たちを見渡しこの中にいないと思いき問いかける。

「そいつは強いのか？」

「はい、誰よりも強くて誰よりも頼りになる人です」

断言する八重樫に、ガハルド皇帝は笑みを浮かべる。

「そいつは是非会ってみたい。今回は引こう、だが気が変わったらいつでも来な！俺はいつでも大歓迎だぜ！」

そう言い謁見の間から出て行くガハルド皇帝、天之河とすれ違う際

鼻で笑ったことで、天之河はこの男とは絶対に馬が合わないと感じ、しばらく不機嫌だった。

八重樫の溜息が増えたことは言うまでもない。

## 如月：峡谷の白兔 24星：谷にて跳ねる青兔

魔法陣からの輝きが視界を染め上げる。奈落の澱んだ空気からどこか新鮮な空気が変わった気がした。

やがて光が収まり、俺たちの目に映ったものは…

「……… なんてやねん」

「ま、そりやそうだな」

地上…ではなく洞窟だった。魔法陣の向こうは地上だと無条件に信じていたハジメは、代わり映えしない光景に思わず半眼になってツッコミを入れてなんとなく予想できていた俺はそこまでシヨックではなかった。

「… 秘密の通路は、隠されてるから秘密。だからハジメ… 落ち込まないで」

「でも… なんかなあ〜」

「気持ちとは分かんなくてもないが切り替えて行くぞ」

俺たちは洞窟の先へと進んでいく。道中に封印が施された扉や罠があつたがオルクスの指輪に反応し解除されてゆく。

暫く歩みを進めると、光が見えた。俺たちにとっては数ヶ月ぶり… ユエにとつては300年ぶりとなる陽の光だ。俺たちは逸る気持ちを抑えながら… しかし歩みを早めていく。

そして俺たちは、本当の意味で地上へと辿り着いた。

### 【ライセン大峡谷】

断崖の下はほとんど魔法が使えず、にもかかわらず多数の強力にして凶悪な魔物が生息することから。地上の人間にとつて、そこは地獄にして処刑場だ。

俺たちは、そのライセン大峡谷の谷底にある洞窟の入口にいた。それが地の底と言われているが太陽の光が降り注ぎ青空と白い雲が見

える地上には違いない。

「念願の地上だぜ、2人とも」

「……戻って来たんだな……」

「……………んっ」

2人は、ようやく実感が湧いたのか、太陽から視線を逸らすとお互い見つめ合い、そして思いつきり叫んだ。

「よっしゃああああ!! 戻ってきたぞ、この野郎おお!!」

「んー!!」

両手を突き上げ、歓喜する2人を微笑ましく見守っていると複数の反応が感知範囲に現れた。

感知した方向を見てみると、魔物の群れがこちらの方へと近づいてきていた。

ハジメたちも気づいたのか、魔物たちの方を見ている。

「全く無粋なヤツらだな……確かここって魔法使えないんだっけ？」

「……………分解される。でも力づくでいく」

2丁のリボルバーを取り出すハジメは、ユエに問いかける。座学でライセン大峡谷は魔法が使えないと学んでいたからだ。

それに対してユエは通常の10倍魔力を込めれば使えると答える。

そして臨戦態勢に移る2人に、俺は待ったをかけた。

「2人とも。あれ、俺1人でやらせてくれないか？」

「俺は構わないけど……なんでだ？」

「【ランクアップ】した際の体のズレを治しておきたくてな」

「……………ん、分かった」

2人から了承を得て、俺は弓矢とナイフを取り出す。

そして地を蹴った瞬間、群れの先頭にいた魔物の首が切り落とされた。

「やべっ……踏み込みすぎた」

本当は喉を切り裂くだけのつもりが、前に出過ぎたようだ。

突然、同胞の1匹が死んだことに魔物たちは呆然とする。そして、俺の方を見て気づいてしまった。

狩る側だと思っていた自身たちが狩られる側だったということに。

「お前らに恨みはないが…練習台になってくれ」  
「ここからは、一方的な蹂躪であった。」

弓矢とナイフをしまっている、2人が近づいてきた。

「体のズレは治ったか？」

「完全には治ってない。分かっていたけどここら辺の魔物は奈落の奴らに比べて弱くてな…」

「…ユミトが化け物」

「ひつでえ…あとは武器だな」

「…壊れた？」

「いんや、今の俺にはこのナイフはちよつと軽すぎてな…ハジメ、後で片手剣作ってくれないか？形状は任せる」

「了解、とりあえず移動するか」

ハジメは、右手の中指にはまっている『宝物庫』に魔力を注ぎ、魔力駆動二輪を2台取り出す。

「とりあえず行き先は？」

「ここは七大迷宮があると考えられる場所だ。とりあえず樹海側を探索しに行くか」

「…なんで樹海？」

「いや、峡谷抜けて、いきなり砂漠横断とか嫌だろ？ 樹海側なら、町にも近そうだし。」

「…確かに、後私はどっちに乗ればいい？」

俺とハジメ、どっちの後ろに乗れば良いか聞いたため、少し考え俺は口を開いた。

「ハジメの方に乗ってくれ」

「…ん」

「なんで俺の方なんだ？」

「俺はバイクに乗ったことないからユエを乗せて事故ったら洒落にならない」

「あゝ…」

こうしてハジメはユエを乗せ、俺は単独でバイクを走らせる。しば

らく走らせていると、それほど遠くない場所で魔物の咆哮が聞こえてきた。距離からしてもう30秒もしない内に会敵するだろう。

バイクを走らせ突き出した崖を回り込むと、双頭のテイラノサウルスが兎耳を生やした少女を襲っていた。

「ハジメ、ユエ、何だあれ？」

「…… 兎人族？」

「兎人族って谷底が住処だったりするの？」

「いや、図書館の本が正しかったら兎人族は樹海に住んでるはずだ」

「じゃあなんでこんな所に」

すると、少女は俺たちの存在に気付き助けを求めながら走ってきた。

「だずげでぐだぎ〜い！ひ〜！、死んじやう！死んじやうよお！だずけてえ〜、おねがいしますう〜！」

「…… とのことだが」

「うわ、モンスタートレインだよ。勘弁しろよな」

「お前ユエの時もそうだけど人の心ねえのか？」

「…… ハジメ、めっ！」

「ちっ…… 分かったよ……」

ハジメはドンナーを構え、2度引き金を引く。放たれた弾丸はテイラノの双頭を打ち抜く。頭を撃ち抜かれたテイラノは倒れ、その衝撃により少女は何故かハジメの方へと吹き飛んでゆく。

「きやああああー！う、受け止めてくださあああー！」

泣き腫らした顔で、手を伸ばす少女。それに対してハジメは

「いや…… ちよつと無理です……」

「ええー!？」

一瞬でバイクを後退させ少女を避けた。それにより少女は顔面を地面にぶつけ痛みで悶えている。

「…… ハジメ？」

「うっ…… いや…… あの……」

「ユエ、ハジメは女性経験が少ないせいでこういうことには慣れてないんだ」

「……なるほど、ハジメは照れ屋」

「やめろお！そんな目で俺を見るなあ！」

2人でハジメに優しい目を向けていると、痛みが治まったのか少女が起き上がりハジメへ近づいて行く。

「先程は助けて頂きありがとうございます！私は兎人族ハウリアの一人、シアといいますです！取り敢えず私の仲間も助けてください！」

「いや！ちよっ！近！」

少女は、豪胆な性格のようだ。



## 25星：兔少女の事情

「私を避けたお詫びとして家族を助けてください！」

峡谷に少女『シア・ハウリア』の声が響く。どうやら他にも仲間がいるようだ。ハジメが何度も振り解こうとしているが、掴んだ手を決して離そうとしていない。

「おま… ちよっ… 離せ！」

「嫌です！助けてくれるまで離しません！」

「この… 良い加減にしやがれ！」

「アバババババババ！」

シアに手を握られ、羞恥に耐えられなくなったハジメが『纏雷』を使った。

威力は調整してるがそれでも動けなくなる威力はある。しばらくして『纏雷』を解除すると、痙攣しながら崩れ落ちてゆく。

「たく… さっさと離せつてんだよ…」

「… ハジメ、顔赤い」

「そういえば、お前ケモミミ好きだったな」

「はあ!?お前なんで知って…」

ハジメが俺の暴露に対して問い詰めようとした瞬間、倒れていた彼女がゾンビの如く起き上がりハジメの脚にしがみついてきた。

「に、にがじませんよ」

「ええ… なんて動けんだよ…」

「… 怖い」

「ユエ、だからといってわざわざ俺の方に来て俺を盾にしないでくれ」  
「うう… 何ですか！さつきからちよっど酷すぎると思っています！断固抗議しますよ！お詫びに家族を助けて下さい！」

頬を膨らませながらハジメに詰め寄るシアに、ハジメはついに折れたようだ。

「分かった… 話は聞いてやるよ」

「ほ、本当ですか!?!」

「ああ… だから離れてくれ… 近い」

笑顔を向けるシアに、顔を逸らしながら離れるよう促すハジメ。思春期の彼には、彼女の肌面積の多い服装は少々過激なようだ。

「改めまして、私は兎人族ハウリアの長の娘シア・ハウリアと言います。実は…」

語り始めたシアの話を要約するところだ。

兎人族『ハウリア』は「ハルツィナ樹海」にて集落を作り暮らしていた。

本来魔力を持つことのない亜人族の中でシアは魔力と『未来視』という固有魔法を持って生まれた。

異端児として扱われる彼女を守るため、兎人族全体で存在を隠していたが、先日遂にバレてしまった。

このままでは処刑されてしまうため、一族総出で山脈へと向かった。

しかし、運悪く帝国兵に見つかってしまい全滅を避けるため峡谷へと逃げ込んだが、今度は魔物たちに襲われてしまい現在にいたる。

「… 気がつけば、六十人はいた家族も、今は四十人程しかいません。このままでは全滅です。どうか助けて下さい！」

「断る」

「即答ですか!? な、なんで!？」

「俺たちにメリットが無い。以上、行こうぜ2人とも」

「いや、メリットはあるぞ。なつ、ユエ」

「……ん、樹海の案内を頼める」

「あく… なるほどなあ…」

樹海は、亜人族以外では必ず迷うと言われている。亜人族を脅して案内させるという手もありはするが、あまり使いたく無いため、協力を仰げるならそれに越したことはない。ただし、彼女たちを助けるということは帝国兵と敵対するという厄介事を抱えているため逡巡するハジメ。

するとユエは、真っ直ぐな視線を向けハジメに告げる。

「……大丈夫、私達は最強」

これは、地上に出る時に俺が言ったセリフだ。互いに守り合えばどんな敵にも負けはしないと、それを聞いたハジメは笑みを零す。

「だな。おい、喜べ残念ウサギ。お前達を樹海の案内に雇わせてもらう。報酬はお前等の命だ」

「ほ、本当ですか!?ありがとうございます!うう、よがっだよお、ほんどによがったよお」

家族たちが助かると知り、嬉し泣きするシア。しかし、仲間のためにもグズグズしてられないと直ぐに立ち上がる。

「あ、あの、宜しくお願いします!。そ、それで皆さんのことは何と呼べば……」

「ん?そう言えば名乗ってなかったか…。俺はハジメ。南雲ハジメだ」

「んで、俺の名前は弓人。三星弓人だ」

「……ユエ」

「ハジメさんとユミトさんにユエちゃんですね」

3人の名前を何度か反芻し覚えるシア。しかし、ユエが不満顔で抗議する。

「……私、年上」

「ふえ!」

ユエの外見から年下と誤っているらしく、ユエが吸血鬼族で遥に年上と知ると土下座する勢いで謝罪した。ユエはそこまで気にしていなかったらしく、ただ彼女の勘違いを指摘しておきたかったらしい。

「とりあえず、さっさと行こうぜ」

「あの…できたら…ハジメさんの後ろが良いなうって…」

「ん?良いぞ。じゃあユエは俺の方な」

「……ん、お願い」

「ま、待て!俺はまだ良いって…」

「あの…やっぱり迷惑でしたか…?」

「……!…分かったよ…んじゃ後ろに乗ってくれ」

こうして、シアを乗せてハウリアたちの元へとバイクを走らせてい

く。

その際、シアはこのバイクやハジメの武器について質問し、ハジメは簡素ではあるが1つ1つ答えていく。

「え、それじゃあ、皆さんも魔力を直接操れたり、固有魔法が使えると...」

「ああ、そうなるな」

「.....ん」

「俺は... ちょっと違うがそんなもんだと思ってくれ」

しばらく呆然としていたシアだったが、突然、何かを堪える様にハジメの肩に顔を埋めた。そして、涙をこぼす。

「... いきなり何だ？ 騒いだり落ち込んだり泣きべそかいたり... 情緒不安定なヤツだな」

「.....大丈夫？」

「大丈夫です... ただ、一人じゃなかったんだなっと思ったら... 何だか嬉しくなっちゃって...」

シアの言葉に、ユエは思うところがあるのか考え込むように押し黙ってしまった。表情は見えないが、俺にしがみついた力が強まった気がした。おそらく、ユエは自分とシアの境遇を重ねているのだろう。

俺は、しがみついているユエの手に、自身の左手を重ねた。

「大丈夫だ、ユエには俺たちがいる」

「..... ユミト... ありがとう」

「気にすんな。仲間だろ？」

「.....ん」

ユエの強張りが解けたような気がした。そうして暫くシアの案内でバイクを走らせると、遠くで魔物の咆哮が聞こえた。どうやら相当な数の魔物が騒いでいるようだ。

「ハジメさん！ もう直ぐ皆がいる場所です！ あの魔物の声... ち、近いです！ 父様達がいる場所に近いです！」

「だあ、耳元で怒鳴るな！ 聞こえてるわ！ 飛ばすからしっかり掴まってる！」

「ユエ！ 俺たちの方も飛ばすぞ！」

「……ん！」

そうして走ることに2分。ドリフトしながら最後の大岩を迂回した先には、今まさに襲われようとしている数十人の兎人族達があった。

## 26星：帝国兵とそつち側

「この度は助けていただき誠にありがとうございます。私はハウリアの族長をしております、カムと申します。」

そう言つて、カムを筆頭にハウリア族は深々と頭を下げた。

彼らは、『ハイベリア』と呼ばれるワイバーンに襲われていたが幸運にも俺たちが来る間に犠牲者は出なかつたようだ。

「礼は受け取つておく。だが、樹海の案内と引き換えなんだ。それは忘れるなよ？それより、随分あっさり信用するんだな。亜人は人間族にはいい感情を持つていないだろうに…。」

「シアが信頼する相手です。ならば我らも信頼しなくてどうします。我らは家族なのですから…。」

その言葉に俺は感心するが少し呆れてしまう。シアのために一族全員で故郷に出るほど情が深いのは聞いていたが、初対面の人間族相手にあっさり信頼を向けるとは考えが甘すぎる。そんなことを考えながら俺たちは樹海へと向かつていく。

一行は、階段に差し掛かった。ハジメを先頭に順調に登つていく。するとシアが不安そうに話しかけてくる。

「帝国兵はまだいるでしょうか？」

「ん？どうだろうな。もう全滅したと諦めて帰つてる可能性も高いが…。」

「そ、その、もし、まだ帝国兵がいたら… ハジメさんとユミトさん… どうするのですか？..」

「どうするつて何が？..」

質問の意図がわからず首を傾げるハジメに、意を決したようにシアが尋ねる。俺は何も答えない。

「今まで倒した魔物と違って、相手は帝国兵… 人間族です。おふたりと同じ… なので」

「お前、未来が見えていたんじゃないのか？」

「はい、見ました。帝国兵と相對するおふたりを…」

「だったら…何が疑問なんだ？」

「疑問というより確認です。帝国兵から私達を守るということは、人間族と敵對することと言つても過言じゃありません。同族と敵對しても本当にいいのかと…」

「問題ない」

2人の会話に、俺は割り込んだ。2人が俺の方を向く。

「この仕事を受けた時点で、想定はしていた…だから問題ない」

淡々と話す俺に2人は何も言わない。いや、おそらく言えないのだろう。

今の俺は、ひどく冷たい顔をしているはずだ。

そして、遂に階段を上りきり、ハジメ達はライセン大峽谷からの脱出を果たす。

登りきった崖の上、そこには……

「おいおい、マジかよ。生き残つてやがったのか。隊長の命令だから仕方なく残つただけなんだがなあ〜こりやあ、いい土産ができそうだ」

三十人の帝国兵がたむろしていた。周りには大型の馬車数台と、野營跡が残っている。全員が軍服らしき衣服を纏つており、劍や槍、盾を携えており、俺たちを見るなり驚いた表情を見せた。

だが、それも一瞬のこと。直ぐに喜色を浮かべ、品定めでもするように兎人族を見渡した。

「小隊長！白髪の兎人もいますよ！隊長が欲しがってましたよね？」

「おお、ますますツイテルな。年寄りには別にいいが、あれは絶対殺すなよ？」

「小隊長お〜、女も結構いますし、ちよつとくらい味見してもいいつすよねえ？ こちとら、何もなくて3日も待たされたんだ。役得の1つや2つ大目に見てくださいいよお〜」

「ったく。全部はやめとけ。2、3人なら好きにしろ」

「ひやつほ〜、流石、小隊長！話がわかる！」

帝国兵は、兎人族達を完全に獲物としてしか見ていないのか戦闘態勢をとる事もなく、下卑た笑みを浮かべ舐めるような視線を兎人族の女性達に向けている。兎人族は、その視線にただ怯えて震えるばかりだ。

帝国兵達が好き勝手に騒いでいると、兎人族にニヤついた笑みを浮かべていた小隊長と呼ばれた男が、ようやく俺たちの存在に気がついた。

「ああ？お前誰だ？兎人族…じゃあねえよな？」

「ああ、人間だ」

俺が口を開くより先に、ハジメが帝国兵に答える。

「はあ？…なんで人間が兎人族と一緒にいるんだ？しかも峡谷から。ああ、もしかして奴隷商か？情報掴んで追っかけたとか？そいつあまた商売魂がたくましいねえ。まあ、いいや。そいつら皆、国で引き取るから置いていけ」

勝手に推測し、勝手に結論づけた小隊長は、ハジメに命令した。

「断る」

それに対して、一蹴するハジメ。

「…今、何て言った？」

「断ると言ったんだ。こいつらは今は俺たちのもんだ。あんたらには1人として渡すつもりはない。諦めてさっさと国に帰ることをオススメする」

「小僧、口の利き方には気をつけろ。俺達が誰かわからないほど頭が悪いのか？」

表情を消す帝国兵、だがハジメの後ろを見て下卑た笑みを浮かべる。背後のユエに気付いたのだろう。

「ああなるほど、よおしくわかった。てめえらが唯の世間知らずの糞ガキだつてことがな。ちよいと世の中の厳しさつてヤツを教えてやる。てめえらの四肢を切り落とした後、後ろの嬢ちゃんを目の前で犯して、奴隷商に売っぱらってやるよ」

「つまり敵つてことでもいいよな？」

「ああ!?まだ状況が理解できてねえのか!てめえは、震えながら許し



をこッ!」

最後通告を無視し、襲い掛かる帝国兵にハジメはドンナーを取り出し引き金を引く…

前に帝国兵の首が飛んだ。

「…………… なんのつもりだ、弓人」

「……………」

ハジメの言葉が無視して、血の滴るナイフを持ったまま前が出る。相変わらず、この感触には慣れそうにない。

どうやら帝国兵たちは、今だになにが起こったのかわからないらしい。いきなり隊長の首が飛んだことに、混乱しているようだ。

俺は淡々と、弓矢を取り出し帝国兵5人の顔を射抜く。

ようやく状況を理解した帝国兵たちが、臨戦態勢に入る。

数分後、そこには惨状が作られていた。

「ひい、く、来るなあ!いい、嫌だ。し、死にたくない。だ、誰か!助けてくれ!」

唯一生き残った帝国兵は、その顔を恐怖で歪ませ命乞いをしながら這いずるように後退る。

俺はそいつの首を掴み持ち上げる。

「答えろ、他の兎人族はどこへやった?」

「…………… は…………… 話すから…………… 助けて……………」

「質問に答えろ」

「ぐえ…………… 多分…………… 全部移送済みだと思う…………… 人数は絞ったから……………」

『人数は絞った』つまりそういうことだろう。俺は掴む力を強める。

「ま…………… 待って…………… なんでもする…………… 助け……………」

ドパアンツ!

俺が首をへし折るより先に、兵士の頭が吹き飛ぶ。何度か痙攣をした後、動かなくなった。

「…………… ハジメ」

『『なんで』とか聞くなよ?そっち側に行くなら俺も一緒だ』

「……………」

息を呑む兎人族達。俺たちの行動に完全に引いているようである。その瞳には若干の恐怖が宿っていた。それはシアも同じだったのか、おずおずと俺に尋ねた。

「あ、あのさっきの人は見逃してあげても良かったのでは……」

「仮に見逃すと今回以上の兵を連れて来る」

「…… それに、剣を抜いた者が、結果、相手の方が強かったからと言っただけ見逃してもらおうなんて都合が良すぎ」

「そ、それは……」

「…… そもそも、守られているだけのあなた達がそんな目を2人に向けないで」

ユエは静かに怒っているようだ。守られておきながら、弓人とハジメに向ける視線に負の感情を宿すなど許さないと言わんばかりである。当然といえば当然なので、兎人族達もバツが悪そうな表情をしている。

「ふむ、お二方、申し訳ない。別に、貴方に含むところがあるわけではないのだ。ただ、こういう争いに我らは慣れておらんので……少々、驚いただけなのだ」

「ユミトさん…… ハジメさん…… すみません」

シアとカムが代表して謝罪するが、俺は気にしてないという様に手をヒラヒラと振る。

ハジメは、無傷の馬車や馬のところへ行き、兎人族達を手招きする。樹海まで徒歩で半日くらいかかりそうなので、せっかくの馬と馬車を有効活用し、魔力駆動二輪を『宝物庫』から取り出し馬車に連結させる。馬に乗る者と分けて一行は樹海へと進路をとった。

無残な帝国兵の死体はユエが風の魔法で吹き飛ばし谷底に落とした。後にはただ、彼等が零した血だまりだけが残された。

## 27星：ハルツイナ樹海【上弦】

七大迷宮の一つにして、深部に亜人族の国フェアベルゲンを抱える【ハルツイナ樹海】を前方に見据え一行はそれなりに早いペースで進んでいた。

馬車のうち、バイクに牽引させているものにはハジメが、馬に引かせているものは兎人族が走らせている。

俺は、馬車から少し後方の位置でバイクを走らせている。

「……ユミト……大丈夫？」

「……」

俺の後ろに乗っていたユエが心配そうに尋ねる。ハジメの方に行くように言ったのだが離れようとしぬい。

恐らく、帝国兵を殺したことに参っていると思っっているのだろう。

「……本当は、ハジメに人殺しをして欲しくなかった」

「……ん」

「俺とは違って、あいつの手は汚れてなかった……」

「……ん」

「だから……俺みたいな人の形をした『ナニカ』になって欲しくないんだ……」

「……大丈夫」

そう言っユエは後ろから抱きつくように腕を俺の首に回す。

そして、優しく話しかけてくる。

「……ユミトはそんなのじゃないよ。だって……とっても優しいから」

「俺は……そんなでできた人間じゃない」

「……ユミトは私を助けてくれた」

「けど最初は損得感情からだ……それに封印を解いたのはハジメだ」

「……けど、ユミトがいなかったら助からなかったかもしれない」

「それはねえよ……なんだかんだハジメは助けた」

「……それでも、私はユミトに救われた。それはきつと……ハジメ

も同じ」

ユエの抱きつく力が強まり、声が震えている。

表情は見えないが、恐らく涙を流しているのだろう。

「……だから……自分を悪くいうのはやめて……」

「ユエ……」

「……ハジメだけじゃない……ユミトもそっち側に行っていないよ……」

「ありがとう……」

俺とユエはそれ以降言葉を交わさなかった。けれど、俺の心は軽くなった。

—————

そして、俺たちは「ハルツイナ樹海」と平原の境界に到着した。

バイクから降りてハジメの所に近づくと、そこには涙を流しているシアと溜息を吐いているハジメがいた。

「……何があつたんだ？お前ら……」

「いや……まあ俺らのこと知りたいって言うから身の上話をしてたら……」

「うえ、ぐすつ……ひどい、ひどすぎますう〜」

「ああ……なるほどな」

「……よしよし」

「ユエさくん……うえくん」

「あ、あの皆様……そろそろ案内をしたいのですが……」

そんなこともありながら、俺たちは樹海へと足を踏み入れた。

しばらく、道なき道を進む。道中魔物が襲ってきたが、奈落の魔物に比べたら格段に弱い。おそらく「オルクス大迷宮」と同じく、この先に本当の迷宮があるのだろう。

樹海に入つて数時間が過ぎた頃、今までにない無数の気配に囲まれた。数も殺気も、今までの魔物とは比べ物にならない。

兎人族たちは、何かを掴んだのか苦虫を噛み潰したような表情を見せた。シアに至っては、その顔を青ざめさせている。

その正体は……

「お前達… 何故人間という！種族と族名を名乗れ！」

虎の亜人であった。樹海の中で人間族と亜人族が共に歩いているという普通では考えられない場面を見て、その顔を怒りに染め上げている。

他にも、姿は見せないが周囲にも数十人の亜人が殺気を滾らせながら包囲網を敷いているようだ。

「あ、あの私達は…」

カムが弁明しようと口を開くが、虎の亜人の視線がシアを捉え、その眼が大きく見開かれる。

「白い髪の兎人族… 貴様ら… 報告のあったハウリア族か… 亜人族の面汚し共め！長年、同胞を騙し続け、忌み子を匿うだけでなく、今度は人間族を招き入れるとは！反逆罪だ！もはや弁明など聞く必要もない！全員この場で処刑する！ 総員かつ！」

ドパンツ!!

虎の亜人が問答無用で攻撃命令を下そうとしたその瞬間、乾いた破裂音と共に、弾丸が背後の樹を抉り飛ばし樹海の奥へと消えていった。

「今の攻撃は、一瞬で数十発単位で連射出来る。隣にいるこいつも、弓で同じようなことができるし、周囲を囲んでいるヤツらも全て把握している。お前等がいる場所は、既に俺たちのキルゾーンだ」

『威圧』と共に警告するハジメ、見たことのない武器に虎の亜人たちは一歩も動けない。

「戦うというなら容赦はしない、だがこの場を引くというのなら追いつかない。選べ、戦って全滅か、このまま撤退するか」

「… その前に、一つ聞きたい… 何が目的だ」

それは、一種の覚悟の表れだ。俺たちの理由によっては死ぬとしても戦うことを選ぶのだろう。『威圧』しているハジメの代わりに、俺が質問に答える。

「樹海の深部、大樹の下へ行きたい」

「大樹の下へ… だと？何のために？」

「そこに、本当の大迷宮への入口があるかもしれない。俺たちは七大

「迷宮の攻略を目指して旅をしている」

「本当の迷宮？ 何を言っている？ 七大迷宮は樹海そのものだ。一度踏み込んだが最後、亜人以外には決して進むことも帰る事も叶わない天然の迷宮だ」

「いや、それはおかしい。それにしてもこの魔物は弱すぎる」「弱い？」

断言する俺に、訝しげな表情を浮かべる虎の亜人。

「大迷宮の魔物ってのは、どいつもこいつも化物揃いだ。少なくとも【オルクス大迷宮】の奈落はそうだった。それに…」

「なんだ？」

「大迷宮というのは、『解放者』達が残した試練だ。亜人族は簡単に深部へ行けるんだろ？ それだと試練になってない。だから、樹海自体が大迷宮ってのはおかしいと思ってるな」

「……」

俺の話を聞き終わり、虎の亜人は困惑の表情を浮かべていた。恐らく、自身の知っている内容と異なることが信じられないのであろう。

しかし、俺たちの言ったことも戯言だと切り捨てられない。優位に立っている俺たちが出鱈目を言う必要がないことを理解しているからだ。

しばらく沈黙が続いた後、虎の亜人が口を開いた。

「… お前が、国や同胞に危害を加えないというなら、大樹の下へ行くくらいは構わないと、俺は判断する。だが、一警備隊長の私ごときが独断で下していい判断ではない。本国に指示を仰ぎたい… 長老なら… 何か知ってるかもしれない」

「さっきの言葉、曲解せずにちゃんと伝えてくれよ？」

「無論だ。ザム！ 聞こえていたな！ 長老方に余さず伝えろ！」

「了解！」

「じゃあ… ハジメも『威圧』解いてくれ」

「分かった」

しばらく待っていると、霧の奥から数人の新たな亜人達が現れた。「私は、アルフレリック・ハイピスト。フェアベルゲンの長老の座を一

つ預からせてもらっている。さて、お前さんの要求は聞いているのだが……その前に聞かせてもらいたい。『解放者』とは何処で知った？」  
「どうやら、すんなりと事が運びそうにはなさそうだ。」

## 28星：ハルツイナ樹海【下弦】

「なるほど… 確かに、お前さんたちはオスカー・オルクスの隠れ家にとどり着いたようだ。他にも色々気になるところはあるが… よからう。ハウリアと共に来るがいい。私の名で滞在を許そう。」

俺たちは、証拠としてオスカー・オルクスの住処にあった指輪を見せたことで一応は納得してもらい、アルフレリックは俺たちを案内しようとする。

だが俺たちは直接大樹の元へと行くつもりだったため断つたのだが、大樹の周辺は一定の周期を除いて濃霧に覆われているため亜人族でも迷ってしまうらしい。そして、次の霧が薄くなる日は10日後らしい。

「おい… お前らどういうことだ？」

「…………… あっ」

「忘れてたんかい…」

そして忘れていた責任をシアにも押し付けようとするカム。それから逃げようとするシア。それとなく責任逃れしようとする兎人族の、実に醜い言い争いが始まった。

「ユエ」

「……………ん」

「まっ、待ってください、ユエさん！やるなら父様だけを！」

「はっはっは、何時までも皆一緒だ！」

「父様は黙っててください！ユ、ユミトさんからも何か言ってくださいー！」

「すまん、流石に無理」

「そ… そんな〜！」

ユエの『嵐帝』により、天高く舞い上がる兎人族に、敵対していた虎の亜人たちがアルフレリックと共にきた亜人族たちですら、彼らを何か可哀想なものを見る目で見ていた。



「なるほど。試練に神代魔法、それに神の盤上か…」

俺たちは、アルフレリックに案内された部屋でオスカー・オルクスが話した内容や、迷宮を攻略した際に神代魔法を手に入れたことについて話した。

そして、彼からは長老に言い伝えられていたことを聞いた。

それは、この樹海の地に七大迷宮を示す紋章を持つ者が現れたらそれがどのような者であれ敵対しないこと、そして、その者を気に入つたのなら望む場所に連れて行くことという何とも抽象的な口伝だった。

どちらにしろ話を詰める必要があるため。情報のすり合わせをしていると、突如部屋の扉が蹴り破られた。

「アルフレリック！貴様…人間と兎人族を連れてくるとはどういうつもりだ！」

熊の亜人がその顔を怒りに染め上げ、アルフレリックに詰め寄る。それに対して、アルフレリックはどこまでも淡々と返す。

「なに、口伝に従ったまでだ。お前達も各種族の長老の座にあるのだ。事情は理解できるはずだが？」

「なら、こんな人間族の小僧共が資格者だとも言うのか！敵対してはならない強者だど！」  
「そうだ」

熊の亜人は信じられないものを見るように俺たちを睨みつける。そして、拳を振り上げて襲いかかってきた。

「ならば！この場で試してやろう！」

「ハジメ、俺がやる」

「やりすぎんなよ」

「安心しろ、お前じゃあるまいし」

丸太のような太い剛腕が振るわれる。止めるよう叫ぶアルフレリックやハウリア以外の亜人族が悲鳴をあげる。

熊の亜人の拳が、俺の胸部へ直撃した。

「で…満足か？」

「な!？」

「お前には悪いが、ちよつと寝ててくれ」

ありえないものを見る熊の亜人の下顎を拳で掠める。すると、糸の切れた人形のように熊の亜人は崩れ落ちた。

「貴様!ジンに何をした!？」

「安心しろ、脳を揺らして気絶させた。しばらくしたら起きる」

「…で、他に来る相手はいるか?」

ハジメの問いに、答えられるものは1人もいなかった。

現在、当代の長老衆である虎人族のゼル、翼人族のマオ、狐人族のルア、土人族のグゼ、そして森人族のアルフレリックが俺たちと向かい合うように席に着いている。熊の亜人のジンは、起きる気配がないため今回は参加していない。

長老衆の表情は、アルフレリックを除いて緊張感で強ばっていた。戦闘力では1、2を争う手練だったジンが、一撃で沈んでいる場面を見たためだ。

「で?あんなたちは俺たちをどうしたいんだ?俺たちは大樹の下へ行きたいだけだ。邪魔しなければ敵対することもない… 亜人族としての意思を統一してくれ」

「こちらの仲間を再起不能にしておいて、第一声がそれか… それで友好的になれるとでも?」

グゼが俺を睨みつけながらそう呟いた。

「あいつがいたら話が進まないと思つてな。すまないとは思つている」

「き、貴様!ジンはな!いつも国のことを思つて!」

「だからと言って問答無用で殺しにきて良い理由にはならない… 相手が弓人で良かったな、俺が相手にしてたら再起不能にはしてたはずだ」

「そ、それは!しかし!」

「グゼ、気持ちはわかるが、そのくらいにしておけ。彼らの言い分は正論だ」

アルフレリックが諫め、グゼは音を立てて席へと座った。

「確かに、この少年たちは、紋章の一つを所持しているし、その実力も大迷宮を突破したと言うだけのことはあるね。僕は、彼らを口伝の資格者と認めるよ」

狐人族のルアが認めたことを皮切りに、翼人族のマオ、虎人族のゼルも思うところがあるが、同意を示した。

「南雲ハジメ、三星弓人。我らフェアベルゲンの長老衆は、お前さんたちを口伝の資格者として認める。故に、お前さんたちと敵対はしないように伝える…。しかし…。」

「絶対じゃない…。か?」

「ああ。知つての通り、亜人族は人間族をよく思っていない者が多い。血気盛んな者達は、長老会議の通達を無視する可能性を否定できない。」

「つまり、さつき俺がやったみたいに手加減しろと?」

「そうだ。お前さんたちの実力なら可能だろう?」

「俺が弓人のようにやることは可能か不可能かと言えば可能だ…。けど俺は殺してくる相手に手加減をするつもりはない」

「ならば我々は、大樹の下への案内を拒否させてもらう。口伝にも気に入らない相手を案内する必要はないとあるからな」

ハジメの解答に異を唱えたのは、虎人族のゼルだった。

「ハウリア族に案内してもらえないとは思わないことだ。そいつらは既に長老会議で処刑処分が下っている」

「な!?!…。長老様方!どうか一族だけはご寛恕を!」

「シア!止めなさい!ハウリアのみんなで何度も話し合つて決めたのだ、覚悟は出来ている。お前が気に病む必要はない」

「でも、父様!」

瞳に涙を浮かべ、何度も懇願するシア。しかし、ゼルの解答は無慈悲なものであった。

「既に決定したことだ。ハウリア族は全員処刑する。というわけだ、これで、貴様が大樹に行く方法は途絶えたわけだがどうする?運良くたどり着く可能性に賭けてみるか?」

「お前、アホだろ?」

「な、なんだと!」

ハジメの解答に、考えがわかっているユエと俺以外が驚愕の表情を浮かべる。

そして、ハジメは泣いているシアの頭に手を乗せ言葉を続ける。

「俺は、お前らの事情なんて関係ないって言ったんだ。俺からこいつらを奪うってことは、結局、俺の行く道を阻んでいるのと変わらないだろうが。お前ら……そのつもりなら覚悟を決めろよ」

「ハ……ハジメさん……」

アルフレリックが誤魔化しは許さないとばかりに鋭い眼光でハジメを射貫く。

「本気かね?」

「当然だ」

「フェアベルゲンから案内を出すと言っても?」

「何度も言わせるな。俺の案内人はハウリアだ」

「なぜ、彼等にこだわる。大樹に行きたいだけなら案内人は誰でもよかろう」

「……約束……したからな、案内を条件に助かるって。それを途中でいい条件が出てきたからって、ポイ捨てして鞍替えなんざ……」

そう言っただけでハジメは、一度シアに顔を向ける。そして、どこか照れ臭そうに口にした。

「……格好悪いだろ」

ハジメに引く気がないと悟ったのか、アルフレリックが深々と溜息を吐く。そして、妥協案……よりも屁理屈に近いものを提案した。

「ならば、お前さんの奴隷ということにでもしておこう。フェアベルゲンの掟では、樹海の外に出て帰ってこなかった者、奴隷として捕まったことが確定した者は、死んだものとして扱う……既に死亡と見なしたものを処刑はできまい」

「アルフレリック!それでは!」

「ゼル。わかっているだろう。この少年が引かないことを、ハウリア族を処刑すれば、確実に敵対することになる。その場合、どれだけの犠牲が出るか……長老の一人として、そのような危険は断じて犯せ

ん」

「ぐっ……」

アルフレリックの言葉に、反論することができずゼルは黙ってしま  
う。

アルフレリックはハジメの方へと顔を向ける。

「というわけだ、口伝の資格者を歓迎できぬのは心苦しいが……」

「気にするな。正直無茶苦茶を言ってるのは自覚している……けど、  
全部譲れないんだ」

「んじや、邪魔者たちは退散させてもらおうよ。行こうぜ、ユエ」

「……ん」

こうして部屋から出て行こうとする俺たち、シアたちは状況を理解  
し切れていないのか呆然としている。

「おい、何時まで呆けているんだ？ さっさと行くぞ」

「え…… あ、はいー！」

ハジメの言葉に、ようやく我を取り戻したのか慌てて立ち上がり、  
さっさと出て行く俺たちを追うシア達。アルフレリック達も、俺たち  
を門まで送るようだ。

シアが、困惑しながらハジメに尋ねた。

「あ、あの、私達……死ななくていいんですか？」

「さっきの話聞いてなかったのか？」

「い、いえ……聞いてはいましたが……その、何だかトントントン拍子で窮  
地を脱してしまったので実感が湧かないといえますか……信じられ  
ない状況といえますか……」

周りのハウリア族も同様なのか困惑したような表情だ。それだけ、  
長老会議の決定というのは亜人にとって絶対的なものなのだろう。  
どう処理していいのか分からず困惑するシアにユエが優しく話しか  
けた。

「…… 大丈夫」

「ユエさん？」

「…… シアたちはハジメに救われた。だから喜べばいい」  
「……」

「…… よしよし」

背伸びをしながら手を伸ばしシアの頭を撫でるユエ。シアは、ハジメに視線を向ける。ハジメは頬をかきながら明後日の方向を向く。

「まあ…… 約束…… だからな」

「ツ…… ハジメさくん！ ありがとうございませう〜！」

「うわあ！ だ…… 抱きつくなあ〜！」

喜びを爆発させハジメにじゃれつくシアの姿に、ハウリア族の皆もようやく命拾いしたことを実感したのか、隣同士で喜びを分かち合っている。

それを複雑そうな表情で見つめている長老衆。そして、更に遠巻きに不快感や憎悪の視線を向けている者達も多くいる。

俺はその全てを見ながら、ここを出てもしばらくは面倒事に巻き込まれそうだとため息を吐いた。

## 29星：覚悟の引き金

「ああ、どうか罪深い私を許してくれえ〜」

「ごめんなさい！ごめんなさい！それでも私はやるしかないのお！」

「ふっ、これが刃を向けた私への罰というわけか… 当然の結果だな…」

「族長！そんなこと言わないで下さい！罪深いのは皆一緒です！」

何故、このような寸劇が繰り広げられているかというところ。フェアベルゲンを出て、大樹に近い場所に仮拠点を作った際、ハジメがハウリアの戦闘訓練を行うことを提案した。

霧が薄まるまでの10日間に、俺たちがいなくなつた後も問題ないようにするために目的だ。そして彼らも強くなりたいため、シアはユエに、残りは俺たち指導の訓練が行われた。

そして、2日目が経過してこの様である。

「なあ… そろそろキレてもいいか？」

「ま、こんなことになる気がしてたけどな」

ハウリア達は、良く言えば優しく、悪く言えば甘い。

魔物1匹殺すだけで、まるで最愛の者を殺めたような反応をする。

そして、妙な動きをするため、注意深く見ていると花や虫を踏まないように細心の注意を払って動いていた。

そのため、最初はため息で済んでいたハジメも、今は堪忍袋の尾が切れそうな状態へとなっている。

「… ハジメ、ちよつと向こうで頭冷やしてきな」

「… 分かった。弓人はどうすんだよ？」

「ちよつとあいつらと話してくるわ… 後ドンナー貸してくれ、弾を込めた状態だな」

「お前… 何するつもりだ？」

「安心しろ、変なようには使わないさ」

どこか訝しげな視線を向けてくるが、ドンナーを渡してくれ、この場から離れていく。

俺はドンナーを持ったまま寸劇を繰り広げているハウリアたちの方へと近づく。

「お前ら、全員集合」

「ユミト殿？いかがされましたか？」

カムを筆頭に、ハウリア全員が近づいていく。そして俺は彼らに質問をした。

「正直に答えてくれ。命を奪うことに迷っているか？」

「いえ…その…はい、魔物を殺すときに…『可哀想』だと思つてしまいます」

カムの答えに、他のハウリアたちも同意する。

「まあ…だろいな。『優しい』それがお前たちの美点なんだと思う…けどな、それをどんな時でも振り撒くつもりか？」

俺の言葉に、誰も答えられない。俺は構わずに話し続ける。

「こいつが分かるか？」

「それは…ハジメ殿の…」

「そう、ハジメが使っている武器だ、ここん所を指で引くだけでドパンツ！」

乾いた音と共に、俺の横にあった木がへし折られる。

「こんな風に、簡単に命を奪える威力の弾が出る」

「はい…でもそれが…？」

「例えばカム、シアが他の亜人族に殺されそうになった時、手元にこいつがあったら引き金を引けるか？」

「な!？」

「一瞬でも躊躇ったら殺される場合、お前は迷わず殺せるか？」

そう言つて、カムに無理矢理ドンナーを持たせる。カムは顔を青くしドンナーを持つ手を震わせる。その状況に耐えられなくなった兎人族の1人が声を上げる。

「ユ…ユミトさん！いくらなんでも…」

「俺たちは何も殺しを楽しめって言ってるんじゃない。そんな事をしたらあの帝国兵たちと同じだ…けどな、仲間や家族の命か、相手の命かで迷つてる時点で論外なんだよ」



「お前らが魔物に可哀想だと思ったり、殺した事に後悔するのはお前らの勝手だ。けどな、その勝手で助けることができた仲間や家族を見殺しにするな」

そう言っただけ俺はドンナーを奪い取ると踵を返す。

「30分やる。その間にどうするか話し合っただけで決めろ」

「どうするかって… いったい…」

「覚悟を決めて訓練するか、それとも訓練をやめるかだ」

「や、やめるって!?!」

「このまま訓練したって、その時が来たらお前たちは必ず見殺しにする。それなら訓練をする意味がない」

俺はハジメの行った先へ歩いてゆく。その場には呆然とするハウリアたちと俯いて黙ったままのカムが取り残された。

「ハジメ、落ち着いたか?」

「ああ… まあな」

しばらく歩いた先に、倒木に腰掛けているハジメを見つけた。俺はドンナーを返すと、ハジメの正面に生えている木に寄りかかる。

「ドンナーの発砲音が聞こえたけど、何したんだ?」

「… あいつらの覚悟がどれくらいか聞いた」

「ふうん… で?」

「論外だ… 30分後再び聞いて覚悟ができてなかったら… まあ…」

「… そうか」

しばらく沈黙が続く、するとハジメからゆっくりと話しかけてきた。

「ユエから聞いたよ… 弓人… お前」

「ああ… 俺は前世… 人を殺した」

「… 理由を聞いても?」

「オラリオには… 『闇派閥』イザイルス って言うテロリストみたいな奴らがい… 仲間と、知人が所属しているファミリアがそいつらに襲われ

た」

「その時にか…」

「…少しでも躊躇ったら殺されていた…後悔はしていないさ」  
ハジメはそれ以降何も聞かない。あの時のことをあまり思い出し  
たくない俺にとって、それがありがたかった。

10分ほど経っただろうか、俺たちが来た道の方から複数の足音が  
聞こえていた。その方向を見ると、ユエと特訓中のシアを除いたハウ  
リア全員がいた。

「…30分には早いと思うが？」

「話し合って…シアを除いた全員で決めました」

「そうか…お前らの答えは？」

「改めて…我々を鍛えて下さい！」

「…お願いします！」

「覚悟は決まったのか？」

「正直…最初はハジメ殿に言われたから…と言う部分がありまし  
た…ですが！この答えは我々が選んだ選択です！」

「そうか…」

彼らの瞳には固い決意が宿っている。恐らく、さっきのような事には  
ならないだろう。

「良いだろう、けどこれからの訓練は今までのような甘いもんじゃな  
い…これはお前たちが選んだ道だ。覚悟を決めろ」

「…はい!!!」

こうして、真の意味でハウリアたちの特訓が始まった。

### 30星：生まれ変わったハウリア【上弦】

樹海に凄まじい破壊音が響く。野太い樹が幾本も折られ、地面にはクレーターがあちこちに出来ており。更には、燃えて炭化した樹や氷漬けになっていく樹まであった。

「でえやああ!!」

「……『緋槍』」

シアが巨大な樹を投げつけ、それをユエが炎の槍で焼き尽くす。直後、上空からユエに向けて丸太が落下し、轟音を響かせながら大地に突き刺さる。ユエはバックステップで回避して再度、炎の槍を放とうとする。

「まだです!」

その瞬間、シアの飛び蹴りにより丸太は破壊され、破片が散弾の様に襲い掛かる。

「ッ!『城炎』」

虚を突かれたユエは、『緋槍』を中断し炎の壁を作り出し防御する。だが、それもシアの想定通りだった。

「もらいましたあ!」

「ッ!」

炎の壁でユエの視界を制限し、気配を殺し後ろに回りこんでいた。そして、手に持っていた大縄を振りかぶり、全力で叩きつける。

『風壁』

大縄と風の壁がぶつかり、辺りに衝撃が撒き散らされる。ユエは自身の作り出した風を利用し後方へ飛び退き。続けて魔法を放つ。

『凍枢』

「ふえ!ちよつ、まつ!」

シアの抑止の声も虚しく。足元から氷が一気に駆け上がり、首から下が氷漬けにされた。

「づ、づめたいい、早く解いてくださいよお、ユエさん」

「……ごめん、やりすぎた……」

ユエは謝罪と共に、氷を溶かし始める。現在、訓練開始から10日が経過しており、彼女たちは最終試験として手加減なしの模擬戦を行っていた。

内容は、かすり傷でもユエに一撃を与えたら合格となっている。

「いえ… 手加減なしなので謝らなくても… て！ユエさんの頬っぺ！キズです！キズ！私の攻撃当たってますよ！」

「…… ホントだ」

「な… なら、この試験は…」

「…… ん、シア合格」

「~~~~~!!やりましたあ!!」

ユエの合格宣言に、まだ氷が残っているのも構わず喜びを表すシア。そんなシアにユエは微笑んで見守っている。

「ユエさん！約束覚えてますよね！」

「…… ん、覚えてる」

「もし、10日以内に1度でも勝てたら… 皆さんの旅に連れて行ってくれるって。そうですね？」

「…… ん、少なくとも私は良いよ」

「後、2人に頼むとき味方してくれるんですよね？」

「…… ん、けど… 2人がダメっていったら…」

「はい… その時は私も諦めます…」

「…… 大丈夫、少なくともユミトは許してくれる… たぶん」

「ユエさん!?そこは断言してくださいよおー」

そんなことを言いながら、少女2人は弓人たちの方へと行く。

「… やりすぎたか？」

「いや… 多分俺だともっと酷くなってた」

俺とハジメがそんなことをぼやいていると、ユエとシアが近づいてきた。シアは満面の笑みを浮かべており、ユエもどこか嬉しそうだ。

「よっ、二人共。勝負とやらは終わったのか？」

俺とハジメも、2人が何かを賭けて勝負していることは知っている。彼女のために大槌を用意したのは他ならぬハジメだ。そのこと

もあり勝負の結果が気になったのだろう。

彼女たちには内緒だが、俺とハジメはどっちが勝つか賭けており、俺はユエに、ハジメは大穴のシアに賭けていた。

「ハジメさん！ユミトさん！聞いて下さい！私、遂にユエさんに勝ちましたよ！」

「よっし！俺の勝ちい！」

「うわマジかよ……」

「……何の話？」

「あ……いや！なんでもない……なんでもないんだ！」

「？」

俺たちが賭けていたことを知らない2人は首を傾げる。自分達の勝負を賭け事にされるのはあまり良い気分ではないだろう。俺は無理矢理話を変える。

「そ、それよりも！シアはどんなもんだった？」

「……魔法の適性は、ハジメくらい」

「まあ、俺よりはマシだ。身体能力は？」

「……正直、化物レベル」

「俺たちと比べたら？」

ユエの高評価には、ハジメも興味があるため耳を傾けている。ユエは、少し考え込んでから質問に回答した。

「……強化していないハジメの……6割くらい」

「それは最大値としてか？」

「……ん……でも、鍛錬次第でまだ上がるかも」

「そいつは確かに化物レベルだ」

「……そのハジメよりやばいユミトはもっと化け物……それより、シア」

「は、はい！」

ユエに促され、どこか緊張した顔つきのシアは俺たちの方を向く。そして、何度か深呼吸を繰り返すと、意を決して口を開く。

「ハジメさん！ユミトさん！私をあなたの旅に連れて行って下さい。お願いします！」

「断る」

「即答!? しかもユミトさんも!?!」

まさか俺にも断られると思っていなかったのか、驚愕の面持ちで目を見開いた。

「いや… だってそうになるとカムたちも来るじゃん…」

「それは大丈夫です! 父様達には修行が始まる前に話をしました!」

「そうか、なら良いぞ」

「弓人!?!」

「いやだって… こいつがついて行きたい理由大体わかるし」

「あん? あいつらに迷惑かけたくないだけじゃないのか?」

「あ… いや、そのお…」

何やら急にモジモジし始めるシア。指先をツンツンしながら頬を染めて上目遣いでハジメをチラチラと見る。ハジメは理由を話そうとしないことに訝しげな視線を向けていたが。シアは思いの丈を乗せて声を張り上げた。

「ハジメさんの傍に居たいからですう! しゆきなのでえ!」

「… は?」

ハジメは何を言っているのか分からなかったのか、鳩が豆鉄砲を食ったように呆然としている。そして、脳が理解したのか顔を真っ赤にしてツツコミを入れた。

「いやいやいや! おかしいだろ!?! 一体、どこでフラグなんて立ったんだよ!?! 自分で言うのも何だが、お前に対してはかなり雑な扱いだったと思うしどつちかという弓人の方に行きそうだろ!?!」

「あ、いえ。ユミトさんは良い人だとは思いますがそういうのは一切無いです」

「… なんて何も言っていないのに俺はいきなりフラれたんだ?」

「… よしよし」

「やめてくれ… なんか惨めになる…」

俺がダメージを食らったことを他所に、2人は言い争いに近いものが始まっている。正直、シアがハジメに好意を向けているのは知っていた。幼馴染のアイツには悪いが、だからといって止める気はない。

「と、とにかくだ！お前がどう思っているかと連れて行くつもりはない」

「そんな！さっきのは冗談ですよ？ちゃんと好きですから連れて行って下さい！」

「あのなあ、お前の気持ちは……う、嬉しいけど……だからといって連れて行くかの話は別だ！」

「こんなこともあるのかと！命懸けで外堀を埋めておいたのです！ささつ、ユエ先生！お願いします！」

「え？ユエ？」

「…… ハジメ、シアが付いてくのを許可して？」

まさかのユエからの援護射撃に、驚愕の表情を浮かべる。そして、何か合点がいったのか照れや呆れを通り越して感心した様子を見せていた。

「なるほど…… 勝負の賭けはそういうことか……」

「…… ん、そういうこと」

「ハジメ、お前の負けだ。シアを連れて行こう」

「はあ……」

ハジメは観念した様子でシアと向かい合う。そして、最終確認の様にゆっくりと話しかける。

「付いて来たって応えては…… やれないかもしれないぞ？」

「知らないんですか？未来は絶対じゃあないですよ？」

「危険だらけの旅だ」

「化物でよかったです。御蔭で貴方について行けます」

「俺の望みは故郷に帰ることだ。もう家族とは会えないかもしれないぞ？」

「話し合いました。〴〵それでも〴〵です。父様達もわかってくれました」

「俺の故郷は、お前には住み難いところだ」

「何度でも言いましょう。〴〵それでも〴〵です」

ハジメの言葉に、即座に返す。彼女の決意は決して揺らぎそうにならない。

「……」

「ふふ、終わりですか？なら、私の勝ちですね？」

「勝ちってなんだ……」

「私の気持ちに勝ったという事です…… ハジメさん」

「…… 何だ」

「…… 私も連れて行って下さい」

見つめ合うハジメとシア。ハジメは真意を確認するように彼女の瞳を覗き込む。そして

「…… はあく、勝手にしろ。物好きめ」

「はい！物好きなので勝手にします！」

その瞳に何かを見たのか、やがてハジメは溜息をつきながら事実上の敗北宣言をした。

そんな2人を見て、ユエは笑い、俺はため息を吐く。

シアに…… カム<sup>あいつら</sup>たちの変化…… どう説明しよう……



### 30星：生まれ変わったハウリア【下弦】

「あ！そういうえば父様やみんなは何処にいますか？」

「う… やっぱ… 気になる？」

俺の歯切れの悪い言葉に、シアとユエは首を傾げている。そして、ハジメが観念したかのように俺に話しかけてくる。

「なあ弓人… あいつら呼ぼう… どうせバレることだ」

「はあ… 分かったよ…」

俺はため息と共に指を鳴らす。すると、周囲から複数の影が飛び出してきた。

「団長！お呼びでしょうか！」

「団長って呼ぶな。シアがお前たちが気になったらしい」

「おおシアか！10日ぶりだな！」

「と、父様…？何だか雰囲気… それにみんなも…」

今のカムたちは、あの優しい雰囲気は無くなっており。何処か凛々しさを感じられるようになっていて。そして、シアの記憶にあった穏やかな声色ではなく、ハキハキとした力強い話し方になっていた。

「それとリーダー！ターゲットの魔物を狩ってきました！」

「お、おう…」

彼らの手には、今回ハジメが試験として指定したここらでは上位の分類に入る魔物の亡骸があった。これで彼らには残すところ俺の試験だけの状態だ。

「ど、どういうことですか!?ハジメさん！父様達に一体何が?!」

「お、落ち着け！ど、どういうことも何も… 訓練の賜物だ…」

「いやいや、何をどうすればこんな有様になるんですか?!完全に別人じゃないですか?!ちよつと、目を逸らさないで下さい！こつち見て！」

樹海にシアの焦燥に満ちた怒声が響く。ハジメはどうにか宥めようとしているが効果はあまりない。そして、俺の方にはユエが近づい

てきた、

「……もしかして、さつき歯切れが悪かったのって……」

「まあ……そういうことだ……」

「……どうしてあんなったの？」

「いやあ……アイツらが俺たちの昔話を聞きたいって言ったから……前世の俺が冒険者の時の話をしたら……」

「……憧れちゃったと？」

「まあ……うん……」

訓練の合間の休憩時、彼らがどうしても言うため。話をしたのが始まりだ。

俺が冒険者として歩んできた話を、彼らは英雄譚を聞く子供のように目を輝かせ聞いていた。そして、俺も悪い気がしなかつたので話を続けてた結果。彼らは俺のことを『団長』と呼び始めてきた。

訓練に積極的になったのはいいが前世でも呼ばれることのなかった『団長』呼びは、いまだに慣れない。

「シア……私たちは目が覚めたんだ。」

「父様……」

「もう、逃げて怯えるだけの我々じゃない！だから安心して行ってきなさい！」

「父様！」

確かに、言葉遣いや雰囲気は変わったかもしれない。けれど、彼女は彼女にとって大切な家族のまま変わっていないことを知ったシアは明るい表情を浮かべる。

「シア……すまなかつた……訓練の結果とはいえ……」

「本当ですよ……けど、許してあげます。ハジメさん」

頭を掻き申し訳なさそうにするハジメを、シアは笑顔で許す。一段落つきそうと思った矢先、霧の中から1人のハウリアが飛び出してきた。

「団長！観測隊からの報告があります！」

「団長はやめろ……で？報告内容は？」

「はい！大樹へのルートに、完全武装した熊人族の集団を発見しまし

た！おそらく我々に対する待ち伏せかと！」

「そうか、あの時俺が倒したやつはいたか？」

「いえ！いなかったため！おそらく一部の者の独断かと！」

「そうか… なら丁度いいな」

俺はカムたちの方へ顔を向ける。そして、彼らに俺からの最終試験を言い渡した。

「俺からの最終試験を言う！内容は『お前たちの力のみで熊人族の集団をどうにかしろ』だ！」

「我々の力のみですか？」

「そうだ。俺たちからは何も言わないし、力も貸さない。」

「了解しました！お前たち！作戦会議だ！」

「了解！」「了解！」

彼らは集まり、作戦会議を始めた。すると、後ろからシアが不安そうな顔で問いかけてきた。

「あの… 大丈夫でしょうか…？」

「安心しろ、熊人族にやられるような柔な鍛え方はしてない。」

「いえ… そっちではなくて…」

「問題ねえよ、アイツらは殺しなんかしない。少なくとも今回はな」

そんなことを話していると、作戦会議が終わったカムたちが俺の方を向く。

「団長！我々はいつでも行けます！」

「… とう団長でいいや。んじやスタート」

「行くぞお前たち！作戦開始！」

「了解！」「了解！」

カムの言葉と共に彼らは霧の中へと消えてゆく。そして俺たちはのんびりとした足取りで熊人族がいる場所へと歩いてゆく。おそらく、俺たちがついた頃には終わっているだろう。

「何なのだこれは?! 一体どうなっているんだ?!」

熊人族の1人レギンは目の前の光景が信じられないでいた。

彼は、熊人族族長のジンの右腕であり、ジンに対して絶対の信頼を寄せていた。

だから、信じられなかった。そのジンが1人の人間に倒されたことが。そして、処刑するはずのハウリアたちに手を出すなど言ったことが。

そのため、彼は族長たちの静止を振り切って、一部の同胞と共に報復へ乗り出した。

その数は50人、仇の人間の目的が大樹であることを知ったレギン達は、もつとも効果的な報復として大樹へと至る寸前で襲撃する事にした。

相手はたかが人間と兎人族。その考えが間違いだつたと気付くには遅すぎた。

「2番隊！常に移動し続け攪乱しろ！」

「了解！」

「族長！例の準備完了しました！」

「分かった！タイミングは俺が指示する！」

「了解！」

四方八方から襲ってくる礫と矢、そして短剣を持ち遅くかかってくるハウリア。そこには温和で平和的、争いが何より苦手な兎人族の面影は皆無だった。必死に応戦する熊人族達は動揺もあらわに叫び返した。

「ちくしょう！何なんだよお前等!!」

「こんなの兎人族じゃないだろっ！」

「うわあああ！来るなっ！来るなああ！」

奇襲しようとしていた相手に逆に奇襲されたこと、亜人族の中でも格下のはずの兎人族の有り得ない強さに動揺が隠せず。ジリジリと追い詰められていく。そして、熊人族全員が1箇所固まったことで彼らの作戦は完了した。

「今だ！やれえ！」

カムの叫びと共に上空から熊人族に覆い被さってくる網。突然の

事に、冷静な対処が出来ずもがく熊人族。だが、彼らにハウリアたちが弓を向けたことで、彼らはもがくのをやめて降伏した。

「終わったみたいだな。」

俺たちがついた頃には、戦闘は終了しており。熊人族は武器を取り上げられて縄により拘束されている。

力づくで引きちぎることは可能だろうが、少しでも変な動きをしよものなら、すぐさまハウリアたちが動くだろう。

「団長、負傷者は0で熊人族全員の拘束が完了しております」

「あいよ、… ンであんたがリーダーかな？気分はどうだい？」

俺は、主犯格であろうレギンに問いかけると。俯いていたレギンは顔を上げ口を開いた。

「…… 俺はどうなってもいい。煮るなり焼くなり好きにしろ。だが、部下は俺が無理やり連れてきたのだ。見逃して欲しい」

「なっ、レギン殿!？」

「レギン殿！それはっ……」

レギンの言葉に部下達が途端にざわつき始めた。レギンは自分の命と引き換えに部下達の存命を凶ろうというのだろう。動揺する部下達にレギンが一喝した。

「だまれっ…… 頭に血が登り目を曇らせた私の責任だ。兎人…… いや、ハウリア族の長殿。勝手は重々承知。だが、どうか、この者達の命だけは助けて欲しい！この通りだ」

額を地につける勢いで頭を下げるレギン、カムは少し考えるそぶりをしてレギンに告げた。

「お前たちは誰も殺さない…… だが、1つ条件がある」

「…… なんだ？」

「ここであつたことを包み隠さず長老たちに報告しろ」

「なっ!?お前…… まさか!」

「そうだ。お前たちには生き恥を晒してもらおう」

レギンはしばらく唸った後、カムの条件を飲んだ。彼らは拘束から

解放されると、足取りを重くしながらフェアベルンへと帰還しようとする。

「待ってくれ。俺から長老たちに1つ伝言がある」

「分かった…その伝言は？」

『貸し1つ』

「っ！…分かった…必ず伝えよう」

こうして熊人族が完全に姿を消したのを確認して、俺はカムたちの方を向く。カムたちは何処か緊張したような顔つきで俺を見ている。

「お前ら合格。おつかれ」

「……へ？」

「どうした？喜ばないのか？」

あまりにもあつさりとした俺の合格宣言に、全員が呆然としていた。だが、段々と実感したのか全員の体が震え始め、そして。

「！！「やったーーーー！！！！」

歓喜の叫びが、森中に響いた。

### 31星：ブルツクの町【上弦】

現在、俺たちは森から離れバイクを走らせている。なぜ迷宮から離れているかという。今の俺たちでは迷宮に入ることができなかつたからだ。

ハウリアたちの案内で大樹へとたどり着いた時、その大樹は完全に枯れており、迷宮の入り口らしきものは見当たらなかった。

そして、大樹の根元に建てられていた石板を見つけ近づく、オルクスの指輪に反応し文字を浮かび上がらせた。

『四つの証』

『再生の力』

『紡がれた絆の道標』

『全てを有する者に新たな試練の道は開かれるだろう』

これにより俺たちは、『再生に関する神代魔法を手に入れ、4つ以上の迷宮を攻略する必要がある』と仮定し、シア以外のハウリアたちにはこの森の防衛を頼み、他の迷宮の攻略へ目的を変更した。

「あの、ハジメさん」

「ん？どうした？」

「次の目的地って決まってるんですか？」

「そーいや言っただけでなかったな。次の目的地は【ライセン大峽谷】だ」

ハジメの告げた目的地に疑問の表情を浮かべるシア。現在、確認されている七大迷宮は、【ハルツィナ樹海】を除けば、【グリューエン大砂漠の大火山】と【シユネー雪原の氷雪洞窟】である。次の目的地はそのどちらかだと思っていたのだろう。その疑問を察したのかハジメが意図を話す。

「一応、ライセンも七大迷宮があると言われてるからな。シユネー雪原は魔人国の領土だから面倒な事になりそうだし、取り敢えず大火山を目指すのがベターなんだが、どうせ西大陸に行くなら東西に伸びるライセンを通りながら行けば、途中で迷宮が見つかるかもしれない

だろ?」

「つ、ついででライセン大峡谷を渡るのですか?」

思わず頬を引き攣らすシア。つい先日一族が全滅しかけた場所でもあるため、そんな場所を唯の街道と一緒にくたに考えている事に内心動揺する。

「お前なあ、少しは自分の力を自覚しろよ。今のお前なら谷底の魔物もその辺の魔物も変わらねえよ。ライセンは、放出された魔力を分解する場所だぞ? 身体強化に特化したお前なら何の影響も受けずに十全に動けるんだ。むしろ独壇場だろうが」

「それに、戦闘はユエから合格貰ったんだろ?」

「…… 師として情けない」

「うう、面目ないですう」

俺たちから呆れられた視線を向けられ、シアは無理矢理話題を逸らす。

「で、では、ライセン大峡谷に行くとして、今日は野営ですか? それともこのまま、近場の村か町に行きますか?」

「そうだな…… 食料とか調味料関係を揃えたいし、今後のためにも素材を換金しておきたいから町がいいな。前に見た地図通りなら、この方角に町があったと思うんだよ」

「はあくそうですか? よかったです」

ハジメの解答に安堵のため息を吐くシア。それに対して訝しそうに「どうした?」と聞き返すハジメ。

「いやあく、ハジメさんとユミトさんのことだから、ライセン大峡谷でも魔物の肉をバリバリ食べて満足しちゃうんじゃないかと思ってまして…… ユエさんはハジメさんかユミトさんの血があれば問題ありませんし…… どうやって私用の食料を調達してもらえるように説得するか考えていたんですよあく、杞憂でよかったです。ハジメさんたちもまともな料理食べるんですね!」

「おい待て、俺はただの人間だから魔物の肉を食ったら死ぬわ」

「ただの人間は完全武装した父様たちを素手で全滅させませんよ!」

「だな、それには同意だ」



「……同じく」

「ひっでえ……」

ある意味、非常に仲の良い様子で騒ぎながら草原を駆ける俺たち。日も落ちてきた頃、前方に町が見えてきた。どうやら野宿をせずにすみそうだと俺たちは顔を綻ばせ町へと近づいていく。

「あ、そうだハジメ。プレートとの隠蔽しとけよ」

「あつ、忘れてた。よく覚えてたな？」

「メルド団長が教えてくれたんだよ。まあ俺のは表記の仕方から隠蔽の施しようがなかったんだが」

「おい!?じゃあどうすんだよ!」

「まあ、なんとか言いくるめするさ」

「お前なあ…… ああそうだ。シアこいつをつけてくれ」

「え…… もしかしてプレゼントですか!ありがと…… ってはあああ!?!」

「止まってくれ。ステータスプレートを。あと、町に来た目的は?」

町の門へとたどり着くと、そこには門番らしき男が俺たちを止め。おそらく規定通りの質問を投げかけてきた。それに対してハジメが門番に対応した。

「食料の補給がメインだ。旅の途中でな」

そう言っただけはプレートは提出する。ステータスの隠蔽が施されているが男は特に気にした様子もなくプレートを返却した。

「じゃあ次はお前たちの方を見せてくれ」

「あ…… それなんだが…… ちよつと問題があつてな」

「うん?」

俺の言葉に、眉を吊り上げる男。それに対して俺は嘘の理由をつけた。

「ちよつと前に魔物に襲われてな、その時に壊れたみたいだよ」

「こ、壊れた?」

「そうそう、ホレ」

そう言つて俺は隠蔽の施されていないプレートを渡した。何処か疑いの眼差しを向けていた男も、俺のプレートを見ると目を白黒としていた。

「本当に壊れてるな…。」

「だろ？しかもこいつのプレートも無くしちまうし本当についてねえ…。」

「そうか…じゃあその兎人族は…そういうことか」

「そゆこと」

「なるほど、随分な綺麗どころを手に入れたな。まあいい、通つていぞ」

こうして一悶着あつたが、俺たちは無事に「ブルツクの町」へ入ることができた。

町中は、それなりに活気があつた。かつて見たオルクス近郊の町ホルアドほどではないが露店も結構出ており、呼び込みの声や、白熱した値切り交渉の喧騒が聞こえてくる。

こういうのを見ると、ようやく『戻つてこれた』と実感することができる。ハジメたちも実感しているのか1人を除いて全員の気分が高揚していた。

「なあ…そろそろ機嫌直してくれよ…。」

「っーん！」

「仕方ないだろ…兎人族は奴隷として人気あるんだから…。」

「っーん！」

「しかもお前は白髪で物珍しい上、か…可愛いんだし…。」

「かわっ!?!…っーん！」

結局、『叶えられる範囲で1つお願いを聞く』という条件で彼女の機嫌はようやく直つた。

### 31星：ブルツクの町【下弦】

俺たちは、金銭を工面するため。この町のギルドへと足を運んだ。この町のギルドは、オラリオとは違い飲食店と1つになっており顔の俺たちを物珍しげに見ていた。

俺は何処かガツカリしているハジメを他所に、受付にいる恰幅の良い女性の元へと近づいていく。

「見ない顔だね。ここに来るのは初めてかい？」

「ああ。ちよつと懐が寂しくなってきたから買取して欲しくてな」

「可愛い子2人もいるのに文無しなんて何やってんだい…。あと後ろにいるあんたも美人の受付嬢じゃなくて悪かったね」

「えっ？いや…。そんなこと考えてないから」

「あはははは。女の勘を舐めちゃいけないよ」

耳が痛い言葉にハジメと揃って苦笑していると、俺たちの様子を見ていた冒険者たちが何処か同情的な視線を向けていた。恐らく、ここにいる全員が言われているのだろう。

「あらやだ、年取るとつい説教臭くなっちゃってねえ、素材の買取だったね。じゃあ、まずステータスプレートを出してくれるかい？」

「ん？買取にステータスプレートの提示が必要なのか？」

「あんたたち冒険者じゃなかったのかい？確かに、買取にステータスプレートは不要だけどね、冒険者と確認できれば一割増で売れるんだよ」

「そうだったのか」

「ちなみに登録に1000ルタ必要だよ」

「じゃあ、素材の買取額から…」

「おつとストップだ」

買取額から引いてもらおうとしているハジメを止め。俺は魔物の素材の1つを取り出すと受付のカウンターに置いた。

「とりあえずこいつを見てもらってもいいか？」

「買取の素材かい？……こつ、これは!?!」

恐る恐る手に取り、隅から隅まで丹念に確かめる。息を詰めるよう

な緊張感の中、ようやく顔を上げた。

「とんでもないものを持ってきたね。これは………。樹海の魔物だね?」

「正解。うちには優秀なナビゲーターがいてね」

そう言つて、シアの方に指を向けるとどこか納得したような表情を浮かべていた。やはり、亜人族以外は迷ってしまう樹海の魔物の素材は流通が少ないのだろう。

シアは、軽くお辞儀をした後、何かを察したのかハジメに対して冷ややかな視線を向けていた。当のハジメは視線を逸らし冷や汗をかいていた。

「あんたも懲りないねえ……」

「今のは俺にもわかつたぞ……」

「何のことかわからない」

姿は変わっても根本にあるオタクの業に、呆ればいいのか安心して良いのか考えていると。受付の女性が話を戻した。

「まあとにかく、樹海の素材は良質なものが多いからね、売ってもらえるのは助かるよ」

「取引だ、これらを売る代わりに俺たちの冒険者登録の費用タダにしてくれ」

「お、おい弓人……それは流石に」

「あははははは! 気に入ったよ! あんたたちの登録料タダにするよ!」

「ありがとう」

その後、無事に登録が完了し。冒険者について軽い説明を受けたのち、樹海の素材の買取が行われた。その結果478000ルタが俺たちの手に渡った。

「これでいいかい? 中央ならもう少し高くなるだろうけどね。」

「いや、この額で十分だ。後この町の地図はあるか?」

「ああ、ちよつと待つといで……ほら、これだよ。おすすめの宿や店も書いてあるから参考にしなさいな」

手渡された地図は、中々に精巧で有用な情報が簡潔に記載された素

晴らしい出来だった。正直、金を取れるレベルだ。

「こいつは凄いな…。金を取ろうとは思わなかったのか？」

「それはあたしが趣味で書いてるだけだからね。書士の天職を持つてるから、それくらい落書きみたいなものだよ」

「そうか、それならありがたく貰ってくよ」

「いいってことさ。それより、金はあるんだから、少しはいいところに泊りなよ。治安が悪いわけじゃあないけど、その二人ならそんなの関係なく暴走する男連中が出そうだから」

「ああ、早速この地図を使わせてもらおうよ」

そう言っただけで俺たちはギルドから離れる。他の冒険者の何人かがココソコと話し合いながら、最後までユエとシアの2人を目で追っている中、受付の女性はどこか面白いものを見る目をしていた。

俺たちは、地図を見て『マサカの宿』という宿屋に泊まることを決めた。地図によると少々値は張るが料理と防犯が良いうえに、風呂まであるらしい。

「いらつしやいませー、ようこそ『マサカの宿』へ！本日はお泊りですか？それともお食事だけですか？」

「宿泊だ。この地図を見てきたんだけど書いてる通りで合ってる？」

「ああ、キャサリンさんの紹介ですね。はい、書いてある通りですよ。何泊のご予定ですか？」

「どうやら、受付の女性の名はキャサリンらしい。どこか遠い目をしているハジメは放っておいて良いだろう。」

「ああ、1泊で頼む。4人いるんだが大丈夫そうか？」

「大丈夫ですよ。お食事とお風呂はどうなされますか？」

「両方頼む」

「はい。お風呂は15分100ルタです。今のところ、この時間帯が空いてますが」

少女が時間表を見せてくる。久々の風呂のためゆつくり入りたい。

男女で交代する時間も考えても2時間は欲しいことを伝えると。少女はかなり驚いていた。しかし、今世は日本人である俺には譲れないところだ。

「え、えくと、それでお部屋はどうされますか？二人部屋と三人部屋が空いてますが…」

「俺とハジメが2人部屋、ユエとシアが3人部屋で良いだろ？」

「ああ、2人もそれで良いよな？」

「……ん」

「……えくと… そのお… 私はハジメさんと同じ部屋が良いなあ〜…」

シアの発言に周囲は騒がしくなる。少女も頬を赤くしている。ハジメは当然待ったをかけた。

「いやいやいや！んなもん無理に決まってんだろ!？」

『叶えられる範囲で1つお願いを聞く』

「うっ……」

「ふーん、ハジメさん嘘つくんですねー」

「い、いや… そうだ！ユエだって弓人と同じ部屋は嫌だよな！」

「……今更、ユミトと何度も寝てる」

「おい待てユエ！その発言は語弊があるぞ!？」

ユエの発言に更に騒然とする。周囲の客達、特に男連中が俺たちに向かって嫉妬の眼差しを向け。少女は顔を真っ赤に染めチラチラと俺とユエを交互に見ていた。俺が誤解を解こうとするより先に口論をしていたハジメが叫ぶように言った。

「ああ分かったよ！一緒に寝りゃいいんだろ！」

少女はどこかトリップしていた。見かねた女将さんが少女を奥へ連れて行き。代わりに父親らしき男性が手早く宿泊手続きを行った。その際、何処か「分かっているよ」という嬉しくもない理解の色が宿っていた。

何を言っても誤解が深まりそうなので、急な展開に呆然としている客達を尻目に、顔を真っ赤に染めたハジメ、満足気なシア、自分の発言の意味に気づいていないユエを引き連れ言われた部屋に行き。そ

れ以降は特にハプニングも無いまま風呂に入り、食事をとって眠りに  
ついた。

おまけ (ボツ茶番)

「今、お風呂ではあの人たちがあんなことやこんなことを…」

「ようお嬢ちゃん、奇遇だな」

「え!?!な…何でここに?」

「今は女性陣が入ってるからな…つまりそういうことだ」

「わ…私もご一緒してもよろしいでしょうか!」

「その歳で覗きの浪漫が分かるとは…いいだろう!着いてこい!」

「はい!師匠!」

「行かせる訳ねえだろうが  
!!!!」

### 32星：第2の迷宮

ライセン大峡谷は今、『死屍累々』という言葉が似合う状態へ変貌していた。

その理由は、迷宮攻略のため再び足を踏み入れた俺たちが作り出したからだ。

「一撃必殺ですう！」

シアは、巨大な戦鎚アーティファクト『ドリユケン』により魔物を粉碎する。

「……邪魔」

ユエは、大峡谷の魔法分解を意に介さず、魔法により殲滅する。

「うぜえ」

ハジメは、ドンナーにより電磁加速された弾丸で魔物を撃ち抜く。

「違いねえ」

俺は、弓矢で魔物の眉間を射抜く。

こうして懲りもせず襲ってくる魔物を返り討ちにしながら探索して3日ほど経過しているが、未だに迷宮の入り口を見つけていない。

「はあく、ライセンの何処かにあるってだけじゃあ、やっぱ大雑把過ぎるよなあ」

洞窟などがあれば調べようと、注意深く観察はしているのだが、それらしき場所は一向に見つからないため。つつい愚痴をこぼしてしまおうハジメ。

「まあ、大火山に行くついでなんですし、見つければ儲けものくらいでいいじゃないですか。大火山の迷宮を攻略すれば手がかりも見つかるかもしれないし」

「まあ、そうなんだけどな……」

「……ん、でも魔物が鬱陶しい」

「確かにユエとは相性悪い場所だしな…… おれもステイタスの伸びが悪いらしい」





もたれ掛かるように倒れており、壁面と一枚岩との間に隙間が空いている場所があった。シアは、その隙間の前で、ブンブンと腕を振っている。その表情は、信じられないものを見た！ というように興奮に彩られていた。

「ごつち、ごつちですう！ 見つけたんですよお！」

「分かったから引つ張るな！ お前身体強化全開じゃねえか！」

「…… 眠い」

「すまん、一応起こした方が良くと思ってな」

はしやぎながらハジメの手を引つ張るシアに、ハジメは少し頬を赤くしながらツツコむ。ユエは寝起きのため目をこすらせながら俺の手に引かれる。

シアに導かれて岩の隙間に入り、その空間の中程まで来ると、シアが無言で、しかし得意気な表情で壁の一部に向けて指をさした。

其処には、壁を直接削って作ったのであろう見事な装飾の長方形型の看板があり、それに反して妙に女の子らしい丸字でこう掘られている。

『おいでませー！ ミレディ・ライセンのドキワク大迷宮へ♪』

「ええ……？」

「もしかして……ここが？」

「…… 頭悪そう」

俺たちは、思わず脱力してしまった。「オルクス大迷宮」の過酷さを知っている身としては、威厳のないこの場所が本当にそうなのか疑ってしまう。

「でも、入口らしい場所は見当たりませんか？ 奥も行き止まりですし……」

そんな俺たちの心理に気づくこともなく、シアは、入口はどこでしょう？ と辺りを見渡したり、壁の窪みの奥の壁を叩いたりしている。

「シア。罫があるかもしれないから気をつけろよ」

ガコンツッ！

「ふぎや!？」

「シア！」

ハジメが警告したが遅く。シアが触れていた壁が忍者屋敷の仕掛け扉のように回転しシアを奥へと連れ去った。ハジメは表情を変え、シアの入っていった壁の中へと入っていく。

「ユエー！」

「……ん！」

俺たちもこのまま立ち惚けている訳にもいかなかったため、意を決して扉の奥へと入っていく。

入った瞬間、矢が襲ってきたが難なく受け止める。シアの方を見ると、ハジメが前に出て全てを捌いたらしい。

「ハジメさん……ありがとうございます……」

「たく、気をつけるよ?……無事で良かった」

「え?ハジメさん何か言いましたか?」

「いや……なんでもねえよ」

最後の言葉は、シアには聞こえなかった様だ。

ふと、周囲の壁が光り出しこの部屋を照らし出す。中央にはまた石板があり、そこにはこう書かれていた。

『ビビった? ねえ、ビビっちゃった? チビってたりして、ニヤニヤ』

『それとも怪我した? もしかして誰か死んじゃった? ……ぶっ』

うぜえ……ここにいる全員が同じことを考えているだろう。

「ミレディ・ライセンだけは『解放者』云々関係なく、人類の敵で問題ないな」

「右に同じく」

「……激しく同意」

「です」

どうやらライセンの大迷宮は、オルクス大迷宮とは別の意味で一筋縄ではいかない場所のようだった。

「あ、そうだ。シア、花摘みはもう良いのか？」  
「あーちよつと待っててくださーい！」

### 333星：ミレデイ・ライセン【上弦】

ミレデイ・ライセンの迷宮はオルクスの迷宮に比べて厄介な代物だ。

魔法の分解作用のせいでユエにはかなりの負担がかかり、ハジメも『空力』や『風爪』といった体の外部に魔力を形成・放出するタイプの固有魔法は全て使用不可となっており、『纏雷』も出力が落ちドンナーといった兵器全般の出力が低下している。

俺の魔法は、この世界の仕組みから外れているため分解される心配はない。だが現状、魔物の気配がないため『オリオン・オルコス』の出番はなく、『アルテミス・アグノス』は反動があるため実質魔法が使えないようなものだ。

更には、この迷宮はまるでブロックを適当に配置したような構造になっており1階の階段を登れば3階に到着したり、2階からの通路の先はただの壁だったりと法則性がない。

「こいつはマップピングするにしても骨が折れるな」

「……………ん、迷いそう」

「えつと……………ハジメさんたちが攻略した迷宮もこんな感じだったんですか？」

迷宮攻略が初めてのシアは、疑問をぶつけてくる。それに対してハジメは少し思い出しながら答えた。

「いや……………【オルクス大迷宮】の時はシンプルな階層別になっていたな。」

「へえ。やっぱり迷宮によって違うんですかね？」

「まあ解放者が作ったんだから、製作者の性格が出るんじゃないかねのか？」

「よし、現時点のマップピングが終わった。ハジメ、『マーキング』頼む」「あいよ」

俺が頼んだ『マーキング』とは、ハジメがもつ【追跡】のことだ。

こいつは、ハジメが触れた位置を魔力で『マーキング』することで

その場所や触れた生物や物質の位置を特定することができる。こいつは魔力を直接添付しているので、分解作用も及ばず効果があるようだ。

ハジメの『マーキング』も完了して、俺たちは先へ進む。

進んだ先は通路になっており、壁自体が薄く発光していたため。明かりなしでも問題ない。

ハジメが鉱物鑑定をするため前に出ようとした瞬間、俺は咄嗟にハジメの肩を掴んでいた。

「ん？弓人、どうしたんだ？」

「いや……何か嫌な予感がしてな……」

「とか言っても別に……ん？」

ハジメが周囲を見渡していると、自身の足元にあるブロックに違和感を感じた。

綺麗に敷き詰められているブロックの床で、これだけに小さな隙間がある。

「このモノクルに反応しないってことは魔法系じゃない……だとすると」

「踏んで作動する物理系の罠だな」

俺の言葉にハジメは後ろへ下がりそのブロックを踏まないようにする。起動してみるのも一興かもしれないが、その瞬間即死の罠だとしたら笑えない。

「…………ユミト、何でわかったの？」

「分かったってより、『直感』だな。おそらく、俺の『発展スキル』の影響だな」

俺が「ランクアップ」した際手に入れた「直感」の効果は、文字通り勘が良くなるものだ。単品だとそこまでだが、前世の経験則と合わせることで予知に近い動きが取れたりする。

「ここからは、こういうタイプの罠にも警戒しながら移動しよう。俺の『直感』も万能じゃないからな」

「了解」

「…………ん」

「ですー！」

「つて！言ったそばからこれかよおおおおおおお！！！」

「シアあああ！！！！お前気をつけろつて弓人に言われただろうがああああ！！！！」

「ごめんなさいiiiiiiiiiiiiiiiiiiii！！！！」

現在、俺たちは坂を滑り落ちている。理由は叫んでいる通り、シアが畏を起動してしまったからだ。ハジメが坂を『錬成』しようにも分解されてしまう。

「シア！ドリユッケンの杭を打ち付けろ！」

「は、はい！…つてハジメさん！道が！？」

シアが背中中の固定具からドリユッケンを外そうと手を回した直後、前方を見たシアが焦燥に駆られた声をあげる。

俺たちはそれだけで悟った。この滑落の果てに、どこかに放り出されるのだろうか。

「このままじゃ…つてきやつ！ハジメさん！？」

「しつかり捕まってるよ！弓人！そっちはユエを頼む！」

「分かった！ユエ！俺にしがみつけ！」

「ん！」

ハジメはシアを抱き寄せ、ユエは俺に抱きつくようにしがみつく。その瞬間、俺たちに浮遊感が襲い、真下が剣山の部屋へと投げ出された。

ハジメは義手からワイヤーの付いたアンカーを射出し天井に突き刺す。そして、ターザンの要領で投げ出された穴とは反対方向にある横穴へと着地する。

「弓人！手を！」

ハジメは俺たちの方へ向き、手を伸ばす。しかし距離が離れ過ぎており届きそうにない。

「くそ！ならもう一回こいつで…！」

「来るな！俺たちなら大丈夫だ！」

ワイヤーアンカーでこっちへ来ようとするハジメを止め。俺は弓と翠色の矢を取り出す。そして、横穴とは反対方向にある壁に狙いを定める。

「一気に衝撃が来るからしつかり捕まってるよ！ユエ！」

「ん！ユミトを信じる！」

「いくぜえ！『シエラ』!!!」

矢が放たれると同時に、突風が巻き起こる。その反動により、狙い通り俺たちは横穴へと飛ばされる。

俺はユエに衝撃が来ないように抱きしめて、背中から横穴に着地した。

「いてて、けど上手くいっただな」

「……ユミト、大丈夫？」

「ああ、ユエも怪我してないか？」

「……ん、ユミトのおかげ」

「そいつは良かった」

俺たちがそんなことを話していると、血相を変えたハジメとシアがこっちへ近づいてきた。

「2人とも大丈夫か!？」

「ごめんなさいいいい!!!わだじがドジなぜいでええええ!!!」

「大丈夫だ、ピンピンしてるぜ。な？ユエ」

「……ん、だからシアも泣かないで」

ユエは俺から離れてシアの頭を撫でて慰める。俺たちの反応に安心したのかハジメはため息を漏らすと、俺に質問をしてきた。

「なら良かった……けど弓人、あの矢はなんだ？少なくとも俺は作った覚えがないんだが」

「ああ、あれは俺のスキルで作った矢だ」

俺が新たに手に入れたスキル【アロー・エンチャント弓矢作成】は様々な属性が付与された矢を作ることができる。

オラリオには『魔剣』といわれるものがある。魔法が込められた剣であり、振るうことでその魔法を放つことができる。



「その『魔剣』の亜種、つまり『魔法の矢』を作り出すことができるのが俺の【スキル】だ」

「あれは風魔法が込められてたつて訳か」

「そゆこと、『魔剣』とは違って1回切りだがその分威力はなかなかもんだぜ」

「そういうのは教えてくれよ…」

「ははっ、すまんすまん」

俺が笑って謝っていると、泣き止んだが落ち込んでいるシアを連れてユエがこちらに戻ってくる。

「うう… 私の『未来視』が何度でも使えたらこんなことにならなかつたのに…」

「けど、練習してんだろ？いつかできるようになるさ」

「ハジメさん… はい！私頑張ります！」

ハジメの言葉に、落ち込んでいたシアも気を取り戻せたようだ。

攻略は、まだ始まったばかりだ。

### 333星：ミレデイ・ライセン【下弦】

あの横穴を進んだ後、どこか見覚えのある部屋に到着した。そこには、見覚えのある石板にこう書かれていた。

『ねえ？今どんな気持ち？』

『お察しの通りここはスタート地点です！』

『苦勞して進んだ先が最初の場所ってどんな気持ち？』

『あ、戻ろうとしても無駄だよ！』

『この迷宮の部屋は一定時間ごとに変化するから！』

つまり、俺のマップピングが現時点を持って無駄なものとなってしまった。しかし怒りは湧いてこない。その理由は隣に冷たい雰囲気を出しているユエがいるせいで、かえって冷静になったからだ。

「なあ…大丈夫か？ユエ…」

「…ユミトが頑張って作ったものを…こいつは…」

「いや…怒ってくれるのは嬉しいんだけど俺は気にしてないから…な？」

俺はユエを宥めながらハジメの方を向くと、あつちはあつちで忙しいそうだ。

「うえええええええ!!私がドジしたせいでえええええええ!!」

「い、いや…シアのせいじゃないから…な？」

「でも私が畏に引つ掛からなかったらあああああ!!」

「どうせ、こいつの性格のことだ。結局何回も戻されるだろうし…だから泣かないでくれよ…」

どうやら自分のせいだと責めてしまっているシアを、ハジメは困った様子で慰めている。

暫くして、2人が落ち着いたのを…ユエは未だに機嫌が悪いが、確認して俺とハジメはこれからの攻略について話し合う。

「弓人、これからどう攻略していく？」

「どう…つってもなあ…マップピングはもう使えねえし…ん？」

「どうした?」

「ハジメ、『マーキング』の反応はどうなってる?」

「そんなもん...」

ハジメは「なくなってる」と言おうとするが言葉が止まり、暫く色々な方向を向いた後、困惑した表情で話しかけてきた。

「...ある。位置は滅茶苦茶だけど...」

「よし、変化するって言っても『部屋の位置を組み替える』タイプか」  
「で、『マーキング』は残ってるけどどうするつもりなんだよ」

「こうする」

俺は、マッピングに使っていた羊皮紙をナイフで切り始める。ある程度切ったところで、ハジメに『マーキング』までの距離を聞きながら地面に並べる。

「こんな風に『マーキング』の位置に並べればいい。そうすりゃこの迷宮構造が次第に分かる様になる」

「なるほどな...俺たちは行ったことのない部分を目指せば良いってことか」

「そゆこと、だから俺のやったことは無駄にはなってるねえよ」  
「.....ん、良かった」

ユエの頭を撫でながらそう言うと、ようやくユエの機嫌が直ったようだ。俺たちは迷宮攻略を再開する。

-----  
迷宮攻略を再開して、約1週間ほど経過した。

スタート地点には7回戻されたが、『マーキング』した部屋も増えていたため、ある程度この迷宮構造は予測できるようになった。

オルクス大迷宮の時とは違い、食糧は潤沢にあるため。時間は気にしないで良いのはありがたい。

そして俺たちは、1週間探索して1度も訪れたことのない部屋へとたどり着いた。そこは、大量の騎士の鎧があり部屋の奥は大きな通路になっている。

「あの騎士...絶対動くよな」

「動くだろうなあ……ならやることは1つ」

俺たちは飛び出し、騎士の鎧に向かって攻撃する。騎士たちは俺たちに反応して襲い掛かってきた。

ハジメは、ドンナーで打ち抜く

ユエは、水の刃で切り裂く

シアは、ドリユツケンで叩き潰す

俺はハジメに作ってもらったガントレットを装備し、拳で粉碎する

「くそ！キリがねえ！」

「ハジメ！こいつらの核はどこだ！」

「それが見当たらねえ！おそらく操ってる本体がどこかにいる！」

ゴーレムの核は、自立行動させる際必要で操るのには必要ないらしい。ここにいるゴーレムたちは操られており、俺たちが破壊しても即座に回復してくるためキリがない。

「仕方ねえ……全員耳を塞げ！強行突破する！」

「ええええ！何ですかそれ!？」

十二連式ロケット&ミサイルランチャー『オルカン』を取り出し、耳を塞いでいないシアを無視して引き金を引く。

バシユウウ！

そんな音と共に、後方に火花の尾を引きながらロケット弾が発射され、狙い変わらず隊列を組んで待ち構えるゴーレム騎士に直撃した。

次の瞬間、轟音、そして大爆発が発生する。ゴーレムの集団は、直撃を受けた場所を中心に両サイドの壁や天井に激しく叩きつけられ、原型をとどめないほどに破壊されている。再構築にもしばらく時間がかかるだろう。

俺たちは一気にゴーレムの残骸を飛び越えて行く。

「ウサミミがあゝ、私のウサミミがあゝ!!」

「だから耳を塞ぎって言っただろ」

「え、何ですか？」

「もういい……行くぞ」

ハジメは未だ聴力が戻らないシアの手を取り、俺たちは通路の奥へと走っていく。通路の先は、巨大な空間が広がっているようだ。道自

体は途切れており、十メートルほど先に正方形の足場が見える。

「一気に飛ぶぞー！」

俺たちは足場に飛び乗る。しかし、その足場は俺たちに乗られるのを嫌うように遠のいていく。

「なっ……」

「もうだめですううううう」

この迷宮に来てから何度目かの叫びを上げるシア。目測が狂いこのままでは落下する。その瞬間、ユエの声が響いた。

『『来翔』！』

風の魔法により、一瞬だけ俺たちを浮かせる。しかし、その一瞬がなによりもありがたかった。

「ユミト！」

「任せろ！『シエラ』！」

翠の矢を放ち、突風が巻き起こる。反動が俺たちを襲い、足場に接地することが出来た。

「ナ、ナイスだ。ユエ……弓人」

「ユエさん、ユミトさん流石ですう！」

「……もつと褒めて」

「助かった。ユエのおかげだ」

「……ん、ユミトのおかげでもある」

和やかな空気に包まれていると、【直感】が今までにないレベルの危険信号を送ってきた。そして、シアも鬼気迫る表情を浮かべ叫ぶ

「逃げてえー！」

ハジメとユエも、何が？ と問い返すこともなく、シアの警告に瞬時に反応し弾かれた様に飛び退いた。運良く、ちょうど数メートル先に他のブロックが通りかかったので、それを目指して現在立っているブロックを離脱する。

直後、

隕石が落下してきたのかと錯覚するような衝撃が今の今まで俺たちがいたブロックを直撃し木っ端微塵に爆砕した。隕石というのはあながち間違った表現ではないだろう。赤熱化する巨大な何か落

下してきて、ブロックを破壊すると勢いそのままに通り過ぎていったのだ。

「シア、助かったぜ。ありがとうよ」  
「……………ん、お手柄」

「えへへ、『未来視』が発動して良かったです。代わりに魔力をごっそり持って行かれましたけど…」

俺たちは、ブロックの淵から下を覗く。と、下の方で何かが動いたかと思うと猛烈な勢いで上昇してきた。それは瞬く間に俺たちの頭上に出ると、その場に留まり光る眼光をもって睥睨した。

「こいつが操っていた本体か…」  
「デカすぎんだろ…」

辺りに静寂が満ち、まさに一触即発の状況。動いた瞬間、そんな張り詰めた空気を破ったのは

ゴーレムのふざけた挨拶だった。

「やほく、はじめましてく、みんな大好きミレディ・ライセンだよおく」

「……………は？」

### 34星：迷宮最後の試練【上弦】

「やほく、はじめまして、皆大好きミレディ・ライセンだよお」  
その見た目から想像できないほど陽気な挨拶をしてくるゴーレム。  
さらにはオスカー・オルクスの手記には死んだと書かれていた「ミレ  
ディ・ライセン」だと名乗ってくる。

俺たちはその情報量の多さから固まってしまい、背景が宇宙の猫み  
たいになっていた。

「あのねえく、挨拶したんだから何か返そうよ。最低限の礼儀だよ？  
全く、これだから最近の若者は…もつと常識的になりたまえよ」  
どこか挑発的な物言いに苛立ちを覚えながら俺は再起動する。俺  
はオスカー・オルクスの手記を取り出しながらコミュニケーションを  
図る。

「いや、すまない。このオスカー・オルクスの手記にはミレディ・ライ  
センは故人だと書かれててな。いきなりのことと混乱したんだ」

「おー！オーちゃんの迷宮を攻略したんだ。もしかして私の迷宮をそ  
れで知った感じ？」

「まあな、ここの神代魔法を貰いたいんだが…タダで貰えたりする  
か？」

正直、戦わずに手に入るならそれに越したことはない、俺はダメ元  
で聞いてみる。

「あはは！それは無理！そんなんじや試練にならないでしょ？」

「ま、それもそうだな」

「じゃあ、今度は私が質問する番ね。君たちは何のために神代魔法を  
求める？」

先程の陽気さが無くなり、真剣な声で問いかけてくる。適当なこと  
を言ったらすぐにバレるだろう。俺は、嘘偽りなく答える。

「俺たち…正確には俺とハジメは、狂った神のせいと別世界からこ  
こに連れてこられた。故郷に帰るためには、神代魔法を集めるのが一  
番良いと思ってな…それでここまで来た」

「つまり…あのクソツタレな神の手先ではないけど、あの神と戦うために来たわけでもない？」

「向こうから何かして来るなら戦うが…もし何もしてこないなら、あんたらには悪いが無視するつもりだ」

「そっか…」

ミレディはそう呟くと、どこか納得したように大きく頷き最初の時のような陽気な雰囲気に戻った。

「ん、そっかそっか。なるほどねえ、別の世界からねえ。うんうん。それは大変だよねえ、よし、ならば戦争だ！見事、この私を打ち破って、神代魔法を手にするがいい！」

「いくらなんでも脈絡なさすぎねえか？完全にこいつら置いてけぼりだぞ」

俺がそう言って振り返ると、未だに宇宙猫だったハジメたちもようやく再起動した。

「あははははは！ごめんごめん、久々に人と会話したから浮かれちゃってたよ」

「なら、戦わずに話し合いでも良いんだぜ？それこそ喉が枯れるまで」

「うくん…とつても魅力的だけど遠慮するよ」

「そうか、ならしようがないな」

「そうそう、しようがないしよがない」

「あ、そうだ。戦う前に名乗りとかしようぜ」

「おー！いいね！やろうやろう！」

「お前ら仲良いな!？」  
これから戦うとは思えない空気で会話する俺たちにツツコミを入れるハジメ。結局ハジメたちも名乗りに参加することとなった。

しばらくして俺たちは真剣な表情で名乗りを上げる

「ライセン大迷宮最後の番人であり開放者ミレディ・ライセン！」

「アルテミスファミア団長『三星の狩人』<sup>トライスター</sup>三星弓人！」

「オ…オルクス大迷宮攻略者、南雲ハジメ！」

「…同じく攻略者、ユエ」

「と、特にないです！シア・ハウリア！」



「「「いざ尋常に勝負!」」」

海戦の火蓋を切ったのは、ハジメのオルカンによるロケット弾だ。放たれた弾はミレデイに直撃し爆音を轟かせる。

「やりましたか!」

「…… シア、それはフラグ」

煙の中から赤熱した腕が出てきて煙を払う。そこには、一部破損したミレデイが出てきたが、すぐさま周囲のブロックを引き寄せ、それを材料に体の修復を行う。

「ふふ、先制攻撃とはやってくれるねえ、さあ、もしかしたら私の神代魔法が君のお目当てのものかもしれないよお、私は強いけどお、死なないように頑張つてねえ」

その言葉と共に、ミレデイは自身の持つていたモーニングスターを俺たちに向かって射出する。俺たちは、それを難なく回避する。

ライセン大迷宮最後の戦いが始まった。

ここに来るまでに戦ったゴーレムたちが、俺たちに襲いかかって来るがユエが水の刃で切り裂いていく。その隙に、ハジメはモノクルからの情報でミレデイの弱点を探り当てる。

「見つけた!・心臓の位置に核がある!」

「げっ!?!何でわかったの!?!」

まさか自身の弱点を見破られるとは思わなかったミレデイは驚愕の声を上げる。弱点を知った俺たちは声に出さずとも自身のやることを理解する。

それぞれ別々の足場に移動した後、シアがミレデイに向かって飛ぶかかる。

ドリユツケンを振りかぶり一撃を叩き込もうとするが、ミレデイはモーニングスターで対抗してきた。

鏢迫り合いが続く中、修復が完了したゴーレムたちがシアに向かって襲いかかって来る。

「あれれ?・忘れてた?・ゴーレムはいくらでも再生できるんだよ?」

「…… 大丈夫、シアの後ろには私がいる」

シアの背後に移動していたユエが、再び水の刃でゴーレムたちを切

断する

「これで武器は使えません！ユミトさん！」

「まかせろ！」

「武器は使えないけど、まだ右手が残ってるよ！」

飛びかかってから俺に向かつて、ミレデイは使える右手で俺に向かつて殴りかかって来る。それに対して俺は、全力で殴り返す。

金属同士がぶつかり合う音を周囲に響かせる。本来であれば質量の差で俺は後方に吹き飛ばされるだろうが、そんなことは起きず拳同士がぶつかったまま拮抗する。

「はあ!?君って本当に人間!?!」

「最近仲間から化け物扱いされてるけど人間だよ！」

最近気にしていることを叫びながら、俺は全力で拳を振り抜く。力負けたミレデイは後方へ仰反るような状態になってしまう。

「今だハジメー！」

「本命はこいつだあ！」

バランスを崩しているミレデイに向かつてハジメはアンカーを使いミレデイに張り付く。そして、シユラーゲンを0距離でミレデイの心臓部分へ叩き込む。

胸部から煙を吹き上げながら弾き飛ばされるミレデイ、ハジメも反動で後方に飛ばされるが、アンカーを飛ばし近くの浮遊ブロックに飛び乗る。そして、ミレデイの様子を観察した。

俺たちも、ハジメの下へと移動する。

「…… いった？」

「手応えはあったけどな……」

「これで、終わって欲しいですう」

「けど、これだと呆気なさすぎる……」

ユエが手応えを聞き、シアが希望的観測を口にするが、希望は薄いだろう。案の定、胸部の装甲を破壊されたままのミレデイが、何事もなかったように近くのブロックを手元に移動させながら、感心したような声音で俺たちに話しかけてきた。

「いやあく大したもんだねえ、ちよつとヒヤつとしたよお。分解作用がなくて、そのアーティファクトが本来の力を発揮していたら危なかったかもねえ、うん、この場所に苦労して迷宮作ったミレディちゃん天才!!」

「ちつ…『アザンチウム鉱石』か」

「白髪くん大正解！世界一硬い鉱石で有名だね！さつすがオーくんの迷宮攻略者」

どこか小馬鹿にした様子で話して来るミレディ。しかし、すぐに真剣な空気に戻る。

「さあ、第二ラウンドと行こうか！」

### 34星：迷宮最後の試練【半月】

「さあ、第二ラウンドと行こうか！」

その言葉と共に、ミレディはモーニングスターを射出し自身も俺たちに向かって突撃して来る。

「ハジメさん！ど、どうしましょう!？」

「まだ策はある。その為にも・・・弓人！」

「任せろ！」

襲いかかって来るモーニングスターを俺は全力で殴りつける。ミレディの拳の時とは比にならない衝撃が周囲を襲う。

「ええ・・・ 流石にこれも止められるのは想定外なんですけど」

「おい！ちよつと引いてんじゃねえよ！」

「だって私の武器にヒビ入ってるじゃん・・・怖」

戦闘中なのに少し泣きそうだ。しかし少しでも気を抜いたら力負けしそうなほど、今回の力比べは拮抗している。ゴーレムの彼女とは違い生身である俺は体力という限界があるため長くは持たないだろう。

「よし。ユエ！シア！弓人が抑えてるうちに行け!・・・ 大丈夫だ弓人。俺は引かないぞ」

「・・・ん。ユミト、私も引かない」

「行きます!・・・ 私もですよ！」

「慰めの言葉をかけるのはやめろお！」

全員からの同情した視線に心が痛む。

ユエとシアは、俺が受け止めているミレディの腕に乗り走る。ミレディは攻撃を中断しそれを煩わしげに振り払おうとする・・・が

「・・・ 当然読んでる」

「ハジメさん!」

「喰らいやがれ!」

それを予測していたハジメは、シユラーゲンをミレディに向かって放つ。電磁加速された弾丸は、爆音と共にミレディに叩き込まれる。

「うわあ!?!」

「行け! シア!」

「はいです!」

ハジメの言葉に反応して飛び出したシアは、ドリユツケンをミレデイの右肩へと叩き込む。

「そして... こうです!」

ドリユツケンの口から大量の爆薬が炸裂し爆音を轟かせる。ハジメのシユラーゲンとシアの叩きつけ、2つのインパクトによってミレデイはバランスを崩してしまう。

「... ナイス、シア」

ユエは、バランスの崩したミレデイに向かって水の刃を放つ。しかし、その刃はミレデイの両腕を切り裂いた。

そして、ミレデイが落下してしまい空中に投げ出されたシアはハジメが、ユエは俺が抱き止める形でキャッチする。

「... 作戦成功」

「だな、この調子で終わらせよう」

「ハジメさん! 私頑張ったので褒めてください!」

「調子に乗んな... これが終わったらな」

近場の足場に着地し、ミレデイを見据える俺たち。ミレデイは、即座に修復をしたりせず、天井を見つめたまま目を強く光らせていた。

この瞬間、再び俺の「直感」が危険信号を放ち始めた。それを裏付けるようにシアの表情が青ざめる。

「皆さん! 逃げてください! 天井が降ってきます!」

その直後、それは起こった。

空間全体が鳴動する。低い地鳴りのような音が響き、天井から破片が落ちてくる。

「っ!?! こいつあ!」

「ふふふ、お返しだよお。騎士以外は同時に複数进行操作することは出来ないけど、ただ一斉に「落とす」だけなら数百単位でいけるからねえ、見事凌いで見せてねえ」

地響きが止まると同時に、天井のブロックが落ちて来る。しかもそ

れは、ただ落ちるのではなく俺たちに向かって落ちるような軌道をしていた。

「シアァ！振り落とされないうようしっかり掴んでろ！」

「はいです！」

「ユエ、少し荒っぽくなるかもしれないが我慢な」

「……………ん、気にしないで」

ハジメはオルカンを再び取り出すと、ロケット弾を全発放つ。それにより大量の爆発と共にブロック群が粉々になっていく。

そして、密集していたブロック群に綻びが見えたため、俺たちは落ちて来るブロックを乗り移りながら回避する。

そして、この調子なら問題ないと思えた瞬間。再び「直感」が働く。俺は反射的に仰反ると俺の顔があった位置に、ブロックの破片が恐ろしい速度で通り過ぎた。

「弓人!？」

「問題ない！ギリギリ回避できた！」

しかし、このままだと不味い。未だ落下し続けて来るブロック群に加え、砕いた破片にも意識を割かないといけない。今のままだと確実に押し潰されてしまう。

「ユエ……………ハジメの方に行ってくれ」

「……………なんで？」

「あれを使う。並列詠唱のできない俺は詠唱で動けない……………だからハジメの方に行くんだ」

「だめ……………ユミトが危ない……………」

「安心しろよ。お前たちを残して死んだりしない」

しばらくしがみついたまま離れようとしないうエ。しかし、俺が安心させるために頭を撫でてやると、渋々といった形ではあるが離れてハジメの方へ移った。

「弓人……………やるんだな？」

「ああ、だから何があっても信じてくれ」

「分かった……………」

ハジメの方もこのままでは不味いと思っていたのか特に言及はし

てこなかった。俺のあれを知らないシアは足を止めた俺を見て驚愕の表情を浮かべる。

「ユミトさん!? な、なんで!？」

「シア、弓人なら大丈夫だ」

「けど… ハジメさん!」

シアが止まるよう叫ぶがハジメは無視して走り続ける。ミレディは、俺が止まったのをチャンスだと思ったのかブロック群を俺めがけて落とし始める。

『我が宿命、月女神に請い願う。』

『肉体に剛力を、精神に冷徹を。』

『そして我が運命をここに定めよう。』

『其は、女神の無垢な加護。』

俺が詠唱を完了しきると同時にブロック群が俺に落とされ、俺のいる場所にブロックの山が完成された。

「急に止まったのは分かんないけど… 一番厄介だった彼が最初にいなくなっちゃったか」

「まるであいつが死んだみたいな言い方だな？」

「いくらあのフィジカルでも、あれを食らって無事なやつはいないでしょ？」

「そうか… なら教えてやるよミレディ・ライセン」

ブロックの山から地響きが聞こえる。

「俺の親友… 三星弓人は」

ブロックの山の内側から何か衝撃が生まれている  
「その程度じゃ死なねえよ」

そして、ブロックの山が内側から吹き飛ばされた。

### 34星：迷宮最後の試練【下弦】

「さあ、最終ラウンドと行こうか」

【アルテミス・アグノス】が間に合い。無事ブロックの山から出ることができた俺に、ミレディは驚愕の声を上げる

「はあ!? え!? 何その光!?!」

「俺の魔法だ。内容は企業秘密つてことで」

「魔法う!? そんな魔法見たことも聞いたこともないんだけど!」

「ま、この世界にはない魔法だからな... そんなことより」

俺はハジメたちがいる場所へ跳ぶ。ランクアップの影響もありヒュドラの時とは比にならないスピードで瞬時に到着した。

「ユミトさんなんで光ってるんですか!?!」

「それはな... シア」

「... 偉大な男というものは輝いて見えるもの」

「そういうことだ」

「え... 本当にどういうことですか...?」

「お前ら茶番は良いからやるぞ!」

ミレディの方を見ると、彼女は既に修復を完了しており。更に配下のゴーレムたちも従えている状態であった。

「ごめんね、君たちのことを侮つてたよ。だから私も文字通り全身全霊をかけて迎え撃つ」

「今までは本気じゃなかったと?」

「いや、本気だったよ... けどそれだけじゃ君たちには勝てそうにな  
い」

すると、ミレディの周囲に待機していたゴーレムたちが分解されていく。そして、粒子となったゴーレムたちはミレディを覆うように集まっていく。

そして、漆黒の鎧がミレディを覆った。

「これが私の奥の手、あのゴーレムたちを圧縮させたアザンチウムにも引けを取らない鎧」



「更に今までゴーレム操作に使っていた魔力も自身の為に使えるって訳か」

「その通り、更に元々付けているアザンチウムの装甲による三重防御を君たちは突破できるかな？」

ミレデイの言葉に、俺たちは鼻で笑い答える。

「愚問だな」

「1人なら不可能かもしれないませんが」

「…… 私たちなら勝てる」

「最後の勝負だ、ミレデイ・ライセン！」

「そっか…… ふふっ。君たち最高だよ！さあ、決着を付けよう！」

その言葉と共に、ミレデイは全力の右ストレートを俺たちにぶつけようとする。ゴーレムたちを操っていた分の魔力が攻撃に利用されているのか今までよりも速度が桁違いに上がっている。

「もう一度俺がやる！」

「待て弓人！……は俺が迎え撃つ！」

その言葉と共にハジメは新たな兵器『パイルバンカー』を取り出しミレデイの拳に合わせるように叩き込む。ぶつかり合った衝撃と共にパイルバンカーの先から漆黒の杭が飛び出そうとする。

「なるほど…… 確かに良い武器だ！けど、私の方が一枚上手だよ！」

「何?！」

杭がミレデイの拳に刺さるかに思った瞬間、ハジメは突如後方へ飛ばされた。

おそらく、今まで使ってきた固有魔法の応用なのだろう。ハジメは落下しそうになるが間一髪アンカーを近くの足場に設置して復帰する。

「けど…… これで隙ができた！」

「俺に任せなあ！」

俺はミレデイの体を移動しながら、各関節部分に1撃叩き込む。強化された俺の攻撃に、黒い装甲が軋み破片が飛び散る。

「この鎧を砕くなんて…… けど！まだ2つ目の装甲が残ってる！」

「それに対しても対策はできている。俺が殴った場所を見てみな」

ミレディは反射的に俺が殴った部位を見る。そこには破損した箇所一つ一つに蒼色の矢が突き刺さっていた

「これは… けど色が違う!?」

「俺からのプレゼントだ『プリミラ』!」

俺が矢の名を叫ぶと、刺さっていた矢から大量の水が放出された。水はミレディの全身を覆うように流れるが、大したダメージにはなっていない

「まさか風魔法以外にもあるとはね… けど、こんなのにゃ私は倒せないよ!」

「ああ、知ってるさ。だから…」

「…… 私の出番『凍枢』!」

跳躍したユエが、ミレディに魔法を放つ。ミレディの全身は即座に凍りつき。近くに浮遊していた足場へ墜落する。

「なっ!? 何で上級魔法が!」

「…… ユミトが水を出してくれたお陰… それでも魔力のほとんどを使ったけど」

「なるほど考えたね! けどこの程度ならすぐ壊せる!」

ミレディは無理矢理体を動かそうとする。表面の氷が所々がひび割れ始め動けるようになるのも時間の問題だろう。

だが、後はあいつらの仕事だ。

「やっちまえ! ハジメ!」

「うおおおおおおお!!!」

上空から、パイルバンカーを手にしたハジメがミレディ目掛けて落ちて行く。そして、ミレディの核がある心臓の部分へパイルバンカーを叩き込んだ。

「ぐぬうううう!!!」

そしてミレディはまだ凍っている左手を無理矢理持ち上げ、ハジメを目掛けて殴りかかる。ハジメには直撃はしなかったもののパイルバンカーに拳が当たったため。杭を残した状態で完全に破壊されてしまった。

「まだまだ! シア!」

「やああああああ!!!」

シアはミレディに突き刺さったままの杭目掛けてドリユツケンを叩きつける。

杭を叩きつけたことで甲高い音が空間を響かせる。杭が深く食い込むが、まだ止めには至らない。

「1回で駄目なら… 何回だって!」

「そう何度もさせないよ!!!」

ミレディは再び固有魔法でシアを吹き飛ばそうとする。シアは懸命に堪えるが、ついに上空へ投げ飛ばされてしまう。

その瞬間

「シアー手をー!」

「ハジメさん!」

ミレディにアンカーを設置したハジメがシアの下へと飛び込んだ。そしてシアの手を取り抱き寄せるとミレディの下までワイアーを巻き取り着地する。

そして、シアとハジメは再び投げ飛ばされないよう懸命に耐えながら2人でドリユツケンを握り振りかぶる。

そして

「はああああああ!!!」

「負けたああああ!!!ちくしよおおおお!!!」

ドリユツケンを叩き込みミレディの核を破壊した。

### 35星：ライセン大迷宮攻略完了

辺りに粉塵が舞い、地面にはヒビが幾筋も刻まれている。激突した足場が大きなクレーターを作っており、その上に胸部から漆黒の杭を生やしたミレデイが横たわっていた。

「ハア… ハア… つ、ハジメさん！」

「ああ、俺たちの勝ちだ」

ミレデイの上で、肩で息するシアとそれを支えているハジメの下に歩み寄る。そして、俺の魔法が切れたのか次第に光が収まっていた。

「いてて… ランクアップしてもまだ反動ありか」

「… ユミト大丈夫？」

「ああ、痛みはするが動けないってほどじゃないからな」

心配してくるユエを安心させるように頭を撫でていると気持ちよさそうに目を細めている。そしてハジメの方を見ると、ハジメもシアの頭を撫でていた。

「え？ハジメさん… これって」

「約束だからな… 終わったら褒めるって。ありがとなシア。お前がいてくれたお陰で俺たちは勝てた」

「… ふえ」

「ふえ？」

「ふえええええええええん!!!」

最初は呆然としていたシアが突如大声をあげながら泣き始める。ハジメは嫌がる事をしてしまったのではないかと混乱してしまう。

「シア!? えっと… もしかして嫌だったか!? いつも弓人がユエにしているみたいにしたんだが…」

「違うんです… 嬉しかったです。けど… こわかったよおおおとおお!! 私もう死んじゃうかってええええ!!!」

当然だろう。彼女にとって初めての旅がいきなり七大迷宮の攻略なのだ。罨にかかった時も自身を責めていたこともあり、明るく振る

舞っていても実際はギリギリだったのであろう。

「そうだよな……いきなり七大迷宮の攻略だから色々堪えるよな」

「ぐすつ……私本当に怖かったんだからね！」

「すまん……ってシア、お前口調が」

「え……あ！すみません！つい素が出てしまつて……」

「いや……それは別に良いんだけど」

普段礼儀正しい彼女の素のギャップを見て、ハジメは頬を染めて頭を掻いている。すると、倒されたはずのミレディの目が光り喋り始めた。

「あははは……本気の本気でやったのに負けちゃったかあ……」

「っ！シアー！」

「は、はい！」

「構えなくて良いよ……もう動かないし、もうじきこの機体の活動も終了するから」

「………ミレディ、死んじやうの？」

「もしかして、心配してくれるの？」

「………ん、ひとりぼっちの辛さは……私も知ってる」

「そっか……ありがとね、けど大丈夫この先の部屋にあるもう一つの機体に魂を移動させるから」

「魂の移動？それも神代魔法の1つか？」

「それについても、先の部屋で話すよ。」

その言葉と共に、ミレディ……ゴーレムの光が消える。すると、何処からか足場が飛んできて俺たちの前で停止する。俺たちがその足場に移ると、再び移動を開始した。

そして、しばらく移動をしているとオスカー・オルクスの住処にもあった七つの文様と同じものが描かれた壁があった。そこへ近づくと、壁がひとりでに移動してその先には

「やつほー、さつきぶり！ミレディちゃんだよ！」

随分可愛らしいゴーレムに魂を移したミレディがいた。

「………可愛い」

「ありがとーこれ結構お気に入りだから嬉しいねえ！」

「……抱きついてもっ？」

「どうぞー！」

そのゴーレムの見た目を気に入ったユエがミレディに抱きつく。ミレディも久々の人とのふれあいのせいかな嫌がるそぶりがない。

「それと、攻略した君たちにこの迷宮の神代魔法を授けるね！」

「話が早くて助かる。どうやったら貰えるんだ？」

「良い質問だね白髪くん！その方法はこの魔法陣の中に入ってくれたまえー！」

「オルクスの時と同じか」

「そゆことー！じゃあいくねー」

ミレディが両手を広げると、足元の魔法陣が輝き始める。オスカー・オルクスの時と違って記憶を探られるようなことは無いらしい。直接脳に神代魔法の知識や使用方法が刻まれていく経験が初めてのシアは体を跳ねさせていた。

「多分みんな勘付いていると思うけど私の神代魔法は『重力魔法』！上手く使つてね……つて言いたいんだけど……うくん？」

「どうした？俺の方を見て」

「いや……なんでか君には授けることができなかつたんだよねえ……なんでだろう？」

「オルクスの時もそうだったから気にしなくて良い」

ミレディはしばらく首を捻っていたが「ま、いっか！」と切り替えて今度はハジメたちの方へ向く。

「君たちは問題なく渡せたから大丈夫だよ！この中だと金髪ちゃんだけが適正あるね！」

「……ミレディみたいに使える？」

「もっちりろん！白髪くんはびっくりするくらい適正なし！ウサギちゃん……体重の増減くらいはできるかな？」

「本当ですかー！」

「う……うん、えらい食いつき良いなこの子」

やはり、女性的には体重は気になるらしい……体重が変化できても体型が変わらないことは伝えるべきだろうか。そんな事を考えてい

ると

「なあミレデイ、攻略の証をくれないか？俺たちは故郷に少しでも早く帰りたい…。だから他の迷宮攻略にすぐにでも行きたいんだ」

「あつ…。そ、そうだよねー！ごめんごめん、これがこの証だよ！」

ミレデイは一瞬表情を暗くしたかに思ったら、すぐさまいつもの陽気な雰囲気に戻った。そして自身の懐から指輪を取り出すと、それを俺たちに渡す。

「………… ユミト」

「ユエ… そうだな」

ミレデイから離れ、俺に対して何処か訴えるような視線を向けるユエに、俺はユエの頭を撫でながらハジメに話しかける。

「なあハジメ、ちよつとここで休んでいかないか？」

「弓人？ どうしてだ？」

「いやあ、さっきの魔法の反動で今全身筋肉痛なんだよ。それにユエもさっきの戦いで魔力のほとんど使っちゃったからさ。ミレデイ、ここで休んで行ってもいいか？」

「え、いいけど…」

「後、休んでいる間俺たちの話し相手になってくれよ」

「えつ…」

「言っただろ？話し合いでも構わないって。それこそ、喉が枯れるまでな…」

「~~~~！ うん！」

こうして俺たちは、さまざまな話を話した。俺たちの世界の話から、他愛無い話まで。その時のミレデイはとても楽しそうであった。

「いやあ！こんなに楽しいのは久しぶりだよお！」

「なあミレデイ、こんなに鉱石貰っても良いのか？」

「当然！ハジメの武器を壊しちゃったからそのお詫びって事で！」

「なら、ありがたく受け取っておくよ」

そう言っつてハジメは、ミレデイから『感応石』を始めとした様々な鉱石を受け取り、宝物庫へしまっていく。

「弓人、筋肉痛はもう大丈夫か？」

「ああ、大分落ち着いた。ユエももう行けそうだな」

「……ん、完全回復」

「そっか……。あのさ、1つ我儘を言ってもいいかな？」

どこか遠慮しているミレディが、俯きながら呟くように言った。

「今度ここを通った時……遊びに来てほしいなく、なんて……」

「ん？良いぞ別に」

「あはは、やっぱり無理だよねって……。良いの？」

「俺たちが来る時に、すぐにここへ行けるようになってればな」

「そ、それは大丈夫！その証があつたら直通ルートに繋がるようになってるからー」

「なら、問題ねえよ」

「けど……なんで？」

断られると思っていたのか、心底不思議そうに聞いてくるミレディ。それに答えたのはユエであった。

「……友達だから」

「ユエ……」

「……また抱きつきに来るね」

「ぐす……うん！」

ゴーレムのため涙は流れていないが。ミレディは感極まつてユエに抱きつく。ユエはそれを受け止めミレディの頭を撫でている。

「んじや、ちよつと行ってくるわ」

「気をつけてね、あのくそつたれは絶対君たちの下へ来る。あいつはそんな奴だ」

「忠告ありがとな……で、ここからはどうやって外へ出るんだ？」

「……えつとお、怒らない？」

「なんで怒ることになるんだ？」

ミレディは目線を泳がせ、とても言いづらそうに口を開ける。

「いや……ね、こここの外に出る方法って……侵入者を追い出すのかねてて……」

「おいミレディ……それって」



「はい… ユミトの想像してる通りです」

そう言つてミレデイは、いつの間にか天井から垂れていた紐を引つ張る。

その瞬間

俺たちの足元に穴が開き、壁から大量の水が流れ込んできた。

「ミレデイー！てめえ！」

「ごめえええええん!!!今度来た時にはちゃんとした帰り道用意するか  
ら許してええええ!!!」

紐にぶら下がりながら、叫ぶように謝罪するミレデイに。俺たちは  
ため息を吐きこのまま激流に身を任せる。すると、何かに引つ張られ  
る感覚が俺たちを襲う。

「お詫びと言つてはあれだけど… 私からのプレゼント！」

「きやあ！」

「シア… ってぶほ！」

「… きやー」

「おっと、ユエ大丈夫か？」

ユエは俺の、そしてハジメはシアの胸元に飛び込むように引き寄せ  
られてしまう。

「外に出るまでは続くようにしてるから存分に堪能してって！」

「ミレデイ、ナイスです！」

「… グツジョブ」

「もがかがが！」

ハジメは顔を真っ赤に染め、抗議しようとするが。シアが全力で  
ホールドして抜け出せない。そんなライセン大迷宮の最後は、オルク  
スの時とは真逆に何処か締まらないオチになった。

|||||

三星弓人 Lv. 6

力： I : 10 ↓ I : 45

耐久： I : 5 ↓ I : 25

器用： I : 7 ↓ I : 32

俊敏： I : 6 ↓ I : 30



### 36星：人工呼吸

現在、俺たちは激流に身を任せて密着している。

ミレデイの住処から流されて地下トンネルのような場所で息を止め……約1名は違う意味で息ができていないが水中を進んでいる。

すると、ハジメをホールドして密着状態を堪能していたシアが視界の端に何かが見え、そこに顔を向けると。

人面の魚と目があった。

人面……しかもおっさん面の魚と目が合う。そんな情報量の多い状態に、シアは背景に宇宙が見える状態で固まっていると

(ちっ……何見てんだよ)

「ぶふおあ?！」

突如シアの脳内に舌打ち付きの声が響いた。思わぬ不意打ちにシアは盛大に息を吐き出してしまった。

そしてハジメは、突如シアの抱きしめてくる力が弱まったため顔を真っ赤に染め睨みつけた瞬間、シアは意識を失っていたため。大慌てで抱き寄せていた事を前方で流されていた俺とユエは知るよしもない。

ここは、ブルツクの町とその隣町の中間にある街道。そこに1台の馬車と数頭の馬が進んでいた。

「ソーナちゃあくん、もうすぐ泉があるから其処で少し休憩にするわよお〜」

「了解です、クリスタベルさん」

数名の冒険者に護衛されながら、弓人たちが泊まった『マサカの宿』の看板娘ソーナとシアの服を購入した服飾店の店長クリスタベルという漢乙が隣町からブルツクの町へと帰還していた。

ブルツクの町まであと一日といったところ。クリスタベル達は、街道の傍にある泉でお昼休憩を取ることにした。

泉に到着したクリスタベル達が、馬に水を飲ませながら自分達も泉

の畔で昼食の準備をする。ソーナが水を汲みに泉の傍までやって来た。そして、いざ水を汲もうと入れ物を泉に浸けたその瞬間、

突如、泉の中央が泡立ち一気に水が噴き出始めた。

「きゃあー！」

「ソーナちゃん！」

悲鳴を上げて尻餅をつくソーナに、クリスタベルが一瞬で駆け寄り庇うように抱き上げ他の冒険者達のもとへ戻る。そして全員が警戒する中、ついに水泡の正体が出現した。

「ぶはあー！」

「…… けほつけほっ」

「おいシアー！しっかりしろー！」

「……………」

魔物だと警戒していたその正体はただの人間だったことに、全員が呆然としている中、その人物に見覚えのあるソーナは驚きの声を上げた。

「師匠！なんでここに!?!」

「ん?… つてお嬢ちゃんじゃねえか。ていうことはここはブルツクの町か?」

「い、いえ… ここはブルツクの町と隣町の間にある泉です」

「あ… それじゃすぐに風呂は入れそうにないなあ…」

そんな緊張感のかけらもない雰囲気、冒険者とクリスタベルはため息と共に脱力した

—————

「シアー！ くそ… 息をしてねえぞ」

「………… シアー！お願いだから目を覚ましてー！」

俺たちは水面から上がり、意識のないシアを仰向けに寝させる。シアは、顔面蒼白で白目をむき呼吸と心臓が停止していた。よほど嫌なものでも見たのか、意識を失いながらも微妙に表情が引き攣っている。

「ユエ、人工呼吸を！」

「………… じん…何?」

「あゝ、だから、気道を確保して…」  
「??？」

「くそ… この世界には心肺蘇生がないのか」

ハジメは覚悟を決め、シアの口に自身の口を合わせ人工呼吸を開始した。

「ハジメ!? 急に何を…」

「大丈夫だユエ。あれは人工呼吸、息をしていない奴にあんな風に空気を送り込んで呼吸させる方法だ」

「… あれでシアは助かるの?」

「手遅れじゃなかったら… 俺たちは知識として知っているが実際にやるのは初めてだろうしな」

何度目かの人工呼吸のあと、遂にシアが水を吐き出した。水が気管を塞がないように顔を横に向けてやるハジメ。体勢的には完全に覆いかぶさっている状態だ。

「ケホツケホツ… ハジメさん?」

「おう、ハジメさんだ。まったくこんなことで死にかけてんじやつ!」

ハジメが安心した、表情をしていると突如ハジメは突き飛ばされる。そしてシアは顔を真っ赤に染めて自身を抱きしめるようにしながら後方を後ずさる。

「なななななな… 何してるんですか!? 人が抵抗できないからって!!!」

「あれは歴とした救命措置で… って、お前、意識あったのか?」

「いえ… 意識はなかったですけど分かるんです… ハジメさんが私に… キキキキキスしたって!」

「あれはあくまで救命措置であって、深い意味は…」

「はあ!? 寝ている人にキスする救命措置がどの世界にあるのよ!」

「俺らの故郷にはあったんだよ!」

「だ… だからって! 私初めてだったんだけど!!!」

「そ… そんなもん俺もだよ!」

「え… け、けど! あんなのが初めてなんて嫌! やり直しよ!」

「ああ良いぜ! やってやるよ!」

顔を真っ赤にして言い争いしていると、突如シアは目を瞑り唇を突き出す。ハジメは売り言葉に買い言葉と言わんばかりにシアの肩に手を置く。そして……視線を感じたためそこを見ると。

「師匠！私たち凄いものを見ています！」

「あら、若いって良いわね」

「……大胆」

「抱けー！抱けー！」

野次馬根性丸出しで俺たちが見ていた。ハジメは一瞬固まるとわなわたと震え出し、腰のホルスターからドンナーを取り出した。

「てめえら！何見てんだ！」

「やっべバレた！逃げるぞお前ら！」

「……ちっ」

「お、お邪魔しましたあ！」

「ごめんなさいねえ」

「逃げてんじやねえ！てめえら皆殺しだああ!!!」

全力で逃げる俺たちを、ハジメは顔を真っ赤に染め上げ追いかける。取り残されたシアは半目でハジメの背中を睨んでいた。

「……いくじなし。けど……そっか、ハジメさんも初めて……

えへへ」

### 36. 5星：押して駄目なら押し倒せ

俺たちはあの後、ソーナたちが乗っていた馬車にさせてもらい。ブルックの町へ帰還した。そして、マサカの宿に直行して風呂に入る手続きを行う。

その後、レディーファーストという理由でユエとシアを先に入浴させて、俺たちは彼女たちが出るのを待っているのだが……

「なあ……なんで鎖で俺を縛るんだ？」

「こうしてないと絶対に覗きに行くだろう」

「覗きは男の浪漫だと何度も……待て俺が悪かった。だからオルカンをしまえ宿が吹き飛ばす」

オルカンの銃口を向けてくるハジメに早口で謝罪するとハジメは呆れた表情を俺に向けてくる。

「お前の覗きへの執念はどこから来るんだよ……」

「そんなことよりも……お前どうすんだ？」

「覗きをそんなことで済ますな……どうするっていうと？」

「シアのことだよ。結局お前は どう思ってたんだ？」

ハジメはしばらく黙っていたが、頬を赤くして頭を掻きながら答える。

「好き……何だと思う」

「ハッキリしねえなあ」

「仕方ないだろ……初めての経験なんだから」

「けど、好きなら付き合ったりしないのか？両思いなんだし」

あの幼馴染のこともあるが俺は鼻負するつもりはない。ハジメもシアも大事な仲間だからこいつらの想いは尊重してやりたい。

「考えちまうんだよ……なんで俺なんかをつて」

「あんまり自分を卑下すんなよ。そのお前を好きだって言ってるシアに失礼だ……けど、焦って答えを出そうとするなよ。これは持論だが流されて付き合うなんて長続きしないからな」

「……分かった。ちよつと考えてみる」

俺の言葉に素直に従うハジメ。

この異世界で様々な経験をしているが、ハジメはまだ思春期の男子高校生だ。恋愛関係で相談できる人がいるのは有難いのだろう。

「弓人ってやっぱモテたりしたのか？」

「やっぱってなんだよ？ 残念ながら天之河と喧嘩してばっかで女子からは嫌われてたよ」

「それにしてもこう言う話に詳しいな」

「単純に人生経験の差だよ。前世含めると俺は40代だしな」

「そういえばそうだったな… じゃあ前世でモテたのか？」

「それも残念ながら。アルテミスは『恋愛アンチ』って言われるくらい潔癖症だったし」

「そんな女神の眷属なのになんで覗きをしようとすんだよ…」

「どこか馬鹿を見るような視線を向けるハジメに向けて、俺は断言する

「憧れは… 止められねえんだ！」

「世界一最低な名言の使い方をすんじゃねえよ！」

一方、入浴しているユエとシアは…

「本当、ユエさんの髪ってさらさらで綺麗ですよね」

「… シアの髪はふわふわで気持ちいい」

ガールズトークに花を咲かせていた。先に入浴する際、弓人たちのことを考え早く出ると言ったのだが。ゆっくりで良いと言われたため、それに甘えさせて貰っている。

「はあ… ハジメさんのいくじなし」

「… ハジメは照れ屋だから仕方ない」

「けどお… あんなファーストキスはあんまりですよお…」

「… よしよし」

そして話題は先ほどの人工呼吸の件に変わっていた。シアも年頃の少女のためファーストキスには憧れがあったのだが、それがあんな色気もない状態で奪われるには納得していなかった。

「それにハジメさんも、私があんなにアタックしてるんだから少しく



らいデレてくれたって良いのに… 私って魅力無いのかなあ」

「…… シアはかわいいよ」

「ありがとうございます… やっぱリアタックの仕方を変えた方が良いんでしょうか？」

頭を悩ませるシアを見ると、ユエは昔彼が言っていた言葉を思い出した。

「…… 昔ユミトが言ってた。『押しで駄目なら押し倒せ』」

「お、押し倒せですか!?!で、でもそれは大胆すぎるというか変態だと思われたら嫌というか…」

「…… 名前の呼び方を変えるとか？」

「あ、でもそれで上手くいったらその勢いで…… って呼び方?押し倒すのにな?」

「…… 押し倒すって誰を？」

「あ、ごめんなさい… 私の心が穢れていたようです…」  
「??」

自己嫌悪しているシアに、どうしてそうなったか分からない様子のユエは首をかしげる。

そして、自己嫌悪から回復したシアが先ほどのユエの言葉に再び反応する

「呼び方を変えるですか… ハジメ… くん。け、結構ドキドキしますね」

「…… いっそ呼び捨て」

「呼び捨て!?えつと… ハジメ… ……!無理!恥ずかしい!」

「…… 頑張れ、これでハジメもイチコロ」

「い、いちころ… よくし、やるぞ私!」

「……」

「んで、今後の予定はどうするよ」

「そうだな… 迷宮の場所はミレディから聞いたし。暫くはここを拠点にして装備を整えたい。貰った鉱石でお前の剣も作りたいしな」

「了解。2人が来たら改めて言ってくれ」

ハジメの恋愛相談もどきも終わり、今後の予定を話していると。風

呂から上がってきたユエとシアが戻ってきた。

「……ほら、シア」

「は、はい……えっとお」

「ど、どうしたんだ？」

先ほどの話で自身の恋心を言葉にしたことで、ハジメはシアを意識してしまい顔が見れていない。シアも風呂上がりとは違う理由で頬を染め、ハジメの前でモジモジとしている。そして、

「お、お風呂上がったよ……ハ、ハジメ……」

「……!?」

呼び捨て、更に素の口調で話しかけてくるシア、それによりハジメの顔が一瞬で真っ赤になった。

「あ……やっぱり嫌でしたか?」

「い、嫌じゃ無い!」

顔が赤く染まったのを怒ったためと勘違いしたシアは、今にも泣きそうな顔でハジメに聞く。するとハジメは、顔を真っ赤に染めたまま即座に否定した。

「嫌じゃ無いから……いつもそうして欲しい……」

「……うん!じゃあ」

花が咲くような表情を浮かべたシアは、そのままハジメに近づきその耳元で

「ハジメ。大好きだよ」

「なあ!？」

そう囁くとハジメの顔は更に赤く染まる。それを見たシアは先ほどとは違い、どこか小悪魔じみた笑顔をハジメに見せていた。

## 弥生：黒竜と海人の少女 37星：次なる目的地へ

現在俺は、情報収集のためにブルツクの町にある市場へ足を運んでいる……というのは建前で。

ハジメはミレディから貰った鉱石で新しい兵器の作成。シアとユエはガールズトークに花を咲かせているせいで俺だけが手持ち無沙汰だったためである。

俺は適当にぶらつきながら、目に入った青果店へと近づいていく。「よう、儲かっているか？」

「おおあんちゃん。今日は彼女と一緒にじゃ無いのか？」

「悲しいけどユエとはそんなじゃねえよ……。ん？なんかいつもより品揃えが良いな」

「おっ、やっぱり分かるかい？これも『豊穰の女神様』の賜物だよ」「『豊穰の女神様』？なんだよそれ」

聞きなれない単語に反応すると、青果店の親父は待つてましたと言わんばかりに話し始めた。

「仕入れ先から聞いた話なんだけど、希少な作農師の天職を持った女性が各地の農村や未開拓地に足を運んでいるんだってよ」

「それで流通量が増えたから、ここの品揃えも良くなったって訳か」

「そういうことだ。それでその女性がえらい別嬪さんらしいから誰かが『豊穰の女神様』って言い始めてそれが広まったらしい」

「別嬪さんねえ……」

俺は作農師で1人心当たりがいたが、別嬪さんという言葉に人違いだと結論をつける。あの人は確かに容姿は整っているが別嬪というより可愛らしいの方に部類されるだろう。

「ふーん……。他になんか珍しい話とか無いか？」

「珍しいねえ……。そういえば『ウル』って町に珍しい料理を出す店があるって話を聞いたな」

「珍しい料理ねえ…どんな料理なんだよ」

「たしか麦とは違う穀物を使った料理って聞いたな…」

「っ！ それって『米』じゃないか!？」

「おおそれだ! 『コメ』だ 『コメ』」

それを聞いた瞬間、俺は親父に『ウル』の場所とその店の名前を聞き。ハジメたちのいる宿へと急いで戻った。

「…よし、新しい兵器も弓人に頼まれてた剣も完成したな」

「終わった？ じゃあさハジメ、デート行こうよ!」

集中していた作業も終了し、一段落ついていたハジメにシアが後ろから抱きついてくる。

「デ、デート!? いい…いや、弓人が戻ってきたらこいつを渡したいし…」

「あ…そ、そうだよね…ごめん」

「い、いや!別にシアとのデートが嫌なわけじゃ無いぞ!むしろ行きたいといかなんというか…」

「…ふふふ、ごめんごめん!ちよつとからかっただけで気にしてないよ」

「なっ…お前なあ!」

「きやー!たすけてー、おそろわれちやーう!」

「…ふふつ、2人とも楽しそう」

シアがハジメに対して言葉を崩して以降、こうしてシアがからかってハジメもどこか満更でもない距離感になっている。それをユエは微笑ましそうに見ていると突如部屋の扉が勢いよく開けられた。

「ハジメ! 『ウル』に行くぞ!」

「うお!?びつくりしたあ!」

「…どうしてウルに行くの?」

「それはなユエ…ウルには米を出す店があるらしい」

「本当か弓人!？」

俺の言葉にハジメが反応して、大きく目を見開く。

「ああ、市場の奴に聞いた話だと確かな筋らしい」

「ねえハジメ、コメって何？」

「米っていうのは、俺たちの故郷で主食だった食いもんだ」

俺たちが故郷で食べてたもの、その言葉に2人は反応し興味を持った。

「…… 食べてみたい」

「そうですねユエさん。ユミトさん、ウルにはどれくらいかかるんですか？」

「そうだな…… 話によると馬車で6日かけて『フューレン』に行つて。その後更に3日ほどかければ到着するらしい」

「じゃあ、バイクでも2、3日かかるかもな…… よし、準備を済ませて明日行こう」

「そうこなくっちゃな」

この町へ来てから1週間、この冒険者ギルドには世話になったため。礼も兼ねて顔を出しにいくと。

「おや？ 今日全員いるのかい？」

「ああ。明日にでも町を出るんで、あんたには色々世話になったし、一応挨拶をと。ついでに、目的地関連で依頼があれば受けておこうと思つてな」

ハジメの言葉に、受付の女性…… キャサリンが驚いた顔をし、俺たちを見ていた周囲の男性冒険者たちに動揺が走った。

「な!? それは本当か!? 同志ユミト!」

「あんたがいなかったら! 女湯俺たちの夢の覗きはどうなる!」

「頼む! 行かないでくれえ!」

懇願する男性冒険者たちの前に立ち、俺は口を開く。

「お前たち…… 俺は新たな『浪漫』を探しに行く! だからここでお別れだ!」

「二同志ユミトおおおおお!!」

「私はあの子が捕まらないか心配で仕方ないよ……」

「俺が殺してでも止めるから安心してくれ」

馬鹿を見る目を向けてくるハジメと、女性たちを極力無視して。俺

は受付に顔を戻す。キャサリンは何か言いたげだったが、言っても無駄だと感じたのかため息をして話を交える。

「で、何処に行くんだい？」

「ウル、そのためにも1度フューレンを経由する」

「フューレン・・・なら丁度いいのが1つあるよ」

キャサリンはその言葉と共に、1枚の依頼書を見せてくる。その内容は、商隊の護衛依頼だった。

「空きは丁度2人だけど、受けるかい？」

「連れを同伴するのはOKなのか？」

「ああ、問題ないよ。あんまり大人数だと苦情も出るだろうけど、荷物持ちを個人で雇ったり、奴隷を連れている冒険者もいるからね。まして、ユエちゃん、シアちゃんも結構な実力者だ。2人分の料金でもう2人優秀な冒険者を雇えるようなもんだ。断る理由もないさね」

「そうか・・・ どうする？弓人」

「うーん・・・ どうすつかなあ・・・」

正直金には困っていないし、移動するならバイクを走らせた方が早い。そう考えていると。袖を引っ張られ、目を向けるとユエがこちらを見ていた。

「・・・ 急ぐ旅じゃない」

「そうですね。ハジメ、私こういう依頼やったことないからやってみたいな」

「とのことだが弓人、依頼受けてもいいか？」

「良いぞ、別に俺も急いでいる訳じゃねえしな」

「決まりかい？先方には伝えとくから、明日の朝一で正面門に行つとくれ」

「了解した」

ハジメが依頼書を受け取ると、キャサリンは何かを思い出したかのように1通の手紙を渡してきた。

「これは？」

「あんたたち、色々厄介なもの抱えてそうだからね。町の連中が迷惑かけた詫びのようなものだよ。他の町でギルドと揉めた時は、その手

紙をお偉いさんに見せな。少しは役に立つかもしれないからね」

「お偉い人にとって… あんた何者だよ？」

「悪いけど詮索は受け付けないよ。良い女には秘密が付き物さね」

「ははは！ 違いねえ！」

「素直でよろしい！ 色々あるだろうけど、死なないようにね」

謎多き、片田舎の町のギルド職員キャサリン。ハジメ達は、そんな彼女の愛嬌のある魅力的な笑みと共に送り出された。

こうして俺たちは、世話になった人たちへ挨拶に回った。

――  
おまけ（没茶番）

「えー!? 師匠行っちゃうんですか!？」

「そうだ、だからここに泊まるのも最後だ」

「そんなあ… 私まだ師匠に聞きたいことが沢山あるのに…」

「我が弟子、お前には俺の全てを教えた。後はお前の努力だ」

「師匠… けど、そこのお兄さんのせいで1度も成功してないですよ」

「お前にはこの言葉を教える… 『手に入らないからこそ。美しいものもある』」

「師匠！」

「うーわ、言葉単体で聞くと良いこと言ってるのに、ユミトさんが言う」と一瞬で最低なものになってるよ」

「あいつ… 前世思い出してから色んな意味でぶっ飛んでないか？」

「……ユミト、めっ！」

「あ、はい。ユエさんすんません」

### 38星：護衛任務

「私の名はモットー・ユンケル。この商隊のリーダーをしている。君達のランクは未だ青だそうだが、キャサリンさんからは大変優秀な冒険者と聞いている。道中の護衛は期待させてもらおうよ」

「…もつとユンケル？…商隊のリーダーって大変なんだな」

彼の名前から、某栄養ドリンクを思い出したのかハジメの視線が優しい。だがそんなことを知る由もないモットーは首を傾げている。

「まあ、期待は裏切らないと思うぞ。ユンケルさん、他の冒険者はどこにいるんだ？」

「他の方は馬車の方で待機してますが如何されましたか？」

「ちよつと護衛の打ち合わせにね。そういうことだからハジメ、ちよつと行ってくるわ」

俺はそう言うと、ハジメの返事を待たずに冒険者たちの方へ近づいていく。

「お前ら、今回の護衛の打ち合わせをしたから誰か通行ルート知ってる奴いるか？」

「それなら俺が知ってる。説明するから地図を見せてくれ」

「後は、馬車の外に…」

「交代の時間は…」

地図を囲んで、冒険者たちと話している俺を見て。ハジメとユエは感心したように、そしてシアは信じられないものを見る目で俺を見ていた。

「え？ハジメ、あれ本当にユミトさん？そっくりさんとかじゃなくて？」

「お前なかなか失礼だな… あるいは前世は冒険者って言ったからその経験か？」

「でもユミトさんってあれじゃん。考えるより殴ってみろってタイプじゃないの？」

「……ユミトはそんなじゃない」



「あ、ごめんなさい…。ってユエさん、怒ってます?」

3人がそんなことを話しているとは知らない俺は、打ち合わせも終わり3人の所へ戻っていく。

「打ち合わせが終わった。とりあえず今日、俺たちは馬車で待機すれば良い」

「了解だ」

「中々の手際、『青』と聞いていたのですがキャサリンさんが仰った通り優秀な冒険者だ」

「昔取った杵柄だよ」

そして出発する時間が近づいてきたため、俺たちは馬車に乗り込む。

こうして、フューレンまでの護衛が始まった。

現在、護衛開始から3日経過しているが、順調に進んでいる。

今日も、特に問題が発生することなく野営の準備が行われていた。

本来護衛系の仕事をする際、周囲の警戒をしながら食事をとるため、商人とは離れて簡素な携帯食で済ませることが多いのだが。今日はシアが作ったシチューとふかふかなパンを冒険者たちに振る舞っていた。

「カッター、うめえ! ホント、美味いわあ、流石シアちゃん! も

う、亜人とか関係ないから俺の嫁にならない?」

「私はもうハジメのものだから嫌です」

「ホント兄ちゃんが羨ましいぜ! あんなに可愛くて料理も上手い!

最高の嫁さんだな!」

「嫁!? 待て待てシアとはまだそんなんじゃない」

『『まだ』ってことは時間の問題だな』

「やめろお!」

最初の時は遠慮しがちだった冒険者たちも、今ではハジメを弄るくらいに溶け込んでいる。ハジメは賑やかな食事が嫌いではないため、揶揄われて顔を赤くしているが嫌とは一度も言っていない。

こうして、3日目も平和に過ぎていく。

更に2日経過して、残すところ1日になった日、俺の探知に反応が現れた。

「森の方から魔物の群れが来る。数は100以上か？」

俺の言葉に周囲の冒険者たちに緊張が走る。現在俺たちが進んでいる道は、大陸1の商業都市へのルートであるため、整備が整っており危険な場所ではない。魔物が出る話を聞いても大体は20前後、多い時でも40前後がほとんどだ。

「くそっ、百以上だと？ 最近、襲われた話を聞かなかったのは勢力を溜め込んでいたからなのか？ ったく、街道の異変くらい調査しとけよ！」

護衛隊のリーダー……ガリティマが、いつそ隊の大部分を足止めにして商隊だけでも逃がそうかと考え始めた時、その考えを遮るように提案の声が上がった。

「大丈夫だ。俺たちでやる」

「えっ？」

まるで気負った様子を見せない俺に、ガリティマはつい間抜けな声で聞き返した。

「だから大丈夫だって。俺たちでやるから」

「いや、お前たちは『青』なんだろう!? ただでさえ100という異常な数なんだ! いくら腕に覚えがあると云っても」

「これは見せたほうが早いな……ユエ、頼むわ」

「……ん」

ガラティマを無視して俺たちは魔物たちが来る方向をむく。ガリティマは俺の話を信じていないため、ユエの魔法を放ったあといつでも出れるように冒険者たちに指示をしている。

「あつ……ユエ、魔法打つときには形でも良いから詠唱しとけ」

「……詠唱? ……えいしよう」

「もしかして知らないとか？」

「……大丈夫、今考えた」

「なら良い、接敵10秒前だ」

ユエは右手を森の方へ向けると、唄うように詠唱を開始した。

『彼のもの、奈落の暗闇を月光で照らす』

『古の牢獄を打ち砕き、障碍の尽くを退けん』

『天すら撃ち落とす矢とならん』

『我、最強の片割れなり』

『雷竜』

ユエの詠唱が終わり、魔法が放たれる。その瞬間、詠唱の途中から立ち込めた暗雲より雷で出来た龍が現れた。その姿は、蛇を彷彿とさせる東洋の龍だ。

そしてユエが腕を振り下ろすと共に、雷の龍は魔物の群れがある方向へと襲い掛かる。

その瞬間、轟音が周囲を叩きつけた。

「うわっ!」

「どわああ?」

「ぎやああああ!!」

轟音と龍が爆ぜたことによる光で、全員が耳を押さえ目を閉じる。そして目を開けると、焦土が出来上がっていた。

「…… やりすぎた」

「おいおい、あんな魔法、俺も知らないんだが……」

「ユエさんのオリジナルだってさ、ユミトさんから聞いた龍の話と例の魔法を組み合わせたんだって」

「ユエ、あの詠唱式はなんだ?」

「…… ユミトの真似、嫌だった?」

「嬉しいよ。ありがとな」

頭を撫でてやると嬉しそうに目を細める。周囲が静かなため冒険者たちの方を向くと、そこには目を点にした冒険者たちが次々と再起動し始めた。

「おいおいおいおい、何なのあれ? 何なんですか、あれっ!」

「へ、変な生き物が…… 空に、空に…… あっ、夢か」

「へへ、俺、町にいたら結婚するんだ」

「動揺してるのは分かったから落ち着け。お前には恋人どころか女友

達すらいないだろうが」

「魔法だつて生きてるんだ！ 変な生き物になつてもおかしくない！

だから俺もおかしくない！」

「いや、魔法に生死は関係ないからな？ 明らかに異常事態だからな

？」

「てめえ、ユエが異常だとお!？」

「ユミトの旦那!？」

「お前らに教えてやる！ユエは天使、これで全て解決だろうが！」

「二」「なるほど！流石はユミトの旦那!」「二」

「ここにはバカしかいないのか…」

「ユミトさん…」

「…………… 天使、えへへ」

こうして馬鹿たちを連れて、護衛任務は無事遂行された。

39星：冒険者ギルド　フューレン支部にて【上弦】

「あなた達のお陰で無事到着できました。またご縁が有ればよろしく  
お願いします」

フューレンに入るために、門の行列に並んでいると。モットーが一  
足先に感謝の言葉を俺たちに言ってきた。

「依頼だからな。まあ気にすんな」

「それでもですよ。お嬢さんのお陰で馬車を捨てたりせず済みまし  
た。ありがとうございます」

「……ん、どういたしまして」

「では、こちらが今回の報酬となります。」

モットーはそう言いながら報酬の入った袋を渡してくる。俺はそ  
れを受け取り中身を確認すると、依頼者に提示されていた額より多く  
入っていた。

「何か多くねえか？」

「お連れ様の分、色をつけさせていただきました。流石に4人分は  
我々も生活があるので入っていませんけど……」

「いや、十分すぎる。悪いな何から何まで」

「なら、そのアーティファクトを手放すことがある際、ぜひ我々に売っ  
ていただけると幸いです」

「商魂逞しいねえ……覚えておくよ」

「後、お嬢さんの魔法……竜を模したとおっしゃってましたが教会に  
知られると色々と面倒になりますのでお気をつけて」

「……ん」

こうして話していると、ついに俺たちの番になりモットーが手続き  
を済ませる。そして俺たちは無事にフューレンに入ることができた。

「ようこそ、冒険者ギルドフューレン支部へ。案内人のリシーと申し  
ます」

「そうそう、こう言うので良いんだよ」

「ハジメメ？」

「うっ… シア… これは男なら誰しも考えるシチュエーションというか…」

容姿の整っている案内人の女性を見て、ハジメは「これぞファンタジー」と言わんばかりに頷いていると、シアから睨まれ目を逸らしながら言い訳を始める。

「あく、うちの連れが悪いな。宿を探してるんだがお勧めとかあるか？」

「お勧めですか… それなら観光区の宿をお勧めします。少々値は張りますがサービスはかなり良いものとなっています」

「なら観光区の中で、『飯が美味しい』『風呂がある』『責任の所在が明確』な宿はあるか？」

「少々お待ちください… って責任の所在ですか？」

おそらく前半2つの質問はよく聞かれるのだろうが最後の質問は聞かれたことがないのだろうか首を傾げている。

「それ、うちの連れは見ての通り目立つからな。まあ保険だし難しそうなら考慮しないでいい」

俺の言葉に、リシーは俺の側でサンドイッチを頬張っているユエと未だにハジメへ詰め寄っているシアを見て納得する。

「それなら警備が厳重な宿を紹介しましょうか？」

「それでも良いんだが… 欲望に目が眩んだ奴が力づくで！ とかになつたときにこっちも抵抗するからなあ…」

「なるほど、そのための責任の所在ですね。かしこまりました。他になにか要望はございますか？」

リシーがそう言うと、ユエはサンドイッチを頬張るのを止めて要望を言う。

「… ベットは大きいほうがいい」

「ユエさんって、ベットが大きいほうが好きなんですか？」

「… 小さいと落ちそうになる」

「それは俺のベッドに入り込んでくるからだろ」

「… ユミトと寝る」

「だから誤解を生む言い方はやめなさいっての！」

ユエの言葉に周囲から嫉妬の視線が俺を襲う、目の前のリシーも顔を赤くさせながら俺の方をチラチラとみている中、どこか粘着質で気持ち悪い視線を1つ感じた。

ハジメも感じたようで同じ方向を見ると、そこには太っついてお世辞にも清潔とは言えないような男がユエとシアにむけて気持ち悪い視線を向けていた。

「げっ…」

「リシーちゃん。あいつ知り合い？」

「知り合いというかあの方は…」

「お、おいガキども！」

リシーから説明を聞こうとした瞬間、目の前の男は金切り声を上げながら俺たちに話しかけてきた

「100万ルタやるから、その兎をこ、こっちに渡せ。そ、そっちの金髪は、わ、私の妾にしてやるから。い、一緒にこい」

「「あ？」」

いきなり意味のわからないことを言い始めた豚を睨みつけてやると、豚は悲鳴を上げながら後方へ倒れ込む。反応を見るにハジメが『威圧』を使ったのだろう

「ごめんねリシーちゃん。宿は自分の足で探すことにするよ」

「え？ あ、はい」

『威圧』の範囲をあの豚のみにしていたため、要領を得ていない生返事を返すリシーを見て俺たちはここを離れようとする

「そ、そうだ、レガニド！ そのクソガキどもを殺せ！ わ、私を殺そうとしたのだ！ 鬨り殺せえ！」

「坊ちゃん、流石に殺すのはヤバイですぜ。半殺し位にしときましようや」

「やれえ！ い、いいからやれえ！ お、女は、傷つけるな！ 私のだあー！」

「了解ですぜ。報酬は弾んで下さいよ」

「い、いくらでもやる！ さっさとやれえ！」

豚は喚き散らしながら護衛の男を呼ぶ。すると、後方から1人の男が俺たちの方へと歩みを進めていく。

「めんどくさ、さっさと済ませるか」

「弓人、お前がやるのか？」

「あの時の熊公みたいにならんとてから正当防衛してくるわ」

「……待つて」

俺が相手をしようとする、ユエが待ったを掛けて俺の前に出る。

「……私たちがやる」

「え？ ユエさん、私もですか？」

ユエの言葉にレガニドと呼ばれた男は一瞬呆けるが、そのあと大笑いし始めた。

「ガツハハハハ、嬢ちゃん達が相手をするだつて？ 中々笑わせてくれるじゃねえの。何だ？ 夜の相手でもして許してもらおうつて

「……うるさい」ツ！」

レガニドの頬に一迅の風が吹き、皮膚を薄く切る。反応することができなかつたことに冷や汗をかきながら必死に分析する。

「……私達が守られるだけのお姫様じゃないことを周知させる」

「ああ、なるほど。私達自身が手痛いしつぺ返し出来ることを示すんですね」

「……そう。せつかくだから、これを利用する」

そう言つてユエは、先程とは異なり厳しい目を向けているレガニドを指差した。

「まあ、言いたいことはわかつた。確かに、お姫様を手に入れたと思つたら実は猛獣でしたなんて洒落にならんしな。幸い、目撃者も多いし……うん、いいんじゃないか？」

「ちよつと、猛獣つて酷くない？」

ハジメの言葉に文句を言いながら今度はシアが前に出る。そして背負っているドリユッケンを取り出すと、軽く一回転させて構える。

「おいおい、兎人族の嬢ちゃんに何が出来るつてんだ？ 雇い主の意向もあるんでね。大人しくして欲しいんだが？」

ユエから目を離さずにレガニドは、そうシアに告げる。しかし、シ



アはレガニドの言葉を無視するように、逆に忠告をした。

「腰の長剣。抜かなくていいんですか？ 手加減はしますけど、素手だと危ないですよ？」

「ハッ、兎ちゃんが大きく出たな。坊ちゃん！ わりいけど、傷の一つや二つは勘弁ですぜ！」

亜人族最弱で有名な兎人族に言われたことで、剣を抜き怒りを露わにする。そして、ユエを警戒しながらシアに襲い掛かる。

「やあ!!」

「ッ!？」

シアは迎え撃つようにドリユツケンを叩き込む。レガニドは長剣で受け止めた瞬間、予想していた以上の衝撃がレガニドに叩き込まれた。

「重すぎんだろ・・・」

拮抗することも叶わず後方の壁に叩きつけられるレガニド。立ちあがろうと顔を上げた瞬間、椅子やテーブルといったものが宙に浮いているのを見てこの後の展開を察した。

「あく・・・割に合わない仕事はするもんじゃねえな・・・」

「・・・ごめんね」

ユエは一言謝罪を入れたのち、詠唱を開始する。

『舞い散るは花』

『風に抱かれて砕け散れ』

『風花』

宙に浮いていたテーブルや椅子が、一齐にレガニドに叩き込まれ。レガニドは完全に沈黙した。一応生きているようで、体が軽く痙攣している。

「・・・ やりすぎた」

「もう少し、調整の練習がいるな」

「・・・ むう、難しい」

俺はユエの頭を軽く撫でた後、目の前で呆然としている豚の方へ歩いていく。豚は近づいてくる俺を見ると、再び喚き散らし始める。

「ひい！ く、来るなあ！ わ、私を誰だと思っている！ プーム・ミ

ンだぞー！ ミン男爵家に逆らう気かあ！」

「てめえがどこの誰かなんてどうでもいい」

俺は豚の胸ぐらを掴むと一気に持ち上げる。

「ぐえ… は、はなせえー！」

「けどてめえが俺の仲間に手を出すつてんなら… ここで殺すぞ」

最初に睨みつけた時とは比較にならない殺意をぶつけてやると、豚は情けない悲鳴と共に股間を濡らしながら気絶した。

「汚ねえな… リシーちゃん。うるさくしてごめんな」

「いえそんな！… ですが申し訳ございません。一応規則としてあちらで事情聴取にご協力願います」

俺は気絶した豚を放り投げ、ハジメたちの下に戻ろうとした所、状況を知っているリシーは申し訳なさそうにギルド職員たちの方へ手を向ける。

「あ… 良いよ。騒ぎになったんだし仕方ないさ」

「はい… ご協力感謝します」

気にしないように笑いながら返すと、ホツとした様子で頭を下げてくる。

こうして俺たちは、ギルド職員たちの方へ歩いて行った。

### 39星：冒険者ギルド　フューレン支部にて【下弦】

「初めまして、冒険者ギルドフューレン支部支部長のイルワ・チャングだ。今回の件は君たちが来るまでの間に聞いているよ」

「冒険者ランク『青』の三星弓人だ」

「『青』…それは本当なんだね？」

「なんならステータスプレート見るか？」

俺のステータスプレートは壊れていることにしているため、ハジメのプレートを見せる。イルワはプレートを見た瞬間、少し驚いた顔をしたのち、ハジメにプレートを返却する。

「確認させてもらったよ。まさか本当に『青』…しかも非戦闘職の錬成士とはね」

「信じてもらえたか？」

「とりあえずは信じることにしよう…では一応、君たちの口から改めて説明してもらえるかな？」

こうして俺は、先ほどあったことの説明をはじめた。

「ふむ、目撃者から聞いたこととほとんど同じだな…」

「じゃあ、俺たちは無罪ってことでいいか？えっと…ムーオンだっけ？あいつから有る事無い事言われても面倒だ」

「やめてくれ弓人、あんな豚と国民的人気キャラを同じにするな」

「君たちが言ってることはよく分からんが…今回の件はプーム・ミンが発端だ、奴は前から問題行動が目立っていたため処罰が下るだろう…それに」

イルワは話の途中俺が渡したキャサリンの手紙を取り出す。

「先生がわざわざ君たちに渡したんだ。あの人の見る目は本物だし僕は君たちを信用するよ」

「そいつは助かる…って、先生？」

「ん？ 本人から聞いてないのかい？ 彼女は、王都のギルド本部でギルドマスターの秘書長をしていたんだよ。その後、ギルド運営に関

する教育係になつてね。今、各町に派遣されている支部長の5、6割は先生の教え子なんだ。私もその1人で、彼女には頭が上がりなくてね。その美しさ与人柄の良さから、当時は、僕らのマドンナ的存在、あるいは憧れのような存在だった。その後、結婚してブルツクの町のギルド支部に転勤したんだよ。子供を育てるにも田舎の方がいいって言つてね。彼女の結婚発表は青天の霹靂でね。荒れたよ。ギルドどころか、王都が…」

「はあくそんなにすごい人だったんですね」

「…… キャサリンすごい」

「只者じゃないとは思つていたが… 思いつきり中枢の人間だったとはな。ていうか、そんなにモテたのに… 今は… いや、止めておこう」

「お前所々失礼だよな…」

聞かされたキャサリンの正体に感心するハジメたち。想像していたよりずっと大物だったらしい。ハジメは若干、時間の残酷さに遠い目をしていたが。

「おっと、話が逸れてしまったね… 『黒』のレガニドを一蹴した君たちに頼みがあるんだが良いかい？」

「仮に断つたら？」

「結果の分かつている手続きのために、馬鹿みたいな時間を浪費してもらおう」

「半分脅迫じゃねえか」

恨みがましい視線を向けるが、イルワはどこ吹く風の様子だ。俺はため息を吐き、半分諦めながらイルワの頼みを聞く。

「君たちなら聞いてくれると思つていたよ」

「聞くしかないだけだ… 良い性格してるよあんた」

「褒め言葉として受け取つておくよ」

イルワの頼みとは、北の山脈地帯へ魔物の群れの確認情報が出たため、そこへ調査へ向かい行方不明となった人物の搜索願であった。

「搜索ねえ… 冒険者ならそこら辺は自己責任だと思ふんだが？」

「普通ならね。けど今回搜索してほしい『ウイル・クデタ』はクデタ伯

爵家の三男だ。伯爵家直々の依頼なら断るわけにもいかないのですね」「体裁としてならどうなる？」「青』に依頼するのも色々言われそうだぞ」

「それも問題ない。手数は多い方が良いとのことだ」

断る理由を次々と潰されていく。北の山脈地帯…俺たちの目的地であるウルを経由するため、悪い話ではない。俺はハジメたちの方を見ると、苦笑していたりため息を吐いたりしているが、嫌がる様子はなさそうだ。

「降参だ。その依頼を受けるよ」

「感謝する、その言葉を待っていたよ。」

「けど、条件がある」

「金か？それともランクを上げてほしいのか？」

「いや、ユエとシアのステータスプレートを発行してほしい。そしてその評価内容は他言厳禁で頼む。」

「それは構わないけど、それだけかい？」

「それと、もう一つ。あんたのコネクション全てを使つて、俺たちのバックについて欲しい」

俺の要望に、さつきまで友好的であったイルワの表情が強張り、真剣なものへと変わった。

「何が目的だ？」

「おっと、落ち着いてくれ。俺たちは少々特殊な事情持ちでね、近いうちに教会の奴らに目をつけられる可能性が高い。その際、信用できるバックについてもらつた方が都合が良くつてね」

「ふむ…確かに、シア君の怪力やユエ君の見たことない魔法…確かに目をつけられてもおかしくない…先生も信用しているようだし…」

流星は支部長、頭の回転が早い。イルワはしばらく考え込んだ後、真剣な表情を崩さず俺たちの方を向く。

「犯罪に加担するような倫理にもとる行為や要望には絶対に応えられない。君達が要望を伝える度に詳細を聞かせてもらい、その上で私自身判断する。だが、できる限り君達の味方になることは約束しよ

う…これ以上は譲歩できない。」

「十分だ。で、お坊ちゃんが死んでたらどうする？遺品とかを持って帰ればいいのか？」

「想像したくはないが…もしそうだとしたら、ウイルスがどんな状態でも持ち帰って欲しい」

「了解だ。行くぞ、お前ら」

俺が立ち上がりながらそう言うと、ハジメとユエはすぐについてきて。シアはイルワに一礼して部屋から出ていった。

「頼んだよ…『神の使徒』君」

「そういえばユミトさん、いつもと様子が違ったね」

「様子が違うって？」

「だってさ、いつものユミトさんなら『まかせろ、俺が絶対助け出してやる！』とか言いそうじゃん」

「あー確かに…ていうかシアの物真似似てね…」

『冒険者は冒険してはならない』

「?」

後ろで話していたハジメとシアに、前世知人むかしが言っていたことを話すと2人は訳がわからないように首を傾げた。

「知人が口を酸っぱくして言っていた言葉だ。身の丈に合わないことをしようとする碌な目に合わん」

「なるほどなあ…」

「へ〜」

「まっ、俺はその言葉を無視して何回か死にかけたんだがな」

「おー…」

## 40星：恩師との再会【上弦】

現在俺たちは、ウルの町に向かってバイクを爆走させている。その理由は、イルワの依頼を受け部屋を出た時にまで遡る。

~~~~~

「あ！皆さま大丈夫でしたか？」

「あ、リシーちゃん。支部長の依頼を受けることになったけど大丈夫だ」

「支部長の依頼ですか・・・どちらへ行かれるので？」

「北の山脈地帯。だから明日にはウルへ行こうと思ってる」

リシーは少し考えた後、何かを思い出したかのように口を開いた。

「そういえば、ウルには珍しい料理を出すお店があるんですが・・・」

「米の店だろ？実は俺たちそれ目的でウルに行くつもりだったんだよ」

次の瞬間、俺とハジメはリシーの放った言葉に思わず叫んでしまった。

「なら急いだ方が良くありません、その料理が食べられなくなるかもしれないので」

「な!?何iiiiiiiiiiii!?!」

~~~~~

こうして俺たちは、フューレンを飛び出して、バイクを爆走させている。

「ハジメエ！今何キロ!?!」

「丁度半分過ぎた所だ！このペースなら日が落ちる前には間に合う！」

「ちよ、ちよつとハジメ落ち着いてよ！食べれなくなるのは香辛料使ったものだけらしいし・・・」

そう、リシーから聞いた情報によると。山脈地帯の魔物情報によって、採取に行く者が激減してしまい、香辛料が不足しているらしい。

その結果、香辛料を使った料理が食べられなくなるかもしれないと

言われた。一応、香辛料を使わない料理であれば、問題ないようなのだが…

「全メニュー食うに決まってるんだろ!」

「あ、駄目だこの人たち。もう頭の中がコメで埋まってる」

「……じゅるり」

「ユエさんも!? まともなのは私だけですか!」

こうして脳内を米に支配された3匹と唯一まともなシアは、ウルへとバイクを走らせる。

「はあ、今日も手掛かりはなしですか… 清水君、一体どこに行っちゃったんですか…」

肩を落とし、ウルの中の表通りをトボトボと歩くのは召喚組の一人にして教師、畑山愛子だ。普段の快活な様子がなりを潜め、今は不安と心配に苛まれて陰鬱な雰囲気漂わせている。

作農師として、各地の農村や未開拓地を点々とする中。突如行方不明となってしまう生徒の清水幸利を探して2週間ほど経過した。ウルの内側にある町や村にも使いを出したが、全てが空振りに終わった。

「愛子、あまり気を落とすな。まだ何も分かっていないんだ。無事という可能性は十分にある。お前が信じなくてどうするんだ」

「そうですね、愛ちゃん先生。清水君の部屋だって荒らされた様子はなかったんです。自分で何処かに行った可能性だって高いんですから、悪い方にはかり考えないでください」

元気のない畑山に、そう声をかけたのは愛子専属護衛隊長のデビッドと生徒の園部優花だ。周りには他にも、護衛の騎士たちと生徒たちがいる。彼等も口々に畑山を気遣うような言葉をかけた。

守るはずだった生徒たちに慰められている。そのことに気づいた畑山は何度か深呼吸をした後、両手で自身の頬を叩き気持ちを立て直す。

「皆さん、心配かけてごめんなさい。そうですね。悩んでばかりい



ても解決しません。清水君は優秀な魔法使いです。きっと大丈夫。今は、無事を信じて出来ることをしましょう。取り敢えずは、本日の晩御飯です！ お腹いっぱい食べて、明日に備えましょう！」

「二二はい二二」

明らかに無理をしているが、それを指摘する無粋な者はここにはいない。そして全員は最近利用している『水妖精の宿』のレストランへ行き、そして全員が一番奥の専用となりつつあるVIP席に座り、その日の夕食に舌鼓を打つ。

「ああ、相変わらず美味しいいゝ異世界に来てカレーが食べれるとは思わなかったよ」

「まあ、見た目はシチューなんだけどな… いや、ホワイトカレーってあつたけ？」

「いや、それよりも天井だろ？ このタレとか絶品だぞ？ 日本負けてんじゃない？」

「それは、玉井君がちゃんとした天井食べたことないからでしょ？ ホカ弁の天井と比べちゃだめだよ」

「いや、チャーハンモドキ一択で。これやめられないよ」

和やかな空気で、故郷のものに似た料理を食べる畑山たち。するとそこに、オーナーのフォス・セルオが現れた。

「皆様、本日のお食事はいかがですか？ 何かございましたら、どうぞ、遠慮なくお申し付けください」

「あ、オーナーさん。いえ、今日もとてもおいしいですよ。毎日、癒されてます」

「それはようございしました」

畑山の言葉に、フォスは微笑みを浮かべながら会釈をする。しかし、その笑みを消して表情を申し訳なさそうに曇らせた。

「実は、大変申し訳ないのですが… 香辛料を使った料理は今日限りとなります」

「えっ!? それって、もうこのニルシツシル（異世界版カレー）食べられないってことですか？」

カレーが大好物の園部優花がショックを受けたように問い返した。

「はい、申し訳ございません。何分、材料が切れまして…。いつもならこのような事がないように在庫を確保しているのですが…。ここ1ヶ月ほど北山脈が不穏ということで採取に行くものが激減しております。つい先日、調査に来た高ランク冒険者の一行が行方不明となりまして、ますます採取に行く者がいなくなりました。当店にも次にいつ入荷するかわかりかねる状況なのです」

「あの…。不穏っていうのは具体的には？」

「何でも魔物の群れを見たとか…。北山脈は山を越えなければ比較的安全な場所です。山を1つ越えるごとに強力な魔物がいるようすが、わざわざ山を越えてまでこちらには来ません。ですが、何人かの者がいるはずのない山向こうの魔物の群れを見たのだとか」

「それは、心配ですね…。」

畑山たちが表情を暗くすると、フォスは申し訳なさそうに頭を下げた後。場の雰囲気盛り返すように明るい口調で話を続けた。

「しかし、その異変ももしかするともう直ぐ収まるかもしれませんよ」「どういうことですか？」

「実は、今日のちようど日の入り位に新規のお客様が宿泊にいらしたのですが、何でも先の冒険者方の搜索のため北山脈へ行かれるらしいのです。フューレンのギルド支部長様の指名依頼らしく、相当な実力者のようですね。もしかしたら、異変の原因も突き止めてくれるやもしれません」

畑山たちはピンと来ないようだが、食事を共にしていたデビット達護衛の騎士は一樣に「ほう」と感心半分興味半分の声を上げた。フューレンの支部長と言えばギルド全体でも最上級クラスの幹部職員である。その支部長に指名依頼されるというのは、相当どころではない実力者のはずだ。同じ戦闘に通じる者としては好奇心をそえられるのである。騎士達の頭には、有名な『金』クラスの冒険者がリストアップされていた。

愛子達が、デビット達騎士のざわめきに不思議そうな顔をしていると、二階へ通じる階段の方から声が聞こえ始めた。男2人の声と少女2人の声だ。何やら少女の1人が男の1人に文句を言っているらし

い。それに反応したのはフォスだ。

「おや、噂をすれば。彼等ですよ。騎士様、彼等は明朝にはここを出るそうなので、もしお話になるのであれば、今のうちがよろしいかと」  
「そうか、わかった。しかし、随分と若い声だ。『金』に、こんな若い者がいたか？」

デビッド達騎士は、脳内でリストアップした有名な『金』クラスに、今聞こえているような若い声の持ち主がいないので、若干、困惑したように顔を見合わせた。

そうこうしている内に、4人の男女は話ながら近づいてきており、その内容が聞こえてきた。

「いくらコメが楽しみだからってノンストップでここまでくるとか馬鹿じゃない!?!」

「馬鹿ってなんだよ! 早く来ないと食えなくなるんだから仕方ねえだろー!」

「でもそういう役目は『ユミトさん』がやる役でしょうが!」

「おい、俺だけをギャグ要因にするな。『ハジメ』も結構こつちよりだ」

「勝手に俺をギャグ堕ちさせるんじゃないやねえよ『弓人』」

「……『ユミト』と『ハジメ』は似たもの同士」

「ほら、ユエもこう言ってるし」

「嫌だ! ギャグ要因にだけはなりたくねえ!」

少女たちの呼ぶ少年の名前が『2人』と同じだ。

少年たちの声が『2人』とよく似ている。

「……三星君に……南雲君?」

畑山は反射的にカーテンを開けて声の主の方向を見る。

そこには……

「三星君! 南雲君!」

「……先生?」

「あ、言っちゃったよこいつ」

外見が大きく変わった少年と、変わらず元気そうな彼がいた。

## 40星：恩師との再会【下弦】

俺たちはウルに到着した瞬間、バイクを投げ捨てる勢いで降り。米料理を出す『水精霊の宿』へ駆け込んだ。

そして従業員に案内を受けていると、突如部屋の仕切りとして使われているカーテンが勢いよく開けられた。

「三星君！南雲君！」

そこにいたのは、目を見開き余裕のない叫びを上げる畑山先生だった。

どうしたものか……素直に本人だというべきか、他人の空似だと言ってしらを切るか……

「……先生？」

「あ、言っちゃったよこいつ」

ハジメの先生発言に、空似で誤魔化す方法は不可能になった。ハジメの方を見るとほぼ無意識に発言したらしく、今はしまったと言わんばかりの表情を浮かべている。

「君は……南雲君なんですよ？それに三星君……良かった……生きてて本当に」

「いえ、人違いです。それじゃあ」

「へ？」

まさかのゴリ押しで人違いにするつもりのような。瞳に涙を浮かべていた畑山先生はハジメの発言に涙が引つ込み呆然としている。そしてハジメはそれを好機だと言わんばかりにその場から離れようとする。

「待て、ハジメ。『先生』って言ってる時点でそれは無理がある」

「いや……あれは方言で『チッコイ』って意味……にならないかなあ？」

「諦めろ。ただ失礼なこと言ってるだけだ」

「だよなあ……えっと、久しぶりです。先生」

ハジメは申し訳なさそうに畑山先生の所へ戻り謝罪する。それに

よりハジメ本人だと完全に分かり畑山先生は再び涙を浮かべる。

「ごめんなさい…。私がちやんとしたら…」

「あく、あれは先生のせいじゃないですよ。だから自分を責めないでくださいよ」

「三星君…」

「こうして俺とハジメは生きてる訳ですし、ね？」

「ありがとうございます…。また慰められてしまいましたね」

すると、さつきまで静かだったユエが俺の腕に抱きついてきて畑山先生を睨み始めた。

「……ユミト、この女何？」

「女って…。この人は俺とハジメが通ってた学校の教師だよ」

「……ふーん」

「えっと…。あなたは？」

畑山先生が訪ねると、ユエはどこか自慢げな表情で畑山先生の質問に答えた

「……ユエ、ユミトの女」

「女じゃなくて仲間だろ？ 勘違いされるぞ？」

「……むうー！」

「いてて、なんで殴るんだよ？」

頬を膨らませ、ぽかぽかと殴ってくるユエ。ここにいるものたちがその微笑ましい場面にはんわかしているが、ユエの自己紹介以降が聞こえてなかった畑山先生は体をわなわなと震わせている。

「女…。ですか？ではそちらの方は？」

「あ、はじめまして。シア・ハウリアと申します。えっと…。ハジメの女ですかね」

シアの発言に、ここにいるものたちがハジメの方を見る。そして、ハジメは顔を真っ赤にしていた。

「はあ!?シア…。お前何言ってる」

「えく、だって私のファーストキス奪ったじゃん」

「あ、あれは救命活動のためだって…。それに俺たちはまだそんなじゃ」

「そつかく、『まだ』かく」

「なあ!?お、お前なあ!」

「きやー!」

どう見ても惚気ているようにしか見えない状況に、女子生徒たちは頬を赤くそめ、男子生徒たちは嫉妬の眼差しをハジメに向けていた。

そして、畑山先生は。

「ずっと心配してたのに…連絡もよこさず女遊びとはどういうことですか!お説教です!そこに座りなさい!南雲君に三星君!」

「え、俺も?」

暴走した畑山先生を俺たちは宥める羽目になった。

-----

「す、すみませんでした。暴走してしまつて…」

「別に良いですよ。日本でも何度かありましたし…あ、すんませーん。ここからここまで1品ずつ下さい」

「よ、よく食べますね」

「いや、これを食べうために半日ロクに食べずに来たもんで」

畑山先生を宥めた後、食事しながらでも良いなら話をするという条件で、護衛隊の騎士たちや、生徒を含めて全員が席についていた。そして、話の内容は奈落に落ちた後の俺たちへの質問になっていた。

Q、橋から落ちた後、どうしたのか?

A、頑張つて這い上がった

Q、南雲はなぜ白髪なのか

A、魔物に襲われたことによるストレス

Q、南雲のその腕はどうしたのか

A、魔物に襲われて失った

Q、なぜ、直ぐに戻らなかつたのか

A、素で忘れてた

「忘れてた!?忘れてたつてどういう意味ですか!」

「いやだつて…その日を生きるだけでギリギリだったから…つてどうしたユエ?」

「……ユミト、このニルシツシルつていうの美味しい」

「そつかそつか、俺のも食うか？」

「……ん！おいひい」

「そんなに急がなくても料理は逃げないぞ。ほら、顔拭いてやるからこつち向け」

ハムスターのように頬張りながら幸せそうな表情を浮かべるユエと、甲斐甲斐しく世話する俺を見て、女子生徒たちは微笑ましい視線を向けており。

「はあ……米うめえ」

「へえ、こんな感じなんだ……ハジメ、私のも食べる？」

「おお、一口くれ」

「じ、じゃあ……あ、あゝん」

「な!？」

「は、早く食べてよ！結構恥ずかしいんだから！」

「な、ならしなくていいだろ！」

人目を気にせず、イチヤついているハジメとシアを見て、男子生徒たちはもはや怨嗟に近い視線を向けていた。

「おい、お前！愛子が話しているのだぞ！真面目に答えろ！」

「デビットさん。私は気にしてないので……」

突如、護衛隊長のデビットがテーブルを拳で叩きながら怒り出す。

畑山先生はデビットを宥めようとしているが

「愛子、止めないでくれ。そもそも薄汚い獣風情を人間と同じテーブルに着かせること自体俺は気に食わん。せめてその醜い耳を切り落としたらどうだ？少しは人間らしくなるだろう」

侮蔑を込めた視線で放たれた言葉に、場の空気は凍りつき、シアは気まずそうに視線を伏せる。よく見れば、デビット以外の騎士たちの表情も似たようなものだ。

その余りにも差別的な発言に、畑山先生は注意しようとするが。それよりも先にハジメが立ち上がりデビットの方へ近づいていく。

「な、なんだ貴様！何か文句でもあるグハアツ！」

「シアを泣かすんじゃねえ！」

ハジメはデビットの顔面を右腕で殴り飛ばした。

後方に吹き飛んだデビットは一度床にバウンドすると、その勢いのまま壁に激突した。

「き、貴様！」

「我らに敵対する気か！」

騎士たちが剣を抜こうとした瞬間、俺はテーブルに勢いよく足を乗せる。その衝撃でテーブルが軋み、食器類が大きな音を立てる。それにより気を失ったデビット以外の者たちが俺の方を向く。

「先に喧嘩を売って来たのはあいつだろうが。親友の恋人を薄汚いやら耳を切り落とすやら・・・なんならここで殺つてもいいんだぞ？」

一触即発、その言葉が似合う空気に男子生徒たちは息を呑み、女子生徒たちは体を寄せ合って震わせている。そんな空気を壊したのは・・・

「………… ユミト、行儀悪い」

「… ユエさん？ここは乗ってくれないと……………」

「………… 言い訳、めっ！」

「あ、すみません。すぐ下ろします」

さつきまでの空気が一瞬で霧散し、ホツとした様子の生徒たちは俺は来ていた料理を全て食べ終わっていたのを確認して席を立つ。

「まあ、どちらにしろ仲間を馬鹿にされて腹が立ってるのは本当だ、飯を食い終わったし俺たちは帰る」

「み、三星君！待ってください！デビットさんの事は謝りますので…」

俺たちを止めようとする畑山先生に向けて、俺は二つ折りした紙を投げ渡す。

「申し訳ないって思ってたんなら、ここの支払いをしてくれや。それでチャラだ」

「ち、ちよつと三星！いくらなんでもそれは「分かりました」あ、愛ちゃん先生！」

「三星くん… 信じて良いんですね？」

「… 何のことか分かりませんが、先生が信じたいならそれで良いと思いますよ」



こうして俺たちは、その場から離れた。

「やっぱり……この耳は気持ち悪いんですかね……」

「……そんなことない、シアの耳は可愛い」

あの場から離れた後、未だに暗い表情を浮かべるシアを、ユエは必死に慰めている。

「ハジメは……どう思ってる?」

聞くのが怖いのか、恐る恐るハジメに尋ねると、ハジメは頬を掻きながら答える。

「気持ち悪くねえよ……少なくとも俺は……好きだ」

「……ほんと?」

「こんな時に嘘はつかねえよ」

「そっか……ありがとハジメ。大好き」

お互いに顔を真っ赤にして、顔を合わせないようにしている2人。ふと、後方から視線を感じたためハジメが振り向くと、そこには面白いものを見る目を向けている弓人と、無表情なのに、どこか腹立つ顔をしているユエがいた。

「見たかユエ、あれでまだ付き合ってたねえんだってよ?」

「……2人はお似合い」

「だよなあ、さっさと付き合えってんだよ」

「お前らなあ! つーか弓人! 『親友の恋人』ってどういう意味だ!」

「やっべバレた。逃げろ!」

「……お幸せに」

こうして顔を真っ赤にしたハジメに追いかけられる弓人とユエを見て、シアはさっきまでの表情が嘘みたいに朗らかに笑っていた。

「ちよつとハジメ〜! 待ってよ〜!」

## 41星：深夜の密会

現在深夜、畑山は寝巻きにも着替えずに部屋に置いてある椅子に座り込んでいた。

「南雲君、それに…三星君…」

その理由は、再会した2人の変わり様によるものだった。

彼女は信じられなかった。あの温厚でいつも困ったような笑みを浮かべていたハジメが人を殴ったことに。そして、いつも周囲を氣遣っていた優しい弓人があんな冷たい目をしていたことに。

だが…それ以上に

「良かった…生きてて本当に良かった。」

嬉しかった、生きていたことに。そして彼らが怒った理由も、親しいもののためであり2人の優しさも変わってなかったことに。それに思わず笑みを零していると。

やけに小気味の良いノックが窓から聞こえて来た。

「っ！」

畑山は少し警戒しながら、恐る恐る窓を開けるとそこには

「雪だるまつくろ〜」

「きゃあああああ！」

弓人とハジメが窓を乗り出すようにそこにいた。

—————

「ちよっ！先生、俺たちです！」

「え!?み、三星君と南雲君?」

「だから言ったんだよ！先生は絶対驚くぞって！」

俺たちを見た瞬間悲鳴を上げた畑山先生を落ち着かせていると、扉の外の方から何やら慌ただしい足音が聞こえて来た。

「おい！お前のせいで誰か来てるじゃねえか！」

「悪かったって！先生、俺たちはちよっと隠れてるから適当に誤魔化してください」

「え!?ち、ちよっとな人も!?!」

そして俺たちはバレないように外の壁に張り付いていると、畑山先生のいる部屋の扉が勢い良く開けられた。

「愛子！悲鳴が聞こえたが大丈夫か!」

「デ、デビットさん… えつと… 虫！そう虫が出てきて…」

「虫？なら俺が追い払おう。どこにいるんだ？」

「い、いえ！私の声に驚いたのかももう外へ出ていったので大丈夫です！」

畑山先生はそういうと窓を勢い良く閉めた。デビットは特に疑った様子もなく笑みを浮かべていた。

「それなら良かったよ。だが何かあったらすぐに呼んでくれ、俺たちはすぐに駆けつけるからな」

「あ、ありがとうございます… あはは…」

乾いた笑いをしていると、デビットは部屋から出ていった。畑山先生はため息を吐きながら窓を開ける。

「はあ… もう行きましたよ…」

「いやあ、すみません… まさかあんなに驚くとは」

「驚くに決まってるでしょう！」

小声で怒ってくる畑山先生を見て苦笑しながら俺たちは部屋に入る。

「それに、なんで窓からなんですか？扉の鍵は開けていたのに」

「答えはさつき見た通りですよ。あっちには護衛の奴らが見回りしてるんで」

「錬成師の俺ならこっちからでも簡単に入れるんでそうさせて貰いました」

「そうでしたか… では、これについて、詳しく聞かせていただきます」

畑山先生はそういうと、あの時俺が投げ渡した紙を取り出す。そこには日本語でこう書かれていた。

『今日の深夜、ハジメと共に会いに行きます。この世界の真実を伝えるために』

俺たちがオスカーとミレディから聞いた『解放者』と『狂った神』に

よる世界の真実を伝えると、畑山先生はしばらく考え込んだ後、ゆっくりと口を開いた。

「2人は、もしかして、その『狂った神』をどうにかしようかと…旅を？」

「いや、そこまでは」

「ミレディからそいつとは必ず接触すると言われてますが…俺たちの最優先は『日本へ帰ること』です」

畑山先生自体、生徒の安全と日本に帰ることを優先にしているため。何も言わない。

「…アテはあるんですか？」

「一応は、大迷宮のさらに奥に、『真の大迷宮』があります。そこを攻略すれば神代魔法と言われる強力な魔法が手に入ります」

「それが…帰れる可能性ですか？」

畑山先生の質問に俺たちは肯定する。そして、俺は彼女へ忠告する。

「けど、すぐに攻略へ乗り出すのはおすすめしませんよ。真の大迷宮は、表面のものとは文字通り格が違う。レストランの時、あの程度の空気で吞まれてるようだと言ひなりません」

「そうですか…」

しばらく、沈黙が続く。俺は話す事が終わったので帰ろうかと考えていると、畑山先生はどこか懇願するように俺たちに聞いてきた。

「あの…1度でも良いので戻ってきてくれませんか？」

「理由を聞いても？」

「白崎さんと八重樫さんに会って欲しいんです…」

「…っ、白崎さん…」

ハジメは1度息を飲んだ後、呟くように一言零す。おそらく、奈落に落ちる前の事を思い出したのだろう。俺も、目線を伏せながら畑山先生に尋ねる。

「雫は…大丈夫ですか？」

「正直…大丈夫とは言えません。表面上は普通ですが、三星君が生きている事を信じてるのが唯一の支えなので…いつ折れてもお

かしくないと思います」

「そうですか……… 雫…… 約束、したもんな」

俺が思い出すのは、あの夜の約束。

『どっちかが限界を迎えそうになったら、片方が支える。』

「なあ…… ハジメ、この依頼が終わったら」

「良いぞ。会いにいつでも」

「あいつらに…… 良いのか？」

「いつも俺の頼みを聞いてくれるからな。そんなくらい構わねえよ」

「ありがとな、ハジメ」

「仲間だろ？ 気にすんな」

そう言って拳を合わせる俺たち、それを見た畑山先生はの表情は明るいものへと変わった

「ありがとうございます！」

「ちよ、声が大きいって」

「あつ、ごめんなさい……」

慌てて口を押さえたがもう遅く、再び廊下の方から足音が聞こえてきた。

「ど、どうでしょう……」

「とりあえず、俺たちの言いたい事は全部話したから帰ります。行くぞハジメ」

「ああ…… つとそうだ、先生。あいつらと手紙のやりとりはしていますか？」

「！ わかりました。白崎さん達に南雲君たちと会った事を伝えれば良いんですね？」

「いや、そうじゃない。俺たちが奈落到ちた原因はベヒモスとの戦闘、または事故って事にでもなっているんじゃないですか？」

「はい…… やっぱり。みんなの事を恨んで」

「そんなのはどうでもいい。けど、あれは事故なんかじゃない。クラスメイトの誰かが俺を狙って撃ったものです」

ハジメの発言に畑山先生は目を見開いて驚愕するが、ハジメは構わず話し続ける。

「だからこう伝えてください。『本当に注意すべきは迷宮の魔物じゃない。仲間の方』だと」

そして俺たちは窓から飛び降り撤収する。そして取り残された畑山先生には、悩みの種が増えてしまった。

## 42星： 北の山脈地帯へ

俺たちは、北の山脈地帯へ行くために夜明け時に宿を出た。

ウイル・クデタが消息不明になってから5日、俺は彼が生きているなんて楽観的な考えを持っておらず、遺品の回収が出来たら良いなぐらいにしか思っていない。

表通りを歩き、外へ出るための北門に近づいていくと。北門の近くに複数の人が待ち構えるようにいた。

「何となく想像できますけど… 何でここに？」

「南雲君たちの受けた依頼は行方不明者の搜索ですよ？ 私たちも手伝います」

「遠慮します。俺たちで十分です」

「な、なんでですか？ 人は多いことに越したことはないんじゃない？」

「単純に足が違うんですよ。先生たちに合わせたら日が暮れてしまいます」

確かに、俺たちだけならバイクを4時間ほど走らせれば到着できるが。先生たちに合わせて馬車を使うと1日ほどかけないと到着できない。

「ちよつと、そんな言い方ないでしょ？ 南雲が私達のことよく思っていないからって、愛ちゃん先生にまで当たらないですよ」

どうやらハジメが先生と会いたくないからそう言っていると勘違いした園部が食ってかかる。ハジメもそれに気づいたのかため息と共に俺の方を見てくる

「見せた方が早いよな…」

「だな。良いと思うぞ」

「ちよつと、あんたたち何を言ってる」

園部の言葉を見無視して、ハジメは宝物庫からバイクを取り出す。何も無い空間から大型のバイクが出現したことに畑山先生たちは目を見開いて驚いている。

「だから言っただろ？ 足が違うって」

「そういうことです。このバイクは俺の分合わせて2台しかない  
で、全員を連れていく事はできません。」

そう言つて俺もバイクを取り出すと、クラスメイトの1人でバイク  
好きの相川が興奮気味に尋ねてきた。

「な、なあ！これつてどこで手に入れたんだ？」

「手に入れたんじゃない、ハジメが作ったんだ」

「南雲が!? すっげえなお前！」

「お、おう…… ありがとな」

純粋な賞賛を受け。バイクの作成に苦勞したこともあり、ハジメは  
照れながらであるが嬉しそうだ。

それを見た畑山先生は頬が一瞬緩んだが、真剣な表情に戻り俺に頭  
を下げてきた。

「無理を承知で言います。 お願いします。 私たちを同行させてくださ  
い」

「…… 何でそこまで？」

「昨日南雲君が言っていた事を、私は先生として詳しく知る必要があ  
ります。 移動時間や搜索の合間でも良いので、 お願いします」

畑山先生の目には強い決意が見える。 この状態の先生は梃子でも  
動かないだろう。

「…… ハジメ、 あれは出来るか？」

「出来るけど…… っつて弓人、 お前まさか」

「仕方ねえだろ。 こうなった先生は折れねえよ」

「三星君！ ありが けど2つ条件がある」

俺は畑山先生の言葉を遮りクラスメイト達を見渡す。

「1つ目は、『俺たちが使う武器や魔法を教会には伝えない』だ。 教会  
が知ったら「戦争に勝つために戻ってこい」「その武器を量産しろ」と  
か言つてくるに決まってる」

1つ目の条件に、畑山先生たちは全員頷く。

「それで2つ目は、『何があっても自己責任』だ。 無理言つて同行して  
くるんだ。 仮に死んだとしても文句は無いだろ？」

死んだとしても



その言葉に畑山先生たちは一瞬息を呑むが、すぐに表情を戻して頷いた。

「弓人、お前は良いのかよ?」

「諦める。あの人はどこまで行っても『先生』だ」

「そうか... 仕方ねえなあ」

ハジメは乱暴に頭を掻いた後、バイクを仕舞い始めた。そして、空  
間庫から『魔力駆動四輪』と命名されている大型自動車を取り出した。  
「うっそ...」

「な、南雲! これもお前が作ったのかよ!?!」

「まあな、全員は中に乗らないから何人かは荷台に乗ってくれ」

こうして俺たちは、畑山先生たちを同行させて北の山脈地帯へ移動  
を開始した。

現在、俺たちは車を走らせて2時間ほど経過しただろうか。当初、  
俺はレディーファーストだからと荷台に乗り込もうとしたが...

「..... ユミトはこつち」

「おいおい、俺が助手席に行ったら誰かが荷台に行くじゃねえか」

「..... こうすれば、問題なし」

俺を助手席に無理矢理座らせ、ユエが膝の上に座ってきた。

交通法としては完全にアウトだが、ここは異世界だしまあ問題ない  
だろう。

俺は満足気なユエの頭を撫でながら、ハジメと畑山先生の話を聞  
く。

2人の話は佳境を迎えていた。

「やっぱり... 南雲君は誰かに落とされたと?」

「はい。あれは確実に俺を狙ってきました。」

「そんな... 一体誰が」

「多分ですけど「檜山だろ?」 弓人、知ってたのか?」

「半分は勘、もう半分は予想だけだな。あいつのハジメに対する態度  
はここに來てから異常だったしな」

「そんな! けどそれが決まったわけじゃ...」

やはり畑山先生は信じたく無いようだ。生徒が人殺しをしようとした事を

「けど、あの中だと一番可能性が高いです」

「そんな… いったいどうすれば…」

畑山先生は、仮に檜山が犯人だったとして。どうやって罪を償わせれば良いのか、どうやって歪んだ心に戻せば良いのかについて頭を悩ませる。

結局、山脈地帯に到着してもその答えは出ず。答えてくれる者は誰もいなかった。

## 43星：彼女の本音

### 北の山脈地帯

標高千メートルから八千メートル級の山々が連なるそこは、どうい  
うわけか生えている木々や植物、環境がバラバラという不思議な場所  
だ。そのお陰で、気候に左右される事なく森の恵みを手に入れること  
ができるため。ウルの人たちの生活には欠かせない場所となっている。  
る。

麓に車を停めると、ハジメはミレディから譲ってもらった『感応石』  
を利用して作成した鳥型の偵察機を数機取り出すと上空へ飛ばす

「バイクや車に続いてドローンかよ...」

「俺... 銃とか出てきても驚かないと思うわ」

「銃どころかレールガンやロケラン、おまけにパイルバンカーもある  
ぞ」

「マジかよ!?!」

俺が相川と玉井に教えてやると、ロマンのある武器たちに思春期男  
子の琴線に触れたのか羨望の眼差しをハジメに向けている。日本で  
は向けられなかった視線に、ハジメは照れ臭そうに顔を晒し偵察機の  
準備をしている。

「とにかく... とりあえずこれを山頂に飛ばして、俺たちは登ってい  
こう」

「ハジメ、ちよつといいか?」

「ん? どうした弓人」

「この探索、俺だけ別行動でもいいか?」

俺の提案に、ハジメは怪訝な顔を向けてくる。

「弓人のことだから理由はあると思うが... 何でだ?」

「単純に固まって動くよりバラけた方がいいと思ってな。お前らはこ  
こみたいに広がった道を歩けばいい」

「じゃあ、弓人は?」

「俺はあっちの雑木林の方を探す。もしかしたらあんな場所で身を隠

してるかもしれないからな」

俺の言葉にハジメは納得したようだが。俺たちの話を聞いていた畑山先生が、心配した様子で近づいてきた。

「けど、危ないですよ。慣れていないと怪我をするんじゃないや…」

「大丈夫ですよ先生。俺むかしは山育ちだったんで」

「あ、そうなんです。けど！気をつけてくださいね」

「心配ありがとうございます。ハジメ、どこで合流する？」

「そうだな…なら、ここにしよう」

ハジメはそう言うと、地図を取り出しこの山の6合目を指差していた。

「了解。地図は持っていくぞ」

俺はハジメから地図を受け取ると。近くの雑木林へ入っていく。こうして二手に分かれての探索が始まった。

-----

しばらく一人で探索しているが、遺品どころか手がかり1つ見つからない。しかし、1つ気づいたことがある。

これほどまで自然が豊かなのにも関わらず、生物の気配が全くない。

俺の直感もこの山脈に来てから危険信号を発し続けているため。俺は1人での探索を切り上げ、ハジメと決めた合流地点への移動を開始した。

合流地点へ到着すると、ハジメたちは先に到着していたようで休憩していた。しかし、女性陣が見当たらない。

「悪い、遅くなった」

「おお、気にすんな」

俺が声をかけると、ハジメは俺の方へ近づいてくる。相川と玉井は、息を切らしており随分とバテているようだ。

「あいつら随分と疲れてるな」

「あく…いつものペースで動いてたらああなった」  
「なるほどな。そういえばユエたちは？」

「あいつらは近くの小川で涼みに行った」

小川…涼みに…なるほど

「水浴びか」

「!?」

俺の言葉に、さっきまでまともに喋れないほど疲れていた2人が反応する

「よし、いくぞ同志よ! 『桃源郷』はすぐそこだ!」

「おお!」

「お前らがいくのは『桃源郷』じゃねえ… 『あの世』だ!」

女性陣は小川で水浴び…は当然してる訳もなく。靴を脱ぎ足を水に入れて涼んでいた。ハイペースで探索していたこともあり、水の冷たさが心地いい。

「はあ…」

女子生徒の1人、園部は疲労とは違った溜息を吐いていた。その視線の先にはシアがいた。そして、その視線に気づいたシアは、園部の下へ近づいていく。

「あの…どうかされましたか？」

「え?… あつ、何でもないの… ごめんね?」

「い、いえ… 気にしてませんよ」

気まずい空気が2人を包む。しばらく沈黙が続いた後、シアは園部の隣に座り問いかける。

「あの… ソノベさん… でしたっけ?」

「う、うん… 園部優花。優花で良いよ」

「では… ユウカさんは、ハジメの方が好きなんですか?」

「うえ!? な、なんでわか… って私は別に南雲のことなんて!」

「良いですよ、好きだって言っても」

シアの質問に、園部は狼狽えながら否定しようとするが。その直後、シアの言葉に固まってしまふ。そして、つぶやくように口を開いた。

「……………なんで分かったの？」

「えっと…女の勘って奴ですね」

「…そっか、ごめん…」

「何で謝るんですか？」

「え…だって、あんたも南雲のこと…」

園部は申し訳なさそうにシアを見ると、シアは何処か困ったように笑っていた。

「確かに私はハジメのことが好きです。ハジメにも私だけを見て欲しいです」

「なら「けど…」」

「誰かを好きになる気持ちは…すごく分かりますから」

同姓である園部ですら見惚れる微笑みを見せるシアに、園部は俯きながら自身の本音を話した。

「……………うん、私は南雲が好き」

「はい」

「あの時、骸骨に殺されそうになった時…助けてくれた時に好きになった」

「はい」

「けど…言える訳ないじゃない」

「何ですか？」

「だって…私は南雲が王国にいた時…内心馬鹿にしてた…そんな私が好きって言える訳ないじゃない」

「それは違いますよ」

園部の吐き出した言葉に、シアは優しく否定する。そして、とても優しい声で語りかける。

「確かにユウカさんはハジメの事を馬鹿にしてたかも知れませんが…けど、好きになったんですよね？」

「……………うん」

「私も… ハジメと出会った時、最初の印象は『怖い』でした」

シアが思い出すのは、ハジメと出会った時。予知で見たとはいえ、ダイヘドアを1撃で殺したり、同族である帝国兵を殺した時。彼女はハジメに恐怖した。

「けど… ハジメが私たちを守ってくれた時… 『好き』になりました」

シアが思い出すのは、フェアベルンにて処刑すると宣告された時。必死に懇願しても撤回されなかった時、どこか照れ臭そうに守ってくれたハジメに恋をした。

「だから… 好きになるっていうのは仕方のない事だと思っんです」

「… 良いのかな？ 南雲のことを好きになっても」

「それを決めるのは、ユウカさんです」

「そっか… ありがと」

「なら… 故郷にいた時のハジメを教えてくださいませんか？」

「良いよ。シアさんも南雲のこと教えてよ」

「良いですよ。後、呼び捨てで良いですよ」

「分かった。よろしくねシア」

こうして2人は、自身の知らない彼について話し合った。

## 44星：忍び寄る気配

シアと園部がハジメについて話し合っている時、ユエはどこか不機嫌そうに座り込んでいた。

「……私も付いて行きたかった」

相談もせずに1人で探索に行った弓人に不満を持っていると、ユエの下へ誰かが近づいてきた。

「ユエさん……で良かったですよね？」

「……あなたは」

「隣、失礼しますね」

「……ん」

近づいてきた人物……焔山はユエの隣に座る。ユエは何か話した方が良いかと話題を考えていると、焔山の方から話しかけてきた。

「三星くんのこと、好きなんですネ」

「……ん、けど……子供扱いしてくる」

ユエの言葉に、焔山は弓人たちと再会した時を思い出した。恐らく似たようなことが何度かあったのだろう。焔山はふと気になったことをユエに尋ねた。

「ユエさんは、ちゃんと三星くんに『好き』と伝えましたか？」

「………言っていないかも」

「なら、ちゃんと伝えた方が良いでしょう。いくら親しくても、言わないと伝わらないこともありますので」

「………ん」

焔山の言葉を素直に聞くユエ。そして焔山にお礼をしようと名前を思い出そうとするが、そういえば名前を聞いたことがなかったことに気づいた。

「………えっと……」

「どうしました？」

素直に尋ねるべきか……しかし、せっかくアドバイスをくれた人に「名前を知らないから教えて」というのは失礼ではないか、と悩ませて



いると弓人とハジメが彼女をどう呼んでいたか思い出した

「……ありがとう、『センチ』」

「え……先生って」

「……ハジメとユミトがそう言ってたから、違った？」

まさか生徒以外の人にそう呼ばれると思っていなかった畑山は驚いた表情を浮かべるが。その直後、とても嬉しそうに捲し立てる。

「い、いえー先生です！先生であってます！ええ、私は先生ですから！」

「……良かった。よろしくセンチ」

「はいー」

どこか噛み合っているようで噛み合っていない2人の会話は、休憩が終わるまで続いた。

「なあ、そろそろ外してくれよ」

「そうだぞー」

「横暴だー」

「お前らみたいな変態を誰が野放しにするか」

ハジメに捕まった俺は、いつぞやの時みたいに鎖で拘束されている。多分引きちぎれるだろうが、それをした瞬間ハジメは俺を殺しに来る勢いで止めにかかるだろう。

「シアがいるからって余裕のつもりかー？」

「そうだそうだー！」

「あんな可愛い彼女がいるなんてずるいぞー！」

「シアは関係ないだろー！」

相変わらずシアのことで弄ると顔を真っ赤にするハジメを見て。

その瞬間、俺に電流走る。

「なあ、ハジメ」

「あん？それはあいつらが戻るまで」

「シアの水浴び姿、見たくないか？」

「………いや！駄目だ！」

「間があつたぞ」

「かなり考えたな南雲」

「これ押せばいけるぞ」

「お前ら仲良いな！」

一瞬想像したのだろう。先ほどより顔を赤く染め、忘れるように首を横に振るハジメ。すると、小川がある道の方から、複数の足音が聞こえてきた。

「ハジメ、お待ちせ…… ってユミトさん戻ってたんですね」

「おお、一区切りついたからこれ以降は同行する」

「三星…… あんた何でそんなことになってるのよ……？」

「そうだなあ…… 浪漫を求めた結果と言っておこう……」

「なにそれ…… ってあんた達もなんで同意してんの？」

俺が遠い目をしながらそう言い、相川と玉井が同意しているのを見て。察したシアは頭を痛そうに抑えている。すると、ユエが俺の前に近づいてきた。

「…… ユミト」

「どうしたユエ？ 後これを外すの手伝って欲しいんだけど」

「…… 私、ユミトのこと好き」

突然のユエの告白に周囲は騒めき、視線が向けられる。それに対して俺は……

「ん、ありがとな。けど言い方を変えような、勘違いされるぞ」

「…… そうじゃない」

何故かユエは不満そうだ。何か間違ったことを言っただろうか

「…… えっと、大好き」

「嬉しいこと言ってくれるな、俺も大好きだぞー」

「…… むううううううううー！」

「いって！ 何で怒って…… って脛を蹴るな！」

頬を膨らませ、何度も脛を蹴ってくるユエ。何か怒らせることでもしたかとハジメ達の方を見てみると、呆れを通り越して最早困惑した表情を浮かべていた。

「ユミトさん…… 嘘でしょ？」

「あいつモテないって言ってたけど…… それって」

こうして俺は、機嫌の悪くなったユエを宥めるのに苦勞することになった。

なんとかユエの機嫌も直り、俺もハジメたちと共に探索を再開した。その際、俺は気づいたことをハジメに伝えると、ハジメはどこか納得した表情を浮かべていた

「確かに……ここにくるまで魔物どころか生き物の気配がなかったな」

「山全体の生物が居なくなるなんて碌なことじゃない。早く見つけ出すぞ」

「だな」

こうして、川沿いに登っていると、遂に痕跡を見つけることができた。

「これは……鞆か、それに盾もある」

「見たところ、まだ新しい……当たりだ。行くぞ」

「了解」

こうして、軽く散開しながら探索していると、ハジメの『気配感知』に反応が現れた。

「こつちだ！この滝壺の奥に反応がある！」

「分かった！ユエ、頼む！」

「……『波城』『風壁』」

すると、ユエの魔法により、滝が二つに分かれる。その奥には洞穴のようなものがあり、その奥にいるのだろう。

「よし、行くぞ……ってお前らどうした？」

「え……だって、詠唱は？魔法陣は？」

「企業秘密、さっさと行くぞ」

混乱するクラスメイト達を他所に、俺たちは洞穴へ入っていく。そして、洞穴の奥にはイルワから聞いた特徴と合致する青年が倒れていた。

「食糧はある……気を失ってるだけか」

「顔色がずいぶん悪いですね、皆さん、とりあえず外へ……」

「さっさと起きろ」

「三星君!」

畑山先生が運び出そうと指示を出しているが、俺は無視して試験管に入れていた水を青年の顔にかける。水をかけられた青年は、飛び上がるように起き、軽く咳き込んだ。

「ゴホツ…ゴホツ…一体何が」

「目覚めの気分はどうだ?」

「えつと…あなた達は」

「ウイル・クデタで合ってるか?俺たちはイルワに頼まれてあんたを助けにきた」

「イルワさんが!そっか…僕は助かるんだ」

俺の言葉に、心底安堵したような表情を浮かべるウイル。だが、その次の瞬間には顔を真っ青にして俺たちに詰め寄ってきた。

「あ、あの!あなた達が来る間に『ヤツ』に出会わなかったですか!」

『ヤツ?』魔物のことか?それならここら辺に気配は無かったぞ」

「な、なら!早く移動しましょう!『ヤツ』がまだ居たら…」

「お、おい…落ち着けて…!」

ウイルを落ち着かせようとした瞬間、とてつもない悪寒が俺たちを襲った。

全員が反射的に洞穴の外を見ると、そこには

「グウルルル」

金色の眼を輝かせ。巨大な翼を羽ばたかせている『黒竜』がそこに居た。

## 45星：黒竜【上弦】

黒竜の体長は7メートル程。漆黒の鱗に全身を覆われ、長い前足には鋭い爪がある。背中の大きな翼は、魔力の影響が薄らと光を持っている。そして、夜空に輝く月を思わせる黄金の瞳が俺たちを捉え睨みつけている。

何度か死線を乗り越えた俺とハジメ、ユエとシアは即座に構えるが。ウィルと畑山先生たちは、完全に萎縮してしまい動けそうになり。

黒竜は口を開け、口内に魔力を溜め始めた。恐らくブレスを放つつもりなのだろう。

「全員ここから離れろ！」

俺が叫び、ハジメたちは即座に回避行動に移るが、畑山先生たちは聞こえてないのか動こうとしない。ウィルに至ってはトラウマになっているのか顔を真っ青にして体を震わせ蹲っている。

「ユエ！俺をあいつの所まで飛ばしてくれ！」

「……………ん！『征天』」

俺の考えを即座に理解したユエは、俺の後ろに回り込み背中 handsを置く。

その瞬間、俺の体はユエから吹き飛ばされる様に黒竜の下へと飛ばされた。

『征天』

ミレデイが俺たちとの戦いで使っていた重力魔法の1つ、自身を中心に斥力を働かせる魔法だ。

ミレデイの住処で、ミレデイ自身がユエに教えていた魔法の1つである。

「くらいやがれ！」

黒竜の目の前にまで飛んだ俺は、黒竜の顔面を全力で殴り抜く。

生物を殴ったとは思えない感触と音を響かせるが、目論見通り黒竜の顔が逸れた。

その瞬間、あのヒュドラとは比較にならない威力のブレスが放たれた。

放たれた黒色のブレスは、滝壺のすぐ横にある木々を薙ぎ払い地面を抉る。ハジメがもしものために、大盾を取り出し構えていたが、『金剛』を使ったとしても、後ろの動かない奴らを守れるかと考えてしまう。

狙いを逸らされた黒竜は、邪魔をしてきた俺を。まるで蠅を振り払う様に前足を叩きつけてくる。

空中、更には殴り抜いたことで体制を整えることができない俺は、その攻撃をまともに受けてしまい。そのまま地面へと叩きつけられてしまう。

「かはっ……」

「あっ……三星君!？」

俺が地面に叩きつけられる姿を見て、ようやく現実を理解した畑山先生が悲鳴の様な叫びを上げる。クラスメイトたちも、畑山先生の叫びで再起動し始める。

俺は即座に立ち上がり、黒竜から視線を外すことなくハジメ達の下に戻る。

「弓人、まだ行けるな」

「当たり前だ。ハジメ、あいつの甲殻は並大抵の硬さじゃねえぞ」

「三星君！大丈夫なんですか!？」

「問題ないですよ先生。けど、今は先生たちを気にしながら戦う余裕は無さそうです」

地面にぶつかかった時口を切ったのか、鉄の味が口いっぱい広がる。そして俺は、黒竜の違和感をハジメに伝える。

「後、気づいたんだが。あの黒竜……ウイルから視線を外そうとしな  
い」

「……確かに、俺らは眼中に無いってか」

「というより、動きも生物らしく無い……意識がないのか?」

そう、あの黒竜からは生物としての殺意や本能といったものが希薄なのだ。まるで、プログラムされた様に外敵を排除する動きをしてい

る。

「あん？　どういうことだ」

「……駄目だ、情報が少なすぎる」

そもそも、この世界の竜がどのような生態をしているか知らないため断言することが出来ない。

「とにかく、あいつを殺るしかないってことだな」

「それなら話は早い。シア！　気を引き締めろよ！」

「分かっている！　ユエさん！」

「……『禍天』」

シアはドリユツケンを構え、黒竜へと駆けていた。そしてユエが魔法名を呟くと。黒竜の頭上に黒い球体が発生する。その球体は黒竜へ落ちると、黒竜は地面へと叩き落とされた。

『禍天』

消費した魔力に応じて、任意の位置に重力を発生させる魔法。『征天』より魔力の消費や準備に時間がかかるが、重力の方向も選択することが出来る。

「……シア！」

「やああああああー！」

地面に礫となっっている黒竜の頭部へドリユツケンを叩きつける。重力魔法によってさらに重量を増した一撃は、大きな土煙と破碎音をあげた。

「グルアアア!!」

「避けた!？」

黒竜は、自身の顔を逸らし紙一重で回避していた。そして火炎を放とうと口を開いた瞬間

「させるかー！」

ハジメがドンナーとシユラークを連射させ妨害する。弾は甲殻によって全て弾かれているが、黒竜は煩わしげに首を振っている。

「弓人ー！」

『放たれしは必中、我が矢の届かぬ獣はあらし』

「【オリオン・オルコス】」

一閃

黒竜の死角から放たれた白く輝く矢は、寸分の狂いなく黒竜の甲殻を貫く…。はずが弾かれてしまう

「何!？」

「ガアアアア!!」

驚愕している俺たちを他所に、黒竜は火炎弾をユエに向かって放つ。ユエは咄嗟に『征天』で防御するが、『禍天』の維持ができなくなってしまう。

黒竜はその隙を見逃さず、再び飛び上がり俺たちから距離を取る。そして変わらぬウイルを睨み続けている。

「弓人、どうする?」

放てば全て撃ち抜いていた【オリオン・オルコス】が弾かれているのを見て、ハジメは俺に問いかける。そして、俺は1つ確信したことをハジメに話す。

「ハジメ。恐らくあいつは、何かに操られている」

「操られている? どういうことだ」

【オリオン・オルコス】は獣・魔性に対して防御無視の補正がかかるが、逆にそれ以外には少し威力がある矢程度でしかない。

「魔性の類じゃないのに人を襲う…。しかも意識が希薄だから操られているってことか?」

「恐らく、半分は勘だがな」

「………… ユミトの勘はよく当たる」

「けど、操られているのは分かりましたがどうするんですか?」

ユエとシアも近づき、俺に尋ねてくる。

「それなら簡単だ。俺たちであいつの意識を取り戻す」



## 45星：黒竜【下弦】

「意識を取り戻すって… 策はあるのか？」

「そうですよ！ 私たちの中に洗脳解除の魔法を使える人はいませんし」

俺の発言に、疑問を口にするハジメとシア。だが実際、全魔法の適性のあるユエでも、回復魔法を苦手としているため。洗脳解除の魔法は持っていない。

「よく言うだろ？ 『強いショックを与えれば洗脳は解除される』って強いショックって… お前まさか」

「ああ、『あれ』を使う」

俺の考えた策、それは「アルテミス・アグノス」を使って強化した一撃を叩き込むというシンプルなものだ。早速俺は詠唱を開始しようとした瞬間、ハジメから待ったをかけられた。

「待ってくれ、そいつを使うのはもう少し後でも良いか？」

「別に良いが、どうした？」

「1つ妙案が浮かんでな… それを試してからでも良いか？」

「妙案ねえ… とりあえず内容を聞いてからだな」

黒竜が俺たちを警戒してるのか、未だに対空して襲ってこない隙に手短かにハジメから説明を受ける。説明を聞いた俺たち3人は、その内容も内容のためなんとも言えない表情を浮かべてしまった。

「あー… うん、確かにあり得そうではあるが…」

「ね、ねえハジメ… 他にやりようはないの？」

「いや、少なくとも俺は思いつかないが不満か？」

「不満というか…」

「… 可哀想」

「うっ… でもなあ…」

するとハジメは、俺の方を向き。ハジメもなんとも言えない表情を浮かべる。

「弓人が『あれ』使って殴ると… あいつ死にそうだしなあ」

「あー…」

「お前らなあ… まあ良いや、ハジメの案で行こう」

もうこいつらの俺に対するイメージは払拭できないだろう…俺は心の中で泣きながら弓を構えようとすると、後ろからクラスメイトたちが近づいてきた。

「あのさ南雲… 私たちにもやれることないかな？」

「そうだな… じゃあ、あっちでウィルと先生を守っててくれ」

「うわっ… って重！」

ハジメは黒竜のブレス時に取り出していた大盾を園部に渡すと、その重量にバランスが崩れそうになるがなんとか立ち直す。

「お前から体震えてんぞ、こういう時は適材適所だ」

「… ごめん」

「謝んな、俺たちが戦ってる時は先生たちを守ることが出来ない。だから頼んだぞ」

「分かった… 死なないでよ！」

ハジメの言葉に、園部は大盾を引き摺って畑山先生たちの方へ行く。他のクラスメイトたちも一言ずつ激励を言いながら畑山先生たちの方へ駆けていった。

「それじゃあ… 作戦開始と行こうか！」

黒竜は未だに空中を羽ばたいており、その視線はウィルに向けられている。そのお陰もあり、俺たちが準備を整える間も何もしてこなかった。

「行くぞ！」

ハジメが作戦開始の合図と共に、シユラーゲンを構え『纏雷』を発動する。赤いスパークが迸らせる。

ウィルを見ていた黒竜も、シユラーゲンの脅威を本能で感じ取ったのか。迎撃するためブレスの準備を行う。

「今だ、弓人！」

「任せろ！」

俺は宝物庫から、1本の巨大な矢を取り出す。その矢は、自身の身

の丈と同じほどの大きさを誇っており、もはや槍と表現できる大きさだ。

俺はその矢を番え放つ。矢は風を切りながら、黒竜へと迫る。

黒竜は矢の存在に気づき、即座に回避する。そしてブレスを放とうとした瞬間

避けたはずの矢が黒竜の皮膜を貫いた。

「グガア!？」

「さっきの矢に比べて遅かったから油断したな？速度を落とした分・・・『弾道』に力を入れたからな」

これがミレディの迷宮を制覇した時に手に入れたスキルトリック・ショット【弓芸百般】だ。

弓矢限定ではあるものの、発射時の弾道や速度を任意に変化させることができる。今回は、速度を落とした代わりにブーメランのような軌道にさせた。

「ナイスだ弓人！くらいやがれ！」

「グルアアアア！」

シユラーゲンの充填を終え、引き金を引くハジメ。轟音と共に発射される弾丸。黒竜も負け時とブレスを発射するが、皮膜を片づけられた時に魔力が霧散したのか先程より威力が落ちている。

シユラーゲンの弾丸と黒竜のブレスがぶつかり合う。威力が落ちていてもシユラーゲンと拮抗しているのには驚いたが、ここまで全てが想定通りだ。

「頼んだぞーユエー！」

「…………『禍天』」

ユエの魔法により、再び黒竜の頭上へ現れる重力の球体。黒竜は先ほどのことを思い出したのか球体から離れようとするが、今回避のためブレスを止めるとシユラーゲンの弾丸が襲ってくるためブレスを止めることが出来ないでいる。

その結果、黒竜は再び地面へと礫になってしまう。口内の魔力も完全に霧散してしまい、ブレスも途切れている。

「…………シア！」

「今度こそ、当てます！」

シアはドリユツケンを構え、今度は縦振りではなく横振りですイングをする。

重力魔法により更なる加速を得たドリユツケンは、黒竜の顔面を完璧に捉える。

「ガアアア…」

脳が揺さぶられたのか、抵抗する力が弱まり咆哮も小さな物となっている。

そしてこの作戦の最後は、黒竜の背後でパイルバンカーを構えたハジメによって終わる手筈になっている。

「そういえばこの世界にはこんな言葉があるんだってな？ 『竜の尾を蹴り飛ばす』って」

これは、護衛中モットーから聞いたこの世界の諺の一つだ。

この世界の竜は硬い鱗と甲殻に覆われており鉄壁の防御力を誇るが、目や口内を除けば唯一尻穴の付近は鱗がなく弱点となっている。防御力の高さ故に、眠りが深く、一度眠ると余程のことがない限り起きないのだが、弱点の尻を刺激されると一発で目を覚まし烈火の如く怒り狂うという。昔、それを実行して叩き潰された阿呆がいたため、教訓として伝わっている。

「こいつを食らって目を覚ましやがれ！」

そして、パイルバンカーが黒竜の『そこ』へ勢いよく突き刺さった瞬間

「なんじゃあああああああああ!!?」

黒竜の目が見開き、突如人の言葉で絶叫した。

|||||

三星弓人 Lv. 6

|    |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |
|----|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 力  | : | I | : | 4 | 5 | ↓ | I | : | 6 | 0 |
| 耐久 | : | I | : | 2 | 5 | ↓ | I | : | 3 | 7 |
| 器用 | : | I | : | 3 | 2 | ↓ | I | : | 4 | 2 |
| 俊敏 | : | I | : | 3 | 0 | ↓ | I | : | 4 | 0 |
| 魔力 | : | I | : | 4 | 0 | ↓ | I | : | 5 | 1 |

頑健：E  
对魔力：F  
千里眼：E  
直感：H

## 46星：ティオ・クラルス

「なんじゃああ!? いったい何が!」

黒竜はひどく困惑した様子で叫んでおり、俺たちもまさか人語を話すとは思っていなかったため、全員が呆然としている。

そして黒竜は俺たちに気付き、羞恥と怒りに満ちた声をあげた。

「お主たちか… 妾のお、お尻に異物を突っ込んだのは!」

「待て待て待て! 落ち着け!」

「これが落ち着いていられるか! よりにもよってお、お尻とはどういう了見じゃ!」

「お前が洗脳されてたから強いショックを与えるために仕方なかったんだよ!」

「… それは真か?」

俺が必死に伝えると、黒竜は他の奴らへ顔を向け怪訝な表情で尋ねる。尋ねられた皆は、困惑しながらではあるが首を縦に振ると、黒竜はその怒りを収め始めた。

「そうであったのか… ならば礼を言おう」

「いや… 俺たちもこんな方法で悪かったな」

「よい、他に方法が無かったのであろう?」

黒竜の寛大さに内心感謝していると、ユエが黒竜に質問をした。

「… あなた、竜人族?」

「うむ、妾は誇り高き竜人族の1人。『ティオ・クラルス』と申す」  
「… なんてこんな所に?」

「質問に答えるのは構わぬが… すまぬ。恥を忍んで頼みがある」

「頼み?」

「わ、妾の… お、お尻に刺さっているこれを抜いてほしいのじゃ…」

黒竜… ティオは羞恥に満ちた声で俺たちに頼んできた。

「魔力もほとんど残つとらん故… このままだと死んでしまう…」

「あ… なるほどな」

「弓人、お前どういう事か分かったのか?」

その意味に気づいた俺はテイオに同情していると、未だ気づいていないハジメは俺に質問してきた。よく見ると他の奴らも俺に視線を向けている。

「テイオ…さん？あんたのその姿は魔法による者だろ？」

「その通りじゃ…」

「それで、魔力が切れたら、人の姿になる…だろ？」

「うむ…」

「じゃあお前たち、考えてみる…あれが突き刺さった状態で人の姿に戻るとどうなると思う？」

俺がそう尋ねると、全員は少し考えた後、顔を青くして自身の尻を抑え始めた。

「そんな死に方をしたら父上や同胞たちに顔向け出来ん…後生じゃ…」

羞恥により、消え入りそうな声で懇願するテイオに、俺は内心申し訳なさいでいっぱいになりながら刺さっている杭の所へ行く。

「分かった。俺たちのせいでもあるし抜こう」

「真か！」

「ああ、だから男の俺に見られる事になるが我慢してくれ」

「うっ…せ、背に腹はかえられぬ！頼む！」

テイオからも許可を得たため。俺はテイオの『そこ』へ刺さっている杭を両手でしっかりと握り、力が入るように腰を落とす。

「よし、じゃあ3つ数えたら抜くから力抜いてくれ」

「え？ ちよっ…できれば優しく…」

「いくぞ！」

「ま、待ってたもれ！せめて妾のタイミングで」

「はい、いーち！」

「オアーーーーー！ーーーーー！」

「「「いや2と3はアアア!?」「」」」

話の途中で杭を引っこ抜かれたことで、テイオは絶叫を上げて飛び上がるように体をのけぞらせる。

そして、俺がタイミングを完全に無視して引っこ抜いた事に、ハジ

メたちと畑山先生たちに加え、さつきまで怯えきっていたウイルスですらツツコミを入れてきた。

「知らないのか？男は1だけ覚えてたら生きていけるんだよ」

「お、お主！さつき3つ数えたらと言ったであろうが!？」

「後、こういう時はタイミンングをずらした方が力が抜けてるもんだ」

「こんなにも嬉しくない心遣いを受けたのは初めてじゃ…」

テイオは恨みがましい視線を俺に向けてくるが、しばらくするとため息と共にテイオの体が光り始める。

その輝きが繭のようにテイオを包みこむと、どんどん小さくなっていく。そして、人が1人入れるくらいの大きさになると、繭が解けるように消えていく。

そして繭の中から、着物を思わせる衣服を着て俺を睨みつけてくる黒髪金眼の女性がいた。

「色々と言いたいことがあるが…ひとまず、感謝するのじゃ」

「とりあえず、ユエの質問に答えてもらっても良いか？」

「うむ、順番に話そう…妾は」

こうしてテイオの口から、ここまでの経緯が話された。

彼女はとある目的のため、竜人族の隠れ里から飛び出してきたらしい。そして、情報収集のため人里に降りるつもりであったが、その前に魔力の回復のため休息を取っていた。

「その間に洗脳されてしまったと？」

「おそらく…我ら竜人族は一度休息に入ると丸1日は起きることはない…」

「そうか…洗脳してきた奴は分かるか？」

「臆げではあるが…たしかローブを身につけた『闇系統の魔法』の使い手であった」

テイオの言葉に、畑山先生たちは息を呑む。詳しくは聞いていないが、心当たりがあるのだろう。

「あの…そのローブの子について何か「ふざけるな!」

畑山先生がテイオに問い詰めようとした瞬間、ウイルスが怒りに満ちた視線を向けテイオに叫んだ。



「洗脳されてたから… ゲイルさんを、ナバルさんを、レントさんを、ワスリーさんをクルトさんを殺したのは！… 仕方ないとも言うつもりか！」

「… 妾は事実を言っただけじゃ、言い訳をするつもりはない。妾には目的があるため、この命で償うことはできぬ… だが、罵りなら幾らでも受けよう」

テイオは目を閉じて、全てを受け入れようとする。ウイルは一瞬罵声を浴びせようとするが、それは自己満足にしかならないと悟り。そして、絞り出すように口を開く。

「なんで… なんで、あの人たちが死ななきや駄目だったんだ… あんなに良い人たちが… 何も悪いことをしてなかったあの人たちが…」

「知りたいか？」

俺がウイルに尋ねると、ウイルは一瞬反応するが答えない。だが、俺は構わず話し続ける。

「何も悪いことをしていないそいつらが、何故死んだのか？ どうしてお前は今、こんなにも苦しいのか… 知りたいか？」

「み、三星くん… これ以上は」

畑山先生が俺に止めるよう言ってくるが、俺はそれを無視して言い放った。

「それは、誰のせいでもない。ただ… 間が悪かっただけだ」

## 47星：間が悪かった

「間が… 悪かった?」

「そうだ。たまたまその時だけ噛み合わなかった。ただ、それだけだ」  
弓人は、さも当たり前のように言い放った。それにこの場にいた者全てが唾然とし、先ほどまで目を閉じていたティオでさえ目を見開き彼を見ていた。

「じゃあ… なんですか… 彼女が洗脳されたのも… 運が悪かったからだ?」

「そうだ」

「そのせいで僕たちが襲われたのも?」

「そうだ」

「そのせいで… みんなが死んだのも?」

「そうだ」

体を震わせ、絞り出すように問いかけてくるウイルスに対して、弓人は淡々と、そして無慈悲に肯定する。

その瞬間、ウイルスは顔を怒りで歪ませ弓人の胸ぐらを掴んだ。

「そんな… そんな間に合せの言葉で済まされることじゃないでしょう!」

「だが、それが真実だ」

「どう考えたって! 悪いのはあいつだろうが!」

そう言つてウイルスはティオを指差す。ティオは彼の仲間を殺した事による罪悪感で思わず視線を逸らしてしまう。

「そうだな、操られていたとはいえお前の仲間を殺したティオは悪い!」  
「なら!」

「だが、お前たちも悪い!」

「は…?」

突然の言葉に、ウイルスは意味がわからなかった。

なぜ、襲われた自分たちが悪いのか。被害者である自分たちが、なぜ責められないといけないのか。

「準備は完璧だったか？ 調査の依頼だからと油断しなかったか？ どうせ死なないと高を括ってなかったか？」

「そ、それは…」

「その反応だと、心当たりがありそうだな。なら、お前たちも悪い」  
「そんな…」

ウイルは弓人から手を離し、崩れ落ちるように座り込んでしまう。しかし、弓人は構わず話し続ける。

「そして、イルワも悪い」

「なっ… イルワさんは関係ないだろ！」

「いいや、関係ある。そもそもお前たちに依頼を出さなければ誰も死ぬことがなかったからな。そして、俺たちも悪い」

自身のことを悪いと言い始めたことに、探索に来た者たちが困惑した表情を弓人へ向けた。

「俺たちは1度ウルスの街で夜を明かしてからここへ来た。もし、ウルへ寄らずここへ直行していたら助かったかもしれない。だから、俺たちも悪い」

「全員が… 悪いってことじゃないですか…」

「そうだ。お前も… そして周りも含めて全てが悪かった… なら、『間が悪かった』と言うしかないだろ？」

「それじゃあ… 死んだみんなが報われないじゃないですか…」

絶望したように吐き出されたウイルの言葉に、先ほどまでの淡々とした口調ではなく、どこまでも優しく穏やかな口調で返した。

「悲しいがな… けどな、それも悲しいだけだ。それが人生だ」

「え…？」

「人生なんて、無意味と有意味のせめぎ合いでしかない。だから絶望するくらいならこう思えばいい『ただ間が悪かった』ってな、大体のことはこれで片付くぞ。騙されたと思って口に出してみる、気持ちだが、心が軽くなるからな」

どこまでも無慈悲に、そしてどこまでも優しく肯定する弓人の言葉に、ウイルは泣き出してしまった。

直前まで迫って来ていた、死の恐怖から解放された事に。そして、

仲間が死んだことが、自身だけのせいじゃないと言われた事に。

「すみません…。みつともなく泣き出してしまっただけだ」

「気にすんな、俺は自分の考えを言っただけだ」

しばらくした後、泣き止み恥ずかしそうにしているウィルを立ち上がらせると、ハジメが痕跡で見つけたバッグを持ってきた。

「そういえば、こいつはお前の持ち物か？」

「あ！僕のバッグです！」

そう言っただけでバッグを受け取ると、大慌てで中身を探る。そして、口ケットペンダントを取り出すと安堵の表情を浮かべた。

「良かった…。壊れてない」

「ん？その写真の女性は恋人か？」

「あ、いえ。この写真に写ってるのはママです」

「ま、ママ？」

「そうだ…。まだ僕にはママがいる！だから死ぬわけにはいかないんだ！」

先ほどの絶望が嘘のように、活力をみなぎらせるウィルを見て、俺は開いた口が塞がらなかった。

「ええ…。俺、結構良いこと言ったと思ったのに…」

「……よしよし」

「す、少なくとも妾の心には響いたぞ！」

「やめて！慰めないで！」

いつのまにか近づいて来ていたユエに頭を撫でられて、まさかのテイオに慰めの言葉をかけられたことに、若干泣きそうになっている。ハジメが少し焦りながら話しかけて来た。

「弓人、面倒な事になってきた」

「面倒って、なにが？」

「テイオの話聞いてから偵察機を飛ばしてたんだが、例の魔物の群れを見つけた」

「あ、けど多くて4千とかだった？」

「それに桁が1つ追加されそうだ」

「うわ、面倒臭」

ハジメの言葉に、ウイルや畑山先生たちが驚愕する。聞けば既に進軍し始めているようで、ルートからして1日もすればウルへ到達するようだ。

「は、早く町に知らせないと！ 避難させて、王都から救援を呼んで・・・それから・・・」

畑山先生はパニックになりながらも、必死にやるべき事を考えている。万を超える魔物に対して、こちらの戦力は余りにも少ない。そのため、避難を呼びかけ王都から救援を呼びかけるのが最適解であろう。

「あの・・・ユミト殿たちならなんとかできるのでは？」

ウイルの呟くようにこぼした言葉に、全員が俺たちに視線を向ける。その瞳には、期待の色が混ざっている。

「いやいや、俺たちの依頼はあくまで『ウイルをフューレンへ連れて帰る』ことだ、流石に他へ気を回す余裕はない」

折角、ウイルが生きていたのに別の事に首を突っ込んで死んでしまったなんて笑い話にもならない。

「俺も弓人に賛成だ。保護対象連れてこんな起伏が激しい障害物だらけの場所で殲滅戦だなんてやりづらくてしょうがねえ。仮に大群と戦う、あるいは黒ローブの正体を確かめるとして、じゃあ誰が町に報告するんだ？ 万一、俺達が全滅した場合、町は大群の不意打ちを食らうことになるんだぞ？ ちなみに、魔力駆動二輪は俺か弓人じゃないと動かせない構造だから、俺に戦わせて他の奴等が先に戻るとか無理だからな？」

理屈を並べて捲し立てて来たハジメに、畑山先生たちは何も言えなかった。

「何はともあれ、1度ウルへ行く。この話は一旦終了だ」

「の、のう。ユミト殿にハジメ殿、妾もついて行って良いか？」

「俺は良いけどハジメは？」

「好きにすれば良い」

「おお！感謝するぞ！」

こうして俺たちは車に乗り込み、ウルへ移動を開始した。

## 48話：寂しく悲しい生き方

ウルへ移動中、先ほどのこともあり空気が重い車内

しかし、1名だけその空気に気づいていない者がいた

「の、のう！この鉄の箱はなんじゃ？何で馬がおらぬのに動くんじや？それに…」

「だー！落ち着け！っていうか空気を読め！」

「す、すまぬ…このような珍妙な物は見た事ないゆえ」

この世界には本来存在しない車に、目を輝かせ矢継ぎ早に質問してくるテイオ。俺がツツコミを入れると質問をすることをやめたが、興味が尽きないのか車の中をキョロキョロと見渡している。

「ユミト殿… 本当になんとかならないんですか？」

「答えはさつき言っただろ」

「ですがウルの人たちを見捨てることなど」

「くどいぞ」

先ほどからウィルは俺たちを説得しようとしてくるが、俺は考えを改めるつもりはない。すると、ウィルは何か思いついたように提案した。

「な、なら！僕だけウルに置いて行って良いです！ユミト殿たちにはイルワさんに生きていたと報告して頂けると「舐めてんのか？」」

俺はウィルを睨みつけると、ウィルは体を強ばらせ息を呑む。

「随分とお優しいことで… いや現実が見えてないのか？お前の保護を頼まれたのに保護対象本人を危険に晒すとも思ってたのか？」

「で、ですが！」

「それに、お前1人がいたとして何かできるとでも思ってたんのか」

ウィルは顔を俯かせ黙ってしまふ。先ほどより重い空気が車内を包み込む。そんな中、彼女は意を決したように話しかけて来た。

「三星君… 君なら… いえ、君たちなら魔物の大群をどうにか出来るんですよね？」

「先生… あんた正気ですか？どう考えたら万を超える大群をどうに

かできるってなるんですか？」

俺はウイルに向けた視線を畑山先生にも向ける。彼女は一瞬だけ怯んだが、どこか確信した様子で話し続ける。

「三星君は先ほどからウイルさんが危険に晒されることを理由にしているだけで、自身の心配は一度もしてません。それに、山で南雲くんが言った時もやりづらいいと言いましたができないとは言ってませんよね」

「…まあ、そうですね」

言い方を間違えたあと、俺とハジメは表情を歪ませる。畑山先生は真剣な表情を崩さず俺たちに頼みを伝える。

「三星君、南雲君。どうか力を貸してもらえませんか？ このままでは、きつとこの美しい町が壊されるだけでなく、多くの人々の命が失われることになります」

「先生、今自分が何を言ってるか分かってます？」

「弓人の言う通りですよ、まるで戦争へ駆り立てる教会の連中みたいだ」

俺たちの言葉に、彼女は表情を崩さず。どこまでも『先生』の表情で俺たちを見てくる。

「…元の世界に帰る方法があるなら、直ぐにでも生徒達を連れて帰りたい、その気持ちは今でも変わりません。でも、それは出来ないから… なら、今、この世界で生きている以上、この世界で出会い、言葉を交わし、笑顔を向け合った人々を、少なくとも出来る範囲では見捨てたくない。そう思うことは、人として当然のことだと思えます。もちろん、先生は先生ですから、いざという時の優先順位は変わりませんが…」

畑山先生が1つ1つ確かめるように言葉を紡いでいく。

「あんなに穏やかだった南雲君や、優しくかった三星君がそんな風になるまでに、想像を絶する経験をして来たのだと思います… そんな時、力になれなかった私の言葉なんて軽いものかもしれませんが、聞いてください」

俺たちは黙ったまま、畑山先生の言葉を待つ。



「君たちは、日本に帰ると言いましたよね。では、日本に帰っても同じように大切な人達以外を切り捨てて生きますか？ そんな生き方が日本で出来ますか？ 日本に帰った途端、生き方を変えられますか？ 先生が、生徒達に戦いへの積極性を持つて欲しくないのは、帰ったとき日本で元の生活に戻るのか心配だからです。殺すことに、力を振るうことに慣れて欲しくないのです」

「……」

「君たちには君たちの価値観があり、未来への選択は常に君たち自身に委ねられています。それに、先生が口を出して強制するようなことはしません。ですが、君たちがどのような未来を選ぶにしろ、必要な物以外を切り捨てるその生き方は……とても『寂しくて悲しい事』だと思うのです。その生き方は、誰も幸せにならないものだと思うのです。なので……君たちが持っていた、他人を思いやる気持ちを忘れていってください」

俺は、奈落に落ちた時のことを思い出していた。

前世の記憶を思い出しハジメとユエに受け入れてもらった時、俺は救われた。

俺の思考や価値観は、前世のもの寄りになっている。そんなこと畑山先生は当然知らない。だが、彼女はどこまでも俺たちのことを考えてくれている。

ハジメの方を見ると、ハジメも何か思うことがあるのか考えている。そして、ハジメは畑山先生に質問をした。

「……先生は、この先何があっても、俺と弓人の先生か？」

「当然です」

「……俺たちがどんな決断をしても？ それが、先生の望まない結果でも？」

「言ったはずです。先生の役目は、生徒の未来を決めることではありません。より良い決断ができるようお手伝いすることです。君たちが先生の話を聞いて、なお決断したことなら否定したりしません」

ハジメの質問を、一切の迷いなく即座に返す畑山先生。ハジメは再び考え込んだ後、今度は俺に話しかけて来た。

「弓人、ウルに着いたら準備をするから着いて来てくれ」

「あいよ」

「南雲君！・三星君！」

表情を明るくする畑山先生、俺は彼女に対して条件を言った。

「じゃあ、今回の件で条件があります『俺たちの指示に従ってもらおう』と『何があっても文句を言わない』良いですね？」

「分かりました！ありがとうございます！」

この条件を快く飲んだ畑山先生には、今回の件の立役者になってもらおうと俺は考えた。

こうして俺たちを乗せた車は、遂にウルへ到着した。

## 49星：人造の女神

俺たちがウルに到着した瞬間、ウイルと畑山先生は町長のいる役場へと飛び出した。そして俺たちが遅れて着いた時には、既に役場は騒然としていた。

最初は戯言だと聞く耳を持たなかった町長も、『豊穰の女神』である畑山先生の言葉には無視できなかつた。

「それは本当ですか!? 『豊穰の女神様』!」

「は、はい。できれば・・・その呼び方はちよつと」

「町の住民に避難の指示をしなければ・・・それに王都にも増援を要請して・・・」

町長はやるべきことを考えており、呼び方の訂正を聞かれていないことに畑山先生はなんとも言えない顔をしている。

「あく、避難の指示はともかく増援の必要はないぞ」

「む? お前たちは誰だ?」

「そうだな・・・強いて言うなら『豊穰の女神の使徒』だな」

「え!? み、三星くん!」

「『俺たちの指示に従ってもらおう』『何があつても文句を言わない』『うっ・・・』」

抗議してこようとする彼女を、最初に提示した条件で大人しくさせていると。

「おお・・・噂には聞いている! 女神にはとてつもなく強い護衛がいると!」

「ああ、俺たちがいるからにはもう大丈夫だ」

俺がそう言うと、役場の人たちは希望を見つけたような表情を浮かべる。そして、殲滅は俺たちが行うため避難誘導を任せる旨を伝えると、役場の人たちは快く引き受けてくれた。

「あっそうだ。テイオ、お前も俺たちの方に来て手伝ってくれ」

「無論じゃ。竜人族として名誉挽回といこう・・・じゃが、魔力の回復のため1日は欲しい」

「それなら… 翌朝、ウルを出てすぐにあるあの平原で迎え撃とう。  
全員、それで良いな？」

「了解だ」

「はい！」

「……ん」

「分かったのじゃ」

こうしてそれぞれ準備のため、役場から離れ夜を明かした。

—————

翌朝、ウルには本来存在していなかった『外壁』が作られ、異様な  
雰囲気にも包まれている。

この『外壁』は、ハジメがバイクを走らせながら『錬成』を行い生  
成したものだ。

「ユミト殿！なんじゃあの鉄の騎馬は？あんな不安定な形でなぜ倒れ  
たりしないのじゃ？あの鉄の箱と同じ原理で走ってるのか？」

「はいはい、全部終わったなら教えてやるから大人しくしとけ」

「約束じゃぞー！」

車の時のように目を輝かせているティオを落ち着かせていると、ハ  
ジメも外壁作りが終わったため、こちらの方へ戻って来た。

「とりあえず、こんなもんでいいだろう？」

「十分だ… ってどうしたティオ？」

「えつとのう… お主たちに頼みがあるのじゃが…」

「頼み？」

どこか言いづらそうにしているティオ。俺は話を促すと、彼女は指  
同士を合わせながら話し始めた。

「えつとじゃな… お主たちは、この戦いが終わったらウィル坊を送  
り届けて、また旅に出るのじゃろ？」

「ああ、そうだ」

「それでの… 頼みというのは… 妾も同行させてほし…」

「良いぞ」

「あつ！勿論無理にとは… って良いのか!？」

ティオは一瞬顔を明るくさせるが、その後すぐに気まずそうに顔を

逸らす。

「じゃが… 操られてたとはいえ、妾はお主たちを襲った…」

「… テイオはもう仲間」

「ユエ殿…？」

「… ユミトが言った。『お前を助けて、お互いに名前を知った。なら俺たちはもう仲間だ』って」

「ユエ殿… お主たちもよいのか？」

テイオは不安気にハジメたちの方を見る、ハジメとシアのどちらにも嫌そうな雰囲気はない。

「まあ、お前がいた方が迷宮攻略とか楽になりそうだし俺は別に良いと思うぞ」

「私はハジメが良いって言うならかまいません！」

「ハジメ殿… シア殿…」

「来いよ。テイオ」

俺はテイオに右手を差し出すと、テイオはどこか照れ臭そうに握り返して来た。

「うむ、よろしく頼むぞ！」

こうして俺たちの旅に、テイオが加わることが決まっていると、ついに魔物の大群が見えて来たのだが

「あれ？3万にしては多すぎねえか？」

「いや、6万はいるぞ…」

「ハジメ… それって、たった1日で2倍にしたってこと？」

魔物の数について俺たちが話していると、町の方から畑山先生と、武器を持った男たちがこちらへ近づいて来た。

「先生、彼らは？」

「故郷を守りたいと… 自分達も戦いたいと言った人たちです」

「頼む！俺たちにも戦わせてくれ！」

「何だってやる！俺たちにもこの町を守らせてくれ！」

彼らを見ると、決してひかないという強い意志が瞳に宿っていた。下手をすれば無理矢理にも着いて来そうな雰囲気であったため、どうしようかと考えていると1つ妙案が浮かんだ。

「先生、ちょっと失礼」

「えっ？つてきやあ！」

「……む」

俺は畑山先生を抱き寄せると、外壁の上にまで登る。そしてハジメたちに手招きすると、ハジメたちも察したのか登ってくる。……何故かユエは不機嫌だが

そしてハジメたちが到着すると、俺は見上げてくる男たちに向かって大きく声を張り上げる。

「聞こえているか！このウルの町に残った者たちよ！」

まるで劇の役者のように大きく身振りをつけ、男たちの視線を俺に向くようにする。

「今！この町には魔物の脅威が迫っている！」

「このままでは！この美しい町が破壊され！無辜の民が殺され！全てが奪われてしまうだろう！」

その言葉に、1人は悔しそうに唇を噛み、1人は血が出る勢いで拳を握り締める。

「だが！悲観することはない！俺たちの勝利は決定しているからだ！」

「なぜなら！俺たちには女神の加護がある！『豊穰の女神』畑山愛子様  
のな！」

「え…… え？ ええ！」

いきなり呼ばれた畑山先生は、困惑から驚愕に変化しながら俺を見てくる。男たちも何故、畑山先生がいると勝てるのか分からないため困惑している。

「彼女は魔物によって人々が苦しむことを良しとせず！『豊穰』と『勝利』をもたらすため！人界へ舞い降りた女神である！さあ、刮目せよ！彼女の力の一端を！」

「…… 『雷竜』」

俺はユエの肩を軽く叩くと、ユエは渋々と魔法を放つ。護衛の時の様に、暗雲から雷の龍が現れ、外壁付近の平原を焼き払った。

「お、おお！」

「すげえ！いける！いけるぞ！」

「「「愛子様万歳！愛子様万歳！愛子様万歳！」」」

その雷竜を、畑山先生の力だと勘違いした男たちは、希望に満ちた表情で畑山先生を讃え始めた。羞恥で顔を真っ赤にして、瞳に涙を溜めながら睨みつけてくる畑山先生を無視して俺は再び口を開く。

「先陣は我々『女神の使徒』が行く！お前たちは俺たちが取りこぼした魔物を請け負ってくれ！」

「「「おおー！」」」

「行くぞ！！我々の勝利を！！女神に捧げろおおお！！」

「「「うおおおおおおおおお！！！！」」」

士気は最高潮になり、後は俺たちが魔物を取りこぼさなければ誰も死ぬことは無いだろう。

「三星くん…なんでえ…」

「…よしよし」

「あいつ、半分は楽しんでやってるぞ」

「確かに」

「ユエ殿！今の魔法はなんじゃ？竜と言ったがあのような姿の者は里でも見たことないぞ？」

## 50星：防衛 ウルの町【上弦】

「弓人、こいつを」

魔物の大群を見ていたところ、ハジメから何かを投げ渡され咄嗟に受け取る。

「うおつと…こいつって」

「ああ、お前から頼まれてた物だ」

俺はハジメに渡されたものを見ると、それは黒い鞘に収められた日本刀に良く似た形状をした物であった。

試しに鞘から抜いてみると、刃は何か効果が付与されているのか翠色の光が淡く光っている。

「日本刀…か」

「個人的には会心の出来なんだが、不満か？」

「いや、一応心得はあるから問題ない…で、こいつにも何かカラクリが？」

俺が尋ねると、ハジメは待つてましたと言わんばかりに説明を始める。

「当然、そいつには『風爪』を付与している」

「『風爪』って爪熊のやつか」

「ああ、そいつに魔力を込めれば刃から『風爪』が発動して爪熊がやつたみたいに斬撃が拡張され、擬似的に刀身が伸びる。」

斬撃が拡張って…俺はまさかと思いハジメに尋ねる

「…こいつの銘は？」

「そうだな…風刃…いや旋空だな」

「お前狙ってるな？」

「…なんのことかわからない」

俺は呆れた視線を向けながら日本刀…旋空を腰に収める。平原を見てみると、魔物の大群もそれなりに近づいて来ており、俺たちもそろそろ始め時だ。

「じゃあ、ぼちぼち始めるか…ってユエ、いい加減機嫌治してくれ



よ」

「……ユミト、私もだっこ」

「これが終わったらな」

「……ならば良し」

なんだ、俺に甘えたかったのか。

俺はユエの頭を軽く撫でてやると、ユエは気持ちよさそうに目を細める。

こうして、防衛という名の蹂躪が開始された。

—————

「何だよ、これ……何なんだよ、これは!!」

ローブの男…… 清水幸利は、岩陰に身を隠しながら眼前の現実を理解できないでいた。

偶然出会った男との契約により、ウルを畑山ごと壊滅させようと企んだ。容易に捻り潰せると思っていた町や人は、予想しなかった迎撃により未だ無傷であり、それどころか彼にとって、地獄が現在進行形で生み出されていた。

白髪の男が、この世界に無い筈の銃…… しかもチェーンガンにより魔物たちを肉塊に変えていく。

戦闘能力が無いはずの兎人族の女が、これまたこの世界に無いはずのロケットランチャーで魔物たちを爆散させていく。

金髪の少女が、見たことない魔法で魔物たちを消し飛ばしていく。

黒髪の女が、あの山脈で操った黒竜のブレスの様な魔法で魔物たちを焼き尽くしていく。

そして何よりも

「何で…… 何で三星の奴が生きてんだよ!?!」

あの時、奈落に落ちて死んだはずの三星弓人が生きて清水の計画を崩壊させている。しかも彼は、大量の矢を放ち魔物たちを1撃で撃ち抜いていく。

「なんでだよ! 何でステータス0の無能以下のゴミが俺の邪魔をするんだよ!」

髪を掻きむしり叫ぶ様に悪態をつく清水、しかし何かを思い出した

のか息を荒げているが少しづつ落ち着きを取り戻す。

「落ち着け… まだ大丈夫だ。俺にはこいつがいる…」

清水の後ろには、狼の姿をした4つ目の魔物がいた。

「真の勇者は… 英雄は俺なんだ」

そう言った清水の瞳は、光を失い暗く澱んでいた。

「す、すまぬ… 妾はここまでのようじゃ…」

「謝らなくていい、ゆっくり休んでくれ」

「…… お疲れ様」

「ありがたい… そうさせて貰おうかの」

魔力のほとんどを使い切り、立っているだけでやっとなったティオに労いの言葉をかけると、彼女はその場に座り込んでしまった。

「ユエ、お前の方はどれくらいだ？」

「…… ん、残り魔晶石二個分くらい…… 重力魔法の消費が予想以上。要練習」

「了解、ならば後は俺たちがやるから。何かイレギュラーが起きるまでティオと待機してくれ」

「…… ん、気をつけて」

俺は弓矢を空間庫にしまうと、ハジメとシアの下へ行く。ハジメの方もチェーンガン… メツエライが限界を迎えていたのか同じく空間庫へしまっていた。

「2人とも、気づいたことはあるか？」

「気づいたこと… 魔物たちの違いのことか？」

「あ、それだったら分かります。ティオさんの様に操られてるのと、へっぴり腰の魔物のことですか？」

「正解、おそらく操られてるのが群れのリーダーだ。そいつを叩けば操られてない魔物は逃げ出すだろう」

そう言うと2人は即座に理解して、ハジメはドンナーとシユラークを、シアはドリユツケンを取り出しいつでも出れる準備をする。

「ここからは俺たち前衛組の仕事だ。さっさと終わらせてウイルスを連れて帰るぞ」

「了解だ！」

「はい！」

「ま、待て！わざわざ敵陣に突っ込むつもりか!?危険じゃ！」

テイオは体をふらつかせ、俺たちを止めにくる。俺はテイオの肩に手を置き、そのまま抑え座らせる。

「まあ見てろ、俺たちの強さは直接戦ったお前がわかってるだろ？」

「なっ……し、しかし！」

「じゃ！ちよつと行つてくるわ！」

「待て！……絶対死ぬぞ！」

テイオの抑止の声を振り切り、外壁から平原へと飛び降りる。ハジメとシアは先に行っている様で、既に戦闘を開始している様だ。

「じゃあ……始めるか！」

俺はハジメに渡された旋空を構えながら、敵陣へ突っ込んだ。

## 50星：防衛 ウルの町【下弦】

敵陣に突っ込むと、俺の存在に気づいた魔物が数匹飛びかかってきたため。俺は鞘から刀を抜き、下段に構え最小限の回避でリーダー格へ直行する。

「まずはこいつ自体の性能からだな」

リーダー格の懐に潜り込み、斬り上げる。リーダー格は腰から肩にかけて斬り裂かれ一太刀で絶命した。

「マジか、切れ味良すぎだろ」

斬った感触がほとんど無かったことに驚いていると、取り巻きの魔物が数匹飛びかかって来た。どうやらリーダー格を殺しても逃げない奴もいるらしい。

「なら、こいつらで試すか」

試しに魔力を流すと、刀身の光が強まり風が噴き出す。そして横に薙ぎ払う様に振るうと、魔物たちは刀の間合いに入っていないのにも関わらず胴体から横一文字に血が噴き出し、上半身と下半身が切り離された。

「なるほどな、大体わかった」

『そいつの使い心地はどうだ？』

ハジメから『念話』が届いたため、『念話』が付与されているイヤリングを使って答えた。

「完璧以上だ、流石の仕事だな」

『それは何よりだ。そいつについて聞きたいことはあるか？』

「そうだな・・・範囲を伸ばすことは可能か？」

『魔力を込める量を増やせば可能だ。けど伸ばした分効果時間が減少するから気をつけろ』

「・・・やっぱり狙ってんだろ？」

『なんのことかなー』

棒読みでしらばつくれるハジメに呆れていると、もう一つ気になったことが出来たため試しに質問してみる。

「あつそうだ、鞘の方の耐久性はどのくらいだ？」

『ん？刀身と同じアザンチウム鉱石を加工してるから、かなり頑丈だが…それがどうした？』

「いや、それが分かれば十分だ」

俺はハジメとの『念話』を終了して魔物たちの方を向くと、魔物たちは先ほどのことがあり、俺と距離をあけて警戒しているようだ。

『あれ』できるんじゃない？」

俺が刀を収め、居合の構えを取る。

呼吸を整え、目の前の魔物たちへと意識を集中させる。

操られていない魔物たちは、突如武器をしまった俺を見てチャンスだと考えたのか逃げようとする。

しかし、先ほどとは別個体のリーダー格が戦う指示をしたことで各々武器を構え始めたがもう遅い。

「八重樫流抜刀術『断風』たちかぜ」

抜刀した瞬間、魔物たちの世界が逆転した

風により生み出された不可視の刃が、先ほどとは比にならない範囲で魔物たちの首から上を両断した。その範囲は、少し離れた位置にいたハジメやシアと戦闘していた魔物たちの一部にも届いていた。

「よし、上手くいったな」

『な、何ですか今の!?私の方の魔物にも届いてるんですけど!?!』

『弓人の奴…マジでやりやがったよ』

「名付けて…『弓人旋空』」

『『だっさ!』』

俺がやったのは、日本で読んでいた漫画のキャラが使っていた必殺技だ。

技の内容は、効果持続時間を極限まで減らし、効果範囲を最大限まで伸ばして放つ居合斬りである。

斬撃の範囲外にいた魔物たちは、この惨劇を目の当たりにして一目散に逃げ出し始めた。リーダー格が戦う様指示するが、恐怖が勝り残る者は誰もいない。

『後は任せな』

ハジメからそう言われると、発砲音と共にリーダー格が撃ち抜かれた。

「よし、それじゃあローブの男を探るか」

『だな』

『はい』

「なんじゃ…今は…」

「……大丈夫？」

先ほどの弓人が行った人間技とは思えない居合を見て、ティオは俯き体を僅かに震わせていた。

ユエはそれを見て、弓人に恐怖したのかと思いい心配そうに顔を覗いたが、それは杞憂で終わった。

「父上の言つてた通りじゃ、世界は広いのう」

目を輝かせ弓人たちを見るティオ、ユエはそれを見て弓人たちが褒められている様に感じ思わず頬を緩ませた。

「今…誰かに褒められた気がする」

「気のせいだろ…っと」

ハジメとシアに合流した後、今回の元凶であるローブの男を探している、俺たちの前に逃げ出さなかった魔物が立ち塞がった。

その魔物は奈落にいた二尾狼に似た雰囲気を纏った、4つ目の狼の魔物だった。

「操られてる感じもないな、さっさと殺るか」

「だね」

「2人ともストップ、ここは俺1人でいい」

武器を構える2人を止め、1歩前に出る。

「お前らはローブの男を探しといてくれ」

「俺は構わねえけど…良いのか？」

「そうですね、3人でやった方が早くないですか？」

「ちよつと試したいことが1個残つててな、あいつらで実験してみる」

俺がそう言うと、2人はそれ以上何も言わずここから離れ探索を再

開する。四目狼たちは一度ハジメたちの方を一瞥するが、俺が武器を構えた瞬間即座に戦闘態勢に入った。

「とりあえず、挨拶代わりに」

俺は先ほどより範囲を狭めて、居合を放つ。すると、四目狼たちはそれが来ると分かっていた様に上へ飛び回避する。

「ん？勘が良いのか？」

まさか全員に回避されると思っていなかったため、少し驚いたが俺は即座に四目狼1匹の前へ跳び、袈裟斬りで刀を振るう。しかし、それも来ると分かっていたかの様に避け距離を取られた。

「勘が良いっていうより… ああ、お前ら見えてんのか」

おそらく、シアの『未来視』に似た固有能力を持っているのだろう。しかし攻撃に転じてこないところから『予知』より『予測』に近いものだと仮定する。

「丁度良い、今度は『あっち』をやってみるか」

俺は再び居合の構えを取り、意識を集中させる。四目狼たちは俺の攻撃を警戒して、再び回避の準備をする。

お互いに動かず、ひりついた空気が周囲を包み込む。

そんな中、1匹の四目狼が痺れを切らし俺へ襲いかかってくる。おそらく『予測』して、次の攻撃が回避できるものだと判断したのだろう。

俺は動じることはなく、四目狼が近づいてくるのを待つ。そして間合いに入った瞬間、俺は弾かれた様に抜刀した。

四目狼は最初の時の様に上へ飛ばうとするが、その時には既に刃が首を斬り飛ばしていた。

「よし、鞘にも特に損傷はないな」

俺は鞘の状態確認をして残りの四目狼を見ると、狼たちは先ほど何があつたか分からず困惑と怯えが混じった視線を向けていた。

「いくら予測できても、回避が間に合わなかったら関係ねえよな」

先ほどの居合の正体は、構えの時点で風を発生させ鞘の中で循環させることにより抜刀時の速度を爆発的に加速させたものだ。

こちらは先程と違い範囲が刀の間合いまでしかないため、仲間がい

る場合での混戦時でも巻き込む心配は無さそうだ。

「じゃ、実験も終わったしきつさと済ませるか」

こうして清水の奥の手である魔物も、たった数分で全滅することになった。

「こいつで、終わりっつと」

最後の四目狼を切り伏せると、丁度ハジメとシアがこちらへ戻ってきた。

「お疲れ様です… っつて早いですね」

「こいつら奈落の魔物レベルだったがそこまでじゃ無かった」

「そんなもんか、あと見つけたぞ」

そう言っつてハジメは右手を前に出すと、そこには黒ローブに身を包んだ清水がいた。どうやら気を失っている様で暴れる気配がない。

「気失ってるけど何したんだ？」

「いや、こいつが魔物に乗って逃げようとしてたからその魔物を撃ち抜いたら気絶した」

「そうか、とりあえず先生とこ連れて行くか」

「だな」

三星弓人 L v. 6

|      |   |   |   |   |   |   |   |   |   |
|------|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 力：   | I | ： | 6 | 0 | ↓ | I | ： | 9 | 4 |
| 耐久：  | I | ： | 3 | 7 | ↓ | I | ： | 5 | 0 |
| 器用：  | I | ： | 4 | 2 | ↓ | I | ： | 7 | 6 |
| 俊敏：  | I | ： | 4 | 0 | ↓ | I | ： | 7 | 2 |
| 魔力：  | I | ： | 5 | 1 | ↓ | I | ： | 7 | 0 |
| 頑健：  | E |   |   |   |   |   |   |   |   |
| 対魔力： | F |   |   |   |   |   |   |   |   |
| 千里眼： | E |   |   |   |   |   |   |   |   |
| 直感：  | H |   |   |   |   |   |   |   |   |



## 51星：英雄の資格

清水幸利は、真正のオタクである。部屋にはアニメのポスターを壁に貼り、本棚には漫画やライトノベルが敷き詰められ、ゲーム類が大量に積まれていた。

そんな彼にとって、異世界召喚は夢であり憧れであった。何度も頭の中で夢想して、様々な世界を救ったりした。

トータスに召喚された瞬間、彼は自分の時代が来たと思った。自分が『勇者』だと、この世界で『英雄』になるのだと

しかし、彼は『勇者』ではなかった。

『勇者』はあろうことかクラスでも目立っていた天之河であり、自身は『闇術師』というぱつとしない職業。

自分は『モブ』で『勇者の引き立て役』だと嫌ほど理解させられた。なぜ俺が『勇者』じゃないのか

なぜ天之河なんか『勇者』なのか

なぜ天之河ばかりちやほやされるのか  
俺だったらもっと上手く立ち回れる

都合の悪いことを全て周囲のせいにする、子供じみた自己中心的な考えが清水の心を蝕む。

周りの馬鹿たちにはうんざりだ

何にも分かってない

俺こそが『真の勇者』なんだ

『英雄』は俺なんだ

~~~~~  
俺たちが清水を畑山先生たちの下へ連れて帰り、意識が戻るのを待っていると、畑山先生は清水へ近づいて行く。

「愛ちゃん先生！危ないよ！」

「大丈夫ですよ」

園部が止めようとするが、畑山先生は構わず近づく。そしてローブを外し清水だと分かると、一瞬顔を悲しそうに歪めるが清水を起こそ

うと体を揺すり声をかける。

やがて、畑山先生の声がけもあり清水は意識を取り戻した。清水は周囲を見渡し、自身の置かれている状況を理解したのか血走った目で俺たちを睨みつけながら座り込んだまま距離を取ろうとする。

「清水君、落ち着いて下さい。誰もあなたに危害を加えるつもりはありません。先生は、清水君とお話したいのです。どうして、こんなことをしたのか。どんな事でも構いません。先生に、清水君の気持ち聞かせてくれませんか？」

畑山先生が清水と視線を合わせ問いかけると、清水は視線を逸らし、ぼそぼそと独り言に近い声で悪態を突き始めた。

「なぜ？ そんな事もわかんないのかよ。だから、どいつもこいつも馬鹿しかいない。馬鹿にしやがって。勇者、勇者うるさいんだよ。俺の方がずっと上手く出来るのに。気付きもしないで、モブ扱いしやがって。ホント、馬鹿ばかりだ。だから俺の価値を示してやろうと思ったただけだろうが。」

「てめえ。自分の立場わかってんのかよ！危うく、町がめっちゃくちゃになるところだったんだぞ！」

「そうよ！ 馬鹿なのはアンタの方でしょ！」

「愛ちゃん先生がどんだけ心配してたと思ってるのよ！」

反省の色が見られない清水の姿に、クラスメイトたちは怒りを露わにして反論する。清水はそれが気に入らないとばかりに口をつぐみだんまりを決め込む。

畑山先生は、そんな清水が気に食わないのか更にヒートアップする生徒たちを抑えると、ゆつくりと、そして穏やかに問いかける。

「そう、沢山不満があったのですね。でも、清水君。みんなを見返そうというのなら、なおさら、先生にはわかりません。どうして、町を襲おうとしたのですか？ もし、あのまま町が襲われて。多くの人々が亡くなっていたら。多くの魔物を従えるだけならともかく、それでは君の“価値”を示せません」

畑山先生のもっともな質問に、清水は少し顔を上げると薄汚れて垂れ下がった前髪の隙間から陰鬱で暗く澱んだ瞳を愛子に向け、薄らと

笑みを浮かべた。

「…示せるさ…魔人族になら
「なっ!？」

畑山先生が驚き硬直した瞬間、清水は弾かれた様に彼女の後ろに回り込み羽交締めにする。そして、隠し持っていた針を取り出し彼女の首筋に突きつけた。

「動くなあ!動いたらこいつをぶつ殺すぞお!この針は北の山脈の魔物から採った毒針だっ! 刺せば数分も持たずに苦しんで死ぬぞ!

わかつたら、全員、武器を捨てて手を上げろ!」

「清水くん…駄目ですよ…」

裏返った声で叫ぶ清水を、畑山先生は苦しそうであるがまだ説得しようとしている。そんな彼女に清水は馬鹿にした様に薄ら笑いを浮かべた。

「あんだ、自分の価値分かってんのか? 『豊穰の女神』は『勇者』より厄介な存在なんだってよ…魔人族が言ってくれたよ、豊穰の女神を殺せば、俺を『魔人族を勝利へ導いた英雄』にしてやるってさ」

「清水くん、考え直してください…今ならまだやり直せます」

「うるせえよ、良い人ぶりやがって…お前らもさっさと武器を捨てろよ!本当に殺すぞ!」

喚きながら腕に力を込める清水、苦しそうにする畑山先生を見て、園部たちは悔しそうに武器をその場に捨てた。

「後は三星とお前だよ…お前だっつってんだろこの『厨二野郎』!
「ぐふう!」

「止めろ清水! 正論が人を傷つけることはいくらでもあるが、人を救った例は一度も存在しないぞ!」

「ぐほお!」

脅威と思われていない扱いに、清水は苛立ちを覚え顔を歪めている。そんな中、俺とハジメは『念話』で誰にも聞かれない様に別のことを話していた。

『ハジメ、俺が注意を引くから清水の手ごと針を打ち抜け』

『了解、その後はどうする?』

『とりあえず治療する、最悪神水を使っても良いだろ』

『あいよ』

そんな会話をしていることを知らない清水は、怒りに任せ俺たちに武器を捨てる様に叫んでくる。俺は刀を地面に突き立て、ゆっくりとした歩みで清水に近づいて行く。

「まあ、落ち着け。先生も苦しそうだしな」

「来るな！近づくと殺すぞー！」

「お前、『英雄』になりたいんだってな」

俺がそう問いかけると清水は一瞬だけ固まり、また独り言の様にぶつぶつと喋り始めた。

「そ、そうだ…俺は『真の勇者』なんだ…『英雄』になるんだ…だからさっさと逃げてこいつを殺さないと…」

「無理だ」

「…は？」

「お前には、『英雄の資格』がない」

自身が『英雄』になれないと否定された清水は、体を震わせ怒りによって歪ませた顔を俺に向けてくる。

「てめえ！自分の立場が分かって、『もし英雄と呼ばれる資格があるとするならば』」

俺は清水の言葉を遮り、前世で聞いたことを口にした。

『剣を取った者ではなく、盾をかざした者でもなく、癒やしをもたらした者でもない。己を賭した者こそが英雄と呼ばれるのだ』

「…」

これは前世、俺が幼かった頃に森へ来た旅人が言っていた言葉だ。

『仲間を守れ。女を救え、己を賭けろ。折れても構わん。くじけても良い。おおいに泣け。勝者は常に、敗者の中にいる。願いを貫き、想いを叫ぶのだ』

「黙れ…」

その言葉で、俺は『英雄』に憧れなりたと思った。

『さすれば、それが、一番、格好のいいおのこだ』

「黙れよ…」

それなのにこいつは『英雄』を穢そうとしている。

「それなのにお前は何だ？『自身の弱さを周囲のせいにして』『仲間を裏切り』拳句の果てには『女を人質に取る』」

「黙れって言ってるんだろ…。」

そして、俺は清水を睨みつけ言い放った。

「『英雄』を無礼^{なめ}るな、クソガキ」

「黙れえええええー！」

清水はやけになり、畑山先生に針を突き立てんと腕を上げる。その瞬間をハジメは見逃さずドンナーを構え引き金を引く…。

より先にシアが清水の下へ駆けていた。

「避けてえええええええええええー！」

とる。だが、完全に避けることはできず男の片腕が吹き飛んだ。

それでも男は速度を落とさず逃走を続けたため、俺は深追いは危険だと判断してハジメたちの方へ行く。

「先生、大丈夫ですか？」

「私は大丈夫です、それよりシアさんが！」

先ほどまで人質になっていた畑山先生に聞くと、彼女は血相を変えてシアの方を見る。シアを見ると、水流による負傷だけではなく、清水の針も当たっていたようで顔を青白くして浅い呼吸を繰り返していた。

「シア、こいつを飲め！」

ハジメは大急ぎで神水を取り出すとシアの口元に流し込む。しかし、毒が余程強力なのか飲み込む力も残っておらず咳き込んでしまう。

「シアー！」

「死なせるか！絶対に死なせるか！」

泣きそうな表情のユエを横に、ハジメは躊躇せず神水を口に含むとシアに口移しで流し込んだ。

そのお陰もあり、シアは無事飲み込むことができ解毒と治癒が完了する。

ハジメが口を離してしばらくすると、シアはゆっくりと目を開けた。

「シアー！大丈夫か！」

「…これで、2回目だね」

「っ！馬鹿野郎！」

「わっ…ハジメ…ちょっと苦しい」

いつものように揶揄おうとするシアに、ハジメは泣きそうな声で怒り、シアを強く抱きしめる。

普段見せることのないハジメの姿に、シアは一瞬驚いた後とても優しく、まるで子供をあやすようにハジメの背中を撫でる。

「ごめんね、心配かけちゃって」

「良いんだ…お前が生きてるなら…良いんだ」

温かな雰囲気周囲を包む中、男のうめき声で全員があいつを思い出してうめき声の出所を見る。

そこには、胸から大量の血を流し、今にも死にそうになっている清水がいた。

「清水くん！こんな… ああ、ひどい」

「し、死にたくない… だ、だずけ… こんなはずじゃ… ウソだ… ありえない」

止血をしようと、必死に清水の胸を押さえ声をかける畑山先生。しかし、清水はこんなことになってまでまだ独り言を繰り返している。

畑山先生は、藁にもすがる思いでハジメに懇願した。

「南雲君！さっきの薬を！今ならまだ！お願いします！」

ハジメも予想ができていたようで、ため息を吐き若干清水を睨みながら質問した。

「助けないんですか、先生？自分を殺そうとした相手を。いくら何でも『先生』の域を超えていると思いますけど」

「それでもなんです！私がそういう先生になりたいから… だからお願いします南雲くん！」

「仮に先生がそうだとしても、俺が『シアが死にかけた原因』を助けないと思えますか？」

「けど！お願いします！」

どちらの気持ちもよくわかるが、このままだと平行線だと思い俺は神水の入った試験管を取り出してハジメの肩に手を置く。

「ハジメ、後は任せろ」

「弓人！… お前まさか」

「問題ない」

ハジメは気づいたようだが、俺は気にすることなく清水の下へ行く。畑山先生は清水が助かると思ったのか希望を見つけたような表情をして清水を励ます。

「三星くん、ありがとうございます！清水くん！大丈夫ですよ！これで助かります！」

「たす… かる？」

「清水、こいつが見えるか？こいつを飲めばお前は助かる」

清水に見せつけるように試験管を前に出すと、清水は笑みを浮かべ始めた。

「たのむ…それをくれ…ください」

「その前に質問だ…『お前はもう裏切らないか？』」

「ああ…約束するよ。お、俺、どうかしてた…もう、しない…何でもする…助けてくれたら、あ、あんたの為に軍隊だって…作って…女だって洗脳して…ち、誓うよ…あんたに忠誠を誓う…何でもするから…助けて…」

「そうか、もういい」

俺は試験管をしまうと、腰につけていたナイフを取り出す。畑山先生は俺が何をするのか気づいたが、信じたくないのか声を震わせて尋ねる。

「三星…くん？なんで薬をしまうんですか？そんな…ナイフなんて出して危ないじゃないですか」

「清水、お前との付き合いはほとんどなかったが、お前のことは忘れな
いよ」

「そんな…ダメです。そんなことをしてはいけません…」

「好きだけ俺を恨めば良い。お前には、その権利がある」

「ダメ…つてきやあ！」

「愛ちゃん先生！」

俺は近づいてきて、宥めようとしてきた畑山先生の襟を掴み園部たちの方へ投げ飛ばす。園部は咄嗟にキャッチすることに成功したようだ。

そして俺は迷うことなく、清水の喉元へナイフを突き立てた。

53星：覚悟　そして別れ

どれだけ経っても慣れることのない感覚が手に伝わり、生暖かい血がナイフを持つ手を染め上げる。

初めてまともに見る人の死に、クラスメイトたちは、顔を青くしたり吐きそうになるのを必死に抑えている。

「……なんで」

「こいつは完全に堕ちてました」

最後の清水の顔は前世でよく見た。闇派閥の奴等が命乞いする時の顔にそっくりだった。

「けど……」

「後、これは持論ですが『一度裏切った奴は何度でも裏切る』」

「けどー殺す必要はなかったじゃないですか!」

怒りと悲しみが混ざった表情で睨みつけてくる畑山先生の顔に、俺は前世『あいつ』に向けられた表情と重なった。

自身の『正義』を胸に、どこまでも気高く『疾風』のように駆け抜けた『あいつ』に。

「殺さなくても……王宮で保護して……日本に帰れたなら、まだ可能性があったじゃないですか」

「俺は先生の生徒に対する考えや姿勢は尊敬しています……けどね、それが通じるほどこの世界は甘くない」

「……っ」

「俺の考えが『寂しくて悲しい生き方』だとしても……それで仲間が守れるなら、その仲間たちから拒絶されたとしても俺は構わない」

俺は清水に突き刺していたナイフを引き抜き、血に汚れたまま離れようとする。

「三星くん……」

「言った通り、雫たちには会いに行きますよ。まだあんたが、自分の生徒に、こんな『人殺し』と会わせたいと思ってるなら」

そう言つてこの場から離れていく弓人の背中には、ここにいる者たちにはひどく寂しそうに見えた。

ハジメはそんな背中を悲しそうに見た後、立ち上がり去ろうとする。

「弓人は… 滅茶苦茶不器用な奴なんです。先生… あなたにまだ、弓人を信じる気持ちがちよつとでも残つてるなら… 折れないでください」

こうしてハジメたちが立ち去つた後には、顔を俯かせた畑山と、共に何かを考え込んでいるクラスメイトたちだけが残つた。

先生たちと別れた後、ウィルをフューレンへ連れて帰るため車に乗り込もうとしていると、ウィルが話しかけてきた。

「あのおく、本当にあのままですよかったですか？ 話すべきことがあつたのでは… 特に愛子殿には…」

「良いんだよ、俺がいない方が決断できるだろうし」

「それは、そうかもしれないませんが…」

「お人好しは長生きしねえぞ？」

ウィルと会話していると、玉井と相川が俺の方へと走ってきた。

「待てよ、三星！」

「お前には言わなきゃいけないことがあるんだよ！」

それはそうだ。俺はどんな理由はあれ、俺は清水を殺した。どんな罵倒も受け入れようと待っていると、2人は俺の前に立ち勢いよく頭を下げてきた。

「ごめん！」

「…は？」

まさか謝つてくるとは思わなかったため困惑していると、2人は謝つてきた理由を話し始めた。

「俺！お前のステータス聞いた時馬鹿にして笑つてた！」

「俺も！王宮にいた時、内心見下してた！」

「… 黙ってたらバレなかつただろ」

「けど！今謝らなかつたらずっと後悔する気がする！」

「罵倒しても良い！なんなら殴っても構わない！」

律儀というか何というか、聞いてみるとハジメには先に謝ってきたらしい。その時、何もされずに許されたため自身の気が済まないらしい。

「なら…先生のことを頼む」

「三星…」

「俺のせいなんだが、あの人は色々と限界だと思う。だから、お前たちで先生を支えてやってくれ」

「任せろ！」

俺の頼みを快く聞いてくれた2人と別れ、俺は園部と話しているらしいハジメが帰ってくるのを待つ。

「園部、話って何だ？」

「あの…えっとね、南雲」

園部はシアと話し、自分の気持ちを改めて理解して出した答えは、好きだと伝えないことであった。

あの時、ハジメがシアを必死に救おうとしたのを見て、自身の気持ちに蓋をして諦めようと決めたのだ。

「1つ…言っておこうと思って」「？」

その為、園部が伝えようと思っていたことは、迷宮でハジメに助けられた時の礼だ。そして意を決して口を開いて出した言葉は

「好き」

「…えっ」

「私、南雲のことが好き」

自身の思っていた事とは違い、本当の気持ちを言ってしまった。

「あ…待って…違う、いや違わないんだけど…なんで？」

「お、落ち着け…えっと」

口に出してしまった瞬間、自身の内から溢れてくる『好き』という感情。園部は必死に抑え込もうとするが、抑えることが出来ず、感情が爆発してしまい泣き出してしまう。

そんな園部を見て、ハジメは慌てながら出した答えは、やはり、園部が想像している通りの言葉であった。

「園部の気持ちは嬉しい。けど、ごめん。俺には」
「それ以上は言わないで」

ハジメの言葉を遮り、瞳に涙を浮かべながら、しっかりとハジメの顔を見る園部。

「ごめん。困らせるようなことを言って」

「謝らないでくれ。むしろ謝るのは俺の方だ」

「南雲は悪くないよ… 本当は言うつもりは無かった。けど、気づいたら口に出してた」

どこか気まずい空気が2人に流れる。そして、園部は両手で自身の頬を叩くと、どこか吹っ切れた表情を浮かべる。

「本当に言いたかったことは。迷宮の時、助けてくれてありがとう！南雲に救われたこの命、無駄にしないから！」

笑みを浮かべる園部を見て、先ほどのことを引っ張るのは失礼だと感じたハジメは、同じく笑みを浮かべ返した。

「お前は強くなるよ。その表情を、俺はよく知っている」

「あのさあ… 振った女の前で、別の女のこと話さないだよ」
「うっ… すまん」

「ごめんごめん、そんなつもりじゃないのは分かってるから。シアなこと、悲しませたら承知しないからね」

「ああ、分かってる」
「ならよし！」

こうして2人は、友人として笑い合い別れた。

そして車に乗り込み、弓人たちはフューレンへ移動を開始した。

54星：帰りの車内

「やはり愛子殿に話すべきだったのでは？」

車内にて、ウイルが弓人に先ほどのことを掘り返すように問いかけてきた。

「しつこい男は嫌われるぞ」

「ですが、それでは愛子殿と弓人殿にわだかまりが生まれてしまします。せめて殺した理由を言うべきだったはず」

「理由はあの時言っただろ」

「ですがあれは『助けない』理由であって『殺す』理由にはならないはずです」

「…君のような勘のいいガキは嫌いだよ」

ウイルが指摘してきたことは凶星であったため、弓人はどこかで聞いたことのあるセリフを口にしてしていると。彼の膝に座っていたユエが口を開いた。

「… センセへの気遣い？」

「… そんな殊勝なもんじゃねえよ」

「なるほど、そういうことじゃったか」

ユエの言っていることが分からず、首を傾げているシアとウイルに、気づいたティオが2人へ説明のため質問する。

「あの闇術師は、なぜ敵の攻撃を受けたと思う？」

「えっと… 標的のアイコさんを抱えてたからです」

「ですね、敵が彼ごと愛子殿を殺そうとしたため…」

その瞬間、ウイルとシアは気づいたのかハツとした表情を浮かべる。

「そう、あの攻撃は彼女を殺すために放たれたものじゃ。逆に言うと彼女が捕まっていなければ闇術師は攻撃を喰らわずに済んだかもしれぬ」

「なるほど… 責任感の強い愛子殿のことです。もし自分が原因で生徒が死んでしまったと思ってしまったら… 考えたくもないですね」

「だからユミトさんは自分が悪役になってまであのようなことを…」
そんな3人の会話は、弓人の耳には入っておらず。彼はナイフを
持っていた自身の右手をぼんやりと見つめていた。

この世界で人を殺したのは、これで2回目だ。

どんな理由はあれ、人を殺している。そんな俺が、どの面を下げて
零へ会いに行けば良いんだ。

こんな人殺しの手は、誰にも差し伸べてはいけない。

「…… 大丈夫」

ユエは俺の右手を、指を絡ませるように握ってきた。すると、右手
に残っていた嫌な感覚が薄まった気がした。

「…… ユミトには、私がいる」

「…… ありがとな」

俺は左手でユエの頭を撫でると、ユエは力を抜き、体を預けてきた。

「口の中が甘くなってきました…」

「なるほどのう、ユミト殿とユエ殿はそういう仲であったか」

「いえ… 実はユエさんの一方通行です…」

「はっはっはっ、シア殿は冗談が好きじゃのう… え？マジで？」

「それどころかユミトさんは妹のように扱っている様子です…」

「ええ… 嘘じゃろ？」

何故か後ろから呆れられた視線を感じるが、俺は気にしないように
した。

そして俺たちを乗せた車は、フューレンへ走り続ける。

ここは、弓人たちが去って3日経過したウル。

ここに残っている畑山は、心ここに在らずといった状態で淡々と仕
事をこなしていた。

そんな彼女の頭の中を蝕んでいるのは、弓人が清水を殺した時の光

景であった。

その日も、料理を機械的に口にして、話しかけてくる生徒たちやデビットにもろくに話を聞かず生返事するばかりであった。

あの時、清水ともつと話しておけば

あの時、人質にならなければ

あの時、弓人が殺そうとするのを止められたら

何故、あんな簡単に人を殺せるのか

何故、あんな危険な奴が生きているのか

「つ駄目！」

自己嫌悪から、弓人に対しての黒い感情が芽生えかけ、それを止めるため思考を打ち止めして、再び自己嫌悪を始めるループに陥っていると。

「愛子様。一言よろしいですか？」

オーナーのフォスから、穏やかな口調でそう言われた。

「え…？」

「愛子様が何に悩まれているか分かりませんが、愛子様の信じたいことを信じてみてはいかがでしょう？」

いきなりのことで畑山が混乱していると、フォスは笑みを浮かべながら話を続ける。

「どうやら、愛子様の心は、今、大変な混乱の中にあるように見受けられます。考えるべき事も考えたくない事も多すぎて、何をどうすればいいのかわからない。何が最善か、自分がどうしたいのか、それもわからない。わからない事ばかりで、どうにかしなければと焦りばかりが募り、それがまた混乱に拍車をかける悪循環。違いますか？」

「ど、どうして…」

「伊達に長年お客様を見ておりませんので」

心の内を言い当てられ驚愕している畑山に、フォスは穏やかな笑みを絶やすことなく言葉を続ける。

「そういう時は、取り敢えず『信じたいものを信じてみる』というのも手の一つかと。よく、人は信じたいものだけ信じて真実を見逃すと、そう警告的に言われることがあります。それは確かにその通りなの

でしょう。しかし、人の行動は信じるところから始まると私などは思うのです。ならば、『動けない』時には逆に『信じたいものを信じる』というのも悪くない手だと、そう思うのです」

「…信じたいことを信じる」

その言葉に、畑山が今一番信じたいことは何かを考える。そして、1つの『約束』を思い出した。

「戦争だから無事についていうのは難しいですがクラスメイト全員生きて日本に帰りましょう！」

それは、王宮にて彼と交わした約束。その時の彼の表情は、決して偽りのものではなかった。

なら何故、殺したのか

彼は言っていた『一度裏切った奴は何度でも裏切る』と。それはつまり、清水を生かしたいなら、改心できると約束できる何か畑山自身にはなかったからだ。そのせいで、あんなに弱っていた清水が殺されたのだ。

その瞬間、畑山の頭の中に引つかかるものがあつた。

何故、わざわざトドメを刺したのか。

放っておけば、助けなければ、清水は時間の問題だったのに。

では何故、清水はあんなに弱つたのか。

「私の…：せいだ」

そう、清水は『畑山を狙った攻撃』に巻き込まれて傷を負つたのだ。それなのに、あの場にいた者たち…：狙われた畑山自身でさえ弓人が殺したと思ひ込んでいた。

そして思い出すのは、ハジメが去り際に言った言葉。

「弓人を信じる気持ちがちよっとでも残ってるなら…：折れないでください」

おそらく、ハジメはこのことを危惧していたのだろう。畑山自身が気づき。そして心が折れてしまわないように。

「三星くんは…：私のために清水くんを殺した？私…：私のせいで生徒を殺したと思わせないために…：」

その瞬間、畑山は気づいた。

また助けられたと。

守るはずの生徒に、また守られてしまったと。

「弓人くん……あなたはなんで……そんなに優しいんですか？」

55星：帰還　フューレンの町

無事、フューレンにたどり着いた俺たちは。イルワのいる支部長室へと足を運ぶ。

そして俺はノックもせず支部長室の扉を開けた。

「帰ったぞ」

「入る時はノックを… ユミト君！ウイルは無事だったか!？」

「運が良かったな。ほら入ってこい」

ウイルに入るよう促すと、ウイルは心配をかけたのが申し訳ないのか気まずそうに入ってくる。

「ウイル！無事かい!?怪我はないかい!？」

ウイルを視界に収めた瞬間、詰め寄るようにウイルを心配するイルワ。

「イルワさん… すみません。私が無理を言ったせいで、色々迷惑を…」

「何を言うんだ… 私の方こそ、危険な依頼を紹介してしまった… 本当によく無事で… ウイルに何かあったらグレイルやサリアに合わせる顔がなくなるところだよ… 二人も随分心配していた。早く顔を見せて安心させてあげるといい。君の無事は既に連絡してある。数日前からフューレンに来ているんだ」

「父上とママが… わかりました。直ぐに会いに行きます」

そう言つて、ウイルは俺たちに。改めて謝罪と礼をした後、両親のいる場所へと行った。

ウイルが出て行った後、イルワは俺たちの方を向き深く頭を下げてきた。

「今回は本当にありがとう。まさか、本当にウイルを生きて連れ戻してくれるとは思わなかった。感謝してもしきれないよ」

「さっきも言った通り運が良かったな。それより、約束は覚えてるな?」

「分かっているとも。すぐに準備をしよう『女神の使徒くん』」

イルワから予想外の単語が出たため。俺は驚きながら問いかける。
「情報が早いな」

「ギルドの幹部専用だけだね。長距離連絡用のアーティファクトがあるんだ。私の部下が君達に付いていたんだよ。といっても、あのとんでもない移動型アーティファクトのせいだ。常に後手に回っていたよ。うだけど……彼の泣き言なんて初めて聞いたよ。諜報では随一の腕を持つているのだけだね」

苦笑しながら喋るイルワを見て、どうやら俺たちは監視されていたようだ。ギルド支部長として当然の措置だと考え、怒りよりも俺たちの監視に着いていた職員に同情してしまう。

「それにしても、大変だったね。まさか、北の山脈地帯の異変が大惨事の予兆だったとは……二重の意味で君たちに依頼して本当によかった。数万の大群を殲滅した力にも興味はあるのだけど……聞かせてくれるかい？ 一体、何があったのか」

「それは良いが、先にステータスプレートの方を頼む。ついでにテイオオの分もな……黙って監視してたんだ。これぐらいおまけしてくれ」
「それを言われると耳が痛いな。分かった、3人分用意しよう……そういうえば君のは壊れていると聞いたが、君の分も用意しようか？」

「いや、どうせ内容は一緒だ。」

「？ まあいらぬならそれでも良いが」

俺の言葉にイルワは首を傾げるが、気にしないことにしたらしく職員を呼んでプレートを3枚用意してくれた。

そして、プレートに記されていたユエたちのステータスはこのようなになっていた。

|||||

ユエ 323歳 女 レベル：75

天職：神子

筋力：120

体力：300

耐性：60

敏捷：120

火属性適性「＋魔力消費減少」「＋効果上昇」「＋持続時間上昇」・風属性適性「＋魔力消費減少」「＋効果上昇」「＋持続時間上昇」・複合魔法

||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||

もはやバグに近いハジメほどではないが、これでも故障を疑うほどの数値とスキル数の暴力が描かれていた。

それを見たイルワは、見間違いかと目頭を抑え再度見た後、今度は頭が痛そうに抑え始め天井を仰ぐ。

「はは…これはもう笑うしかないね」

乾いた笑い声で、10年ほど老け込んだように見えるイルワに対し、俺は笑みを浮かべ問いかける。

「で、教会の奴らに報告するか?」

「舐めないでくれ、恩人に対してそんなことをする恥知らずになった覚えはないよ。約束通り、僕の持てる全てをつかって君たちのバックにつこう」

「その言葉を待っていた」

「まったく、良い性格してるよ」

「褒め言葉として受け取る」

いつぞやのやり返しと言わんばかりに会話をした後、俺たちはイルワの提案で俺たち全員のランクが『金』になり、彼の紹介でホテルのVIPルームに泊まることとなった。

宿に到着して荷物を置いてみると、ウイルの両親がウイルを連れて、息子を助けてくれた札をしにきた。

その際、家への招待や金品を渡したいと言ってきたが、それ目的で助けたわけではないため丁重に断りを入れると、何かあった時にはいつでも力になると言われ、俺たちもそれで納得し別れた。

こうして一段落つき、各々が寛いでいると、ハジメがシアの方へ近づき。とても言いづらそうに話しかけた。

「シア…ちょっと良いか?」

「どうしたの?」

「あのよ…あの時のやつ…今日でも良いか?」

「あの時って?」

「デ、デート」

「……え」

「だから……デート」

顔を真っ赤にしたハジメの誘いに、シアはしばらくフリーズした後、一瞬で立ち上がりハジメの腕に抱きついた。

「行こう！すぐに行こう！今すぐ行こう！」

「ままままで！買い出しが先だ！あ、あと！当たってる！」

「あててんのよ！」

「なんで知ってんだ!？」

そんな2人を見て、残った俺たち3人はとても良い笑顔でサムズアップを向ける。

「買い出しは俺たちに任せろ！」

「うむ！存分に楽しんでくると良いのじゃ！」

「……ファイト」

「さあ！3人もこう言ってるしデート行こう！」

「分かった！分かったから抱きつくのはやめてくれ！」

55. 5星：買い出しと観光

「4割」

「1割だ」

現在、ハジメの代わりに買い出しをしている俺は。フューレンの商業区にて、商人と値下げ交渉を行っていた。

「いやいや、この野菜の質で1割は高すぎる」

「ああ？うちの商品にケチをつけるってのか？」

「だつて見てみろよ。こいつに至っては時間が経ちすぎて葉が萎れてる。こんなもん誰も買わねえぞ？」

「むう……」

「それを俺は4割引くだけで全部買ってやるって言ってるんだ」

俺は商品の1つを手を持ち見せつけるように突きつけると、商人も分かったのかしばらく考え込んだ後、2本指を立てた。

「2割だ、こつちも商売なんぞでな」

「3割、これが飲めないならこの話は無しだ」

「ぐ…… 2割5分！そのかわりこいつをオマケしてやる！」

「毎度」

こうして俺は、食品を比較的安く入手することができた。時間が経っている野菜類は早いうちに食べれば問題ないだろう。

「悪いな、待たせちゃった」

「…… 気にしないで」

「うむ、それよりも今のが、いわゆる値切り交渉というやつじゃな？」

ユエとテイオの下へ行くと。2人は気にした様子もなく、むしろテイオは先ほどの交渉を興味深く見ていたようだ。

「とりあえず、これで買い出しは終わりだからどうする？」

「…… ユミト、観光区に行こう」

すると、ユエは俺の腕…… というより身長差のせいで手に抱きついてきた。

「良いぞ、どうせハジメとシアも1日中デートしてるだろうし」

「………… えへへ、わたしもユミトとデー」「テイオも行くか?」「え…………」
「よいのか!」

俺がテイオを誘ってみると、テイオは目を輝かせながらいつの間にか持っていた観光案内のパンフレットを開き始めた。

「どこに行こうかのう………… 水族館にしようかの………… それとも展望台にしようかの………… むむむ」

「なんだよ、随分と楽しみにしてたんだな?」

笑いながらそう言うと、テイオは恥ずかしいのか頬を染め、目を逸らしながら答えた。

「わ、悪いか!父上が厳しかったせいで家から出たことがなかったから、こういうったものは初めてじゃから…………」

「悪くねえって。なら、俺が初めて来る観光地での楽しみ方ってやつを教えてやるよ」

「お、おお!それは心強い!うむ、よろしく頼むぞ!」

「お任せください。お嬢様」

「なつ………… 揶揄うでない!」

こうして俺たちも観光区へ移動を開始した。

「………… ティオ」

「む?ユエ殿、どうしたのじゃ?」

「………… けつあな確定」

「何故じゃ!」

「よし、着いたことだし先ずは腹ごしらえといくか」

「では、このガイドに書いてある店へ行くのか?」

「いや、この時間帯だと待たされるだろうから、屋台で売っている食べ歩きできるものにする」

「なるほど、分かったのじゃ」

「ユエもそれで良いか?」

「……………ん」

何故か機嫌の悪いユエを見て首を傾げるが、多分空腹なのだろうと頭の中で納得して屋台を見渡すと、随分と懐かしいものが見つかつ

た。

「おー、じゃが丸くんじゃねえか」

「なんじゃ？そのじゃが丸くんとは」

「こいつはな、前世むかしよく食つてたもんなんだ」

じゃが丸くんとは、前世オラリオにいた時に好んで食べていたものだ。実際は、ただのコロッケの屋台なのだが、前世を思い出してからついじゃが丸くんと言ってしまう。

「……ユミトはあれが好きなの？」

「ああ、結構好きでよく買ってた」

そういえば、『リア』のところに遊びに行く時毎回買って行ったな。そんなことを思い出していると、ユエが屋台の方を指差す。

「……あれ食べたい」

「じゃあ行くか。俺も久しぶりに食いたいし、テイオもいいか？」

「うむ、ユミト殿の好物がどんなものか、妾も気になるからの」

2人を連れて屋台へ近づくと、人の良さそうなおばちゃんが笑顔で出迎えてきた。

「いらつしやい！何にする？」

「む、色々あるのかの？」

「ああ！うちは色々な味で勝負してるからね！」

そう言われメニューを見てみると、たしかに塩やソースといった定番物から抹茶塩やコンソメといった様々な味があった。

「そうだな……俺はプレーン1つ」

「妾は抹茶塩を1つ、ユエ殿は？」

「……小豆クリーム1個」

「え？」

ユエの言葉に、俺とテイオは思わずメニューを凝視する。そこにはちゃんと『小豆クリーム味』と書かれていた。

「これ……美味しいの？」

「ははは！意外と人気あるんだよ！」

「マジかよ」

失礼な事を思わず言った俺に対して、笑いながら答えてくれるおば

ちゃんは、手慣れた手つきで直ぐに用意してくれた。

「はいおまたせ！全部で300ルタね」

「じゃあ、こいつで」

「丁度300ルタだね、熱いうちに食べてね！」

では早速と一口食べる。オラリオで何度も食べた味に、懐かしさで思わず頬が緩んでしまう。

「うん、この味だ」

「……おいひい」

ユエの方を見ると、じゃが丸くんを幸せそうに頬張っており、機嫌も良さそうで何よりだ。

「で、では妾も」

テイオは恐る恐るといった感じに一口食べる。その瞬間、大きく目を見開き輝かせていた。

「~~~~！」

「美味いだろ」

俺が尋ねると、テイオは嬉しそうに何度も頷く。どうやらじゃが丸くんはお気に召したようだ。

ふと、視線を感じて見渡してみると、道ゆく人々が俺たちを見て話し合っていた。

「見ろよ、すつげえ美人がいるぜ」

「でも男がいるぜ……チツ、イケメンかよ」

「あの小さい子は娘か？でも髪色が違うな」

「きつと色々苦労したんだろう……良かったな嬢ちゃん。良い夫婦に出会えて」

どうやら俺たちのことを親子だと勘違いしているようだ。俺は苦笑しながら2人を見ると、ユエは先ほどより機嫌を悪くして頬を膨らませており、テイオはじゃが丸くんに夢中で聞こえていないようだ。

「……ユミト、行こう」

「おいおい、別に引っ張らなくても……」

「ま、待ってても！まだ食べてる途中なのじゃ！」

ユエに手を引っ張られていく俺を見て、テイオは大慌てで残りを食

べて追いかけてようとしていると、突如近くの建物が開けられ、そこからハジメとシアが出てきた。

「お前らも来てたのか」

「お前ら、デートにしては物騒すぎないか？」

何故か2人の手には武器が握られており、おそらく建物内で戦闘したのだろう。

「ちようど良かった。弓人たちにも手伝ってほしい」

どうやら観光はここまでのようだ。

56星：救出作戦

薄暗い路地裏を、黒いローブを纏った男が歩いている。その背後には、手錠をつけられた兎人族の少女が連れられていた。

「遅いぞ」

「悪いな、連れのガキを殺すのに手間取った」

黒ローブの男の視界の先には、明らかにカタギではない男が苛立つた様子で待っていた。しかし、兎人族の少女を見た瞬間その口角が吊り上がる。

「こいつは聞いてた以上の上玉だな。隷属の首輪は付けたか？」

「そんなもん後でいいだろ、兎人族が抵抗できるとでも思ってたのか？」

「…それもそうだな、着いてこい」

男が踵を返し歩いていく。黒ローブの男…ハジメは気づかれないうように『念話』を使い弓人たちへ伝達した。

『釣れた。今から移動を開始する』

「なるほど、それでお前たちはそのミュウちゃんって子を助けたいってわけか」

「頼む。力を貸してくれ」

ハジメから聞いた話はこうだ。

デートをしていると、下水道の方から人の気配を感知した。

最初は無視しようと思ったが、つい気になってしまい行ってみると酷く衰弱している海人族の子供がいた。

助けた手前放っておくこともできなかつた為、その子供…ミュウちゃんを保安署へ預けに行った。

最初はかなり抵抗されたが、どうにか預けて保安署から離れると、恐らくミュウちゃんを誘拐した組織が再び彼女を誘拐したらしい。

「更にそいつらは、シアも標的にしてる」

そう言っただけハジメは一枚の紙を取り出した。そこには『海人族の子

を死なせたくなければ、白髪の兎人族を連れて〇〇に來い』と、先程ハジメとシアが入っていた建物の名前が書かれていた。

「で、入ってみたら襲って來たから返り討ちにしたと」

「ああ、おそらく俺を殺してシアを売り飛ばすつもりだったんだらうよ」

「なるほど……で、ミュウちゃんの場所は分かったのか？」

「いや、知らないらしいから他のアジトの場所を聞いた」

「ハジメ殿、もしやその童わらわが見つかるまで繰り返すつもりかの？」

「それしかないからな」

それは余りにも非効率的であったため、俺は1つ提案する。

「なあ、案があるんだが良いか？」

「案って？」

「あえて、シアには捕まえられたフリをする。そして引き渡し場所に行つて、ミュウちゃんの場所まで連れて行つてもらおう」

「却下だ。そんな危険な役目をシアにさせられるか」

俺の提案をハジメは当然却下する。しかし、シアは少し考えた後覚悟を決めた表情でハジメに話しかける。

「ハジメ、やろう」

「シア！」

「ハジメの言いたいことは分かるよ。けど、早くしないとミュウちゃんが手遅れになるかもだし……後、何があつてもハジメが守つてくれるでしょ？」

その言葉にハジメはしばらく悩んだ後、頭を乱暴に搔きため息を吐いて折れた。

「はあ……分かつたよ」

「ハジメ、ありがとう！」

「でだ……弓人、引き渡し場所の当てはあるのか？」

「何言つてんだ？聞けば良いだけだろ」

俺は建物を指差すと、ハジメは納得したようだ。しかし、少し言いづらそうに口を開き始めた。

「ああ……すまん、建物の中にいる奴ら全員ぶつ飛ばしたから起きて

る奴いねえと思う」

「別にいい。起こせば良いだけだからな」

そう言つて俺は建物の中に入り、近くで気を失っているチンピラ1人に近づくと、空間庫から水筒を取り出して水をぶっかけた。

「ごはあ!?!ゲホツゲホツ・・・」

「起きたなら俺の質問に答えろ、この子を捕らえたらどこへ引き渡すつもりだ?」

「は?」

よく分かつていないチンピラに対して、俺はナイフを取り出し首元に当てる。その瞬間、チンピラは現実を理解して顔を青くする。

「ま、待て!俺たちが誰だか分かつてんのか!」

「次質問の答え以外を口にしたら殺す。別に聞くのはお前以外でも良いんだぞ?」

「い、言えない!そんなこと言ったら殺されちまう!」

「じゃあ、今逝つとくか?」

「ひい!」

首元に当てていたナイフに力を込める。するとチンピラは顔を恐怖で歪ませ、簡単に場所を吐いた。

「し、商業区の外壁近くにある路地裏だ!そこで落ち合う手筈をしてる!」

「そうか、良かったな。次お前が目を覚ました時は塀の中だ」

「ぐほつ」

ナイフを離し、一撃でチンピラを気絶させる。こうして場所を知った俺たちは、ハジメを引き渡し役のチンピラに変装させて、ミュウちゃんの救出へ乗り出した。

『着いたぞ、場所は商業区の外壁近く。唯一7階建の建物だから行けば分かる』

「了解、ハジメとシアはそのままミュウちゃんの救出。ユエとティオは建物から出てきた奴らを全員捕まえてくれ」

「……………ん」

「けど、良いのか？妾たちの目的は童の救出じやろ？」

「良いんだよ。どうせその建物にいる奴らは、奴隷目的できた裏社会の奴らだ。捕まえておいた方がこの世界のためになる」

「なるほどのう。して、ユミト殿は？」

「俺は暗躍」

笑みを浮かべながら俺が言うと、ユエとテイオは意味がわからず首を傾げていた。

57星：ハジメ。パパ

「本当に、君たちにいくら感謝しても足りないよ」

現在、俺たちは三度目となる支部長室への訪問を行なっている。前回と違うのは、ハジメの膝に座ってイルワの出したお菓子を美味しそうに食べているミュウがいることだ。

「俺たちはミュウを助けるためにやっただけだ」

「それでもだよ。シアくとハジメくんの体を張った本拠地の特定。ユエくとテイオくんによるオークション会場にいた奴らの現行犯逮捕。そして…」

イルワは一拍置いて俺の方を見る。

「ユミトくんのお陰で、捕まっていた被害者の解放と保護、更にはフリートホーフのボスの確保ができた」

「ユミト殿、暗躍とはそういうことじゃったか」

「こういうのは元締めをやらなきや意味ないからな」

俺は懐から紙束を取り出すと、イルワの前へ放り投げる。イルワはそれを見て怪訝な表情を浮かべた。

「ユミトくん、これは？」

「あいつらが使っていた人攫いの連絡網、それとオークションに来た顧客のリストだ。奴さん後生大事に抱えてたぜ」

「な!?!それは本当かい!?!」

「見てみな、ご丁寧に各顧客の購入履歴も書かれてた」

イルワは食い入るようにリストの中身を見た後、何度目か分からない感謝の言葉を伝えてきた。

「本当にありがとう。これで今回のオークションにいなかった奴らも一網打尽にできるよ」

「なあに、ハジメに頼まれたのもあるが…」

「こういう時『あいつ』ならこう言うだろう。」

「こんな小さな子供の笑顔を奪うあいつらを許すことは、俺の『正義』が許せなくてね」

そう言つてハジメの膝に座っているミュウちゃんの頭を撫でてやると、ミュウちゃんは不思議そうにハジメに尋ねた。

「ねーお兄ちゃん。『せいぎ』ってなーに？」

「おお… 何とも難しいことを聞くな… そうだな、『いいこと』って事だな」

「じゃあお兄ちゃんやお姉ちゃんも『せいぎ』なの！」

「そうか、ありがとな」

純粹なミュウちゃんを見て、ハジメは表情を和らげながらミュウの頭を撫でる。ミュウちゃんは気持ちよさそうに目を細めており、どうやら俺よりハジメの撫で撫でがお気に召したようだ。

「ははは、随分と懐かれているようだね。それで、ミュウくんについてなんだが聞く必要はなさそうだね」

「ああ、俺たちがミュウを連れていく」

「分かった。なら我々からの依頼という事で処理しよう」

ハジメとイルワの会話を聞いて、シアは嬉しそうにミュウちゃんに話しかける。

「ミュウちゃん。お姉ちゃんたちがお家に帰らせてあげるからね」

「お兄ちゃんも一緒なの？」

「ああ、俺も一緒だ… けどミュウ、お兄ちゃんはやめてくれないか？ ハジメでいい」

一人っ子のハジメは『お兄ちゃん』と呼ばれ慣れていないせいか、むず痒そうに呼び方を変えるよう要求した。そのことをよく分かっているミュウちゃんはしばらく考えた後、全員の予想の斜め上に行く答えを出した。

「… パパ」

「は？」

「パパなの」

「なんで… パパなんだ？」

ハジメは目元を押さえて、理由を聞いてみるとミュウちゃんは寂しそうに話し始めた。

「… ミユウね、パパいないの… ミユウが生まれる前に神様のとこ

ろにいつちやったの… キーちゃんにもルーちゃんにもミーちゃんにもいるのにミュウにはいないの… だからお兄ちゃんがパパなの」
「理由は分かった… いや正直今でも分かってないけど。でもなミュウ、パパは勘弁してくれ… 俺はまだ17だ」

「やー！パパはパパなのー！」

「いやほんと勘弁してください。お兄ちゃんていいから… というかお兄ちゃんてお願いします」

「やー！パーパーなのー！」

ハジメの懇願も、ミュウちゃんはお兄ちゃんよりしつくりしたのかパパから変えようとしなない。ハジメは困ったようにシアを見ると、シアは子供だからと困ったように笑っており、そして俺たちの方を見ると…

「ははははは！見ろお前ら！ハジメの奴結婚通り越して一児のパパになったぞー！」

「… 頑張れ、ハジメパパ」

「は… ハジメ殿は… 随分とその童わらわに好かれて… ブフオ！」

指を刺して爆笑する俺と、口元を押さえてクスクスと笑っているユエ、そして笑いを堪えていたがとうとう吹き出してしまったティオがいた。

「この3馬鹿が！他人事だと思いやがって！」

「あぶねっ」

『天征』

「あうー！」

俺たちにキレたハジメは、ドンナーでゴム弾を3連射してきたため、俺は咄嗟に掴み取り、ユエは『天征』により別方向へ反射、ティオは反応できずに額に直撃した。

その後、ハジメはあの手この手でお兄ちゃんに戻そうとしたが、とうとうパパから戻すことは出来なかったため、エリセンにいる母親に説得してもらうつもりのようだ。

「まあ頑張れや、ハジメパパ」

「お前なあ… そうだ、ミュウ。この人のことはなんて呼ぶんだ？」

「えつとね… おじちゃん！」

「そうかそうか、そつちも頑張れよ、おじちゃん」

その瞬間、ハジメはやり返しと言わんばかりに、いい笑顔を俺に向けてきた。

それに対して、俺は気にせずミュウの頭に手を置く。

「ミュウちゃん、おじちゃんがパパと一緒に你家に帰してやるからな」

「わーいなの！」

「お前、気にしてないのか？」

俺の予想外の反応に、ハジメは少し困惑した様子で問いかけてきた。

「前も言ったけど、前世合わせたら俺は40代のおっさんだぞ？それにミュウちゃんくらいの子には俺らの歳は十分おじちゃんだよ」

「くそ… なんか負けた気がする」

こうして異世界にて、一児のパパになったハジメの旅が始まった。

おまけ

「くそ… ミュウの奴」

「あはは、良いじゃん子供の我儘なんだから」

「けどなあ…」

「それとも… 本当にパパになつちやう？」

「ばっ!?!お前え！」

「きやー！」

幕間：オリオンのいないオラリオ
幕間：ある月女神の話

貴方と会うまで、退屈だなんて思ったこともなかった。だって、それが当たり前だったから。

ここは、迷宮都市オラリオにある「アルテミス・ファミリア」その主神であるアルテミスは、1人の眷属の帰りを…何年も待っている。

「ほんと…どこで道草食ってるんだか」

彼との出会いは、はつきり言って最悪なものだった。

事故とはいえ、私の水浴び姿を見られたのだから当然とも言える。そんな彼が、私が神だと分かった瞬間言った台詞は

『お前、神様なんだろう？【恩恵】？って奴くれよ！』

なんて凶々しい男なんだ。当然私は断った。私にとつての初めての眷属がよりにもよって男なんて到底耐えられなかった。

『はあ!?減るもんじゃ無いんだし良いだろ!?!』

『お前みたいな男を誰が好んで眷属にするか!』

『そこをなんとか!』

『しつこい!』

ますます怒りを覚える私のことなど気づいていないのか、彼はどこまでも凶々しく頼んできた。

そんな中、私は1つ妙案が浮かんだ。

『いいだろう、そんなに言うなら【恩恵】を授けてやってもいい…』『マジか!いやあ、分かってくれたか!』

『けど条件がある…私に狩猟で勝ったなら!授けてやらんこと面白い』

私の言葉に、彼は驚いたように目を見開いた。

当然だ、私は月と狩猟の女神アルテミス。

そんな私に狩猟で勝つなど不可能なのだから…

『え？そんなので良いのか？』

今、彼はなんと言った？

そんなの？私に狩猟で勝つことがそんなのと言ったのか？

『ふふふ…』

『どうした？急に笑い出して』

『私が誰か分かかっていて言ってるの？』

『いや、自己紹介されたわけでも無いし知らん』

この瞬間、私がギリギリで抑えていたものが爆発した。

『許さん… お前だけは絶対に許さんぞ！』

『なんで怒ってんだ？それより、さっさと始めようぜ』

『良いだろう、二度とそんな態度を取れないようにしてやる！』

こうして【恩恵】を賭けた勝負が始まった。この時の私は、まさか自分が負けるだなんて欠片も思っていなかった。

『嘘…』

『よし、俺の勝ちだ！』

狩猟の腕には、絶対の自信があった。

それこそ、誰にも負けないと思っていた。

けれど、彼が勝った。

人の身で、【恩恵】すら授かっていない状態で、神である私に勝ったのだ。

そこから、私の毎日は刺激的になった。

『おいアルテミス！冒険者登録して来たぞー！』

『様をつけなさい！後…… おかえり』

『おう！ただいま！』

いつからだろう、彼の凶々しさが気にならなくなったのは。

『ただいまー！聞いてくれよ！今日の稼ぎ。ドロップアイテムのお陰でこんなにもなったぞー！』

『すごい！なら今日はご飯食べに行こうよ！』

『ああ！すぐに準備するから待っててくれ、アルテミス』

『早くしてね、オリオン』

いつからだろう、彼が様付けしないのが気にならなくなったのは。

『ねえ、オリオン。貴方はなんで【恩恵】が欲しかったの?』

『どうした急に?』

『そういえば聞いてなかったな〜って思っただけ。聞かないほうが良かった?』

『いや…。言ったらお前笑うだろうしな…。』

『笑わないわよ、よっぽど変じゃ無かったら』

すると、彼は少し恥ずかしそうに話し始めた。

『英雄に…。なりたいんだよ』

『英雄?』

『…。悪い怪物を倒して…。みんなを笑顔にして…。悲劇のヒロインなんて存在しない、そんな…。物語に出てくるような英雄になりたいんだ…。ガキっぽいだろ?笑っていいぞ』

そんな、少し恥ずかしげで…。けれど、目を輝かせ英雄に憧れている彼が、とても愛おしく感じた。

『なれるわよ』

『えっ…。』

『オリオン、貴方なら絶対になれるわ、だって…。』

『だって?』

『…。な、なんでもない!それより!女神の私が言うんだもの!間違いないわ!』

『なんだそりゃ?けど…。ありがとなアルテミス』

あの時は恥ずかしくて言えなかったけど、今なら言える。だって、貴方のおかげで私は救われたんだ。

—————

ねえオリオン、貴方は気づいていなかったけど。

貴方は、沢山の人に慕われてたのよ?

ちよつと女性が多いのは気になるけれど…

ギルドでは、貴方は死んだ扱いにされている。

けど、【恩恵】という貴方との繋がりはまだ残っている。

貴方が生きているのを信じて、帰りを待っている人は沢山いるのよ？

貴方のいない日常は、退屈で苦痛だ。

だから

「だから…早く帰って来なさい。愛^オしい我^リが子^ン」

幕間：ある猫人の話

私は、男が嫌いだ。

野蠻で、下品で、五月蠅い。口先だけの臆病者だ。

彼も初めて会った時は、同じだと思っていた。

『改めて自己紹介だ。俺はオリオン。一応このファミリアの団長を務めている』

『…アタランテだ』

ファミリアの扉を叩いた時、私は信じられなかった。

清廉で高潔な女神、アルテミス様の眷属が男だったなんて。

『とりあえず冒険者登録から『話しかけるな』

『勘違いするな。私はアルテミス様に仕えた訳で、貴様の下についてわけではない』

『あく…でもなあ、アルテミスにお前を案内するように言われてるしなあ…』

『ふん…何故アルテミス様はこんな男を…』

男というだけで毛嫌いする私に対して、彼は困ったように笑ってばかりだった。

そんな彼に対して、軟弱者だと内心馬鹿にしていた。

そして渋々、彼の案内の下冒険者登録を済ませ迷宮へと足を踏み入れた。

『お、百発百中だな』

『ふん、当然だ。こんな奴らは物の数ではない』

私はこの時、慢心していた。

彼が周囲の警戒を怠らず、私が戦いやすいように怪物を誘導していたことに気づかず。自分の実力だと勘違いしていた。

そんな過信した者に牙を剥くのが迷宮だと、この後痛いほど理解することになる。

『はあ…はあ…』

『……』

彼の抑止を無視して、6階層まで降りた私に襲いかかって来た、影のような怪物^{モンスター}『ウォーシヤドウ』

『上層』でも随一と言われる戦闘能力に、その日【恩恵】を授かっただけの私は、手も足も出なかった。

隙を見て逃げ出そうとした瞬間、壁から更なるウォーシヤドウが産まれる。

ああ、ここで死ぬんだ。そう思った瞬間

『うおおおおお!!』

『な?!』

私が無視して、振り切ったはずの彼が。後方からウォーシヤドウへと斬りかかったのだ。

『貴様!何故ここに』

『悪いが話しは後だ!まずはここを切り抜けるぞ!俺が突っ込むからアタランテはそこから走り抜ける!』

『わ、私に指図をする』いいから黙って従え!死にてえのか!』っ……』
『行くぞ!』

初めて見る彼の切迫詰まった表情に、私は思わず怯んだ。それを肯定と見たのか彼はウォーシヤドウの群れへと突っ込んでいった。

そのお陰で、私はあの絶望的な状況から切り抜け生還することができた。

『巻いた……のか?』

『気を抜くな。まずは迷宮^{ダンジョン}から出るまで休まず行くぞ』

背後から、彼の声が聞こえる。恥を晒し男に助けられた羞恥から、私はつい憎まれ口を叩いてしまった。

『べ、別に助けろなど一言も言っていない。あれくらい私は一人で……えっ』

振り返り、私が見た先にいた彼は

ウォーシヤドウの爪により、決して浅くない傷を大量に作り、夥しい量の血を流していた。

『な……なんで』

『言っただろ。話は後だって、行くぞ』

『あつ…』

今にも倒れそうにも関わらず、いつも通り笑いかけてくる彼に、私は何も言えなかった。

その後、彼に言われた言葉で私はようやくよく理解した。

『アタランテ、俺とお前はまだ付き合いが浅いかもしんねえ…。けどな！俺がその程度の理由で仲間を見捨てるわけねえだろうが！』

『…っ！』

『もし不安なら何度だって助けに行つてやる！俺は！決して！仲間を見捨てねえ！』

私は大馬鹿者だ。

彼はずつと私のことを仲間だと思つていたのに、私は彼が男だといふだけで毛嫌いしていた。

『ただいま〜』

『おかえり！つてどうしたのオリオン!?ボロボロじゃない!』

『アルテミス様… 申し訳『すまん！調子に乗つたせいで怪我した！』

私の言葉を遮り、アルテミス様に謝罪する彼に困惑した。

『どういうこと?』

『いやあ… アタランテが予想以上に強かったから、つい6階層まで行つちまった』

『6階層!? 貴方今まで4階層が限界だったでしょ!』

『本当にすまん!』

『… 分かった。まずは体を治してからね、その後はお説教です』

『う… 分かった』

私は更に困惑した

何故私を庇うのか?

素直に私のせいだと言えはいいのに

こうして彼が奥へと入つていった後、アルテミス様は私に向き合つた。

『彼が貴方を庇う理由は聞きません。貴方もゆっくりと休みなさい』
『き、気づいていたのですか?』

『神に嘘は通じませんので、後… おかえりなさいアタランテ』
『っ… 申し訳ありません！』

『それは、何に対する謝罪ですか？』
後悔から、涙を流し謝罪する私に、アルテミス様は優しく語りかけてくる。

『彼が… 彼が傷ついたのは私のせいなんです！私が… 私がもつと、彼の言うことを聞いていたら…』

『そうでしたか… では、許します』

『え…』

『貴方はちゃんと反省している。なら、子を許すのが親の役目ですから』

『で… ですが』

私は自分を許せない。そう言おうとした瞬間、アルテミス様は再び優しく語りかけてくる。

『では、オリオンを… 彼を信じてください』

『あいつを…』

『はい、貴方が男を嫌っているのは知っています。ですが、彼は貴方の思う男とは違うから… 信じてください』

『… はい』

オリオン… 汝がいなくなつてから随分と時が経つたぞ。

アンタレスの恐怖と、汝が死んだと言われた悲しみから。1人… また1人と脱退する者が出て、今では団員は私だけだ。

けど、この場所は、このファミリアだけは決して無くさせない。汝がオラリオに帰って来た時、家が無いと困るからな。

「だから… 早く帰ってこい。团长」

|||||

アタランテ Lv. 4

アルテミス・ファミリア現团长

二つ名【純潔の狩人】

|||||

『我が憎悪を受け入れよ』

『闇天蝕射』

【スキル】

【月誓純潔】
セリーニ・オルキソメ

・異性との戦闘時におけるステータス補正

・誓いが続く限り効果持続

・魅了・呪いに対する耐性

【障害踏破】
アルカディア

・走行速度強化

・荒地走行時、器用・俊敏に補正

|||||

ここは、オラリオにある『豊穡の酒場』

酒場故に昼は夜ほど忙しくないのだが、今日は違ったようだ。

「はあ… 疲れたニヤ」

「確かに… 昼なのにいつも以上に忙しかったよね」

「というか、リユートの奴はなんでいないニヤー！」

「そういえば… シル、リユートがどこにいるか知ってる？」

「えっと… 多分あそこに行ったんだと思う… 今日のはあの日だから…」

薄鈍色の髪をした女店員… シルの言葉に他の店員たちは思い出す。

彼女は、毎年この日になると休みを取り、ある場所に向かうことを。

ここは、西のメインストリートの外れにある古ぼけた鐘楼。

ここに、1人のエルフの女性がバスケットを持ってオラリオを見ていた。

「貴方は、この時間になると… いつもここにいましたよね」

彼は、この時間に吹く風が好きだと言っていた。

エルフの女性… リユートは俯き、自身が持ってきたバスケットの中身を見る。

「料理…あの時から上達したんです…」
後悔と悲しみから、声が震えてしまう。

あの時、彼に取り返しのない事を言った私は…ずっと後悔している。

—————
彼との出会いは、ある意味で忘れることはないだろう。

あれは、私が『あるファミリア』に入団して間もない頃、土地勘を養うため、オラリオを歩いていた時だ。

『えっと…ここが…きやつ！』

『おっと、悪い！』

手に持っていた地図と、周囲ばかりに気を取られていた私は、横の路地から出てくる彼に気づかずぶつかってしまった。

私が転ばないよう咄嗟に手を取ってくれた彼に対して私は

『わ、私に触れるな！』

『うおおおおお！』

彼を思いつきり投げ飛ばしてしまった。

その後、私は反射的に投げてしまった事を謝罪すると、彼は笑って許してくれた。しかし、私は申し訳なさから、どうすればお詫びができるか仲間に相談した。

そして、私は『それ』を持って彼を探していると。

運良く彼と会うことができた。

『あ、あの…』

『ん？って君は昨日の』

『はい…その節ではご迷惑を』

『ははは、昨日も言ったけど気にしてねえよ』

『いえ…もしよろしければ…これを』

私は気恥ずかしさから、少し押しつけるように渡してしまう。彼はいきなりのことのため、不思議そうに受け取った。

『えっと、これは？』

『お、お弁当です…』

『弁当？なんで？』

『輝夜：… 仲間から聞きました。殿方へお詫びをする時には手料理を振る舞うのが良いと』

『え、そうなの？』

この時、彼の反応から輝夜に揶揄われていた事に気づいた。

羞恥から顔が熱くなりこの場から消えてしまいたくなる。

『すみません：… どうやら私は揶揄われていたようだ：…』

『いや待て！もしかしたら君の仲間の故郷ではそうだったかもしれないだろう？』

『いえ：… 多分、いや絶対揶揄われていただけです：…』

なんともいえない空気が、2人に流れる。この場から逃げようかと考えていた時、彼が話しかけてきた。

『まあ、くれるってんならありがたく貰うよ。腹減ってるしな』

『そうしていただけると：… 有難いです』

『どこで食うかな：… そうだ。なあ、この後暇か？』

『え、ええ：… 一応予定はありませんが』

『ならついて来てくれ。いい場所を知ってるんだ』

怪しい、普通に考えれば罠だ。

しかし、彼の人の良さを何となく感じていた事もあり。彼について行った。

『ここが？』

『そう、俺のお気に入りの場所。この時間になるといい風が吹くんだ』

確かに、吹く風が頬を撫で気持ちがいい。彼が気に入るのも納得だ。

『いい場所ですね』

『だろ？それじゃあ早速』

そうやって彼は壁に寄りかかるように座り込むと、バスケットの中心を確認する。

そして

『：… なにこれ？』

固まった

『：… サンドウィッチです』

『え？サンドウィッチ？炭じゃなくて？』

『… 私はいつもやり過ぎてしまう』

『やり過ぎというか… 焼き過ぎというか… というかサンドウィッチに焼く工程あったっけ？』

恥ずかしくて死にたくなる。殿方に… というかそもそも料理自体初めてだった私が作ったものは、料理とは到底言えない物体だった。

『あの… それは処分しますので後日『まあ良いか』

彼は私の言葉を無視して、サンドウィッチ炭を食べ始めた。

明らかに食べ物を咀嚼しているとは言えない音を出しながら黙々と食べている。

『な!?吐き出してください!そんな物食べたら…』

『断る、女に作ってもらった物を粗末にはできない』

『… 貴方は馬鹿だ』

けれど、嬉しかった。

下手くそな私の料理を食べてくれたことが、嬉しかった。

『ふう… 美味かったよ』

『顔… 真っ青ですよ』

『け、けど気持ちは伝わったから!』

よっほど酷かったのか、歪んだ笑顔を向けてくる彼が、どこか可笑しくてつい笑ってしまった。

『笑うことはねえだろ…』

『すみません… 貴方が宜しければ、また作ってきててもよろしいですか?』

『え… なんで?』

『そんな顔をしなくても… 流石に傷付きます』

こんな料理と言えない物がお詫びだと、私のプライドが許せなかった。

だがこれは、彼に会うための言い訳だったのではないかと今の私は思っている。

『まあ、良いけど。俺はいつもこの時間にここに居るから勝手に来い』

『そうですか、なら勝手に来ます』

こうして、この時間になると彼に弁当を渡すのが日課になった。

『…なにこれ？大砲の弾？』

『輝夜から聞いた、おにぎりという物です』

『待って、これ本当に食べ物？鉄叩いた感触するんだけど』

彼は、私の料理を怒らず食べてくれた。

『…なんだよこれ？』

『えっと…カレーです』

『カレーって普通辛いとか甘いだろ！これくせーんだよ！』

嘘です、何度か本気で怒ってました。

けれど、彼は一度も残したことはなく、全て食べてくれた。

こんな日常が、毎日続けば良いと思っていた。

けれど、それは叶わない。

その日常を壊してしまった私には、願う権利などあってはいけ
ない。

おまけ

「ふむ、汝がオリオンの言っていた者か」

「えっと、貴方は？」

「すまない、自己紹介が先だったな。アルテミス・ファミリア副団長の
アタランテだ」

「彼と同じファミリアでしたか。私はアストレア・ファミリア所属の
リオンと申します」

「… 汝とは仲良くなれそうだな」

「奇遇ですね、私もそう思っていました」

「汝とは」

「貴方とは」

「他人の気がしない」

幕間：あるハイエルフの話

ここは、『黄昏の館』

現在、ハイエルフの女性が弟子であるエルフの少女に自身の知識を教え込んでいた。

「時間だな、今日はここまでにしよう」

「あ、ありがとうございます。」

エルフの少女：：レフィーヤは師の授業は、好きな時間であると同時に苦手な時間でもある。

レフィーヤの師：：リヴェリアはエルフ：：いやオラリオで知らない者などいない存在だ。

エルフの中でも王族のハイエルフであり、冒険者としても最強と言っても過言ではない魔導士だ。

そんな人物からワンツーマンで指導してもらえるなんて、いくら金ヴァリスを積んでも足りないだろう。

しかし：：いや当然と言うべきか、彼女の膨大な知識や経験を教え込まれる為。授業が終わる頃には、いつも頭がパンクしそうになる、その点だけレフィーヤにとっては苦手な部分だ。

「ふむ：：今日は詰め込みすぎたか。レフィーヤ、片付けは私がやっておくから部屋に戻って休むと良い」

「い、いえー！リヴェリア様のお手を煩わせる訳にはいきません！」

レフィーヤは飛び上がるように起きると、大急ぎで教材を片付け始める。リヴェリアは軽くため息した後、弟子を労うために紅茶の準備を始めた。

「これはここで：：これはあつちで：：あ、リヴェリア様！これも片付けておきますね！」

「私がやると言っているだろう：：っ！」

リヴェリアが振り返ると、レフィーヤが文章が途中で終わっているノートと、開いたまま置かれている教科書を片付けようと手を伸ばしていた。

「それに触るな！」

「え!?も、申し訳ございません！」

予想外の鋭い声を出したリヴェリアに、怒られたと思ったレフイーヤは伸ばしていた手を仕舞い、反射的に謝った。

リヴェリア自身も予想以上に強い口調で言ってしまったため、リヴェリアもレフイーヤに謝る。

「す、すまない…。だがそれはそのままでもいい。後は私がやっておくから部屋に戻ると良い」

「は、はい」

今回は素直に部屋から出て行くレフイーヤ。それを見た後、リヴェリアはノートと教科書が置いてある机に近づき指で撫でた。

「早く帰ってこい…。お前には、教えることが沢山あるんだ」

「はあ…。 やっちゃった」

「やつほー!どうしたのレフイーヤ?」

「今日の授業、そんなにキツかったの?」

気分を沈ませていたレフイーヤに、アマゾネスの姉妹…。 ティオナとティオネが話しかけてきた。

レフイーヤは、先ほどあったことを2人に話した。

「そういえば…。 あれ、私たちが入団した頃からあるよね」

「えっと、おふたりが入団したのって…」

「大体5年前くらいね、アイズなら知ってるんじゃない?」

「呼んだ…。?」

その声に反応して3人が顔を向けると、偶然歩いていたレフイーヤにとつて憧れの存在である…。 アイズがいた。

「ア、アイズさん!?!」

「えっと…。 名前が聞こえたから。違った?」

「ねえねえ!アイズってあれについて知ってる?」

「あれ?」

「あんたねえ、そんなんで分かるわけないでしょ?」

そう言つてアイズにも先ほどあったことを説明する。

アイズはしばらく考え込んだ後、何か心当たりがあったのかある単語を声に出した。

『もしかして、『じゃが丸お兄さん』かも』

『じゃが丸お兄さん?』

「うん。私がまだ入団したばかりの頃、リヴェリアの授業を頑張ったじゃが丸くんくれるお兄さんがいたの」

「ふーん、そのお兄さんは今はどこにいるの?」

「えつと...」随分と懐かしい名前が出てくるね」あつフィン」

4人の下へ、「ロキ・ファミリア」の団長... フィンが話しかけてきた。

「団長!」

「えつと、3人がリヴェリアの所にある『あれ』が気になるって...」

「そつか... もう随分と経つんだね」

「フィンはじゃが丸お兄さんのこと知ってるの?」

「ああ、よく知っているよ。君たちは『アルテミス・ファミリア』を知っているかい?」

「は、はい!アタランテさんが所属しているファミリアですよね?」

「アルテミス・ファミリア」は団員が1人なのにも関わらず「ロキ・ファミリア」と友好的な関係が続いているファミリアだ。

「昔は、団員ももつと居て団長も違ってたんだ」

「あの、もしかして」

「ああ、その団長の名前はオリオン。リヴェリアにとって一番最初の生徒さ」

彼との出会いは、アイズが入団する半年前ほどだ。

『なあ、リヴェリアってあんたのことか?』

『... 確かに、私の名はリヴェリアだが』

初めて見た彼の印象は、良くも悪くもどこにでもいる男だと感じた。

オラリオに来てから、私に話しかけてくる男はほとんど同じだ。

同胞なら王族の私に畏まった態度をとり。

それ以外の男は、私の容姿目的に口説こうとしてくる。彼も同じだと思って、適当にあしらおうとした所

『頼む！俺に魔法について教えてくれ！』

驚いた、初対面の私にそんなことを言う男など居なかったからだ。王族のリヴェリアでも、エルフのリヴェリアでもなく。冒険者のリヴェリアとして話しかけられるのは、当時の私にとって新鮮だった。

『ふっ… 良いだろう、ついてくると良い』

『マジか！ありがとう！』

『だが私も忙しい身だ。今回だけだぞ』

『十分すぎる！』

こうして彼をホームへ連れて行くと、ロキや仲間たちにとっても驚かれた。

『り、リヴェリアが男連れてきたあああああ！』

『ははは、随分と珍しいことがあるもんだ』

『… こっちだ。ついてこい』

『お、おい。良いのか？』

『構わん。勝手に言わせておけ』

こうして彼に『魔法』について教えた。と言っても教材に載っているような基本的なものだったが

『… となる。ここままで分からない所はあるか？』

『… すまん、何一つ分からん』

『む、この程度も分からないか…』

人によつては、喧嘩を売っているようにしか思えない私の言葉に対して

『本当に悪い… 俺昔から要領が悪くてな』

彼は怒るところか、申し訳なさそうな表情を浮かべていた。

『もう1回最初から頼む、今度こそ理解するから』

『いや、今日はここまでにしよう』

外を見ると、日は沈んでおり随分と時間が経っていた。

『そうか… ありがとな、後は自分で頑張ってみるわ』

『いや待て… 明日、また来ると良い』

『けどあんた、今回だけだって』

『折角私が教えたんだ。分からないまま終わらすのは私のプライドが許さない』

こうして、彼と私の奇妙な関係が始まった。

『はあ...そこは前教えた所だぞ』

『す、すまん...』

『いや...私ももう少し分かりやすく教えるべきだったか...』

どうすれば、分かりやすく教えられるか彼から学んだ。

『なありア、ここなんだけど』

『そこはだな...なんだそのリアとは』

『愛称。嫌だったか?』

『ふっ、勝手にしろ』

随分と、気安い関係になった。

『やべ...結構遅くなったな』

『なんや?オリオン泊まらへんの?』

『いやいや、流石に悪いって。アタランテも飯作ってるだろうし』

『けどうち、アルテミスにオリオン泊まらせるからって言うてもうたで?』

『マジか、それならお言葉に甘えて...』

『な、なあオリオン。良い果実酒が手に入ったんだ。だから『よっしやロキ!今日は飲み明かすぞ!』

『その言葉待った!ガレスとフィンも巻き込むで!』

『...ふん!』

『痛ってえ!』

私だけではなく、ファミリア絡みで友好的になった。

「へー、そんな人居たんだ」

「そ、それで...その人はどうしてるんですか?」

「...死んだ、ギルドではそう報告されている」

気まずい雰囲気、周囲を包み込む。おそらくあのノートと教科書は、彼の遺品なのだろうと3人は考えた。

「けど… 僕は生きていると思っている」

「団長… けどそれは」

「ギルドの報告だと、彼の遺体と武器は発見されてないんだ。だから僕は… いや、リヴェリア、ガレス、ロキも生きていると信じてる。そして… 君もだろ？アイズ」

「うん、あの人は生きてると思う」

ロキ・ファミアの者たちから、ここまで言わせるオリオンという男に、レフイーヤたち3人は驚きを隠せなかった。

こうして、彼の帰りを待つ者たちの1日は、また経過して行く。

――
おまけ

「オリオン！またアイズにそんな物を与えて、夕飯が食べられなくなったらどうする！」

「大丈夫だって、こんくらいの子は食べ盛りなんだから夕飯だって余裕だ。な？アイズ」

「うん」

「お前はそうやってアイズを甘やかすな！たく… 今日だけだぞ」

「それ3回目だぞ？」

「う、うるさい！このたわけ！」

卯月：再会する少女たち
58星：再び、ホルアドに

「何故だか……フューレンを出てから4日ほど経過した気がする……」
「……何、言ってるの？フューレンにはさっき出たばかり」

俺たちは、ミュウちゃんを故郷へ帰す為に、車でエリセンに向かっているのだが。

「ヤアアハアアアアツツ!!」

「シアって……あんなキャラだったか？」

「お姉ちゃんかっこいいの!」

風を感じたいという理由で1人だけバイクに乗っているシアは、どこかで聞いたことのあるような叫びをしながら爆走していた。

それを見たミュウちゃんは、目を輝かせながらハジメにおねだりし始めた。

「パパ！ミュウもあれやりたいの!」

「ダメ、ミュウにはまだ早い」

「う……や……り……た……く……い……の……!」

「そんな我が儘言う子はうちの子じゃありません」

全力の駄々も即座に切り捨てられたミュウちゃんは、頬を膨らませしよぼくれてしまった為、俺はミュウちゃんの頭を撫でる。

「ミュウちゃん。後でおじちゃんが乗せてやるよ」

「おじちゃん!」

「おい弓人!」

「何事も経験だ経験」

「はあ……二輪用のチャイルドシートとか作ってみるか？材料は……そもそも車体を弄るか……」

ついに折れたハジメは、ブツブツとミュウが怪我をしないように様々なことを考え始めた。それを見たユエたちは意外なものを見るような視線を向けていた。

「……ハジメ、過保護？」

「ふふふ、ハジメ殿は存外子煩悩なのじゃのう」

「けどミュウちゃん。今お姉ちゃんがやってるような運転は危ないから、おじちゃんに乗ってる時はやらないからな」

「はいいなー！」

バイクに乗れると分かったため、ご機嫌になったミュウちゃんを乗せて、車は走り続ける。

ちなみに、ハジメはミュウちゃんの『パパ』呼びを完全に諦めている。

理由は、ハジメがあの手この手で呼び方を変えようとする度

『め、なの？。パパはミュウのこと嫌いななの？』

と、涙を浮かべながら訴えられるのだ。

ミュウちゃんの涙に弱いハジメは、段々と呼び方を変えようとする回数が減り、最終的に呼び方を変えようとしなくなった。

—————

そして俺たちは、宿場町ホルアドにたどり着いた。

別買い出しは、フューレンで済ませているためスルーしても良いのだが。

フューレンを出る際、イルワから頼まれごとをされているため。それを済ませるために寄った。

頼まれごとはハジメが済ませると言ったため、俺はユエとテイオを連れて、メインストリートをぶらついていった。

「ほう、フューレンも中々のものじゃったがこども……と、どうしたのじゃ？ユミト殿」

「いや……最初ここに来た時から4ヶ月経つんだって思ってたな」

「……大丈夫？」

心配そうな顔を向けてくるユエに、俺は頭を撫でてやりながら笑う。

「大丈夫だ。色々な事があったが……それ以上に良いこともあった」

ハジメを助ける事ができて

アルテミスとの約束を思い出して

そして…

「お前たちに、出会う事ができた」

「っ！」

「なっ」

恐らく…いや絶対、あの時に戻ったとしても俺は何度でも奈落に落ちる。

そしてユエ、シア、ティオ、ミュウちゃんと出会う。

こうしてここに来るだろう。

「つてどうした？顔赤いけど」

「……うるさい、鈍感」

「ユミト殿は、そういう所があるのじゃ…」

「なんだよ？そういう所って。まあ良いや、行こうぜ」

俺は屋台で、ミュウちゃんが好きそうなお菓子を買い。

ハジメたちが先に行っている、『冒険者ギルドホルアド支部』に行つた。

そこには…

「パパああああ！怖いのおおおお！」

「お前ら！ミュウを泣かしてんじやねえ！」

「……いや勘弁してください！」「」「」

「なんでこうなるのよ…」

号泣するミュウちゃんを抱っこしながらブチギれるハジメと、引き攣った笑みを浮かべる冒険者たち、そして頭を痛そうに抑えるシアがいた。

「……なにこれ？」「」

「で、なんであんな地獄絵図になった？」

「いや…あいつらがミュウを怯えさせるから」

「だからって『威圧』された状態で笑えって無茶でしょ」

「うっ…」

どうやら、シアという美少女を連れた上に、ミュウちゃんという子供を抱いて入ってきたハジメに嫉妬や怒りといった視線を向けてい

た所、ミュウちゃんが怖がってしまったらしい。

それを見たハジメは、『威圧』を使つて、睨んできた冒険者にミュウちゃんが怖がらないように笑えと言つた所、あんな地獄絵図が完成したらしい。

「ハジメなあ… 悪かつたなお前ら、うちの馬鹿が」

「「「いえ！滅相もございません！」」」

完全に萎縮した冒険者に謝罪を入れた後、俺たちは受付嬢のいるカウンスターへ足を運んだ。

「ごめんね、騒がしくして。イルワからの依頼でここに来た」

「イルワさんからですか… ステータスプレートを拝見しても？」

「ハジメ」

「あいよ、こいつで良いか？」

「ありがとうございます。ランクは… 『金』!? あ、申し訳ございませんー」

思わず出てしまった叫びに、近くにいた者たちは驚愕の表情を向けてきた。

受付嬢はすぐに謝罪してきたため、俺は笑いながら

「良いつて、どうせすぐわかる事だし。とりあえず、ここの支部長さん呼んで貰つても良いかな？」

ウルスの防衛戦やフリートホーフ壊滅といったことをしている時点で、俺たちの存在がバレることは時間の問題だ。

「は、はいー！すぐにお呼びしますー」

周囲からの視線を気にせず、支部長が来るのを待っていると、ギルドの奥から何かが走ってくる音がしてきた。

俺たちがそつちに視線を向けると、黒装束の青年が滑り込むように飛び出してきた後、周囲を大慌てで見渡した。

その青年には、心当たりがあつたため、俺は思わず声をかけてしまふ。

「お前… 遠藤か？」

59星：友の下へ

遠藤浩介

こいつと出会った…。いや、初めて認識したのは、高校に進学して1週間ほど経ってからだった。

当時の俺は、雫の道場を辞めた事により暇な時間が増えており、その日も暇潰しのため、コンビニで立ち読みしようと寄っていた所…

「出してくれ…。出してくれよ!!俺は帰らなくちやいけないんだ!!俺の家に!!」

どこかで聞いたことのある台詞と共に、1人自動ドアと格闘している遠藤を目撃した。そんなシニールな光景に、俺は思わず固まっていると。

俺の視線に気付いたのか遠藤が振り向き目が合った。

そして、遠藤はこう言った。

「お前…。俺が見えるのか…?」

「あ、こいつ見えちやいけないタイプの奴だ」

この時、思わず声に出してしまった俺は悪くないと思う。

「お前…。遠藤か?」

俺が思わず尋ねると、遠藤は勢いよく俺の方を見る。そして、歓喜に震えるように話しかけてきた。

「三星…。生きてたのか!」

「お、おう…。なんとかな」

まさかここまで喜ばれるとは…

そう思っていると遠藤は俺の肩に手を置き、声を震わせながら喋り続ける。

「もし死んだらって思ったら…。俺は…。俺はあ!」

「お、落ち着け。そう思ってくれてたのは嬉しいけ「もう誰にも気づかれなくなってた…」そつちかよ」

異世界に来てこの影の薄さは改善されなかったらしい。

そして遠藤は、顔を上げると俺の周囲を見渡し、悲しそうな表情を浮かべる。

「南雲は… そうか、もう…」

「いや勝手に殺すな。俺はここにいる」

「な、南雲の声!?!三星!南雲はどこにいるんだ!?!」

「いや俺の横にいるだろ」

それが指で場所を教えると、遠藤は食い入るようにハジメを見る。

そして、何故か青ざめ始めた。

「ま、まさか… 幽霊?俺にだけ見えてないってことか?」

「いや、目の前にいるだろうが、影の薄さランキング生涯世界1位」

「誰がコンビニの自動ドアすら反応してくれない影が薄いどころか存在自体が薄くて何時か消えそうな男だ!自動ドアくらい3回に1回はちゃんと開くわ!」

「3回中2回は開かないのか… お前流石だな」

どうやら、ハジメだと認識していなかったようだ。

しかし、この会話でようやくハジメだと理解した遠藤は、困惑した様子で俺に問いかけてきた。

「三星… 南雲ってこんなだったけ?」

「あ… 見た目はかなり変わってるが、こいつは南雲ハジメだよ」

「そうか… けど良かったよ。お前らが生きてて」

付き合いはそこまで無かったとしても、やはりクラスメイトが生きているというのは嬉しいのだろう。遠藤は頬を緩ませていた。

「ていうかお前ら冒険者になってたんだな?しかも『金』って」

「まあ… な、そういうえば、お前は1人か?」

こいつに会ったことに驚いて頭が回ってなかったが、

遠藤がここにいるってことは、他の奴らもいる可能性がある。

正直、雫に会うべきか未だ悩んでおり、踏ん切りがついていない。

こんな… 『人殺し』の俺が、あいつに会う資格があるのだろうか

か…

しかし、こんな悩みも、遠藤の放った言葉で一瞬で吹き飛んだ。

「頼む！一緒に迷宮に潜ってくれ！早くしないと皆死んじまう！1人でも多くの戦力が必要なんだ！天之河も八重樫も死んじまうかもしれないんだ！頼む！」

「ちよ、ちよつと待て。いきなりなんだ？死んじまうって「何処だ！」弓人…」

「雫たちは今何処にいるんだ！」

俺は遠藤の肩を掴み。鬼気迫る表情で問い詰める。遠藤は捕まれた肩が痛むのか、顔を顰めながらではあるが答える。

「【オルクス大迷宮】の… 89階層だ」

「そこまでのマップはあるか！」

「こ、ここに…」

遠藤が取り出したマップを奪い取ると、俺はマップを確認しながら話す。

「ハジメ、イルワの依頼はそっちで頼む」

「弓人… まかせろ」

「… 待って弓人、私も行く」

「ユエ… 分かった。俺がおぶるから、ユエはこいつを見てルートを指示してくれ」

「… っん」

俺はユエにマップを渡し、ユエをおんぶして外に出ようとする、状況をよく分かってないミュウちゃんが尋ねてきた。

「おじちゃん、どこかに行くの？」

「ミュウちゃん、おじちゃんは友達に会ってくるから。ティオお姉ちゃんとお留守番できるかな？」

「分かったの！」

「良い子だ。そんな子にはお菓子をあげよう」

「わーいなの！」

先程屋台で買ったお菓子を渡し、ティオの方を見ると。

ティオは行ってこいと言わんばかりに頷いてくれた。

「お、おい三星！一人じゃ無理だ！全員で行かないと」

「大丈夫だ遠藤」

「南雲！けど三星はステータス0だぞ！」

「教えてやるよ、弓人は俺たちの中で一番強い」

「は？」

その瞬間、突風と共に俺は迷宮へ走り出した。

「はや!？」

入口ゲートにたどり着き、俺は受付を無視して迷宮へと入る。

「きゃっ！つてあなた！受付をしないと…っていない?」

ユエのナビゲートで、迷宮を走る。

「……次、右」

「分かった。ユエ、『あれ』使うがいけるな?」

「……ん、じゃあ止まる?」

「いや、このまま行く」

俺は『並行詠唱』を成功させたことは一度もない。

だが、今は詠唱のために止まるつもりもないため、俺の『直感』を信じることにした。

『我が宿命、月女神に請い願う。』

『肉体に剛力を、精神に冷徹を。』

『そして我が運命をここに定めよう。』

『其は、女神の無垢な加護。』

『アルテミス・アグノス』

その瞬間、閃光が迷宮を駆け抜けた。

60星：私の英雄

私：… 八重樫雫は小学生の頃いじめられていた。理由は、光輝の幼馴染という…。ただそれだけだ。

あの日も、私はクラスの女子たちに囲まれていた。

「あんた、最近ちよーしにのってない？」

「え…？の、のってないけど…。」

「そういうところがちよーしにのってんのよ！」

「そうよ！ブスのくせに光輝くんに近づいてんじゃないよ！」

「い、痛い！やめてよ！」

髪を引つ張られ、寄つてたかつて暴言を吐かれる。

なんでこんな目に遭うのか

なんで痛い思いをしないといけないのか

なんでこんな怖い思いをしないといけないのか

私は恐怖で叫ぶことも出来ず、震えてしまう。

誰でも良い、助けてほしい。

そんな時、私を助けてくれた彼の顔がよぎった。

「弓人くん… 助けて」

その瞬間、教室の引き戸が勢いよく開いた。

—————

「やっと見つけた。勇者のくせにこんなところでコソコソして恥ずかしくないのかい？」

【オルクス大迷宮】 89層

天之河たち勇者一行は、増援を呼びに行った遠藤の帰りを待っていた。

しかし、90層で一度は撒いたはずの魔族と魔獣が追ってきたため、再び対峙している。

「黙れ魔族！さっきのようにはいかないぞ！」

天之河は、この状況を切り抜けるため聖剣に魔力を注ぎ込む。

それにより、聖剣が白く輝き始めた。

「まだそんな大技が使えるなんてね。けど…本当に使っていないのかい？」

魔族の女がそう言うと、女の後ろから馬頭鬼のような魔物がその手に持っていたものを前に突き出してきた。

「メ…メルドさん？」

魔物が持つていたものは、四肢を砕かれ、自身の血で全身を真っ赤に染めたメルドであった。

「メルドさんを離せえ！」

天之河は激昂し、我を忘れて突撃してしまう。

しかし、それは悪手でしかなかった。

「期待外れだよ。こんな手に引つかかるなんてね」

「何!?ガハッ！」

天之河の死角から、新たな馬頭鬼が襲い掛かる。

天之河は咄嗟にガードするが、馬頭鬼のパワーには敵わず吹き飛ばされてしまう。

「光輝！」

「龍太郎くん！駄目！」

親友がやられ頭に血が昇った坂上を、白崎が必死に抑える。

パーティの中で最も強い天之河がやられたのだから二の舞になると考えてだ。

「…何が目的なの？この状況で私たちが生きてるってことは理由があるのでしょうか？」

「状況判断ができて助かるよ、話は簡単。魔族側に来ないかい？」

「断る…誰が魔族側になんて…」

「悪い話じゃないと思うんだけど」

女の提案に、天之河はボロボロの体にも関わらず即座に切り捨てる。

しかし、他のクラスメイトたちは違ったようだ。

「わ、私は…提案に乗った方がいいと思う…」

「中村！てめえ裏切んのかよ！」

「ひっ！わ…私は誰にも死んでほしくないから…」

死んでほしくない

その言葉にクラスメイトは、『あの日』死んだ南雲と三星が頭によぎる。

そうだ、人は簡単に死ぬ。それこそ、あっという間に死んでしまう。

「俺も中村に賛成だ」

「檜山！てめえもかよ！」

中村に続いて、檜山が降伏に賛成する。

「冷静になれよ！勇者がやられた時点で俺たちの敗北は決まったんだ！全滅するか生き残るか！考えたら簡単だろ！」

檜山の言葉に、降伏に傾いていく中

「お前たち……今は生き残ることだけを考えろ……」

「メルドさん！」

瀕死のメルドが意識を取り戻したのか、虫の息にも関わらずクラスメイトたちに指示する。

「ずっと後悔していた……まだ子供のお前たちを巻き込んでしまったことに……最初からこれは、私たちの戦争だ！」

メルドは首にかけていた首飾りを引きちぎると、そこから膨大な魔力が溢れ出す。その勢いに魔物は手を離し、その隙についてメルドは女に突撃する。

「共に死んでもらうぞ！」

「お断りだね、アブソド！」

女が叫ぶと、アブソドと言われた6本足の亀の魔物が口を開ける。

その瞬間、首飾りから溢れ出す魔力がアブソドに吸われていく。

「何?！」

「でも、その潔さ。嫌いじゃ無かったよ」

女が手を突き出すと、そこから魔法が放たれる。

砂塵の刃がメルドの腹部を貫き、夥しい血が噴き出した。

「お前たち……すまない」

「メルドさん!!! 貴様ああああああ!!!」

その瞬間、天之河から首飾りとは比較にならない魔力が噴き出した。

メルドをやられた怒りにより。勇者は『限界突破』の最終派生『覇潰』に覚醒したのだ。

「アハトド！」

先程、天之河を一撃で倒した馬頭鬼…。アハトドを天之河にけしかけるが。

天之河は聖剣を振るい、逆に一撃で絶命させた。

「くらええええええええええ！」

「ちいっ！」

天之河が振り下ろす聖剣に、女は咄嗟に砂塵で作った盾で防御する。

しかし、聖剣は盾を意に返さず女と共に切り裂いた。

「参ったね、三文芝居でも見てる気がするよ…。」

「これで終わりだ！」

胸部から血を流し、呆れたように笑う女

天之河はとどめを刺すために、再び聖剣を振り下ろそうとするが…。

「ごめん… 愛してるよミハイル」

聖剣が、女の目前で止められた。

女が天之河を見ると、天之河は『それ』に気づいたため、恐怖で体を震わせていた。

「呆れた… まさか今になって気づいたのかい？ 『人』を殺そうとしていることに」

「ち… 違う… 俺は知らなくて」

「知ろうとしなかったの間違いだろ？ お前たち！ 剣士の女を殺れ！」

女が叫ぶように指示しすると、魔物たちは天之河を無視してクラスメイトたちを襲い始める。

女にとつて、未だ現実を見れていない勇者より。現状を冷静に判断できる八重樫の方が厄介だったからだ。

「なっ!? やめろお！」

天之河は次々と魔物を屠っていく。

しかし、『覇潰』は『限界突破』より魔力の消費が激しいため、すぐ

に限界が来た。

「っ!?!」

突如、全身から力が抜け。前のめりに倒れ込んでしまう天之河。必死に起きあがろうとするが、指一つ動く気配がない。

「光輝! くっ!」

八重樫は天之河を抱え、クラスメイトの下へ転がるように飛び込む。

そして、天之河を寝かせると、自身の武器をしまい居合の構えをとる。

「後は… 私がやる」

「殺す覚悟もあるか… やっぱりあんたの方が勇者に向いてるよ」

「… 御託はいい、私は生きて彼に会う!」

その瞬間、八重樫の姿が消える。

『縮地』と言われる移動方法により、一瞬で女の背後に回り込み。全力の『断風』を放った。

「危ない… 一瞬でも反応が遅れたら死んでたわ」

「くっ…」

会心の一撃とも言える『断風』が、何もない空間から現れた蛇によって受け止められていた。

咄嗟に距離を取るが、それを待っていたと言わんばかりにアハトドが待ち構えており、剛腕を振る。

「くっ… きゃあー!」

ガードをするが、防御の上から衝撃が襲い八重樫は吹き飛ばされた。

受け身を取ることに成功して再び『断風』を放つため、武器をしまおうとするが…

「嘘…」

武器が、半ばからへし折れていた。

それにより、八重樫の支えていたものも折れてしまった。

「やだ… やだあ…」

「可哀想だけど… せめてもの情けだ。1撃で殺してあげる」

このまま捕虜にしてもいいが、捕虜になった後の八重樫を考え、同じ女として同情した彼女は、八重樫にとどめを刺すため魔物に指示する。

「雫ちゃん！」

白崎が、八重樫の下へ走るが間に合うことはないだろう。

死ぬことに……いや、彼に会えなくなるという恐怖により、八重樫は瞳に涙を浮かべ怯えてしまう。

そして、あの時のように、消えてしまいそうな声で助けを呼んだ。

「弓人……助けて」

「ああ、後は任せろ」

その瞬間、閃光と共にアハトドは吹き飛ばされた。

その時、八重樫の脳裏には『あの日』が思い出されていた。

あの日も、私が助けを呼んだ時あなたは来てくれた。

そして、私の頭を撫でながらこう言ってくれた。

「雫、誰に泣かされた？」

私の『英雄』大好きな人が、助けに来てくれた。

61星：魔人族戦

「雫、誰に泣かされた？」

雫を見ると、ボロボロの姿で瞳に涙を浮かべており、『あの日』を思い出してしまう。

全く自分に腹が立つ

約束しておいて… もうこんな姿にさせないと決めたのに…

「弓人… 私…」

「雫ちゃん！」

雫の下へ駆け寄った香織は、雫を抱き寄せると俺に気づいたのか目を見開いて驚愕した。

「弓人くん！良かった… けど、南雲くんは!？」

「悪いが話は後だ、後… ハジメも生きてるぞ」

「本当!？」

「ああ、だからさっさと終わらせて帰るぞ」

俺は状況を確認する。

クラスメイトは、負傷しているものもいるが大丈夫

天之河は、体力が無くなっているだけだから放置でいい

メルド団長は、辛うじて生きているため。神水を使うか

俺は空間庫から神水を取り出し、ユエに渡す

「ユエ、倒れてるあの人に神水を飲ませてやってくれ」

「…… 良いの？」

「ああ、あの人には世話になった。それに… ここで死んで良い人じゃない」

「…… ん」

ユエは俺から降り、メルド団長の下へと駆け寄る。

魔人族の女は、先ほどまで呆然としていたが冷静さを取り戻したのか、警戒しながら話しかけてきた。

「誰だいいあんた？キラキラと光って見づらいつたらありやしないよ」

「モノを知らない奴だ… 偉大な男とは輝いて見えるもんだ」

「光ってる理由は聞いてないんだけどねえ」

魔族は、女1人だけ

魔物の数は、8... いや、隠れてる奴も入れて9か
旋空を取り出し、居合の構えをとる。

「なんだい？あんたもその子と同じ技を使うのかい？」

「弓人！気をつけ... ごほっごほっ！」

「雫ちゃん！」

「雫、まあ見てろ」

そーいやロキがアイズに言ってたっけ

『必殺技の名前を唱えると、威力が上がる』って

「弓人旋空」

俺は躊躇うことなく、最大出力の居合を放った。

魔族の女... カトレアは、現れた男に対して、一瞬も油断してい
なかつた。

男の光は、勇者の使っていた『技能』に類似したものと仮定した
カトレアは、アブソドに魔力を食わせ、姿を隠しているキマイラで殺
す算段を立てていた。

男が剣士の女と同じ構えをしたのには驚いたが、あの技は武器の間
合いに入らなければ問題ないと決めつけていた。

「弓人旋風」

男が何か呟いたと思った瞬間

直感... いや本能が『死』を感じた。

カトレアは咄嗟に身を屈めた瞬間、
『見えない何か』が頭上を通り過ぎ、従えていた魔物全てを切り裂い
た。

カトレアは恐る恐る後ろを見ると、迷宮の壁に大きく、そして深々と
切り裂いた跡がそこにあった。

「外した... いや、避けたか」

俺は思っていた以上に、頭に血が昇っているようだ。

次は当てるため、再び居合の構えを取ろうとした所

「……ユミト」

「ユエ?」

メルド団長の回復に行つたはずのユエが、いつの間にか俺の所にまで戻ってきていたため、メルド団長を探すと、クラスメイトと一緒に目を見開いていた。

「……上から、ハジメたちが来る」

「そうか……つて上から?」

「……ん」

その瞬間、天井が崩落し始め紅い雷を纏つた杭が現れた。

その光景に、俺とユエを除いた者たちは再び驚愕する事になる。

「イルワの用事は終わったのか?ハジメ」

「まあな」

「南雲くん!」

姿は変わっていても、香織はハジメだと直ぐに理解して歓喜の声を上げる。

俺はハジメに、気の利いた言葉を言うように促すと

「白崎さん……えっと、相変わらず八重樫さんと仲良いんだね?」

「はあ……これだから童貞は」

「どどど童貞ちゃうわ!」

「え……ハジメ、そうなんだ……」

「シア!?あの……その……すいません見栄張りました……」

緊張感のない会話と、あの『死んだはず』で『無能』な南雲ハジメとは似ても似つかない見た目の男に、クラスメイトたちはさらに混乱することになる。

「と、とにかく!後はあの魔族だけか?」

「ああ、さつさと終わらせるぞ」

「待ってくれ、あいつには聞くことがある」

「……了解」

俺たちが惨劇を繰り広げているうちに、逃げようとしていた魔族の女を捕捉すると。逃げられないと判断した女は覚悟を決めたのか

魔法の詠唱を始める。

「あれは… 君たち逃げろ！石化魔法だ！」

どうやら俺たちが『三星弓人』と『南雲ハジメ』だと認識していない天之河から、女が詠唱している魔法の正体を聞く。

石化… 『石化耐性』のあるハジメは問題ないとして、耐性のない俺には確かにキツイ… けど

「わざわざ詠唱を待つほど暇じゃないんでね」

「『残るは終焉』… 早い！」

肉薄した俺に対して、女は別の魔法で迎撃しようとしてくるが俺は女の突き出した腕を加速させた居合で斬り飛ばした。

「あゝあゝあゝあゝあゝ!!!」

「こんなもんで良いか？」

「ああ、十分だ」

絶叫をあげる女に、俺とハジメはそれぞれ武器を突きつける。

女はハジメの銃を見たことはないが、どうせロクな物じゃないと察したのか抵抗する意志を捨てた。

「殺しな… あんたらに話すことは何一つない！」

「そうか、まあ俺も女を拷問する趣味もない」

「いつか、私の恋人があんたらを殺すよ」

「気にするな、すぐに会える」

女の瞳には、ここで死んでもいいという強い決意があった。

彼女は、たとえどのような拷問をしたとしても情報を吐くことはないだろう。

ハジメもそれに気づいたのか、女に質問することなく引き金に当たった指に力を込める。

「ま、待て！そんなことをしちゃいけない！」

俺たちのやろうとしていることに気づいた天之河は、聖剣を杖にしながらいかに立ち上がり叫ぶ。

「ほ、捕虜だ！捕虜にすれば良い！」

「このことだがどうする？俺としてはあまりお勧めしないが」

「ほんと… 人間側は難儀なもんを抱えてて同情するよ」

女は、天之河に呆れた視線を向けそう眩いた。
やはり、いや当然と言うべきか答えは変わりそうにない。
女の額に1発の銃弾が叩き込まれ、その直後首が切り落とされた。

62星：再会

「南雲くん…なんだよね？」

白崎は、ハジメに恐る恐る…しかしどこか確信したように尋ねる。

それに対してハジメは、昔のように困った笑顔を向け答えた。

「えっと…久しぶり…で良いのかな？」

「ぐす…生きてて良かった…ひつく…ごめんね…あの時守れなくて…」

「し、白崎さん!?えっと…その…」

泣き出してしまった白崎を見て、しどろもどろになりながら周囲に助けを求めるように見渡すハジメ

ドラマなどでは抱き締めたりするのだろうか、ハジメには『彼女』がいる。

因みに、そんな『彼女』はというと…

「…シア？」

「私は周囲の警戒のため偶然ハジメの方を向いてません。なのでハジメが何をしても気付きませーん」

「…ありがとうな」

彼女の気遣いにハジメは思わず笑ってしまう。

そして感謝しながら、親友がよくやっているように泣いている白崎の頭を撫でた。

「心配してくれてありがとう、けどこうして生きてる訳だし…な？」

「南雲くん…」

感極まった白崎が、ハジメに抱きつこうとした瞬間

乾いた音が、周囲に響いた。

全員が音の鳴った場所を見ると、瞳に涙を浮かべた八重樫が、弓人の頬を叩いていた。

「なんで飛び降りたの」

「ハジメを助けるためだ」

弓人の頬を叩く

「死んだんじゃないかと思った…」

「けど、こうして生きてる」

再び頬を叩く

「約束…忘れられたと思った…」

「…ごめん」

頬を叩…かず、弓人に抱きついた。

「怖かった…あなたに会えないと思ったたら…怖くて仕方なかった」

弓人は右手で八重樫の頭を撫でようとしてやめる。

代わりに、左手で彼女の頭を抱き寄せた。

感動の再会、誰が見てもそう思える場面

そこに、どこまでも無粋な声が掛かった。

「2人とも離れるんだ…こいつらは南雲と三星じゃない…」

天之河は、聖剣を杖にしながらこちらへ近づいてきた。

「何言ってるんだよ、南雲はともかく三星は見た目変わってないだろ」

「…遠藤か」

「今まで気づいてなかったのかよ…俺そろそろ泣くぞ」

遠藤の影の薄さは、異世界で改善されるどころか拍車がかかったようだ。

「けど、あの奈落の深さで助かるはずがない」

「けど俺、ステータスカードを見たぞ？」

「それに…」

天之河は、何処か確信しているような表情を俺たちにむける。

「南雲と三星は…不真面目な奴だけど人を殺すような奴じゃない」

驚いた…まさかそんな評価をされていたとは

しかし、相変わらず思い込みが強いようだ。

「お前がどう思ってるが知らんか、偽物とかじゃねえよ」

「本当に三星…なのか？」

「ああ、それにハジメもな」

天の河は一瞬顔を顰めると、すぐに表情を戻し口を開く。

「なら、自首するんだ。そして罪を償うべきだ」

「自首ねえ…どこに？」

「どこに？警察…はいないから教会に」

「教会ねえ…」

呆れてものも言えない、どうやら天の河は忘れていているようだ。

「俺たちは魔族と戦争しろって言われたんだぞ…教会の奴らに」

「それは…」

「…もういい、さっさと帰るぞ」

「お、おい！」

話を無理矢理切り上げ、迷宮から出る準備をする。

天の河は納得していないのか、俺の肩を掴もうとするが

「やめろ、光輝」

「メルドさん！」

神水によって回復したメルド団長が、天の河を抑止する。

「ユミト、ハジメ、生きていたんだな。それに…随分と強くなったな」

「メルドさん…お久しぶりです」

「まあ…あれっすよ、男子三日会わざれば刮目して見よってね」

「三日どころじゃないだろう…すまなかった。あの時、お前たちを見殺しにってしまったって」

「過ぎたことです」

「それに、俺たちは生きてます」

俺たちが気にしていないことを見て、罪悪感に駆られていたメルド団長は多少救われたようだ。

そして、メルド団長は天の河の方に顔を合わせる。

「光輝、お前たちには謝らないといけないことがある」

「あ、謝る？」

「そうだ、真っ先に教えるべきだった…『人を殺す覚悟』を」

「え…?」

天之河は、メルド団長の言っていることが理解できないのか困惑した表情をする。メルド団長は、後悔したように俯き話し続ける。

「本当は… 偶然を装い、賊をけしかけて人殺しの経験させつつもりだった… だが、まだ子供のお前たちに経験させたくない… 迷ってしまった。すまない、俺のせいでお前たちを死なせる所だった」

メルド団長の気持ちは痛いほど分かる

俺も、ハジメに人殺しをして欲しくなかった

その手を、汚して欲しくなかった。

「そ、そんな…」

尊敬するメルド団長が、自分達に人殺しをさせようと考えていたことを知った天之河は、絶望したような表情を浮かべ、流れで戦争に参加することを選んだクラスメイトたちにも、シヨックが大きかったようだ。

だが、これは戦争だ。

誰よりも相手を殺した者が讃えられ、誰も殺さなかった者は臆病者だと罵られる世界だ。

こうして、勇者一行の救出に成功した。

「……………」

「ユエさん、大丈夫ですか?」

「っ!…………… な、なんでもない!」

1人の少女の胸に、小さな痛みが生まれながら

|||||

三星弓人 Lv. 6

力 : G : 247

耐久 : H : 198

器用 : G : 215

俊敏 : G : 231

魔力 : H : 174

63星：想いを告げる少女たち【上弦】

「パパー！おかえりなのー！」

「ただいま、良い子にしてたか？」

クラスメイトたちは、もう何度目か分からない驚愕をすることとなる。

やっとの思いで入場ゲートにまで到着したら、海人族の少女がハジメのことを『パパ』と呼びながら突撃してきたのだ。

そしてハジメも、『パパ』呼びに対しても何も突っ込まず、少女を抱き止めて頭を撫で始めた。

「ん？ミユウ、お前1人か？」

「妾は、ここじゃよ」

ミユウから少し離れた場所からテイオが現れる。

ハジメはミユウから離れたテイオに非難の眼差しを向ける。

「おい、ミユウから離れるなよ」

「安心せい、目の届く所にはおったよ。ただ、ちよつと不埒な輩がいての。あまり童わらわには見せられんじやろ」

「なるほど。それならしやあないか？…で？その自殺志願者は何処だ？」

「いや、ハジメ殿よ…妾がきつちり締めておいたから落ち着くのじゃ」

「…チツ、なら良いけど」

「ホントに子離れ出来るのかの…？」

ハジメの過保護っぷりを見て呆れるテイオを傍目に、クラスメイトたちは呆然としていた。

この4ヶ月の間に、ハジメに何があったのだろうか。

見た目どころか父親になっっているではないか。

まさか、この女性たちのうち誰かが『そういう事』なのだろうか。

といった邪推すらしていた。

「ねえ…南雲…くん？」

「ひっ…し、白崎さん?」

まるで奈落の底から響くような声で尋ねてくる白崎に、数々の修羅場をくぐり抜けてきたハジメすら怯えてしまった。

そして、ふらふらと近づいてきた白崎はどこから出ているのか分からない力でハジメの肩を掴んだ。

「南雲くん! どういうこと?! 本当に南雲くんの子なの?! 誰に産ませたの?! あの金髪の子?! そこにいる兎人族の人?! それとも、そっちの黒髪の人?! まさか、他にもいるの?! 一体、何人孕ませたの?! 答えて! 南雲くん!」

目の中に渦が卷いた状態の白崎が、錯乱しながらハジメを揺らす。

冷静に考えたら4ヶ月でミュウちゃんくらいの歳の子は生まれな
いのだが、気づいていないようだ。

「ちよ… 白崎さん… 落ち着い… ゆ、弓人! なんとか… っつい
ねえ!」

親友に助けを求めようとしたのだが、その親友は幼馴染と共に何処
かへ行っているようだ。

そうこうしているうちに、周囲からヒソヒソと噂するような声が聞
こえて来た。

「何だあれ? 修羅場?」

「何でも、女がいるのに別の女との間に子供作ってたらしいぜ?」

「1人や2人じゃないってよ」

「5人同時に孕ませたらしいぞ?」

「いや、俺は、ハーレム作って何十人も孕ませたって聞いたけど?」

「でも、妻には隠し通していたんだってよ」

「なるほど… それが今日バレたってことか」

「ハーレムとか… 羨ましい」

「漢だな… 死ねばいいのに」

話到尾鱈が付き、ハジメは妻帯者にも関わらず、何人の女を食い物
にしているクソ野郎になっている。

こうしてハジメは、親友が戻ってくるまで白崎に問い詰められる羽
目になった。

「なんだよ雫？話があるって」

「ごめんね… 私は香織と違って人前で言う勇気がないから…」

迷宮から出た俺は、雫に連れられて人の通りがない場所に来ていた。

今の雫は、いつもと違い頬を上気させどこかしおらしい。

「すうー… はあー… よし！」

何度か深呼吸した後、意を決したようにこちらに顔を合わせた。

「私、八重樫雫は三星弓人くん、あなたの事が好きです」

うん？今… なんて言った？

「誰が… 誰を好きって？」

「だ、だから私は弓人の事が好きだって…」

「Like？」

「Loveに決まってるでしょ…」

顔を真っ赤にしている雫を見て。どうやら聞き間違いでも、勘違いでも無さそうだと気づいた。

「い、いやいやいやいや！何で!?何で俺!？」

「はあ… 本当に何でこんな鈍感のことを好きになったんだろ…」

混乱する俺を見て、雫は呆れた視線を向けてきた。

そして、俺にとつて衝撃の真実を伝えてきた。

「弓人、あなた昔から結構モテたのよ？顔も良い、運動神経もある、さらに面倒見も良いとききた」

「いやいや、俺嫌われてたぞ」

「それは光輝に気に入られようとしていた女子からだけよ」

「だって、俺と日直同じ日の奴皆逃げてったぞ」

「そりゃあ、『ノート持つよ』って言って目の前にまで近づかれたら恥ずかしくって逃げるわよ」

「ば、バレンタイン… 全部義理でした… 後はお礼とか」

「はあ… 普通、義理やお礼で手の込んだ手作りチョコを作ると思う？」

そうだったのか

気付かなかった・・・というより気付こうとしなかったのだろう。
雫の目は、呆れを含んでいるが冗談などではないことが分かる。
そんな彼女に、告白されたからというだけで付き合うのは彼女に失
礼だと感じた。

「良いわよ、すぐじゃなくても」

「分かるのか？」

「伊達に長年幼馴染してないわよ。どうせ、告白されたから付き合う
のは私に失礼だとも考えてるんでしょ？」

「はい・・・」

「こちとらずっと待ってたんだから今更よ」

本当は、直ぐにでも答えが欲しいのだろう。

それでも待つてくれる彼女の心遣いが何よりも有り難かった。

「別に私は、今すぐ付き合ってくれても良いんだけど？」

「意地悪だなあ・・・」

「これくらい言わせなさい」

こうして俺たちは、ハジメたちの下へ戻ったのだが・・・

「南雲くん！答えて！ねえってば!？」

「ほんと・・・勘弁してください・・・」

錯乱した香織が、ハジメに問い詰めている修羅場を目撃した。

「なにこれ?。」

63星：想いを告げる少女たち【下弦】

「本当に… 申し訳ありません…」

正気に戻った香織は、羞恥により雫の胸に顔を埋めていた。

冷静に考えれば分かる事なのにどうやらそこまで頭が回ってなかったらしい。

雫は、そんな香織に呆れながらも優しく慰めており、側から見たら母親にしか見えない。

「弓人、なんか変なこと考えたでしょ」

「気のせいだろ？」

現在、俺たちは入場ゲートから離れ、町の出入り口付近の広場にいます。

その間、ハジメは町の人々から『男の中の男』やら『女たらしくソ野郎』など、好き放題に言われてたが… まあ聞かない方が良いだろう。

元々はイルワからの用事で寄っただけなので、ホルアドから出る準備をしているのだが、香織を筆頭に勇者一行全員が付いてきていた。

そんな香織は、ハジメとシアをどこか気まずそうに見ていた。

香織のハジメに対する想いは当然知っている。

そのため、俺は香織の背中を押すことにした。

「香織、良いのか？」

「弓人くん… けど」

「どうするかは香織次第だ。けど、後悔しない選択をしろよ？」

「後悔… うん！ ありがとう弓人くん！」

どうやら、覚悟が決まったようだ。

「おっしや！ 行ってこい暴走特急！」

「ぼ、暴走特急!? 酷いよ弓人くん！」

香織は笑いながら突っ込みを入れ、その後ハジメの下へ走っていった。

そんな香織の背中を見ていると、雫が側に近づいてきた。

「ありがとう弓人」

「俺は背中を押したただけだ」

そう、後は香織の頑張り次第だ。
がんばれよ、香織

「南雲くん！」

「白崎さん？」

出発の準備をしているハジメの下に、白崎が覚悟を決めた表情で近づいてくる。

「南雲くん……いや、ハジメくん。私も付いて行っていないかな？いや、絶対について行くから！よろしくね！」

「……………は？」

まさかの決定事項の報告に、ハジメは呆然とした。

しかし、白崎の言葉を理解したハジメは即座に切り捨てる。

「駄目だ、危険すぎる」

「そんなの、この世界に来てからずっとだよ」

ハジメの言葉に反論する白崎、あの日のことを思い出したのか、声が震え瞳に涙が浮かび始める。

「もう嫌なの！好きな人を守れないのは！」

「白崎さん……」

「ハジメくん！貴方が好きです！」

それは、ハジメが日本にいた頃、まさかと切り捨てていた考え。

そしてハジメは、白崎の告白に真剣な表情で答える。

「ごめんなさい、俺には好きな人がいる。だから……白崎さんの想いには答えられない」

「うん……シアさんだよね？」

「ああ、だから」

「けどごめん、それでも貴方のそばにいたい……だって、日本にいた時から好きだったもん……」

白崎は、真剣な表情でシアを見つめる。

その瞳には、決して引かないという強い決意があった。
それに対してシアは

「いいですよ」

「シア!？」

「だって… ユウカさんにもいいって言ったもん」

その言葉に、ハジメはウルの町で園部に告白されたことを思い出した。

白崎は、挑発的な表情でシアに尋ねた。

「良いんだね、シアさん？ 貴方からハジメくんを奪っても」

「誰かを好きになる気持ちは痛いほど分かりますから。まあ精々、頑張ってくださいね… ハジメは私に夢中ですから!」

「ふふふ…」

「あはは…」

笑い合う2人の背中には、何故か首狩り兎と般若が映っていた…

「香織… 強くなったな」

「ええ… そうね」

異世界に来て、さらに逞しくなった香織を見て。

俺と雫は、遠い目をして見守っていた。

「雫、お前はどうする?」

「私は…」

俺は雫も付いてくるか聞いていると、香織の動向に異議を唱える者がいた。

「ま、待て! 待ってくれ! 意味がわからない。香織が南雲を好き? 付いていく? えっ? どういう事なんだ? なんで、いきなりそんな話になる? 南雲! お前、いったい香織に何をしたんだ!」

「… 何でやねん」

天之河は、香織はハジメに惚れていることを認められず。ハジメが何かをしたと解釈したらしい。

「天之河、お前まだ気づいてねえのかよ… 鈍感にも程があるぞ？」

「三星… 鈍感な事については君にだけは言われたくない！」

「そんな怒らなくても… っってお前らなあ…」

予想以上に怒りを見せる天之河と、それに同意する全員を見てなんとも言えない気持ちになった。

そして、香織はケジメとして天之河へ自身の想いを伝える。

「光輝くん、みんな、ごめんね。自分勝手だってわかってるけど… 私、どうしてもハジメくんに行きたいの。だから、パーティーは抜ける。本当にごめんなさい」

その言葉に、女性陣は黄色い声を上げながら応援し、永山、遠藤、野村の3人も、香織の心情は察していたので、苦笑いしながら手を振った。

しかし、天之河はまだ納得できないようだ。

「駄目だ… そんなの、君までいなくなるなんて… 駄目だ」

「光輝くん…」

「光輝…」

天之河は、香織というより何かを思い出さたくないように言う。

そして、天之河は聖剣を構えハジメに対峙した。

「南雲！俺と決闘しろ！俺が勝ったら香織を解放しろ！」

「嫌だよ面倒「俺がやる」弓人？」

俺はハジメの前に立ち、天之河に対峙する。

天之河は驚いた表情をしているが俺は構わず話しかける。

「ハジメの代わりに俺がやる。お前が勝ったら『香織の開放』俺が勝ったら『香織の意志を尊重する』で良いな？」

「っ！分かった、それで良い」

「開始の合図は… 雫、頼む」

「わ、分かった」

雫が間に立ち、開始の合図を待つ。

魔法の反動で全身が痛むが、まあ負けることは無いだろう。

「はじめ！」

「はあああああああ！」

合図とともに、天之河は一気に近づき切り掛かってきた。
それに対して俺は、何もしない

「弓人!？」

「きやあああああー！」

斬られた後の俺を想像したのか、女性陣が悲鳴をあげ。

坂上が俺の名を叫んだ。

そして、聖剣は俺を切り裂くことなく、目前で止められた。

「な、なんで避けない!？」

なんとか停止させた天之河は、焦りの含んだ声で問いかけてきた。

やっぱり、こいつには無理だ。

「光輝…：戦争に参加するのやめろ」

64星：決闘

「光輝：：戦争に参加するのやめろ」

弓人は、天之河にそう伝えた。

天之河はその表情を見て、思わず聖剣を下ろしてしまおう。

そして、決闘を見ていたクラスメイトたちも彼の発言したある部分
が気になった。

「三星つて：：天之河のこと名前で呼んでたっけ？」

「いや、いつも『天之河』って呼んでた気がする：：」

「弓人：：あいつ」

坂上は何かを知っているのか、どこか後悔したような表情で俺の名
前を呟き、香織と雫も、俺のことを悲しそうな表情で見っていた。

「そ、そんなことできるわけないだろー！」

「今のお前じゃあ戦争に行っても死ぬだけだ」

「もしかして、今回のことでそう言ってるのか？大丈夫だ！戦争まで
に強くなれば「そういうことじゃねえんだよ！」

天之河の言葉を遮り、感情が爆発したかのように叫ぶ弓人を見て。

この場にいる全員が驚いた。

「光輝：：いや、この場にいる戦争に参加するって言った奴全員に
言ってるよ」

「三星：：急に何を」

「お前らは：：あの『地獄』を見たことないから、参加するなんてこと
が言えるんだよ」

弓人の脳裏には、あの時の『地獄』が思い出されていた。

燃え盛る街

オラリオ

止むことの無い人々の悲鳴

鼻が曲がりそうになる程、周囲に漂う血と人肉の焼けた匂い

そして、目の前で失う救えたかもしれない命

この世の地獄が、そこにあつた。

「あんな所で：：正気を保つことなんてできない」

「君はいつたい…」

「人を殺す覚悟もできてない奴が行ってもただ死ぬだけだ…だから…止めろ」

懇願するようにそう言う弓人を見て、この場にいる者は息を飲んだ。

しかし、天之河は聖剣を構え弓人の最も望んでいない答えを言った。

「君に何があったかは知らない、けどもう大丈夫だ！」

「大丈夫…だと？」

「ああ！俺は必ず、みんなを守ってみせる！」

「そうか、そこまで馬鹿だとは思わなかったよ！天之河！」

弓人は一気に肉薄し、天之河へ殴りかかる。

天之河は剣の腹で防御するが、受けきれず仰け反ってしまう。

「全員を守る？人を殺せないお前が？」

「殺さなくても…捕らえて捕虜にすれば」

「そんな甘い考えが戦場で通用するわけねえだろ！」

弓人の絶え間ない攻撃に、天之河は防御するだけで精一杯であった。

「あの場所にあるのは！殺すか殺されるかのどっちかだけだ！」

「そ、そんなはずない！話し合えばきつと…」

「そんなことで済まないから戦争になったんだだろうが！」

そしてついに、天之河は持っていた聖剣を手放してしまい後方へ飛ばされてしまう。

「いい加減子供じみた夢を見てんじやねえ！現実を見ろ！」

「く、くそおおおおお！」

武器を失った天之河は、かなぐり捨ててる様に殴りかかってきた。

弓人はそれを難なく避け、苛立ちを隠すことなく叫び殴り返した。

「この…馬鹿野郎！」

防御出来ずまともに受けた天之河は、後方に吹き飛び意識を失う。

そこには、勝ったのにも関わらず悔しそうに佇む弓人が立っていた。

決闘には当然勝った。

けど、俺の脳裏には『あいつ』に言われた事が反響していた。

― 殺す必要はなかったはずだ！

― こんな血に塗れたものが『正義』なはずがない！

― 貴方は闇派閥イザイルスと同じ、唯の『人殺し』だ！

けど… みんなを守るなら、俺は『人殺し』で構わない。

「俺の勝ちだ、約束通り香織の意志を尊重しろ」

意識を失い聞こえてない天之河に俺は構わず言い放つ。

こいつの事だ、どうせ起きてたら有る事無い事行つて決闘のやり直しを要求するだろう。

「他に文句のあるやつはいるか？」

クラスメイトに尋ねると、檜山が何か言いたそうにしていたが、結局誰も言う者は居なかった。

それを確認すると、俺はハジメたちの方へ戻る。

「檜山の事は良いのか？」

「どうでも良い、どうせ何もしてこないだろう？」

「そうか」

そして周りを見渡すと、ユエがいない事に気づいた。

「ハジメ、ユエは？」

「ユエ？ そういえば…」

ユエの強さはよく知っているため、ミュウちゃんみたいに誘拐されたという訳では無いだろう。

俺は気にせず、ユエが戻ってくるまで出発の準備をしようとした瞬間

あの時、ユエの言った言葉を思い出した。

― 私、ユミトのこと好き

― そうじゃない… えっと、大好き

「ハジメ… 出発の準備をして待っていてくれないか？」

「早く行ってこい、女たらし」

そして俺は、体の痛みを無視してユエを探しに走り出した。

その背中を、雫は呆れた様に笑い見ていた。
「そっか・・・あの子もなんだ」

65星：月と星

私は、ユミトのことが好きだ。

あの奈落の底で、私を救い出してくれた彼が大好きだ。笑っている、彼の顔が好きだ。

あの笑顔を見ると、こっちまで嬉しくなる。

頭を撫でてくれる、彼の手が好きだ。

あの大きな手で撫でられると、心が温かくなる。

鈍感な彼は・・・嫌いだ。

テイオの件といい、人の気持ちに全然気づいてくれない。

けど、そんな所も含めて彼が大好きだ。

いつか、けど必ずこの気持ちに気づいてもらう・・・そのつもりだった。

『雫、誰に泣かされた？』

彼が血相を変えて助けに行った女性

彼がその人の頭を撫でるのを見た時、胸に小さな痛みを感じた。

最初は気のせいだと思っただが、その痛みは次第に強くなった。

その人に、私の知らない笑顔をむけている。

その女性の頭を撫でている。

そして、2人がどこかに行くのを見てしまった。

悪いことだとは思う、けど・・・胸騒ぎが止まらなかつた。

「私、八重樫雫は三星弓人くん、あなたの事が好きです」

聞いてしまった。

彼はかっこいい、あの女性が好きになるのもよく分かる。

けど鈍感な彼のことだ。どうせいつものように相手にしないと
思ってた。

けど実際は違った。

その女のことを、意識するようになった。

なんで？

なんで私は意識してくれないの？

そんな女より、私の方があなたが好きなのに

次々と溢れてくる黒い感情

醜い嫉妬だ、こんな考えをしているなんて彼に知られるわけにはい
かない。

知られたら、嫌われてしまうから

私は逃げるようにその場から離れた。

そして今、人の気配のない路地裏で蹲り、必死に抑え込んでいる。

気持ち悪い

こんな感情を、気づかれるわけにはいかない

嫌われる、拒絶されたらと思うだけで目の前が真っ暗になる。

けど

それでも

ユミトに来て欲しい

「こんなところにいたか」

「……ユミト？」

思わず顔を上げると、そこには息を切らしたユミトがいた。

汗もかいており、疲れも見える。

「はは、町中走り回ったぞ。ほら、みんなの所に帰んぞ」

「……こないで！」

手を伸ばし近づいてくる彼を、私は拒絶してしまった。

「……そっか」

ああ、終わった

気づかれてしまった。

目の前が真っ暗になり、絶望に染まる。

もう倒れてしまおうかと考えた時

彼が、優しく抱きしめてくれた。

「ごめん、俺……ユエの気持ちを考えもしなかった」

「……えっ？」

「ユエがあの時言った『好き』って、そういうことなんだよな？」

「……ん」

「ありがとな、こんな俺のことを好きになってくれて」
彼は優しく背中を撫でてくれる。

私の中にある黒い感情が、どんどん小さくなっていく。

「…………… 馬鹿」

「うん」

「…………… 鈍感」

「本当にな」

「…………… 女たらし」

「…………… ハジメにも言われたが流石にそれは…………… すいません俺が悪かったので抓るのやめて」

黒い感情がなくなっただが、代わりに不安になってくる。

あのシズクと言われていた人は、同性の私でも見惚れる黒くて長い髪、スタイルだって私より良い、そして何より

「…………… 私は、今のユミトしか知らない」

「ユエ……………」

私は、昔のユミトを知らない。

シズクは、今の彼を知らなくてもこれから知っていけば良い。

それが、とても悔しい。

そんな時だった。

「オ里昂」

「…………… え?」

「オ里昂、前世の俺の名前だ。ハジメにも…………… 当然雫にも教えたこととの無い俺の名前だ。」

「…………… なんで?」

思わず尋ねてしまうと、彼は笑いながら答えてくれた。

「なんでだろうな?…これだけは…………… ユエにだけ知って欲しかった」

「…………… 私だけに?」

「ああ、ユエだけに」

私だけに、それだけで嬉しくなる。

私は、自分がこんなにもチョロいとは思わなかった。

「ユエ、俺はお前のことが好きだ」

「!」

「けどな…これが恋愛感情としての好きなのかはまだ分からないだ」

「……ん」

「だから待っててくれ、この気持ちは何なのか…必ず答えを見つける」

「……ん、本当にオリオンはしようがない」

「意地悪だなあ…って」

「……2人きりの時だけ、その名前で呼ばせて」

「分かった、2人きりの時だけな」

困ったように笑うユミト…オリオンを見て、黒い感情も不安もなくなつた。

私たちは立ち上がり、手を握りながらハジメたちの所へ戻る。

やはり私は、オリオンの事が大好きだ。

66星：二つ名

【二つ名】

それは冒険者にとって、神々から与えられる最も栄誉なものだ。

神々は、3ヶ月に一度行われる【神会】デナトウスにて、「ランクアップ」した眷属ことどもたちの偉業を讃え、その者を象徴する称号として【二つ名】を授ける。

ユエとともに戻ると、香織は荷物を取りに行ったのかそこにはおらず、他のクラスメイトたちも天之河を連れて行ったのかその場にいたのは、ハジメたちを除くと雫だけだった。

そんな雫はというと、ハジメに対して意地悪な笑みを浮かべており。

そのハジメはなぜか分からないがものすごく悶絶していた。

「お前ら… 何やってんだ？」

「弓人。それに… あなたは」

「…ユエ、ユミトがつけてくれた名前」

「そう… とつても良い名前ね」

本当は、ハジメと考えた名前なんだが… いや、これを言うのは無粋だろう。

この2人には、シアと香織の時のような緊迫した空気は流れていない。

「あなたも、弓人のことが好きなんでしょ？」

「…ん、私もユミトが好き」

「ふふっ、お互い難儀な男を好きになったわね」

「…ん、まったく」

「この鈍感」

2人から半目で睨まれ、俺は視線を泳がしながら話題を変えようとする。

「そ、それよりハジメはなんで悶絶してるんだ？」

「あ、逃げた」

「いやもう勘弁してください」

「流石に意地悪だったかしら、実はね…」

どうやら、もしハジメがシアがいるからと香織の想いを蔑ろにする
と、勇者パーティという権限を最大限使って様々な【二つ名】を広め
ると脅していたらしい。

因みに、その二つ名の知識は日本にいた時に香織にゲームショップ
や本屋に連れ回されて身についたとのことだ。

「その言い方… 来ないのか?」

「ええ… かなり悩んだけど、今の私だと足手纏いにしかならないか
ら…」

「そうか…」

雫はとても悔しそうにそう言った。しかし、すぐに表情を戻し決意
に満ちた表情でこちらを見る。

「だから待って… 必ず、追いつくから」

「分かった。それにしても… ハジメもついに二つ名持ちか」

「おい! まだそう決まったわけじゃねえ!

オラリオの冒険者ではないハジメにとって、やはり【二つ名】とい
うものは耐え難いものようだ。

「雫、どんなのが候補にあるんだ?」

「えっと、『白髪義腕の処刑人』『漆黒の暴虐』『破壊巡回』…」
アウトブレイク

「ぐわあああああ!」

雫が次々と並べる【二つ名】に、ハジメは悶え叫ぶ… こいつ腕ち
ぎられた時より叫んでるぞ。

「すごいな雫… 神々のセンスにも引けを取ってないぞ…」

「え? 神々?」

「あく… そういや言っただけだったな。俺前世の記憶あるんだ」

「は? 前世の記憶?」

すると雫は、自身の額と俺の額にそれぞれ手を置き熱を測り始め
た。

「熱はないわね」

「いやそういうのじゃねえから」

「でもそんな漫画やアニメじゃないんだから」

「そんなもん異世界に来てる時点で今更だろ」

「けど実際、雫の反応は当然だ。ハジメやユエの様にすんなり受け入れるのは難しいだろう。」

「けど、あなたが嘘をつくとは思わないし… うん、信じる」

「ありがとな」

「…… そういえば、ユミトにも【二つ名】あつたよね？」

「おう、『三星の狩人』だ」

「二ああ…」

そう、神々のセンスが前衛的すぎるのか、とてつもなく痛いのだ。

さらにタチが悪いのは、俺たち冒険者の時代がまだ追いついていないのか。

それをかっこいいと思ってしまい憧れてしまうのだ…

「前世は… かっこいいと思ってました」

「…… よしよし」

そんな俺の眩きに、ハジメたちはとても優しい視線を向けてくる。

それは、嬉しそうに二つ名を名乗っていた俺を見ている、アルテミスの表情そっくりだった。

「けどな… これまだマシなんだよ」

「二嘘でしょ…」

「初めて【ランクアップ】した時なんて… 『☆^{流星}』だぞ」

「二絵文字!?!」

【神会】において、中小ファミリアの眷属なんて格好の餌食だ。発言力の強い上位のファミリアの神々がこぞって玩具にする。

当時団員が俺とアタランテの2人しかいなかったアルテミス・ファミリアも、その例に漏れることはなかった。

当時の記録

『ほな次はく… おお！アルテミスんこのオリオンや』

『マジか!?!』

『あの不純異性交遊撲滅委員長のアルテミスに男の眷属!?!』

『べ、別にいいだろ！何か文句でもあるか!』

頬を染めるアルテミスを見て全員が理解した。

あ、こいつ落ちてるな。

『アルテミスと一つ屋根の下とか許せねえよなあ!』バスターゴリラ『冠位級筋肉!』

『こいつ噂によると色んな子落としてるらしいぞ』ミアハMark2『天然ジゴロ!』

『さて、何故私が出るんだ?』

『うるせえ！善意とはいええ女神や子供たちをたらし込みやがって!』

ティア・ドロツツ『女の敵!』

『『『『それだ!』』』』

うたげ悲劇が始まった。

少し聞き逃せない部分があったが、アルテミスは自慢の眷属に無難なものも付けてあげたいため、救いを求める様にロキに視線を向ける。

『お願いロキ:~』

『うくん:~ そやなあ、オリオンはウチの晩酌に付き合ってくれるし面白い奴やしなく』

『で、でしょ!だから無難なものを』マけどリヴェリアとアイズたんをウチから奪ったのは許せへん!』流星『☆彗!』いやあああああああ
!!!

『ロキ:~ オラリオに帰ったらマジで覚悟しろよ:~』

『や、八重樫さん！白崎さんのことは任せてくれ！いやマジで!』

『え、ええ:~ それなら良いんだけど』

【二つ名】で苦労している俺を見て、ハジメは食い気味に叫ぶ。

それを見た雫は、若干引き気味ではあるものの安心した様だ。

そんなこともあり、荷物を取りに行っていた香織も戻ってきて、俺たちは出発することにした。

66. 5星：三星と天之河【上弦】

新たに香織を仲間に加え、弓人たちは「グリューエン大砂漠」へ車を走らせている。

その車内にて、シアたちは先ほどの勇者たちの話をしていった。

「そういえばハジメ、あのアマノガワ？って人と同じ故郷なんだよね？」

「まあな、けど同郷ってだけで親しい訳じゃねえぞ」

「あれ？けどユミトさんはあの人のこと…」

名前で呼んでいた。そう言おうとしながら振り向くと、ただぼんやりと景色を見ていた弓人と、どこか悲しそうな表情を浮かべる香織がいた。

「あの…：もしかして聞かない方が良かったですか？」

「ううん…：そうじゃないんだけど」

香織は恐る恐ると言った感じに弓人を見る。

何も反応しない事を肯定と取ったのかゆっくりと話し始めた。

「昔はね…：弓人さんと光輝くんはこんな感じじゃなかったんだよ…：それこそ、親友って言えるくらい仲が良かったんだ」

天之河光輝は、才能の塊だった。

どんなスポーツでも、1教えられたら10を理解する。

神童と言われても過言ではない、そのため挫折を知らなかった。

あの日までは

「天之河だっけ？俺と試合しないか？」

「別に良いけど…：僕が勝つよ？」

当時、道場でもその才覚で負け知らずだった天之河に、弓人は話しかけた。

彼にとっては、勝つことはあたりまえ。そのため無自覚に相手を煽ることが多かった。

「そんなもん、やってみないと分かんねえよ」

「まあ良いけど」

「じゃあやろうぜ！しはんだーい！」

こうして天之河と弓人は試合することとなった。

そしてその結果は、弓人が勝った。

「勝負あり！」

「よし！」

「なっ…」

その結果は、ある意味当然であった。

才能があるとはいえ、入ってまだ1ヶ月の天之河に対して、1年近く八重樫や師範代にしごかれていた弓人だと、実力には大きな差があった。

「ぐす… うう…」

天之河は知らなかった。

敗北がこんなにも悔しいものだったと。

「天之河、お前すごいな！」

「え… なんで…」

「お前まだ1ヶ月なんだろう？俺負けるかと思ったぞ」

お世辞でもなんでもない賞賛に、天之河は自身の腕で涙を乱暴に拭い。弓人に宣言する。

「次は絶対に勝つ！」

「馬鹿言うな、入ってすぐの奴に負けたら雫にぶっ飛ばされるわ」

こうして天之河は、初めての挫折と親友ライバルができた。

「その後、私や龍太郎くんとも仲良くなって… どんな時でも一緒だった」

「そうなんですねぇ… けど、なんであんな険悪？な感じに？」

その質問に、香織は再び表情を暗くする。

そして、言い淀んでいたが、再びゆっくりと語り始めた。

「2人がああったのは… 昔、雫ちゃんがいじめられてたのを知った時なんだ」

それは、みんなて帰ろうとしていた時八重樫がなかなか来ないと弓人が迎えに行った時だ。

教室でいじめられてる八重樫を目撃して、激昂した弓人が追い払いみんなの所へ連れてきた。

「ぐす…ぐす…」

「ごめんね雫ちゃん… 私雫ちゃんがそんな目に遭ってるなんて知らなかった…」

泣いている八重樫を慰めていると、天之河は八重樫に対して言葉をかける。

「雫、もう大丈夫だ。後は俺がなんとかする」

「なんとかやってどうやって?」

「その子たちと話し合う。みんないい子だから分かってくれるさ」

坂上の質問に、天之河は当然と言わんばかりに答える。

しかし、そんな解決策など不可能に近かった。

「いい子だったら、そもそもいじめなんてしねえだろ」

「弓人、そんなはずない。みんな何かしらの理由があつたんだ」

「光輝、お前本気で言ってるのか?」

天之河は、性善説を信じており。そのことで何度か弓人と対立したことがある。

そして今回も、苛立ち始めた弓人に気づかず、自身の考えを口にしてしまった。

「それに…もしかしたら雫にもいじめられる理由が…ぐあつ!」

「お前!もっぺん言ってみろ!」

「弓人やめろ!」

「ごめんなさい…ごめんなさい…」

天之河の言葉に、今まで見せたことのないような怒りを見せた弓人が殴り飛ばした。

そして天之河の胸ぐらを掴む彼を、坂上が羽交締めで抑える。

そして香織はその剣幕に怯えてしまい、八重樫はただ泣いて謝るしかできなかった。

「その後…どうなったんですか？」

「…先生が来てその場は抑えられた。その後雫ちゃんをいじめてた女子たちが有る事無い事言つて、『弓人くんが雫ちゃんをいじめてて、光輝くんがそれを止めた』って…」

「な、なんですかそれ!？」

香織の言葉に、シアは怒りの声をあげる。周りを見ると、ユエやテイオも苛立ちを見せていた。

「ユミトさん全然悪くないじゃないですか！悪いのはあのアマノガワじゃないですか！っていうかなんですかあいつ！「もういいだろ」ユ、ユミトさん？」

鬱憤を晴らすかの様に捲し立てるシアの言葉を、先ほどまで黙っていた弓人が遮る。

「そりが合わず仲違い、ガキの時ならよくあることだろ」

「弓人くん…」

「香織も、過ぎた事を引っ張るな」

「…ごめん」

気まずい空気が漂うが、弓人はそれを無視して景色を見始めた。

こうして少しの間、車内は静かになり「グリーンユーエン大砂漠」へ進む。

66. 5星三星と天之河【下弦】

現在、王宮の訓練場にて

【オルクス大迷宮】から帰還した八重樫は、メルドとの模擬戦を行っている。

彼女の手には、先の戦いで折れた剣の代わりに弓人の持っていた物と同じ形状の刀が握られていた。

そして、彼の持っていた刀と違い、刃の部分が蒼色に光っていた。

「さあ来い！」

「行きます！ 『車軸』」

その瞬間、鋤の部分から刃へ纏う様に水が吹き出した。

この武器の銘は『時雨』

ハジメが武器を製作している時、それに興味を示したテイオと、全属性の魔法に適正のあるユエの3人で共同製作した物である。

刀の茎に水属性の魔法陣を書き込んでいるため『魔力操作』を持っている八重樫でも問題なく使用できる。

因みに、刀の作成はハジメ、魔法の理論構成はユエ、魔法陣の作成はテイオが担当した。

「はあっ！」

「ぐっ……」

八重樫は刀を両手で持ち、突進する様に突きを放つ。

すると、纏っていた水が勢いを増し、八重樫の全身を包む様に広がった。

メルドは大剣の腹でガードするが、水流によって勢いの増した突きに思わずたたらを踏んだ。

「見事な攻撃だ……次はこちらから行くぞ！」

『逆巻』

八重樫から距離をとり、体勢を立て直したメルドは八重樫に斬りかかる。

それを見た八重樫は、下段に構え魔法を唱える。

すると、纏っていた水が今度は滝の様に流れ始めた。

それを確認した彼女は巻き上げる様に刀を振るい、水の壁を作り姿を隠す。

「それで防御したつもりか！」

普通であれば警戒して攻撃しないのだが、今回は模擬戦ということもありメルドは薙ぎ払う様に水の壁を切り裂いた。

大剣は水の壁を難なく切り裂いたが、先ほどまで対峙していた八重樫の姿がなかった。

「何!？」

「セイツー！」

八重樫は、水の壁で自身の姿を隠し身を屈めて回避していた。

それに気づいたメルドは距離を取ろうとするが、既に居合の構えをしていたため、その隙を見逃さず抜刀した。

「… 降参だ」

「ありがとうございます」

メルドの首元に当てられた刀を仕舞い礼をする。

模擬戦が終わった後、メルドは嬉しさと悔しさが混ざった様な表情を向ける。

「参ったな、もう私じゃあ相手にならないか」

「い、いえ！今回の勝ちはこの刀によるものですし…」

「謙遜するな、その武器を使いこなしたお前の努力の結果だ」

「あ、ありがとうございます」

彼女の成長を、自分以上に喜ぶメルドを見て照れ臭くなる八重樫。

そしてメルドは、1つ気になった事を質問した。

「しかし、随分と堂に入っていたな。我流か？」

「うえ!? えっと… 書物に… 書いてたもの? です」

「なるほど… 王宮にそんなものあったか…?」

あの技術は、日本にいた頃。幼馴染に付き合わされアニメや漫画を見ていた際、ある漫画の日本刀を使う登場人物の技である。

その漫画を読んだ後、人目につかない場所で真似をしたという、彼女にとって誰にも知られるわけにはいかない『黒歴史』がある。

「まあいいか」

「ほっ…」

「しかし… 光輝の奴は…」

そう言つて天之河の方を見ると、弓人に殴られた頬を抑えぼんやりと景色を見ている彼がいた。

天之河は、王宮に戻つてからあんな調子であり、訓練にも身が入つていなかった。

八重樫は、メルドに断りを入れ天之河の方へ近づく。

「光輝、あんたいつまでそうしてるつもり？」

「… 雫」

声をかけられた天之河は、八重樫に視線を向けると呟く様に問いかけた。

「… 僕は、また間違えたのか？」

「… そうね、香織は誰の物でもない。だから南雲くんの所に行くことは誰も止める権利は無いわ」

「… そうか」

聞きたくない事实に、天之河は顔を顰める。

何故南雲なんだ

あんな不真面目な奴なのに

あんな風に女の子を侍らせていたのに

そうだ、きつと何かしたに決まつてる…

結論が出そうになった瞬間、彼に殴られた頬が痛む。

治療は済んだはずなのに、未だに痛む。

弓人、なんであんな目をするんだ。

僕は間違つた事を言つてないだろ…

なんで… 昔みたいの名前で呼んでくれないんだ…

「雫… 僕はどうしたらいいんだ…」

「知らないわよ」

「っ…」

縫う様な問いかけを、彼女は一刀両断する。

しかし、八重樫は少し考えたのか言葉を続けた。

「… 正確に言っていると、私は知ってる」

「なら…」

「けどこれは、光輝自身で見つける答えだと思う。じゃないとあんたご都合解釈するでしょ」

「ご都合解釈なんて…」

「そこで誤魔化すのは、かつこ悪いわよ？」

「…」

顔を顰め黙り込む天之河を見て、八重樫はため息をついてその場から離れようとする。

「… 雫、君も離れていくのか？」

「… それは、どっちの意味で？」

「頼む、行かないでくれ」

懇願するような天之河の言葉、クラスメイトの女子や王国の令嬢が聞けば簡単に落ちそうなものだが、八重樫が見せた表情は『呆れ』だった。

「私はもう決めたの、強くなって… 必ず『彼』の隣に立つって… そもそも縋るような男はお断りよ」

その言葉を残し離れていくのを見て、天之河はまたぼんやりと景色を見始めた。

『彼』その言葉に思い当たる男は1人だけだ。

天之河が変われるかどうかは、本人次第である。

67星：砂漠のトラブル

現在、車内には俺のせいで起きていた気まずい空気は無くなっていた。

それもミュウちゃんの天真爛漫さのおかげだろう。

「パパすごい！前に来た時と違って涼しいし目が痛くないの！」

「そうだね。ハジメパパはすごいね。ミュウちゃん、冷たいお水飲む？」

「飲むう。カオリお姉ちゃん、ありがとうなの」

ミュウちゃんは、前部の窓際の席で香織の膝に乗りながら興奮しながら車内の快適空間を満喫していた。

そんなミュウちゃんを、子供好きな香織は備え付けの冷蔵庫から水を取り出し、甲斐甲斐しく世話をしている。

「あの、白崎さん…ハジメパパって呼ぶのはちよつと…」

「ハジメくんが名前で呼んでくれたら変えてあげる」

「えっ…か、香織…さん」

「む…まあ今はそれで良かった」

姿は変わってもその根本にあるものは日本にいた時から変わっていない事に、思わず笑みをこぼしてしまう香織。

しかし、そんな空気も少女のある言葉によって変わっていく。

「残念でしたね、どうやらハジメとは距離があるようです！」

「…シア？それはどういう意味かな？」

「いえいえ、私は思った事を言っただけですので」

どこか勝ち誇ったような表情のシアに、悔しそうな表情の香織。

しかし、何か閃いたのかやり返しと言わんばかりに声をあげる。

「け、けど！私はハジメくんの趣味や将来の夢を知ってるよ！特に好きなジャンルとか！シアは知らないんじゃないかな！」

「う…ま、まあ！これから知っていけば良いので！それこそ2人きりで！」

「ぐぬぬ…」

「むむむ…」

徐々にエスカレートしていく2人の口論を、後部にいる俺たちと運転しているハジメは関わらないようにしていた。

そしていよいよ取っ組み合いになりそうになった瞬間、挟まれていたミュウちゃんが我慢の限界を迎えた。

「……うー、シアお姉ちゃんもカオリお姉ちゃんもケンカばかり！ なかよしじゃないお姉ちゃん達なんてきらい！」

そう言っつて香織の膝から降り、後部のユエの膝に乗るミュウちゃん。

嫌いとはつきり言われた瞬間、ショックを受けた2人は一気に落ち込んでしまった。

「……2人とも、子供の前でみつともない」

「おじちゃん、もうお腹痛くないの？」

すると、後部に来たミュウちゃんは俺の心配をし始めた。

「どうやら、俺が腹痛で黙り込んでいると思っただらしい。」

「大丈夫だ、ミュウちゃんは優しいな。そんな子には飴ちゃんをあげよう」

「わーいなの！」

「おい弓人！ミュウが昼飯食べれなくなったらどうすんだ！」

「大丈夫だつて、こんくらいの子は食べ盛りなんだから昼飯だつて余裕だ。な？ミュウちゃん」

「よーゆーなの！」

「はあ… 今日だけだぞ」

昔、やったことのあるような掛け合いをしながら、俺はユエと雫のことについても考える。

2人のことは当然好きだ。

けど、この好意は友愛や家族愛なものか、恋愛的なものか分からない。

2人は待っていてくれるが、それに甘え続ける訳にもいかない。だから、雫が合流するまでに答えを出すべきだ。

「ん？なんじゃあれは？ユミト殿。三時方向で何やら騒ぎじゃ」

テイオに言われた方向を見ると、砂丘の向こう側に、サンドワームのようなミミズ型の魔物が相当数集まっており、砂丘の頂上から無数の頭が見えた。

「あいつら、なんであんな所をぐるぐる回ってんだ？」

サンドワームは、何かを中心に旋回しておりどこか違和感を感じられた。

テイオに尋ねてみると、テイオもそこまで詳しくないのかどこか曖昧に答える。

「なんというか… 食うべきか食わぬべきか迷ってるようじやのう」

「確かに… けどあいつらって雑食だったよな？」

「うむ、その上かなりの悪食なのじゃが…」

まあ、サンドワームは俺たちに気づいていないので、放っておこうとしていた所

「っ！お前ら捕まれ！」

突如、ハジメは車を急加速させる。その瞬間、地面からサンドワームが飛び出し、車体を掠める。

どうやら、サンドワームたちは俺たちの存在に気づいたようだ。

ハジメは車をS字に走らせながら、サンドワームたちの強襲を掻い潜る。

そして車内にいる香織は遠心力によって思わずハジメに抱きついてしまう。

「か、香織さん!？」

「ぐごごごめん！ワザとじゃないから！」

「香織さんやりますね… なら私も！」

「あばばばばば」

美少女2人に抱きつかれ、ハジメは完全にショートしてしまう。

このままだと不味いため、俺は防塵用のゴーグルとマスクを顔につけ車外に出ようとする。

「俺が外に出て撃退する。テイオとユエはもしもの時は魔法で援護してくれ」

「……ん」

「分かったのじゃ」

「おじちゃんがんばれー!」

そして俺は窓から車の上に移動する、一瞬バランスを崩すが何とか立ち直り弓矢と旋空を取り出し装備する。

その瞬間、背後から1匹のサンドワームが飛び出してきた。

『放たれしは必中、我が矢の届かぬ獣はあらず』

「オリオン・オルコス」

一閃

白く輝く矢が、サンドワームの頭部を簡単に吹き飛ばす。

仲間意識が薄いのか、それとも食欲でまともな判断が取れていないのか、今度はサンドワーム2匹が同時に飛び出したため、弓を即座にしまい居合の構えを取る。

「弓人旋空」

不可視の斬撃が、2匹のサンドワームを容易く斬り裂き絶命させる。

こうして1匹、また1匹と屠っていき、サンドワームの群れを全滅させた。

「ふう…これで終わりか?」

「……ん、お疲れ」

「しまった、ミュウちゃんに見せる訳にいかなかったなこれ」

「大丈夫じゃ、ミュウには見せとらん」

「何も見えないの〜」

車内を覗き込んでみると、ミュウちゃんに外を見せないようにユエが掌でミュウちゃんの目を覆っていた。

流石に4歳の子に、このスプラッタな光景を見せるわけにはいかない。

「ハジメはもう大丈夫か?」

「おう…すまなかった」

「で、どうだった?」

「柔らかくて良い匂いでした…じゃねえ!」

そうやってハジメを揶揄していると、先ほどまでサンドワームが旋

回していた場所の中心に破壊された馬車と倒れている人がおり、どうやら彼を捕食しようとしていたのだろう。

「ハジメくん…」

「…分かった」

香織に頼まれて、車は男の下へと近づいていく。
新たなトラブルが俺たちに舞い込んできそうだ。

三星弓人 Lv. 6

力	: G	:	2	4	7	↓	G	:	2	5	3
耐久	: H	:	1	9	8	↓	G	:	2	0	0
器用	: G	:	2	1	5	↓	G	:	2	2	2
俊敏	: G	:	2	3	1	↓	G	:	2	3	5
魔力	: H	:	1	7	4	↓	H	:	1	8	0
頑健	: E	:						:			
対魔力	: F	:						:			
千里眼	: E	:						:			
直感	: G	:						:			

68星：穢れたオアシス【上弦】

「助けてくれたことに感謝する。私はビイズ・フオウワード・ゼンゲン」

砂漠で倒れていた男……ビイズは礼を言い俺たちに頭を下げる。

近づいた時の彼は、魔力が暴走しており、香織が『廻聖』で治療しなければ血管や内臓が破裂していたらしい。

「ゼンゲン……もしかしてランズイ公のご子息ですか？」

「その通りだ」

ランズイ公は、ミュウちゃんの故郷【エリセン】の近くにある【ア
ンカジ公国】の領主だったはずだ。

「となると、運送中に襲われたって感じか？」

「いや、そうではない……君たちは見たところ冒険者のようだが、ランクを聞いても良いだろうか？」

ランクを聞く、それはランクの高さによって何かを頼んでくると暗に言っていた。

ハジメに目配せすると、ハジメもそれに気づいているが、助けた手前最後まで付き合うつもりなのかランクを教えるつもりだろうか。

『金』だ」

「金!……神よ、貴方の采配に感謝します」

ランクを聞いた瞬間、驚愕し劇の役者のように仰々しく天に祈り始める。

本当に大貴族なのかと、俺たちが呆れているとビイズは案の定俺たちに依頼してきた。

「君たち……いや貴殿たちにアンカジ公国領主代理として正式に依頼したい。私たち……アンカジ公国を救ってほしい」

依頼内容を聞くとこうだ。

4日ほど前から、原因不明の高熱が流行り始めた。

それは突然の出来事で、症状を訴えるものだけでも2万を超え、死者も出ているらしい。

原因を調査していると、水源として利用しているオアシスに魔力を暴走させる毒素が確認された。

そのため水を飲めば毒に侵され、飲まなければ脱水症状に陥るといふ絶望的な状況となっている。

「治療法は、香織がやった魔法以外ないのか?」

「いや、既に治療法は確立している。【グリューエン大火山】のみで採取できる『静因石』を粉末にして服用すれば治療できる」

彼が砂漠にいた理由が分かった。

【グリューエン大火山】は大迷宮の1つのため、領主のゼンゲン公や領主代理のビイズほどの権力がないと手続きに時間がかかり、その間に国が滅ぶ可能性がある。

「なるほど、依頼は俺たちにその鉱石の採取か」

「その通りだ」

「けど、その鉱石採取だけだと完全な解決にはならないよな」

「… ああ」

ハジメの言った通りだ。

治療できたとしても、安全な水を確保できていなければ根本的な解決にはなっていない。

ビイズもそれに気づいており、俺たちが採取に行っている間に水の確保をするつもりだったようだ。

「よし、一度アンカジに行こう。水についても俺たちに任せてくれ」

「できるのか!? 27万人分の飲み水だぞ!」

「ユエ、どれくらい土地があれば良い?」

「… 200メートル四方」

「それなら農業地帯を使ってくれば良いが…」

それだけの範囲があれば十分だろう。

ミュウちゃんも預ける必要があるため、俺たちはビイズを車に乗せアンカジ公国へと向かった。

ビイズの案内で、俺たちはアンカジ公国の農業地帯に到着した。

「500メートル四方はある、本当にできるんだな?」

「ユエ、いけるか？」

「……ん、けど一度魔力の補給が必要」

ユエは言葉を止め、曇惑的な表情で俺を見てきた。

「……だから『あれ』頂戴」

「分かった、じゃあ始めてくれ」

「……むう、手強い」

「どうやら、俺は反応を間違えたようだ。」

「気を取り直したユエは、手を前に突き出して魔法を放つ。」

「……『壊劫』」

その瞬間、黒く渦巻く球体が現れ形を変え始める。

そして、ユエが最初に言っていた200メートル四方の膜になり、地面を押しつぶすように落下した。

地響きと共に陥没していく大地、そして農地だった場所には200メートル四方、深さ5メートルほどの貯水所となった。

魔力を一気に消費したため、疲労感と共にため息をつくユエ。

俺はユエを支え、血を飲ませるために腕をユエの口に近づけようとすると、ユエは俺の首に腕を回し抱きついてきた。

「……いただきます」

首筋に小さな痛みと、血が吸われていく感覚が発生する。

どこか官能的な光景に、離れて見ていたハジメたちはどこか気恥ずかしさを覚え、目を逸らしたり頬を染めたりする。

「……ごちそうさま」

「ユエ、そういうのは勘違い……されて良いのか」

「……ん、オリオンの血美味しかった」

誰にも聞こえないように、前世の名を呼んでくるユエの頭を撫でてやると、満足したのか立ち上がり水系魔法を発動する。

「……『虚波』」

その瞬間、虚空から巨大な津波が現れ貯水所に流れ込んでいく。

何度か吸血を繰り返し、何度か津波を発生させて200メートル四方の貯水池は、汚染されていない新鮮な水でなみなみと満たされた。

「お疲れさん、貧血で倒れる前で良かった……」

「…… やめられない、止められない」

「あのユエさん、そろそろ倒れるので勘弁してください」

吸血を続けるユエを引き剥がし、俺とユエはハジメたちの方へもどる。

そこには、あり得ない光景を目撃して口を開けたまま呆然としていたビイズがようやく再起動し始めた。

「あ、ありがとう！これで民が救われる！」

「運搬はそっちで頼む。あとは…… オアシスの調査もするか」

オアシスの方も改善できるならそれに越した事はないためビイズに提案すると、彼は快諾してくれたため、ミュウちゃんを預けるために俺たちは一度宮殿に移動を開始した。

68星：穢れたオアシス【下弦】

「えー!?またおるすばんなのー!?」

アンカジ公国の宮殿、そこにミュウちゃんを預けようとしたところ
ミュウちゃんは嫌がり始めた。

「ミュウも行きたいの!」

「そっかあ、けどハジメくんが行く場所は危ないからダメなんだよ」

「うゝ…でもゝ」

「お姉ちゃんも一緒に留守番するから、ね?」

大好きなパパを困らせたくない、けど一緒に行きたい。

2つの感情に挟まれミュウちゃんはどうもいっていると、ハジメがしや
がみ視線を合わせる。

「ミュウ、香織お姉ちゃんを助けてあげな」

「カオリお姉ちゃんを?」

「ああ、お姉ちゃん1人だと大変だからな」

ミュウちゃんの頭を撫でながら話しかけるハジメ

俺たちがオアシスの調査、静因石の採取に行っている間、『治療師』
の香織はこれ以上の犠牲を出さないため、治療施設に行くつもりだ。

お姉ちゃんを手伝う

お姉ちゃんが喜ぶ

パパも喜ぶ

ミュウちゃんの頭に方程式が浮かび上がり、任せろと言わんばかり
に自身の胸を叩いた。

「分かったの!お役に立つの!」

「良い子だ。香織さん、魔力はどれくらい持つんだ?」

「… 2日、その間は絶対に死なせない」

2日、【グリューエン大火山】を往復することも考えるとあまり余裕
は無いだろう。俺たちは水源の調査のためオアシスに向かおうとし
たところ、香織がハジメの袖の端を摘んだ。

「香織さん?」

「キス…。」

「……はい!？」

「だから…行つてきますのキス…。」

香織の爆弾発言に、ハジメは顔を真っ赤に染める。

そしてドス黒いオーラを身に纏ったシアが笑顔で問いかけてきた。

「カオリさん?いくらなんでも調子に乗りすぎでは?」

「だ、だって!シアはもうキスしたんでしょ!?!しかも2回!」

「あんな色気もないやつをカウントに入れたくないよお!」

救命行為で2度のキスしたことをネタに、何度かハジメを揶揄つているところを見たことがあるが、本音はカウントに入れたくなかつたようだ。

シアと香織の口論が勃発している中、行つてきますのキスに反応したミュウちゃんがハジメに近づいていく。

「ミュウも!ミュウもパパにチュウする!」

「ミュウ、お前もか…。」

諦めの含んだ声を上げるハジメをみて、ここがチャンスとみたのか香織とシアが共闘することを選択した。

「ハジメ!昔やり直しを要求した時、やってやるつて言ったよね!」

「あ、あれは勢いといふかなんというか…。」

「ハジメくん!減るものじゃないから良いでしょ!」

「それどつちかと言うと男が言うセリフだろ!?!」

押され気味のハジメは俺の方を見てきたため、いつぞやの時のように答えた。

「強く生きろ」

「またかよ!」

その言葉と共に、俺、ユエ、テイオは一足先にオアシスへ向かう。しばらくした後、顔を赤くしたハジメと満足げな表情を浮かべたシアが合流した。

—————

オアシスは、一見すると何の変哲もない。

しかし、ハジメがモノクル越しに水面を見ると、異変の原因に気づ

いたのか空間庫からペットボトルの様な金属塊を取り出し適当に投げていく。

「ハジメ殿のあれはなんじゃ?」

「魚雷、簡単に言ったら水の中で使う爆弾だ」

「なるほどのう... それを使うということは」

「..... 水の中に何かがある」

その瞬間、大量の水柱が発生する。

しばらくした後、魚雷とは違う理由で水面が揺らぎ始め、『それ』は飛び出した。

『それ』は、体長10メートルほどある、体内に赤い魔石を持つスライムだった。

「なんだこいつ?」

「バチユラム... にはしては見たことない大きさじゃ」

「何にしろ、さっさとやるぞ」

ハジメは挨拶代わりに魔石にむかって撃つ。

やはり魔石が核なのか、体内で魔石を移動させて回避した。

「やっぱり移動できるか」

「..... 水に潜り込まれると面倒」

「物理攻撃は効果なさそうじゃのう。『吹き荒べ頂きの風、燃え盛れ紅蓮の奔流』『嵐焰風塵』」

ティオは風属性と炎属性を掛け合わせた魔法を放つ。

炎の竜巻がバチユラムを包み込むが、バチユラムは即座に再生し答えた様子がない。

「..... 魔石を砕いた方が早そう」

「だな、とりあえず... 水面から切り離そう。弓人旋空」

不可視の斬撃が、水面とバチユラムの境を抉り取る様に切り裂く。

「..... ユミトセンクーいつせーん」

「後は任せてくださいー!」

重力魔法で体重を軽くしたシアが水面を跳ねるようにバチユラムに近づく。

バチユラムはシアを近づかせない様に触手を伸ばす。

「…………『凍宮』」

ユエがバチユラムの触手を一本残らず凍らせる。

それをシアがドリユッケンで砕きながらバチユラムに肉薄した。

そして重力魔法で加速させた一撃がバチユラムを吹き飛ばし魔石だけの状態にした。

「ハジメ！」

「これで終わりだな」

そしてハジメのドンナーの引き金を引き、電磁加速された弾丸が魔石を砕いた。

「反応もなし……これでオアシスは大丈夫だろ」

「うむ、地下水脈から新鮮な水が出ておる。汚染された水を排出すれば問題ないじゃろう」

「それにしてもハジメ、あの魔物はどこから来たんだろ？」

「魔族によるものだろうな」

ハジメはどこか確信した様子で答える。

けれど、ハジメの答えは的を射ていた。

戦争において、食糧や物資の補給は放っておけない問題だ。

『作農師』の畑山先生が狙われた様に、食糧関係の要所であるアンカジ公国も狙われたのだろう。

「それに……魔族が手に入れた【神代魔法】が魔物関連なはずだ」

「…………それなら納得できる」

「とにかく、俺たちが今やることは静因石の採取だ。行こう」

オアシスの戦闘も終わり、俺たちは依頼された【グリュウエン大火山】に移動を開始した。

69星：第3の迷宮

【グリユーエン大火山】

アンカジ公国から北方に100キロ進んだ場所に存在する【七大迷宮】の1つだ。

しかし【オルクス大迷宮】と違い、冒険者が頻繁に訪れることはない。

その理由は、魔石の旨みが【オルクス大迷宮】より少ないのもあるが、1番の理由は…

「あ…暑い…」

「人が来ないのも納得だな」

「妾には適温じやのう」

「…ずるい」

火山地帯のため当然なのだが、とにかく暑い。

さらにはマグマが宙を流れており、地面に流れているものも含めて上下のマグマに注意しながら進む必要がある。

「弓人、シア」

「どうした？ハジメ」

「新しい装備が完成したから着けてくれ」

その言葉と共に、ハジメは空間庫からブーツを2足取り出した。

「こいつは？」

『空力』を付与してある、お前なら上手く使えるだろ」

「ハジメ、ありがとね」

早速俺たちはブーツに履き替え『空力』を使ってみる。

すると、見えない足場が発生して宙に立つことができた。

「おっとと…」

「戦闘に使うなら要練習だな」

「…1発で成功しやがった」

初めて『空力』を使った時、失敗して頭から地面に突っ込んだ思いの出のあるハジメは、少し悔しそうに俺たちを見ていた。

しかしそれも一瞬で、ハジメは表情を戻し新たな装備を取り出した。

「それで、こいつは弓人用の新しい武器だ」

「武器……ていうか、これ盾じゃねえか」

取り出されたそれは、十字架の形状をした身の丈ほどの大盾であった。

その大盾の下部には、車の整備に使うジャッキの様な物が取り付けられている。

「盾のそこん所を魔物に叩きつけると、ジャッキが作動して衝撃が発生する。少し反動はあるが、お前なら問題ないだろ？」

「それは使ってみないことには何とも……こいつの名前は？」

「『ブレンネン』だ」

こうして新たな装備と共に俺たちは、静因石の採取のために深部への移動を開始した。

—————

現在、俺たちは最高記録階層である7階層まで降りていた。

道中、静因石を採取することに成功したが、どれも小指の先以下の小さなものしかなかった。

「どれもこれも、昔誰かが掘った後の残りカスだな」

「やっぱ奥まで行かないとダメか」

塵も積もれば山となると言うが、これでは時間がかかり過ぎてしまふため、俺たちは冒険者の生還報告の無い8層以降へと足を踏み入れた。

そんな俺たちを歓迎したのは、全身にマグマを纏った火の息を吐く雄牛だった。

雄牛はマグマの上に立っており、その見た目に違わず炎や熱に対する高い耐性を持っているらしい。

雄牛は俺たちを視界に入れると、咆哮と共に口から炎を吐いてきた。

「……任せて『絶禍』」

ユエが掌を向けると、重力の渦が火炎を飲み込んでいく。

そしてお返しと火炎を渦ごとぶつけるが、雄牛は応えた様子もなく姿勢を低くして突進の構えを取った。

「…… やっぱり、炎系は効かない」

「あの見た目の時点でな、交代だ。こいつの性能テストだ」

俺はブレンネンを構え前に出る。ハジメたちから異論も無さそうなので、俺は雄牛に向かって挑発的に手招きした。

すると、俺を標的として捉えた雄牛が、一直線に突撃してきた。

「せえ…のー!」

雄牛の突進に合わせブレンネンをぶつけると、ジャツキが折り畳まれ衝撃が放たれる。

その瞬間、凄まじい破碎音と共に雄牛は木っ端微塵になり、今まで感じたことのない反動が俺を襲った。

「いっつく…!」

「だから言っただろ、少し反動があるって」

「少しどころじゃねえよ、肩外れるかと思ったわ」

ハジメに文句を言いながら俺はブレンネンを改めて確認する。

全力で叩きつけたのにも関わらず傷一つ付いた様子もなく、最低でも『金剛』は付与されているようだ。

「他にも付与されてんのか?」

『衝撃変換』シアのドリユッケンにも付与したぞ」

「え?ユミトさんであの感じて… 私が使ったらバラバラになるんじゃない…」

「安心しろ、シアの方は威力控えめだ」

「俺の控えめにしろよ…!」

そんなこともありながら、俺たちは階層を進み続ける。

—————

階層を進んでいく毎に、様々な魔物が襲いかかってきた。

マグマの翼を持つコウモリの魔物

壁や地面を潜航する赤熱化したウツボの魔物

炎の針を飛ばしてくるハリネズミの魔物

マグマの舌で攻撃してくるカメレオンの魔物

宙に浮くマグマを泳ぐへビの魔物

そのどれもが火や熱に対する耐性を持っており、マグマから奇襲してくるといふ厄介さを持っていたが、一番厄介なのは進めば進むほど増していく暑さだろう。

「あ…… あづい……」

「流石に妾も暑く感じてきたのう」

「…… 暑いと思うから暑い。流れているのは唯の水…… ほら、涼しい」

全員が滝のような汗をかき、ユエに至っては現実逃避し始めているのを見て、ハジメは『錬成』で壁に簡単な横穴を作り休憩をとることを提案した。

「とりあえず休憩しよう…… このままだと致命的なミスを犯しそうだ」

「だな…… ユエ、氷塊作ってくれ」

「…… ん」

ユエに頼むと、ユエは水系の魔法を使い部屋の中心に巨大な氷塊を作り出した。

「はうあ……、生き返るう……」

「…… 天国」

氷塊に蟬のようにくっついている2人へ、ハジメは空間庫からタオルを取り出し放り投げる。

「ユエ、シア、だれるのはいいけど、汗くらいは拭いておけよ。冷えすぎると動きが鈍るからな」

「…… ん……」

「ありがとハジメ……」

間伸びした声で受け取る2人を見ると、今度は俺たちの分のタオルを取り出してくれるハジメ

「んでこれがティオの分、こっちは弓人の分な」

「おお、有難いのじゃ」

「サンキュな」

休憩するのは大事だが、ここは迷宮の中だ。

俺は手早く汗を拭き取ると、横穴の入り口付近を陣取り外の警戒をする。

ふと、涼しい風が吹きその方向を見ると、テイオが風系の魔法で俺の方に風を飛ばしていた。

「その場所じゃと、涼むこともできんじやろ？」

「悪いな」

「気にするでない、妾が好きでやってるだけじゃ」

こうして全員が涼み終わるまで、テイオの風を浴びながら外の警戒をすることにした。

||||||

三星弓人 L.V. 6

力：	G	：	2	5	3	↓	G	：	2	8	1
耐久：	G	：	2	0	0	↓	G	：	2	2	6
器用：	G	：	2	2	2	↓	G	：	2	3	5
俊敏：	G	：	2	3	5	↓	G	：	2	5	0
魔力：	H	：	1	8	0	↓	H	：	1	9	6
頑健：	E										
対魔力：	F										
千里眼：	E										
直感：	G										

||||||

70星：大火山の最終試練【上弦】

俺たちは50層ほどの場所にいる…多分

はつきりとしらない理由は、現在進行形でマグマの川を鉱石の小舟に乗り流されているからだ。

「ユミト殿…妾たちは鉱石の採取に来たはずでは？」

「ああ、決して水晶の頭蓋骨を取りに来たわけじゃないから安心しろ」
「…………ユミトは何を言ってるの？」

あのアグレッツシブな考古学者のことを考えていると、この状況を生み出した犯人であるハジメが申し訳なさそうに頭を下げてくる。

「すまん、暑さにやられて判断が鈍った俺のミスだ」

「けどハジメのおかげで静因石が大量に手に入った。だから気にすんな」

俺たちがマグマの川下りをするようになった理由は、静因石の取り方にあった。

この火山に流れているマグマは魔力を帯びているらしく、静因石の鎮静効果によって不自然な流れ方をしていた。

それに気づいたハジメは、マグマの流れが強く抑制されている場所を探し出し、大量の静因石の確保に成功した。

しかし、そこにあつた静因石が無くなるという言うことは、そこを抑えていたものが無くなるという訳なため、大量のマグマが噴き出してきた。

咄嗟の判断で、鉱石の小舟を作り。全員が小船に乗り込んだ辺りでマグマの川下りが始まり、現在に至るといふ訳だ。

「あつ、ハジメ。またトンネルだよ」

「そろそろ麓辺りじゃ、何かあるかもしれんおう」

シアが指差す方角を見ると、マグマの川が壁に開いた大穴へと続いていた。

現在に至るまで、下層へ落ちるたびにトンネルへと入っているため、階段を利用するよりショートカットになるはずだ。

テイオの忠告に頷き、俺たちは大穴へと入っていく。しばらく緩やかな流れに乗っていると、次第に速度が上がっていく。

川の先を急いで確認すると、斜面が段々と急になっていき最終的には滝のようになっていっているのが確認できた。

「……テイオ、手伝って！」

「任された！全員どこかに捕まっておれ！」

そしてついに、俺たちが乗っている小舟が滝へと投げ飛ばされそうになった瞬間

「『来翔』！」

テイオとユエ、2人同時に発動する風系の魔法がひっくり返りそうになっている小舟を支え、緩やかに落下していく。

2人に礼をしようとした所に、大量の気配と風を切る音がこちらに近づいて来るのを探知した。

「弓人！」

「分かってる！反対側は任せろ！」

「ハジメ！私はどうすれば良い？」

「シアは魔法の維持で動けない2人を守ってやってくれ！」

「分かった！」

そして俺たちに襲いかかって来た奴らは、マグマの翼を持つコウモリ……その群れであった。

こいつらは1匹自体の強さはそこまでなのだが、とにかく数が多い。

コウモリの群れは見事な統率力により、まるで黒い龍となって俺たちに襲いかかって来た。

普通であればその物量に吞まれ全滅は必至だが、生憎俺たちは普通ではない。

『放たれしは必中、我が矢の届かぬ獣はあらず』

「オ里昂・オルコス」

前方から襲いかかってくる群れに対し、テイオの翼を貫いた時に使った大矢を取り出し【魔法】を放つ。

放たれた白く輝く矢は、前方の群れを尽く貫き絶命させる。

「こつちも負けてられねえな！」

ハジメは後方から襲いかかってくる群れに対し、メツエライを腰だめに構えトリガーを引く。

独特な発射音とともに弾幕が張られ、コウモリの群れを1匹逃さず粉碎していった。

「うむ… あの2人の殲滅力には目を見張るものがあるのう」

「流石ハジメー！」

「…… ユミトもお疲れ」

コウモリの群れを全滅し終わった辺りで、落下していた小舟もマグマの川に無事着地でき、この川下りも終わりが見えて来た。

そこは、巨大なマグマ溜まりの空間だった。

直径にすると3キロほどはあるだろうか、地面はマグマに満たされておりマグマの海と言っても過言ではない。

中心部分には10メートルほど迫り上がった岩の小島があり、マグマのドームが覆っているため、俺たちの視線はそこへ注がれた。

「…… あそこが住処？」

「恐らくな… だとすると、最終試練もあるはずだ」

警戒しながら中央の島へ近づいていくと

『それ』は襲いかかって来た。

「むっ!? 任せよー！」

咄嗟にティオが魔法で防御したお陰で、俺は襲ってきた正体を確認することができた。

『それ』は宙に浮いていたマグマだった。

マグマは弾丸のような速度で降り注いできており、このままだとこの小舟で立ち往生する羽目になりそうだ。

「全員近くの足場へ散開しろー！」

蜘蛛の子を散らすように小舟から離れると、俺たちが乗っていた小舟はマグマの豪雨に吞まれ沈んでいった。

別々の足場へ着地した俺たちに対して、マグマの豪雨は絶えず襲ってくる。

各々対処していると、ハジメが『空力』を使い中心の島へと近づこうとした。

そんなハジメに対して、マグマの海からマグマで作られた巨大な蛇が現れ、ハジメを飲み込まんかと襲いかかった。

「弓人旋空」

その瞬間、蛇の首から上が不可視の斬撃により斬り飛ばされた。

それにより、ハジメは蛇からの強襲を回避でき俺のいる足場へと着地することに成功した。

「助かった！」

「礼は後だ！まずはこいつらをやるぞ！」

斬り飛ばした蛇は、その巨軀をマグマに沈めたと思った瞬間、何事もなかったかのようにその姿を俺たちの前に現した。

さらに蛇は、その数を増やし俺たちの前には10匹ほど現れ睨みつけて来た。

「さてと、こいつらの弱点分かるか？」

「多分オアシスの奴と同じタイプだと思うが… マグマが邪魔で核が見えねえ」

「全身を吹き飛ばすか、運良く核を壊すか… か」

俺は旋空を鞘に収め、ブレンネンを構える。他のメンバーもハジメからの『念話』で聞き各々構える。

こうして【グリューエン大火山】最後の試練が俺たちに襲いかかって来た。

そこにいる1人の悪意に、俺たちはまだ気づいていない。

70星：大火山の最終試練【下弦】

「久しぶりの一撃じゃ！存分に味わうが良い！」

テイオは自身の背中に翼を生やし飛び立つと、いつぞやのブレスを想起させる黒い極光を蛇たちに向けて放った。

放たれた光は、正面に迫っていた蛇を消し飛ばすと薙ぎ払うように次々と蛇を襲って行き、最終的に8匹の蛇を消滅させた。

しかしそれで終わるほど【七大迷宮】は甘くない。

消滅したと思われた8匹の蛇は、まるで再生したかのように再び俺たちの前に現れた。さらに蛇はその数を増やし、今では20匹に至る数がこの空間に存在している。

「なんと!?魔石を1つも砕けなかったか…！」

「いや、砕けた瞬間は確認できた。ただ倒すだけがクリア条件じゃないのか？」

【千里眼】によって強化されている動体視力で、一瞬露わになった魔石が砕かれた瞬間は確かに確認できた。

ハジメも見ていたらしく、同じく訝しげに蛇たちを見ていて何かを発見したシアが声を上げた。

「皆さん！岩壁が光ってます！」

シアが指差す場所を見ると、小島の壁面にオレンジの輝きをした鉱石が貼り付けられていた。

その数は8、テイオが消し飛ばした蛇の数と同じだ。

「偶然…にしちゃ出来過ぎだな」

「…石の数は…100くらい？」

つまりこの試練は、100体の蛇を倒すことだろう。

言葉にするだけなら単純だ。だがこの熱気で、不安定な足場で100体を相手にするとなるとかなりの精神力と集中力が必要となるだろう。

しかし、次の瞬間放たれたシアの言葉に少女たちの士気が跳ね上がることとなる。

「ハジメー！この試練で頑張ったらデートね！」

「はあ!？」

ハジメの言葉を聞くより先に飛び出していくシア、正面にいる蛇の額に向けてドリユツケンを叩きつけた。

『重力魔法』で加速され、『衝撃変換』により更なる破壊力を手に入れた一撃は蛇の魔石を簡単に砕き爆散させた。

「くそ……シアのやつ勝手に決めやがって」

「愛されてて良いじゃねえの……って、どうしたユエ？」

ハジメに軽口を叩いていると、ユエが近づき服の袖を引っ張ってきた。

「……………私もユミトとデート」

「……分かった、今度は2人きりでな」

「……………ん！」

デートの約束を取り付けたユエは、頬を緩ませ『雷龍』を連続で発動する。

現れた雷の龍は7体、それぞれ別の蛇を飲み込みその魔石を焼き払い消滅させた。

「さてと、女の子に任せっきりなのは性に合わないから……いくか」
「ああ」

こうして俺も戦いに参加するため飛び出す。ここに来るまでに『空力』の練度も高まったため、空中へ難なく着地した。

そんな俺に襲い掛かってきた蛇は4匹、四方から飲み込まんと襲い掛かってくる蛇たちを、俺は上に跳び回避する。

その瞬間、蛇たちはぶつかり合いその姿が潰れて1つに混ざっていく。そして混ざったマグマ溜まりから現れた巨大な蛇は、再び俺を飲み込まんと口を開き下から襲い掛かってくる。

「せえええの!!!」

俺が蛇の方向を全力で振り抜いた瞬間、ブレンネンは見えないものにぶつかり真下へ衝撃波を発生させた。

今、俺が行ったのは『空力』で作り出した足場に向けてブレンネンを叩きつけ衝撃波を発生させるというものだ。

そして俺を襲っていた巨大な蛇は衝撃波の圧力に潰され、その巨体を爆散させた。

「いってえええ！おいハジメ！こいつの出力もう少し落としてくれ！」

「分かったよ！……流石にドリユッケンの10倍はやりすぎたか」
今、聞き逃せない部分があった気がするが、今は攻略が先だ。

各々が得意とする方法で1匹、また1匹と蛇は屠られ岸壁の鉱石が輝き出す。

恐らくこの【グリユーエン大火山】で冒険者たちに求められるものは『あらゆる状況でも冷静に対処できる集中力』だろう。

このコンセプトを考えた解放者には申し訳ないが、俺たちに対してその思惑から外れてしまっていた。

テイオの放つブレスが、蛇たちを薙ぎ払うように消し飛ばし、残り8匹となる。

シアの振るうドリユッケンが蛇の魔石を砕き、残り6匹となる。
ユエが発動した魔法により、蛇に食らいつき焼き払っていき、残り

3匹となる。

俺が旋空を振るい、不可視の斬撃が蛇を切り伏せ、残り1匹となった。

「これで終わりだ」

そしてハジメがドンナーにより最後の蛇を撃ち抜こうとした瞬間
ハジメの頭上から極光が降り注ぎ、蛇ごとハジメを飲み込んだ。

「ハジメエエエエエエ!!!」

シアは悲鳴のような叫びを上げ、限界まで上げた身体強化を使いハジメへ跳ぶ。そして彼女が抱き抱えたハジメは、ボロボロの姿で辛うじて生きていると言っているいい姿だった。

「ハジメ！しっかりして！ハジメエー！」

「神水を飲ませろ！」

涙を浮かべ、何度も声をかけるシアへそう指示すると、彼女は大慌てで神水を取り出しハジメに飲ませる。

ほぼ無意識であるが神水を飲んだことで、傷の修復が始まるがまる

で何かが抵抗しているかの様に治りが遅い。

「……………あの時のユミトと同じ」

「毒か… それより警戒しろ！いつさっきのが来るかもしれねえ！」

ハジメの介抱をシアに任せ、俺たちは極光が襲い掛かってきても良い様に周囲を警戒する。

そして、再び頭上から極光が襲い掛かってきた。

「上からだ！2人とも防御魔法を頼む！」

「……………ん！」

「分かったのじゃ！」

『聖絶』

『嵐空』

俺が飛び出してブレンネンを構えると、2人によって光のドームと風の壁が大盾を覆う。そして降り注ぐ極光とブレンネンが正面から衝突した。

「ぐ……………うおおおおおおお!!!」

重い衝撃が襲いかかってくるが、ユエとテイオと共に作った3重防御により極光を防ぐことに成功した。背後にいるシアは今にも飛び出さんとしていたが、テイオが諫めたお陰もあり極光が収まるまでの間、被害を出すことなく守ることができた。

「……………ユミト、大丈夫？」

「ああ、ユエたちのおかげでな… それより！さっきから姿を見せずになちまちまと撃ちやがって！随分臆病者のようだなあ！」

「……………安い挑発だ。しかし、それに乗るのも一興か」

わざとらしく大声で挑発すると、突如何もなかった場所から何かの羽ばたく音がしてきた。

俺たちはその方角を見ると、そこには純白の竜に乗った赤髪褐色肌の魔族の男がそこにいた。

71星：一時の別れ

「お前か… 俺たちを攻撃してきたのは」

「貴様等の力は私たちにとって看過できない… 特にその男」

そう尋ねると、魔人族の男はハジメを忌々しげに睨みながら答える。

男の背後には先ほどまで存在しなかった小型の翼竜が白竜の周りを飛び回っており、白竜同様この魔人族の男が従えているようだ。

「白竜の一撃を受けて原型を留めているその強靱さ、私たちが知り得ない武器… 貴様等もだ。灰竜の総攻撃を受け止めるとは何者だ？ いくつの神代魔法を修得している？」

魔人族の男は、その黄金の瞳を細め睨みつける様に俺たちに質問してくる。

当然答える気は無いため、その言葉を無視して周囲を確認していると、中央の島にあったマグマのドームが無くなって、正方形の黒い部屋が出現しており、恐らくあそこで神代魔法を手に入れることが出来るのだろう。

「ユエとシアは、ハジメを連れてあの部屋に行け」

「な、何故ですか!?! 私たちも戦います!」

「冷静になれ、この状況での最悪を考えろ」

この状況下での最悪は、ハジメが死ぬことだ。

神水の回復が上回っているお陰で、時間が経てば傷も完治するだろう。しかし、それを待っている間、この足場の少ない環境でハジメを守り続けるのは中々に厳しい。

「見たところ、あの部屋は耐久面には期待できそうだ。だからあの場所ではジメを休めるんだ」

「… それならシアとハジメだけで良いはず」

「ユエも行って欲しいのはあの場所で貰えるはずの神代魔法で強化して欲しいからだ」

こここの神代魔法がどの様なものは分からない、しかしどの様な魔法

であれ強力なものには違いないだろう。

「ユエは神代魔法を手に入れてから戻ってきて欲しい、あとあの部屋が安全だと決まった訳じゃないからな……その時にハジメを守ってやってくれ」

「……ん、すぐに戻る」

「という事でティオ。悪いが『竜化』して俺を乗せてくれ」

「気にするでない……妾もあの若造に真の竜を教えてやりたかったのでの！」

その瞬間、ティオの姿が変わっていく。

白い肌に黒い鱗が生え、次第に全身に広がっていく。

背中から翼が生え、その体を大きなものへと変化させる。

そして妖艶な女性の姿から、巨大な黒竜へとその姿を変えた。

「黒竜だど!?やはり貴様等はここで殺しておくべき存在！」

「ストック解放！解放数2！2節詠唱破棄！」

「【オリオン・オルコス】」

ティオの正体を知り、驚愕した魔人族の男は魔法の詠唱を始めた。その手には複雑怪奇な魔法陣が描かれた布を持っており、それを危険と判断した俺は迷わずストックを消費して【オリオン・オルコス】を発動した。

一閃

白く輝く矢は魔人族の男を射抜かんと放たれるが、男が従えていた翼竜たちがその身を盾にし始めた。その結果、矢は男へ届く前に勢いを失い、その輝きを失ってしまう。

「ちっ……」

「見せてやろう！私が手にした新たな力を！『界穿』！」

「っ！皆さん後ろです！」

その瞬間、白竜と共に魔人族の男はその姿を消した。

そのことに驚愕するのも束の間、叫びながら警告するシアの声を聞き反射的に後ろを向くと、大口を開け膨大な魔力を集約させた白龍がそこにはいた。

「……『聖せ』「待つのはじゃユエ殿！ここは妾に任せよ！」

咄嗟に防御魔法を発動させようとするユエを止め、テイオはその口に魔力を込める。

その直後、純白の極光と漆黒の極光がぶつかり合い。轟音と共にこの空間を揺るがせた。

白竜のブレスはテイオのブレスと拮抗している様で、その衝撃により誰一人動けないでいたため。俺はその隙を使い、切り札の詠唱を開始した。

『我が宿命、月女神に請い願う。』

『肉体に剛力を、精神に冷徹を。』

『そして我が運命をここに定めよう。』

『其は、女神の無垢な加護。』

『アルテミス・アグノス』

詠唱を完了した瞬間、淡い光が俺の体を包み込んだ。

全身から力が漲り、灼熱の空間にいるにも関わらず脳がどこまでも冷静に冴え渡った。

白竜とテイオの拮抗していたブレス勝負が終わった瞬間、俺は『空力』を使い未だ変化に気づいていない魔族の男へと跳躍した。

「ぬうう、まさか竜人族の生き残りがいたとは…仕方あるまい、少々危険だがこの【空間魔法】で」

「なるほど、その力は【空間魔法】だったか」

「なっ…！ いつの間に!?!」

テイオの存在を認知していなかったのか、忌々しげに新たな魔法陣が描かれた布を取り出した男は再び詠唱を開始しようとする。

しかしそれは、目の前にまで近づいた俺のブレンネンによる一撃で中断されることとなる。

「くっ…！ があああ!?!」

「今だ！ 行けえええ!!」

男は障壁で防御をしてくるが、ブレンネンを障壁に叩きつけた瞬間、ジャツキが折れたたまれ発生した衝撃により、障壁を簡単に破壊して男を吹き飛ばした。

ブレンネンの反動により腕が痺れるが、それを無視して下にいるユ

エたちへ叫ぶ。

俺の声を聞いたユエたちはハジメを連れて、中心の島へと移動を開始した。

それを確認していると、主では無い存在が乗っていたことに気づいた白竜が暴れ始め振り落とされてしまう。なんとか体制を立て直そうと『空力』を使おうとした瞬間、飛翔してきたティオが近づいて来てくれたため、体の向きを変えティオの背に乗ることに成功した。

「ユミト殿！大丈夫か!？」

「助かった、このまま一気に行くぞ！」

「任せよ！」

ティオはその身を翻し、魔族の男がいる方向を向く。

男の方も白竜の背に着地しておりその黄金の瞳で俺たちを見据えていた。

「神代の力を使ってなおここまで追い詰められるとは、あの一撃は貴様にぶつけるべきだったか…。」

「安心しろ、仮に俺が狙われてたとしても…そんな時はハジメにやらせてただろうよ」

「減らず口を…」

挑発的に言葉を返しながら、俺たちは互いに警戒する。

すると、『念話』によりユエから嬉しい報告が届いた。

『………… ユミト、ハジメが目を覚ました』

『それは本当か!』

『悪い、迷惑をかけた』

『そんなもん欠片も感じてねえよ!』

親友が無事だったことに、思わず頬が緩んでしまう。

しかし今は戦闘中、即座に切り替え男との決着をつけようとした瞬間、男は何か決意をした様に小鳥の魔物を呼び出し何かを伝えた。

その直後、地響きと共にマグマが荒れ狂い始めた。

「なっ!?!お前…何をした!?!」

「要石だ、この【グリュウエン大火山】は活火山なのにも関わらず噴火した記録がない。それはつまり、地下のマグマ溜まりからの噴出をコ

ントロールしている要因があるということ」

「それが要石か… まさか!？」

「その通り、業腹だがそれを破壊させてもらった… 冥土の土産に我が名を教えてやろう！我が名はフリード・バグアー！貴様等はこの大迷宮もろとも朽ち果てるが良い！」

男… フリードはその言葉と共に首にぶら下げたペンダントを掲げると、天井にヒビが入り地上までの直通の穴が作られた。

フリードはもう一度俺たちを睨みつけると、白竜へ指示し天井の通路へと消えていった。

「行かせるものか！」

「待て！ハジメたちの方が先だ！」

「す、すまぬ！分かったのじゃ！」

フリードを追いかけようとするテイオを止め、ハジメたちのいる場所へ移動しようとしたところ、再びハジメから『念話』が届いた。

『焦っている様だが何があった!』

「お前らこの振動を感じてないのか!？」

『振動どころか音一つ入って来ない!だから外の状況が何一つ分からねえ!』

どうやらあの部屋の性能は、俺の想像を超えるものだったらしい。俺は今の状況を手短かに説明すると、ハジメは少し考えた後ある決断をした。

『… ユエー…いつを弓人の所に飛ばしてくれ!』

『… ん、ユミト… 受け取って。『界穿』』

その瞬間、俺の目の前が歪み空間庫の指輪と懐中時計の様なものが見えた。

「…いつは… さっきの男が使ったやつか!』

『… 『空間魔法』この迷宮で手に入った神代魔法』

【空間魔法】… どうやらあの男もここで手に入れていたらしい。

俺は指輪と懐中時計を受け取った後、ハジメの狙いを理解したため確認のため問いかけた。

「ハジメ… そういうことなんだな?」

『ああ、弓人はティオと一緒にアンカジへ先に戻ってくれ』
「な!?見捨てることなどできる訳ないじゃろ!」

ハジメの言葉にティオが反発する。

確かにハジメの言葉をそのまま受け取ると、俺たちだけ生き残ってハジメたちを切り捨てると言っているようなものであった。

「落ち着けティオ」

「ユミト殿!これが落ち着いていられるか!」

「良いから落ち着け、何もハジメは無駄死にするっていった訳じゃない... 恐らく『あれ』で脱出するつもりだ」

『あれ』じゃと!?じゃが『あれ』はまだ試運転もしておらぬはずじゃ!」

確かに『あれ』はぶつつけ本番で使うのは賭けだ。

だが今は時間がないため、その案で動くしか無かった。

「ティオ... お前のその優しさは美点だ。だが今はハジメたちを信じるんだ」

「信じる...」

「そうだ。仲間ならその言葉を信じろ」

「... 分かったのじゃ!ハジメ殿!ユエ殿!シア殿!必ずまた会おうぞ!」

『頼んだぞ... それと香織さんとミュウに伝言だ。『また会おう』』
「必ず伝える!だから死ぬんじゃねえぞ!」

こうして俺たちは、一時的に別れることとなる。

しかし悲しさは少しも感じない、なぜならすぐに再開できると確信しているからだ。

|||||

三星弓人 Lv. 6

力 :	G	:	2	8	1	↓	F	:	3	1	2
耐久 :	G	:	2	2	6	↓	G	:	2	5	3
器用 :	G	:	2	3	5	↓	G	:	2	4	7
俊敏 :	G	:	2	5	0	↓	G	:	2	7	4
魔力 :	H	:	1	9	6	↓	G	:	2	1	3

72星：アンカジ公国への帰還

ここは、「アンカジ公国」と「グリュエン大火山」の中間に当たる位置。

現在上空にて、黒竜となっているティオの背に乗り、俺はアンカジ公国へと移動を続けていた。

ハジメから預かった懐中時計の蓋を開くと、そこにはデジタル数字で『25・32』と表示されており、しばらくすると『25・31』に変化した。

「恐らくこの数字がタイムリミットなんだと思う。まあ丸1日残っているから問題ないだろ」

「うむ…しかし後1日しかないとも言える。ユミト殿、少し速度を…っ」

ティオが速度を上げようとした瞬間、表情を歪ませ高度を落としてしまう。

「ティオ！大丈夫か!？」

「す、すまぬ！どうやら少し疲れてしまったの！なあに、もう大丈夫じゃー！」

その言葉は、どう考えても強がりだ。

「グリュエン大火山」から脱出する時、フリードがダメ押しと言わんばかりに呼び出した翼竜との戦闘があった。

ティオの体は、その際翼竜から放たれたブレスにより傷つき、鱗は焼け焦げ血が滲んでいた。

「ティオ、一度降りて傷の手当てをするぞ」

「もしや心配してくれるのか？ユミト殿は優しいのう」

「いいから降りろ」

有無を言わせない勢いで指示すると、ティオは観念したのかゆっくりと高度を落とし始める。

そして着地し人型に戻ったティオは、肩で息をしており満身創痍そのものだった。

「強がつてんじやねえよ。ほら、手当てするからこいつに座れ」
「すまぬ… どうやら翼竜のプレスにも毒があつたようじや」

空間庫から椅子を取り出し座る様に言うと、ティオは悔しそうな表情ではあるが素直に座った。

その後、神水を飲ませ体の血を拭いてやっている。ティオは自身の思っていたことをこぼし始めた。

「妾は勘違いしておった… ハジメ殿とユミト殿なら、何があつても大丈夫じやと…」

「……」

「しかし今回のことで痛いほど理解した… 傷つく事もあれば少しの油断で死んでしまうと… じゃから、妾が守らねば…」

「馬鹿言うな」

「いたあ!？」

表情を暗くして後悔した様に吐き出すティオに対して、俺は強めのチョップをティオの額に叩き込んだ。

痛みと共に顔を上げるティオの顔をしっかりと見て、1つ問いかけた。

「お前、自分が年長者だからしっかりしないとでも思ってたんlaro？」

「うっ… そ、それは」

「悪いが俺は一度もお前を目上に見たことない」

「ユ、ユミト殿！それは酷いのじや！」

「そして一度も下に見たこともない」

その言葉に、ティオは驚き固まった。

俺はその変化を気にすることなく話し続ける。

「お前が俺のことをどう見ているかは知らん。けど俺はずっと対等だと思ってる」

「対等…」

「傷ついたり少しの油断で死ぬことがある… けど、それはお前もだろ？」

「しかし… 誇り高き竜人族である妾が甘えるわけには」

「そんなもん俺は知らん。生きてるなら… 嬉しい時もあれば辛い時

もある…。だから辛い時は大丈夫なんて言わず、辛いつてちゃんと言え」

「ユミト殿…」

こいつは、自分だけ生き残ってからずっと我慢していたのだろう。テイオの目的が達成された時、その時が俺たちは別れるのだろう。ならその間くらい、こいつには我慢せずいて貰いたい。

「……ユミト殿、そういうところじゃぞ」

「なんだそれ？」

よく分からないことを言ってきたが、まあ気にしなくて良いだろう。

その後、神水によって体力の回復したテイオの背に乗り、アンカジ公国への移動を再開した。

そしてアンカジ公国に到着した所、恐らく監視塔から報告を受けていたのだろう香織が俺たちの方へと駆けてきた。

「弓人くん！テイオさん！」

「香織か、色々説明することがあるがまずは静因石での治療が先だ」

「それは兵士さんに渡せば良いから！二人の治療が先！」

その言葉を聞き、兵士たちが運搬のため近づいてくる。

そのため、テイオの治療を先にして貰い俺は空間庫から採取した静因石を取り出し渡ししていく。

「こんな毒素見たことない…。ごめんなさい、私じゃあ浄化できない…。」

「心配するでない、妾は神水を飲んでおるから次第に治る」

「そっか…。じゃあ次は弓人くんって何これ!？」

テイオから離れ診断を始めた香織は、俺の状態に血相を変えた。

「全身の筋繊維がボロボロな上に、左腕の腱が切れて骨にヒビが入ってる…。」

「な!?!ユミト殿!?!どういうことじゃ!?!」

「筋繊維がボロボロなのは【魔法】の反動だ。左腕は…。多分ブレンネンのせいだろうな」

ここへ移動している間、左腕に鈍い痛みがあったがかなりダメージを負っていた様だ。

「すぐに回復するから！」

「ユミト殿……対等なら妾を頼ったも……」

「……悪い、俺も人のこと言えないな」

その言葉に、2人は困った様に笑いかけてきた。

そして俺は、ハジメたちのことを説明するため落ち着いて話せる場所に移動することにした。

—————

「それじゃあ、ハジメくんは……」

「ああ、遅れてだが必ず戻ってくるはずだ」

事の顛末を聞き、香織は顔を青ざめ裾を握りしめている。

想い人とまた離れ離れになると考えてしまうのは、仕方ない事だろう。

「香織、ハジメから伝言を預かってる『また会おう』だよ」

「……え？それだけ？」

「正確には、香織とミュウちゃんに対してだけだな」

死ぬかもしれない状況にも関わらず、どこまでも軽い言葉に呆け、その後吹き出してしまった。

「ふふ……うん、ハジメくんならきつと大丈夫だよね」

「当たり前だ。シアに……そして何よりユエが一緒にいるんだ」

「そうだね、だから私は……今私のできることをするね」

「とりあえず国民の治療が完了するまでは滞在しよう。もしそれまでに帰って来なかったら……その時は探しに行くぞ」

「分かった。ミュウちゃんには私から伝えておくね」

そして、香織は治療のため治療施設に戻り。テイオは疲れを癒すために用意された部屋へ移動し始めた。

そして俺は、椅子に座ったまま迷宮での戦いを思い出していた。

あの時、ハジメが負傷したのは警戒を怠った俺のせいだ。

フリードを逃したのも、接近できた時に殺せなかったからだ

俺の『心の弱さ』が、今回のことを引き起こしたんだ

「思い出せ、覚悟は『あの日』にしただろ。」

躊躇うな、一瞬でも躊躇うと仲間を失うぞ

決めただろ、仲間を守るためこの手を血に染めると

例えそれが、仲間から拒絶されたとしても

仲間を脅かす敵は、必ず殺せ

73星：エリセンにて再会

アンカジ公国に帰還して3日経過した辺りで、国民の治療で香織が居なくても問題ない状態となったが、その間にハジメたちが帰ってくることは無かった。

「ミュウちゃん。迷子のパパを探しに行こうか」

「パパを？うん！探しに行くの！」

「けど弓人くん、ハジメくんがどこにいるのか分かるの？」

香織からの質問に、俺はタイムリミットが表示されていた懐中時計を開けリユーズを押し込む。すると、懐中時計の文字盤がソナーの画面の様になりある1点が光り始めた。

「それは？」

「ハジメから渡された物だ。恐らくこの光っている場所にハジメがいる」

「ほんとに!?じゃあすぐに行こう！」

「待て待て。ティオ、地図とコンパスを持ってきてくれないか？」

今すぐに飛び出そうとする香織を落ち着かせ、ティオに持ってきてもらった地図を広げコンパスと懐中時計を並べる。

「ここがアンカジ公国、つまり俺たちのいる場所だ。そして光が示している場所は… 大体ここら辺だな」

「けどここって…」

俺が指差した場所は、「グリュエーエン大火山」から離れミュウちゃんの家郷である「エリセン」近くの海域であった。

「恐らくじゃが、溶岩によってそこまで流されたのじやろう」

「一番良いのは水中… 最悪なのは地中にあることだな」

水中なら水深次第で潜ればいいが、地中にいられると合流すること自体が難しい。だが何はともあれ俺たちは光が指し示す場所へと向かうことにした。

その際、ビイズから感謝として大金を渡され何かあった際力になるため是非頼ってほしいと言われた。

「もー！ミユウを忘れてお家に行くなんてパパはしかたないの！」

「そうだねー、ハジメくんは仕方ないねー」

「けどテイオお姉ちゃんとっても早いの！」

「はっはっはっ、嬉しいことを言ってくれるのう。落ちぬよう気をつけるのじゃぞ」

「はーいなの！」

現在俺たちは、テイオの背に乗り【エリセン】へと向かっていた。

その理由は当初予定していた場所へと向かっている時、地図と懐中時計と睨み合っていると光が徐々に【エリセン】へ向かっていることに気づいたからだ。

「ストップだテイオ。この下にエリセンがある」

「分かったのじゃ、このまま降りるのか？」

「…いや、少し離れた場所から高度を落とそう」

流石に黒竜状態のテイオがこのまま降りると大騒ぎになるため、適当な場所で小舟を出して近づいた方が良さだろう。

「だからミユウちゃん、もうちよつとだけ我慢な…って香織。ミユウちゃんは？」

「え？ミユウちゃんならここに…ってあれ？どこに隠れたんだろ…」

すぐに見つかるだろうとミユウちゃんを探していると、突如テイオが驚愕の叫びを上げた。そして俺と香織はテイオが見ていた方を見ると…

「パパー！」

大の字で落下していくミユウちゃんがいた。

「ミユウちゃああああああん!？」

「まさかハジメ殿がいるから大丈夫だと思つて…いやいくらなんでもお転婆すぎるのじゃ!？」

「良いからテイオ急いで降りろ!…って香織？なんで俺の肩を掴むんだ?」

「弓人くんも飛び降りてミユウちゃんを助けてあげて！」

その言葉に俺は耳を疑った。香織の顔をよく見ると目の中に渦が巻いており、完全に暴走していた。

「いや待って待って待って！この高さで水面に叩きつけられたら大怪我じゃすまねえよー！」

「大丈夫！生きてたら私が治すから！だから早く！」

「いや！ちよ……すごい力だ！」

「鳥になってきて！弓人くん！」

「畜生！やってやろうじゃねえかよこの野郎！」

どこから出てきているのか分からない力で投げ飛ばされた俺は、腹を括りミュウちゃんを助けるべく姿勢をまつすぐにして落下していく。

「ミュウちゃん！こつちに！」

「あ、おじちゃん！はいなの！」

どうにかして近づくことに成功した俺はミュウちゃんに手を伸ばし叫ぶ。

当のミュウちゃんは、全く怖くないのか何気ない様子で伸ばした手を握ってきた。

そしてミュウちゃんを抱き寄せた俺は、全力でハジメたちが外に出ていることを祈りながら落下を続けた。

—————

【グリユーエン大火山】から脱出……いや、マグマに流されて海へ投げ出されたハジメたちは現在、ミュウの故郷である【エリセン】の港の棧橋にて海人族と人間の兵士たちに囲まれていた。

「だから話を聞いてくれ、俺たちはその攫われた『ミュウ』を連れてくる依頼を受けたんだ」

「エリセンの管轄内に無断で侵入したうえに、自警団の者たちを襲った言い訳にしては無理があるぞー！」

「そうだ！どうせお前たちがあの子を攫ったんだろ！」

聞く耳を持たないとはこの事だろう。今回脱出に利用した『潜水艇』はトータスの人にとっては未知そのもの、警戒することは当然とも言える。

しかし一方的に決めつけ、拘束してこようとしてくることにハジメも苛立ちを覚えてしまった。

「だから！あんたらの管轄内に入ったのには理由があるし、あいつらに至っては話をする前に攻撃してきたんだから正当防衛だ！」

「——メー」

「しかし事がはつきりするまでは大人しくしてもらおう、抵抗するなんて考えるなよ」

「——ジメー」

「うん？なんか聞こえてこないか？」

ハジメの言葉に、海人族や人間の兵士たちは気を逸らすつもりかと更に睨みを強くするが。次第に大きくなってくる『人の声』に気づき、全員で声の主を探し周囲を確認し始める。

「……ユミト？」

空を見上げて呟いたユエの言葉に、ハジメとシアも思わず空を見上げ……そして固まった。

そこには

「ハジメエエエエエエエエ!!! ミュウちゃんを頼むううううう!!!」

「パパー！」

ミュウを抱きしめて絶叫する弓人と、ハジメに向けて手を振るミュウがここに向かって落下していた。

宇宙を背負っていた2人だが、弓人の言葉にハジメは即座に反応して『空力』と『縮地』を使いミュウの下へと駆け上がっていき、弓人に受け渡されるようにミュウを抱きしめた。

そして弓人は、落下の勢いそのまま棧橋へぶつかり砂場でもないのに何故か土煙が大きく舞い上がる。

この場にいる全員が見つめる中、土煙が治まった場所には片膝と右手を地面に置く……いわゆる3点着地をした弓人がそこにはいた。

74星：母と娘【上弦】

エリセンの港の棧橋、現在ここには多くの人間がいるにも関わらず静まり返っていた。

理由は攫われて行方不明になっていた少女が空から降ってきたり、少女と共に降ってきた男が膝に悪そうだが何故か真似したくなる着地をした事が挙げられるが、現在の空気に吞まれてしまったからだろう。

「ひっぐ、ぐすつ、ごめんなしい・・・」

「もうあんな危ない事しないって約束できるか？」

「うん・・・ やくそくしゆる」

「ならよし、ほらおいで」

「パパー！」

視線を合わせ、説教する白髪の子。そして男を『パパ』と呼び、抱きつく少女は誰が見ても親子そのものだった。しかしそんな心温まる場面を霧散させる場面が隣で発生していた。

「………… カオリ」

「あの… えっと… そのお」

「………… 下手したらユミトが死んじゃったよね？」

「………… はい、ごめんなさい」

「………… それを言うのは私にじゃないよね？」

金髪の少女から淡々と放たれる言葉に、黒竜と共に降りてきた少女は顔を青く染め滝のような汗を流す。その場面を周囲の者たちは自分が悪い訳では無いのに自分が怒られてるように感じ始めていた。

「ユ、ユエさん？俺は気にしてないから… な？」

「ユエ殿、今回の件は妾も悪いのじゃ… じゃからカオリ殿だけを責めるのは…」

「………… 2人は黙ってて」

「はい」

助け舟も金髪の少女の一言で即座に沈没する。

問い詰められた黒髪の少女が周囲に救いを求める視線を向けるが、全員が視線を逸らしたり憐憫の感情と共に首を横に振った。

「……どこ見てるの?」

「すみません……」

「……だから、それを言うのは私にじゃないよね?」

その後、黒髪の少女が泣きそうになりながら男に謝罪するまでこの空気は続いた。

ちなみに、白髪の少年が黒髪の少女を、黒髪の少年が金髪の少女を抱きしめて頭を撫でると、先ほどの事などなかったかのように機嫌を良くしていた。

「ユミト殿、靴の『空力』使えば安全に着地できたのでは?」

「……あつ」

「……ユミト、正座」

「はい」

「金ランク、さらにはフューレン支部長の指名依頼とは……」

「これで信じて貰えるか?」

「先ほどの無礼を謝罪する。南雲殿」

「疑いが晴れたならそれで良いさ」

ハジメの指輪を返却すると、ハジメは空間庫からイルワの依頼者と事の経緯が書かれた手紙を取り出し兵士の隊長へ渡す。

隊長は最初疑っていたが手紙が本物だと分かり、周りの兵士へ武器を下げるよう指示した後頭を下げた。

「とりあえず聞きたいことは多いと思うが、先にこの子を親に合わせたい」

「その意見には私も同意する。しかし……あの船のことや竜のことは王国騎士として看過できない」

「それなら、俺たちはしばらくエリセンに滞在するつもりだ。だから後日そっちに向かう」

「分かった、私たちはあの建物にいるから落ち着いたらきてくれ。そ

の子を親の元へ連れて行ってやってくれ」

その言葉を残して、隊長は野次馬をちらし兵士と共に離れていった。

そんな中、ミュウちゃんはハジメの手を取り引つ張り始める。

「パパ！こつちななの！早くママのいるお家に行くの！」

「分かった分かった」

急かすミュウちゃんに引つ張られながらミュウちゃんの家へと向かう。

ミュウちゃんにとっては2ヶ月ぶりの我が家と母親だ。

ハジメから聞いたのだが昼間は俺たちが構っていたお陰で笑顔だったが夜は恋しかったようで昼間以上に甘えん坊になっていたようだ。

「そういや弓人、体は大丈夫か？俺現実でスーパーヒーロー着地なんて初めて見たぞ」

「それが不思議なんだが無事なんだよな。そういや『頑健』のランク上がってたな… スゴいね人体」

「いや、凄いですむレベルじゃねえだろ」

そんな会話をしていると、通りの先でなにやら騒ぎがあった。

視線を向けると、若い海人族の女性が壁伝いで歩こうとしており、彼女の友人であろう人たちが必死に止めていた。

「レミアちゃん！そんな足じゃ無理よ！」

「そうだぞ！ミュウちゃんは俺たちが連れてくるから家で大人しくしてるんだ！」

「駄目よ… きつと寂しい思いをしてるはず… わたしが迎えに行かないと… うう」

どうやら彼女がミュウちゃんの母親のようだ。

ハジメも気づいたようでミュウちゃんの手を離し、行くよう背中を軽く押す。

そしてミュウちゃんは両手をいっぱい広げ精一杯声を出しながら駆け出した。

「ママー！！！！」

「っ！ミュウ… きゃあ！」

「危ねえ！」

ミュウちゃんの存在に気づいた女性… レミアは、ミュウちゃんを抱きしめようと壁から手を離れた瞬間バランスを崩し倒れそうになった。その瞬間、咄嗟に飛び出したハジメに支えられレミアは怪我をすることはなかった。

「大丈夫ですか？」

「あ、ありがとうございます… あぐっ」

「ママ！あしたいの!?!だいじよぶなの!?!」

ハジメがその場に座らせると、レミアは礼を言うが自身の足が地面に擦れた瞬間その表情を歪める。よく見ると彼女の足には包帯がさかれており怪我をしているようだった。

大好きなママが痛い思いをしていると知ったミュウちゃんは、ママと同じくらい大好きで世界一頼りになる『パパ』へ助けを求めた。

「パパあ！ママをたすけて！あしがいたいらしいの！」

「え？ミュウ、パパってどういうこと？」

「パパあ！はやくう！」

「けどあの人はもう… どういうことなの？」

大量の疑問符を浮かべるレミア。そして周囲の者たちも『パパ』の存在に困惑を隠せないでいた。

そんな『パパ』ことハジメは周囲の反応に顔を引き攣らせているが、最終的に諦めミュウちゃんの頭を撫で始める。

「大丈夫だ… ちゃんと治す。だから泣くなミュウ」

「うん…」

「すみません、失礼します」

「え？あつ、あらら？」

ハジメは軽く謝罪しレミアを抱き上げる。未だ混乱しているレミアは目を白黒させハジメの顔を見ていた。

そして周囲の黄色い声や怒声、香織とシアの圧が強くなったのを無視しながらミュウちゃんの家へと入っていく。

「とりあえず、俺たちも入るか」

「じゃな」

「……ん」

「……」

ハジメ、強く生きろ

74星：母と娘【下弦】

「カオリお姉ちゃん。ママのいたいの治る？」

「うん、お姉ちゃんに任せて」

レミアの足を診断しながら、ミュウちゃんに笑いかける香織。

その間に俺たちは、ここまでの経緯を簡単に説明をしていると、香織の診断も完了したようだ。

「レミアさん。結論から言うとなあなたの足は治りますよ」

「ほ、本当ですか？」

「ただ後遺症なく治療するのに何日かに分けて癒す必要があるのですが、それまで不便だと思えますが安心してください」

「ありがとうございます…。この子の事といい、どうお礼すればいいのやら…」

「ふふ、良いんですよ。ミュウちゃんのお母さんなんですから」

そして香織は治療を開始した。

ミュウちゃんは今まで甘えることができなかつた分くつついて離れようとせず、レミアも愛する娘が帰ってきたこともあり慈しむように頭を撫でている。

「あつ、そういえば…。何故『パパ』と呼ばれているんですか？」

「パパはパパなの！」

「ミュウ？ どういうことなの？」

「ミュウちゃん、飴ちゃんあげるからこっちおいで」

「わーいな！」

ミュウちゃんがいると話が進まないと感じたため、ミュウちゃんのお気に入りの飴を取り出しこちらへ呼ぶ。

そしてミュウちゃんが飴に夢中になっている間に『パパ』の事についても説明した。

「そうだったのですか…。ミュウ。ハジメさんを困らせたらめっよ」

「で、でも！ パパはパパだから…」

「ミュウ」

「うゝ…なんでいじわるいうの?」

優しく、けれどはつきりと注意されたミュウちゃんは頬を膨らませいじけてしまう。それを見たレミアは困ったようにため息をしてハジメに頭を下げた。

「全くこの子は…ごめんなさいハジメさん。ご迷惑をお掛けして」

「謝らないでください。俺は気にしてないので」

「けど、こんなおばさんと夫婦なんて噂が立ったら嫌でしょう?」

「おばさんだなんて、十分お若いですし美人だと思いますよ?」

「び、美人だなんてお上手なんですから…」

何気なく返したハジメの言葉に、レミアは頬を薄く染めた。

最近のハジメはシアに続き香織にも揶揄われていることがあるため、女性に対する耐性ができ照れたり恥ずかしがるのが減ってきている。それについては良いことだと思っただが…

「ハジメ?」

「ハジメくん?」

「こいつらの前で言うべきじゃなかったな。」

「いでででで!シ、シア!?!香織さん!」

「ハジメ、私には綺麗とか全然言ってくれないのに何で初めて会ったレミアさんには言うのかな?」

「ハジメくん?何レミアさんを口説いてるの?実は年上好きなの一
目惚れなの?」

「ま、待ってくれ!あれはあくまで一般的な意見であって!いやマジ
で離してください!」

ハジメの肩をそれぞれ掴んだシアと香織は、モンスターレックス迷宮の孤王に引けを取らない圧を発しながらハジメに問いかける。

そんなハジメはまるで浮気がバレた間男のように狼狽えながら弁
明を始めた。

そしてレミアさんは、香織の言った『年上好き』と『一目惚れ』に
反応したように

「そ、そんな!一目惚れだなんて。けどミュウにも父親がいた方が…
いや、駄目よ私!亡くなったあの人を蔑ろにするなんて…けどハジ

メさんの腕……遅しくて、男らしくて……」

と言った感じに悶々としていた。

うん、巻き添えを食らう前に逃げよう。

「……魚食りたいし、晩飯の材料買いに行くか」

「……ん、私も行く」

「妾も行くのかの……この場にいると嫌な予感がするのでな」

「お買い物なの？ミユウも行くの！」

修羅場から避難するため、気配を消しながら外出する俺たち。

そして買い物済ませミユウちゃんの家に戻ると、修羅場は終了しており、とてつもなく疲弊したハジメ、レミアをライバル視するシアと香織、そして未だに悶々としているレミアがいた。

「とりあえず……魚買ってきたから飯にしよう」

「よろしければ私が調理しましょうか？」

「いえいえ、俺が作るんで安静にしておいてください。ミユウちゃん、ご飯作る場所はどこかな？」

「こつちなー！」

良かれと思ひ提案したであろうレミアさんに断りをいれ、ミユウちゃんの案内でキッチンに行こうとしたところ。シアが困惑気味に問いかけてきた。

「あのユミトさん。炭は料理とは言いませんよ？」

「俺はどここの料理下手エルフだよ。とりあえず待ってろ」

流石に^{サンドウィッチ}炭^カや即死魔法^カを料理と言ひ張る度胸はないと内心突っ込みながらキッチンへと向かう。

トータスに電気やガスなど通っていないが、そこら辺はオラリオと大差無いため問題ない。

そしてしばらくして料理が完成したので、ハジメたちの下へ持つていき食卓を囲んだ。

「……美味しかった」

「だな、まさか異世界で鍋が食えるとは」

「そりゃ出汁取って食材ぶち込んで煮るだけだからな」

「土鍋で炊いたご飯も美味しかった…」

やはり大人数での食事で鍋は楽で助かる。

食後の茶を飲みながらまったりしていると、レミアがある提案をしてきた。

「エリセンに暫く滞在すると聞きましたので、よろしければ我が家をご利用ください」

「そこまでしなくても、俺たちは適当に宿を探しますので」

「いえ、これくらいさせてください。ミュウも喜びますので」

すると、お腹いっぱいになり船を漕いでいたミュウちゃんがハジメの下へと近づいていく。

「パパあ…一緒にいいの…」

「ミュウ…」

「ママとパパと一緒に寝たいの…」

「ミュウ!？」

その瞬間、再び迷宮モンスターレックスの孤王が2匹現れ、レミアは頬を赤くし悶々とし始める。

俺たち3人はそれを少し離れた位置で眺めながら、茶を啜る。

「ハジメの奴、遂に未亡人まで落としたな」

「……節操なし?」

「いやユエ殿。ユミト殿たちの国には『英雄色を好む』という言葉があるそうじゃ、きつとそれじゃろう」

最終的に、ハジメ、ミュウちゃん、レミアに加え、シアと香織とリビングで寝る事になったそうだ。その際、ハジメの意見は全て却下されたらしい。

皇月：海底の迷宮と壊れた正義
75星：次なる迷宮へ

エリセンに滞在して3日ほど経過した。

ハジメたちが火山から脱出する際使った潜水艇が、思っていた以上に装甲が損傷しており、その修復と装備している兵器の補充をしており、その間ある種の休息をとっていた。

「ハジメ、ユエたちは？」

「折角海に来たからって水着に着替えてる」

「そうか……」

「何もするな弓人」

「おつとおく、怖いねえくってまだ何も言つてねえだろ」

こいつ… 近頃勘が鋭くなってきている気がする。

そんなハジメを見て、ふと気になった事を尋ねてみた。

「お前は水着に着替えないのか？」

「ああ、俺は別にいいかなって。外で遊ぶなんてキャラじゃねえし」

「このインドア派め……」

最近のハジメは、潜水艇や家に引きこもって作業をしてばかりいる。

好きでやっているのだから放っておいても良いのだが、おそろく……

「お前、最近飯と寝る時以外ミュウちゃんと会わないようにしてるだろ？」

「うっ……」

「理由はこれ以上一緒にいると別れる時辛くなるから……違うか？」

「うぐっ……」

短い時間だが、ハジメはミュウちゃんに対してかなりの愛情を注いでいる。それこそ本当の家族のように見えるほどだ。近くで見ているためハジメの気持ちは理解できるが

「それに対してミュウちゃんは、薄々分かってるのに我儘を言わないでいて… 健気じゃないか」

「… 確かに」

「レミアさんも言ってただろ? 『お別れの日まではミュウのパパでいて欲しい』ってよ」

「… そうだったな、すまん」

まあ直後に『べ、別に私は一生でも… って私は何を!』と言っていたがそこは黙っていいだろう。

「俺に謝るくらいならさっさと水着に着替えて行くぞ」

「そうだよな、行くか」

こうして数日ぶりに外へ出たハジメと共にユエたちと合流する。

そしてミュウちゃんと思う存分遊ぶ事にした。

「パパー! おさかなつれたの!」

「すごいぞミュウ、その魚は今日のご飯にしような」

「ユ、ユミト殿! これはかなりの大物じゃ!」

「… これ、海底の岩に引っかけてるだけだな」

「なぬ!？」

みんなで釣りをして、釣った魚で食卓を囲み。

「問題はない! 15メートルまでなら!」

「ユミトさん… なんで重力魔法とか使わず水の上走れるんですか…」

「信じないだろうなあ… 雫ちゃんに言っても」

「おじちゃんすごいの!」

みんなで海を泳いだりして、沢山の思い出を作った。

そしてついに、潜水艇の修復が完了し『その日』が来た。

—————

「ほらミュウ、ハジメさんにちゃんと言うんでしょ?」

「パパあ… 言ってらっしゃい…」

泣きそうになるのを必死に堪えながら手を振るミュウちゃん。

本当はパパとずっといたい筈だ、けど大好きなパパを困らせたくな
いたために健気に我慢する彼女に、ハジメは視線を合わせ頭を撫でる。
「ミュウ、必ず帰ってくるから… ちよつとだけ我慢な」

「ほんと？」

「ああ、約束だ」

「うん… やくそくなの」

そう言つて約束をする2人を見て、俺は『あの時』のことを思い出
した。

—アルテミス様たちは任せろ！先にオラリオで待っているからな
！

—必ず… 必ず帰ってくるのよ！オリオン！

「………… ユミト？」

「どうした？」

「………… いや、何でもない」

要領の得ないユエの反応に首を傾げていると、どうやらハジメの方
は別れの挨拶が終わりそうになっていた。

「すみませんレミアさん、勝手に約束なんてしてしまつて」

「良いんですよ、ミュウも喜ぶますし… そ、それと… 行ってらっ
しゃい、あなた… な、なんて！」

「…」

現在、ハジメはレミアの再婚相手としてエリセンの人たちから認識
されており、レミアもその事に対して満更でもなさそうであった。

そのせいでハジメは、エリセンの人たちに『レミアという美人の妻
がいるにも関わらず女を侍らせるクソ野郎』認定されているが。

こうしてハジメに新たな悩みの種が生まれながら、俺たちは潜水艇
に乗り込み【メルジーネ海底遺跡】へ出発する。

香織にとつては初めての真の迷宮攻略になる。この迷宮攻略で以
降の同行についても考える必要があるが… 香織のことだ、恐らく大
丈夫だろう。

「そーいやハジメ、迷宮の場所は目星ついてるのか？」

「ミレディから聞いた話だと、『月』と『グリュエンの証』に従えつ

て言われたんだが……」

月……それは文字通り空に浮かぶ月なのか、それとも何かの比喩なのか……とりあえず、夜に改めて探索してみても良いだろう。

そんな気楽なことを考えながら、弓矢の手入れなどをして夜になるのを待った。

そして、この迷宮攻略で嫌というほど再確認させられる。

俺という人間が、どれほど穢れ醜い存在なのだ。

英雄と言われる者たちから、かけ離れた存在なのだ。

76星：第4の迷宮

「メルジーヌ海底遺跡」が存在する場所は、一面海原で遺跡と言えるものは何一つ見当たらなかった。

ミレディから『月』と『グリューエンの証』が場所を導くという言葉を通じて夜まで待っている、証であるペンダントが輝き始める。それに気づいたハジメがペンダントを掲げると、一直線に光を放ち場所を示した。

実にファンタジーらしい光景に、ハジメは満足気に頷いているが、俺は違うものを思い出していた。

「… リテ・ラトバリタ・ウルス アリアロス・バル・ネトリール」

「おい、それは海底の遺跡じゃなくて天空の城だろうが…」

「けど… なんか分かるかも…」

日本人なら誰もが知っているあの映画のシーンを思い出している俺たち地球組に対して、ユエたちトータス組は訳がわからず首を傾げていた。

何はともあれ、光が示す方向に行けば良いだろうと考え。俺たち潜水艇に乗り込み移動を開始した。

光が指し示した場所は、一面岩壁に囲まれて遺跡らしきものは見つからない。

そう思っていると、ペンダントの光が壁の一点に当たり、音を立てて左右に開き始めた。

「… こりや探しても見つからない訳だ」

「仮に分かったとしても、潜水艇みたいなもんがないと近づくこともできねえ」

奥に進んでいくと、突如浮遊感に襲われその後落下し始めた。

「全員近くにあるものに捕まれ！」

俺の言葉に全員が反応して近くの椅子や壁にしがみつくように捕まる。

その瞬間、潜水艇が地面にぶつかり轟音と共に衝撃が俺たちを襲つ

た。

そんな中、俺たちの中で特に頑丈な訳ではない香織は呻き声を上げていた。

「香織さん、大丈夫か？」

「う、うん。大丈夫」

潜水艇から外の様子を確認すると、海中ではなく洞窟のような空間であった。

周囲に魔物の気配が無いことが分かったため、俺たちは警戒しながら船外へ出た。

外は大きな反球体の空間で、俺たちが落ちたであろう天井はどういう原理か分からないが水が揺蕩っており水滴一つ落ちることなく波打っていた。

ハジメが潜水艇を宝物庫に収納したことを確認して、攻略を開始……する前に俺はユエに呼びかけた。

「頼んだユエ」

「……ん、任せて」

俺の言葉に即座に反応して、ユエは障壁を展開した。

その直後、頭上から圧縮された水流が俺たちを襲ってきた。

水流は人体に当たれば容易に風穴を開ける勢いだが、ユエの展開した障壁は意に介さず防ぎきった。

「きやあ!？」

初めての大迷宮攻略となる香織は、この突然の出来事に反応できず思わず悲鳴を上げよろめき。それをハジメは腰に腕を回して支えた。

「ご、ごめんなさい」

「いや、気にするな」

いつもなら赤面しそうな場面だが、香織の表情は優れない。そしてユエを一瞥するとその表情をさらに暗くした。

劣等感

それが今香織の感じているものの正体だ。

天之河たちといた頃は、回復や防御でそれなりに活躍していたが、俺たちに同行してからは、アンカジ国民の治癒と火山から帰還した俺

とテイオの回復くらいしかやっていない。

そして今使われたユエの結界は、自分の魔法と比べるのも烏澁がましいほどの差が自分は足手まといにしかないのでは？と考えてしまった。

「大丈夫か？」

「えっ？あつ… うん、大丈夫だよ」

「…そうか」

無理矢理笑顔を貼り付け誤魔化した香織を見て、ハジメは一瞬目を細めるが特に何も言わず攻略を再開した。

その後、水流の元凶であったフジツボの魔物や、ヒトデや海蛇といった海洋生物の魔物が襲いかかって来て、そのことごとくを倒していく中1つ気づいたことがある。

「こいつら…弱くね？」

俺の呟きに、香織以外の全員が同意した。

大迷宮の魔物は、単体なら強力、複数なら厄介、最終試練は強力かつ厄介というものが一貫していた。

しかしここにいる魔物は、地上にいる魔物と大差ないレベルだ。

オルクスのようにまだ本番の大迷宮では無い可能性も考えながら進んでいると

開けた空間に入った瞬間、半透明なゼリーの様なものが入り口を塞いだ。

「私がやりますー！」

ほぼ反射的に、最後尾にいたシアがドリユケンでその壁を殴りつける。

その瞬間、表面のゼリーが飛び散りその飛沫がシアの胸元に張り付いた。

「ひゃあ！何これ気持ち悪いー！」

反射的に手でゼリーを落とそうとするが、ゼリーが付着している服が煙を出しながら溶け始めたのを見て慌てて止める。

「シア殿ー！」

咄嗟にテイオが火属性の魔法を使い、シアが火傷しないよう調整し

てゼリーを焼き尽くす。どうやら皮膚にも付着していたようで、彼女の胸元が赤くなっていた。

「また来るぞ！ユエは障壁！ティオはさつきみたいに魔法で焼け！」

「……ん！」

「任せよ！」

ゼリーの壁から距離を置くと、今度は天井から複数の触手が襲いかかり、それに対してユエが障壁を貼り触手を防ぎ、ティオが火炎で焼き払う。

このままいけるかと一瞬考えたが、どうやらあのゼリーは魔法すら溶かす様で火の勢いが強い障壁がじわじわと溶かされ始めた。

「ハジメ、こいつの魔石はどこにある？」

「……無い」

「魔石が無いって……それじゃあ、あれは魔物じゃないの!？」

「分からん……強いて言うなら、あのゼリー全部が魔石だ……んで」

ハジメが言葉が続けようとした瞬間、周囲に飛び散っていたゼリーが集まり始めクリオネの様な形状になり始め。こいつが魔物の姿かと思つた瞬間、天井だけでなく壁からも触手が生え始めた。

「……部屋全体に反応がある」

「香織！お前も障壁を展開しろ！」

「えっ!?わ、分かった！『全ての敵意と悪意を拒絶する……』」

香織が障壁を展開すると同時に、全ての触手が俺たちを襲ってきた。

障壁の維持をやめ攻撃に参加したユエを含め、香織以外の全員でクリオネと触手の破壊を開始するが、飛び散ったゼリーが集まり始め即座に再生するため決定打にならない。

「くそっ……やるしかねえか」

ハジメがそう呟くと、空間庫からパイルバンカーを取り出し全員に聞こえる様に叫んだ。

「地面の下に空間がある……こいつで開けるから一旦引くぞ！どこに繋がっているか分からねえから覚悟決めろよ！」

全員がその言葉に頷くと、ハジメは迷わずパイルバンカーを地面に

叩きつけ起動した。

発射された杭が地面を割り轟音と共に貫通する。下の空間は激流の海中であり水中での「スキル」や「発展スキル」を持っていない俺は飲まれ流されてしまう。

孤立するわけにはいかないため、俺はどうか近くにあったユエに手を伸ばしユエもそれに気づいたのかその手を掴んだ。

そのまま俺とユエは激流に身を任せ流されていった。

77星：忘れるな、その罪を

「はあ… はあ… ユエ、大丈夫か？」

「… ベトベト… 気持ち悪い」

暫くの間、激流に身を任せていた俺とユエは、どうにか水面へ上がる事ができた。

そこには白い砂浜と密林という海底だと忘れてしまいそうになる空間が広がっていた。

「とりあえず… あそこに行くか」

「… ん」

魔物の気配もないため、そのまま泳いで上陸し空間庫から替えの服を取り出す。ユエも俺とハジメの物ほど容量は大きくないが空間庫を付与した指輪を渡されているため、同じく替えの服を取り出しお互いに見えない様に着替えた。

「… カオリ、大丈夫かな？」

「それはどっちの意味でだ？」

「… カオリ、ここに来てから元気なかった」

どうやら、香織の変化に気づいていたらしく表情を暗くする。

そんなユエに対して俺は頭を撫でてやりながら答えた。

「香織はきつと大丈夫だ。ユエも、仲間なら心配するんじゃないって信じてやろうぜ」

「… ん、仲間だから信じる」

激流に飲まれた時、一瞬であるがハジメが香織の下へ行っていたのを確認していた。シアもティオに合流して流されていたため孤立した奴はいないだろう。

「とりあえず行くか。もしかしたら近くにいるかもしれないからな」

「… んー」

こうして俺たちは合流するためにも攻略を再開した。

密林を進んでいる中、蜘蛛やムカデといった虫がいたが魔石を持っておらず大した脅威にならなかった。

傷つける。

これがこの迷宮の試練なのかと考えていると、背後から炎弾が襲いかかって来たため、迎撃するため弓矢を取り出し放つ。

しかし、寸分狂わず当たったはずの矢は炎弾を撃ち抜くことを焼き尽くされる事もなくすり抜けた。

「マジか!？」

「…………『波城』」

今度は炎弾を防ぐため、ユエが水の防壁を展開した。

再びすり抜ける事を警戒して回避する様構えていたが、炎弾が防壁にぶつかった瞬間音を立てて鎮火したため杞憂に終わった。

「どういう事だ?」

「…………魔法によるものなら問題ない?」

ユエの言った仮説を確かめるため、蒼色の矢を取り出し番える。

そして再び襲って来た炎弾に向けて放ち矢の銘を呼ぶ。

『プリミラ』

その瞬間、鏃から水が放出され矢全体に纏う様に包み込み炎弾に吸い込まれていく。

すると、今度はすり抜ける事なく衝突し炎が鎮火した。

「そうっほいな」

「…………それよりこれが試練?」

「となると…………この迷宮のコンセプトは『戦争の激しさを体感しろ』辺りか?」

「…………コンセプト?」

「ん?ああ、あの時ユエはいなかったな」

これは、火山から脱出しアンカジへ向かっていた時テイオと建てた仮説の1つだ。

七大迷宮は、反逆者たちが狂った神と戦う者たちへの【試練】として作られたものだ。

【オルクス大迷宮】は魔物との戦いでの戦闘経験

【ライセン大迷宮】は魔法を使わずあらゆる事への対応力

【グリユーエン大迷宮】は過酷な状況下での集中力と判断力

「といった感じに……ってどうした？」

「…… オリオン、最近ティオとばかり話してる」

「…… そんなつもりは無いんだけどなあ」

「どうやらやきもちを焼かせてしまった様だ。どうやって機嫌を直そうかと悩んでいると、敵の船団がかなりの数近づいて来ており目を血走らせ狂気じみた叫びを上げながら男たちが乗り込んできた。」

「全ては神の御為にいい！」

「エヒト様あ！ 万歳い！」

「異教徒めえ！ 我が神の為に死ねえ！」

そして、いつのまにか甲板に出ていた俺たちの乗っている船の兵士たちも同じ様に狂気じみた怒声と雄叫びを上げ戦い始める。

1つ違うのは、お互いに叫んでいる神の名が異なっている事だ。

「ユエー！」

「………んー！」

巻き込まれるのは面倒だと感じた俺は、ユエを抱き寄せ『空力』を使い上空へ駆け登る。

そして、物見台にいる兵士を気絶させ着地するとユエと共に周囲を見渡す。

下方の俺たちがいた場所にいた兵士達は、先ほどまで睨み合っていたのにも関わらず今はお互いに俺たちのことを狂気じみた瞳で睨みつけていた。

「ユエ、出口みたいなものは見つけたか？」

「……… 見てない」

「なら、クリアの条件はこいつらの殲滅か？ 面倒くさ……… って何だ？」

何百隻もある船団の殲滅に億劫だと感じていると、突如景色や兵士たちにノイズの様なものが走り始め景色が再び歪み始める。

そして、大海原でも、最初の岩層地帯でもなく、真っ暗な空間に景色を変えた。

「まるで意味がわからん………」

「……… 暗い」

目を凝らしても先が見えない空間に、ユエは空間庫から明かりを取り出そうとするが、それより先に俺は『ある物』を見つけた。

「待てユエ、明かりがあつた」

「……なにそれ？」

「こいつは魔石灯って言ってな。ここんところの撃鉄装置スィッチを押すと……」

この時、俺は気づくべきだった。

なぜこの世界に『オラリオにあつた物』があるのだと。

「お、ついたついた……えっ……？」

「……ここは？」

魔石灯に光が灯つた瞬間、その光源からはあり得ないほどの範囲が照らされ、天にそびえ立つ巨大な塔パベルが目に入った。

「な……なんで」

「……オラオン？」

忘れるはずもない、この景色を、この街並みを。

ここは、俺が前世過ごした世界の中心といわれた場所。

【迷宮都市オラリオ】がそこにあつた。

78星：正義と星【上弦】

「おいおい……どうなってるんだこりゃあ」

「ここも、過去のトータスなのかな？」

ハジメと香織は、あのクリオネの魔物から逃げるため激流に飲まれた後、仲間と合流するためにも、弓人とユエと同じようにこの大迷宮の攻略を再開していた。

そして2人は、過去トータスで何があったかを知ることとなる。

1つは、大海原での宗教戦争

1つは、客船で行われた終戦パーティでの人間族の裏切り

この2つに共通していたものは、『神』が関わっていた事だ。

しかし、深部へ続くであろう魔法陣に近づいた瞬間。先程2つと違い周囲にノイズが走りながら周囲が変化した。

「こんな街……座学や王宮の図書館でも聞いたところねえぞ？」

「私も……それに、街の人たち……何かに怯えている？」

香織の言葉を聞いて、ハジメは外に出歩いている人たちを見る。

確かに、周囲を過剰気味に確認していたり、外に遊びに行こうとする子供を大慌てで家に連れ戻している。

そして、先ほどの人たちのように『神』を盲目的に崇拝している訳ではなさそうだ。

この迷宮の製作者である「メルジーヌ」は俺たちに何を伝えたいのかわからず首を傾げていると、再びノイズが走り場面が変わる。

「ここは、工場か？」

「燃えてる……酷い……」

そこには、闇が嗤っていた。

地獄の炎を思わせる緋色の輝き、逃げ惑う民衆、それを見て悦ぶ

『悪』

目を背けたくなくなる様な光景だったが、ハジメたちの背後から『悪』と対峙する者たちが現れた。

「ほいっつー」

「ぐあああつ!?」

まず現れたのは、桃色の髪が特徴のまだ幼さの残る少女だ。

少女は複数の刃が取り付けられた投擲武器をブーメランの様に投げ、敵の胸部を切り裂いた。

「アリーゼー！3番倉庫、押さえた！」

「そのまま4番まで制圧！イスカとマリユーに指示！ライラは先の区画、押さえて！」

「ほいほいほいつと！注文は！」オーダー

「敵ごと火の手を氷漬け！火災も襲撃も止める！進軍進撃進行！」ゴウゴウゴウ

桃髪の少女へ指示を出すのは、赤髪が特徴的な少女。

その声に対して即座に答え動いているところを見るに、かなりの信頼を寄せている様だ。

「輝夜、リオン！敵の本命任せた！」

「ほんとうに、人使いの荒い団長さん… 乗り遅れないようにしてくださいませ、エルフ様」

「抜かすな、輝夜。ー行きます」

その瞬間、『風』が吹いた。

敵陣へ飛び出したのは、着物を着た和風の少女と覆面と外套を身につけたエルフの少女だった。

和風の少女は刀を、エルフの少女は木刀を使い多くの敵を屠っていく。

「凄い…」

「けど… これは本当に昔のトータスなのか？」

人間とエルフが… よく見ると狼の亜人の少女も、手を取り協力して戦っている。

そんなハジメの疑問に、『ある人物』が登場したことによりこれが過去のトータスではないと知る。

「お、おのれええええええ！」

「あれは魔剣!?アリーゼー！」

「あ、危ない！」

物陰から怒気を撒き散らし、紅蓮の長剣を赤髪の少女の方角へ薙ぎ

払おうとしている男、それを見て香織は咄嗟に障壁を展開し守ろうとした瞬間

1本の矢が、長剣を持つ男の肩を貫いた。

「ぎゃあ!？」

「たく… 避難が完了するまで押さえ気味って言ったろうが!調子に乗って突っ込んでんじゃねえよ!」

そうやって叫ぶ男の声に、ハジメと香織は何故か聞き覚えがあった、そして男が姿を見せた瞬間、2人は驚愕の声を上げた。

「ゆ、弓人くん!？」

「お前、何やってんだ…っ!？」

ハジメは弓人?に近づき肩を掴もうとしたが、そのまますり抜けてしまう。

さらに訳が分からなくなり、弓人?の顔をよく見ると、高校生である彼に比べて幾つか年をとっているように見えた。

「あら?心配してくれるの?けど大丈夫!清く美しい私には、悪者の攻撃なんて効かないんだから!フフーン!」

「お前この前、戦闘服バトルドレスに火がついて消リオンのサンドウィッチし炭炭になりかけてただろうが」

「あ、あれは忘れて欲しいと言ったはずだ!あと料理に関しても昔に比べたら上手く「カレー」…すみません」

緊迫感の欠片もない会話に、敵の残党は隙だと感じたのか逃げ出そうとするが、後ろを向いたと同時に男は敵の片足を射抜き動きを止めていた。

「もうすぐシャクティたち「ガネーシャ・ファミリア」が来るから、さっさと終わらせるぞ」

「そうね!けど、自己紹介はやらせてもらおうわ!」

「はあ… 勝手にしろ」

男はどこか諦めを含んだ表情で、アリーゼと呼ばれた彼女の自己紹介を促した。

そしてアリーゼは、自信満々に… というか若干ドヤ顔で自己紹介を始めた。

「弱気を助け、強きを挫く！たまにはどつちもこらしめる！差別も区別もない自由平等、全ては正なる天秤の赴くままー！」

アリーゼの言葉と共に、1人… また1人と彼女の下へ並ぶ少女たち。

エルフが、人間族が、獣人が、アリーゼの言葉にどこか誇らしげに頷いていたり、呆れながらも笑みを浮かべている。

「願うは秩序、想うは笑顔！その背に宿すは正義の剣と正義の翼！」
そしてハジメは理解した。

この世界は過去のトータスではなく、アイツが前世生きていた世界だと。

「私たちが【アストレア・ファミリア】よ!!」

「俺を含めるな！俺は【アルテミス・ファミリア】だ！」

「弓人くんの… 前世？」

「ああ、昔あいつが言っていた【オラリオ】っていう街に特徴が似てる」
最初に見た時に見た、あの巨大な建造物が『バベル』と言われるものなのだろう。

「じゃあ… あの人が前世の弓人くん？」

「恐らくな… にしても変わってなさすぎだろ…」

そんなことを言っていると、再び周囲にノイズが走り場面が変わる。

場面が変わると、「アストレア・ファミリア」の者たちはおらず、前世の弓人と猫の獣人の少女が街を歩いていた。

「アタランテ、避難者は全員無事だったか？」

「勿論、■■■■の方もその感じだと大丈夫そうだな」

「おう、相手含めて死者は0だ。闇イヴェルス派閥の奴らとはいえ、殺すのは… 流石にな」

「ふふ、やはり汝は優しいな」

「そうか？」

アタランテが言ったはずの彼の名前は、何故か聞き取ることができず2人は首を傾げた。

その後も会話の中で何度か名前が出るが、全て聞き取ることができなかったため、合流した後からに直接聞けばいいと結論をつけていると

「それで、先日の襲撃で4度目となったが……奴らの目的は分かっただのか？」

「ああ、シヤクテイの調べによると魔石製品に使われる『撃鉄装置』がなくなっていたらしい」

「撃鉄……それはたしか、魔石灯に使われる物では？」

「だな。魔石製品の殆どに使われる心臓部……『スイッチ』と思えば良い……にしても何に使うんだか」

魔石灯……つまり明かりだろうか

そんな物に使う『スイッチ』を集めて何ができるのか、この世界の工業技術を知らないハジメと香織は話について行けていないでいると

「あ~~~~~れ~~~~つ!!」

なんとも情けない男の声が周囲に響いた。

78星：正義と星【下弦】

『あ~~~~~れ~~~~つ!!』

突如響いた声に、ハジメと香織が反射的にその方向を見ると

『ははっ! いただきだあ!』

『俺の全財産444ヴアリスがああああ! 誰か取り返してええええんっ!!』

1人の暴漢が、男から財布を奪い取っていた。

その財布を奪われた男を見た瞬間、ハジメと香織はとてつもない違和感に襲われた。

「ハジメくん…」

「香織も気づいたか?…あの男: 『人間』なのか?」

外見は、気弱そうで覇気のない男だが自分たちとは何か違う。

しかし、そんな2人の疑問はアタランテと呼ばれていた少女によって案外早く解決した。

『まさか神の財布を盗る者が現れるとは: 世も末だな』

『っか: 神のくせに所持金が微妙にしよぼいな』

アタランテと弓人?の言葉に、2人は思わず仰天した。

ハジメは奈落で弓人から『神は娯楽を求め下界へ降りた』と聞いてはいたが

「威厳ねえな…」

「はは: 神様って、私たちと変わらないんだね」

ハジメや香織にとって、神はゲームだと偉大な存在だったりラスボスで出たりするイメージが強いため、目の前の男神を見て思わず脱力してしまう。

そして弓人?の方を向くと、彼は地面に転がっている小石を1つ拾い上げた。

『とりあえず: これを足にぶつけりゃいいか』

『待て、Lv4の汝がやるとあの男の足が折れてしまう。ここは彼女たちに任せよう』

アタランテが弓人？を制止し指を指す。

そこには、赤髪の少女アリーゼとエルフの少女リオンが暴漢を追いかけていた。

『逃げられないわよ！観念してお縄につきなさい！』

『げっ!?【紅スカーネット・ハーネルの正花】に【疾風】!?ち、ちくしょう！よりもよって

【アストレア・ファミア】なんて…くそお！』

暴漢はとことんツいていないようだ。

神から財布を奪ったと思えばしよぼい金額だった拳句、現行犯で捕まりそうになっているのだから。

それでも暴漢は振り切ろうと通りの横道に飛び込もうとするが

『ぐえっ!?』

進路上に突如現れた人影に足をかけられ転倒した。

『ダメだよ、悪いことしちゃ。お金は働いて、自分の手でもらわないと』

『アーデイー！』

その少女を一言で表すとするなら『可憐』だった。

リオンが少女の名を呼ぶと、アーデイと呼ばれた彼女は両手を広げ満面の笑みを浮かべた。

『そうだよ！品行方正で人懐っこくてシヤクテイお姉ちゃんの妹でリオンたちと同じLv3のアーデイ・ヴァルマだよ！じゃじゃーん！』

『いったい誰に説明しているのですか、貴方は…』

リオンはアーデイに呆れた眼差しを向けている。

アーデイはそんな視線を気にすることなく、捕らえた暴漢へ話しかけた。

『さ、おじさん。盗んだものは返してね』

『…あー、くそっ！もう詰んだ、詰んだ俺の人生！さっさと牢屋にぶち込みやがれ、ちくしょう！』

完全に開き直った暴漢は、自身が溜め込んでいたものを少女たちにぶつけた。

『おめえ等みたいな強い連中にはわかんねーだろうな！こんな惨めな真似をして、食い扶持稼ぐ浮浪者のことなんかよお！仕事場も奪われ

れば店も開けねえ！いつもいつも事件事件で、どこもかしこも余裕がねえ!!』

確かに、暴漢の服はくたびれており無精髭を生やしみすばらしい。暴漢はその勢いのまま自分の主張を八つ当たり気味に捲し立てる。

『職に溢れたヤツなんて、ごまんという！それもこれも、お前ら冒険者がさっさと悪党どもを追い出さねえからだ!』

暴漢の言葉に、ハジメと香織は自身の事を思い出す。

自分達が誰かを助けた際、感謝されこそすれあの暴漢のように非難されたことがなかった。

「これが… 昔の弓人くんが暮らした世界なんだ」

「完全に言いがかりだが… あんな風になるくらい治安が悪いってことか…」

ハジメは、弓人は前世の話をあまりしなかったのを思い出した。恐らく、思い出したくない出来事があったのだろう。

少女たちの方を見ると、その中でリオンは思うところがあるのか俯き表情を暗くしていた。

『そうさ！俺みたいなヤツがいるのは、全部お前等のせいだ！俺は被害者だ!』

その暴漢の結論に、リオンの隣で聞いていたアーデイは口を開いた。

『それがおじさんの言い分?』

「『え?』」

『でも、悪いことは悪いことだよ? おじさんが奪われた分だけ何かを奪えば、誰かがおじさんと同じ思いをしちゃうよ?』

その言葉に、思わず暴漢と声が重なった。

何故ならアーデイは、咎めるわけでも同情するわけでもなく、ただただ普通に訪ねたからだ。

『それだとおじさんが、おじさんみたいな人を作り出しちゃうかもしれない。私たちが力を尽くす前に』

『そ、それは…』

詰め寄られているわけではないにも関わらず、暴漢は言葉に詰まる。

そして、アーデイは笑顔と共に取引を持ちかけた。

『だからさ、誓って。もう悪事は働かないって…。そうしたら、今回のことは見逃してあげる』

『なっ!?アーデイ、いけません!都市の憲兵(ガネーシャ・ファミリア)の貴方が悪党を見逃すなんて!』

呆然とする暴漢を他所に、リオンがアーデイに問い詰める。

それもそのはずだ。彼女が今やろうとしていることは、己の私情で犯罪者の許すことなのだから

『私は情状酌量があると思うけど。確か…。『飴と鞭』だっけ?』

『…。?それがどうしたのですか?』

『■■■■に言われたんだけど、他の憲兵おねえちゃんたちが『鞭』なら、私くらいは『飴』になってくれって…。鞭ばっかりだとみんな疲れちゃうからって』

『彼が…。』

そしてアーデイは暴漢に視線を戻すと、ずっと片手に持っていたものを差し出す。

それは、簡素な包装に包まれたコロツケだった。

『お金は渡せないけど…。じゃが丸くん、あげる。また一口も食べてないから、安心していいよ』

『い、いいのよ…。?』

『うん、私のはまた買えばいいから』

『そつちじゃねえよ!結局俺を見逃して良いのかよ』

『そつちも大丈夫、後で私がいっぱい怒られるから…。だから、はい』

暴漢は彼女とコロツケを交互に見た後、恐る恐るコロツケを受け取った。

『ちつ、慈善者気取りかよ…。悪かった、もうやらねえ』

暴漢は舌打ちと恨み言を吐くが、小さく反省の言葉を放ち離れていった。

それを見て、とても嬉しそうに笑うアーデイと何故かドヤ顔で何度も頷くアーリーゼがいた。

『うんうん、これであの人はアーデイから貰ったじやが丸くんで、五臓六腑に塩と油が染み込み改心するに違いないわ!』

『なに訳の分からねえ理屈を展開してんだよ』

『あつ、■■■■にアタランテ!』

そんな彼女に突っ込みを入れたのは、いつの間にか近づいていた弓人?であった。

弓人?とアタランテに対して、嬉しそうに手を振るアーデイに弓人?は軽く手を振りかえしてやると、顔を俯かせ考え込んでいたりオンへと話しかけた。

『さっきのこと、納得できないか?』

『…ええ、その時々で裁き方を変えては秩序が乱れてしまう』

『お前は相変わらず真面目すぎるんだよ、もう少し馬鹿になれ』

そう言つて、弓人?はリオンの頭を自然に撫でる。

そのことに彼女は驚いているが、弓人?は構わず話し続ける。

『確かに秩序で人を律するのは大事だと思う…。けどな、そうやって抑え続けていると必ず限界を迎えて爆発する。そうなつてからじゃ遅いんだよ』

『し、しかし…』

『私も■■■■に賛成。ねえリオン、君が言っていることは『強い人』だから言えるんだと思う』

『えっ?』

『おじさんが言つてたことも間違いじゃ無い。私たちが『正論』を言えるのは、私たちが力を持つてるからだと思う』

弓人?、そしてアーデイの言葉にリオンは衝撃を受ける。

その光景を見ていたハジメと香織も、2人の言葉に思うところがあつた。

『正論』が言えるのは力を持つてるから…か』

『私… ちょっと分かるかも』

弓人?たちの方へ視線を戻すと、彼はリオンの優しく笑いかけながら問いかけていた。

『なありオン、人を赦すのは… お前の『正義』に反するか?』

『……何故、頭を撫で続けるのです』

『おっと、ついな。悪い悪い』

『いえ……嫌という訳では』

彼が手を離すと、名残惜しそうに見えるリオンは気恥ずかしそうに咳払いをしていると

『いや、お見事お見事!』

乾いた拍手をしながら、財布を奪われていた男神が近づいてきた。

おまけ

「ねえハジメくん……前世の弓人くんの周り、女の子多くない?」

「だよな……あいつの無自覚は前世からだったか……」

「頑張れユエ!私も頑張るから!」

79星：彼の正義

『いやあ、急に後ろからタツクルされてさあ。びっくりしちやったよ』

ハジメと香織は、あの男が神ということに疑いを持ってしまう。

気弱そうな笑みを浮かべるこの男は、髪もボサボサで威厳も全くない。

『大丈夫ですか、神様？お怪我は？』

『大丈夫だよ、可愛い女の子。僕の財布を取り戻してくれてありがとうね』

アーディから財布を受け取ると、その神は自身の名を名乗った。

『俺はエレン。君たちは？そっちの子は「ガネーシャ・ファミリア」って聞こえたけど...』

エレンと名乗る神に名を尋ねられ、アリーゼは自信満々に、リオンは少し考えてから自身の名を名乗る。

『私はアリーゼ・ローヴェル！「アストレア・ファミリア」の団長よ！』

『... リオンと名乗らせてもらっています。アリーゼと同じく「アストレア・ファミリア」です』

『正義の女神... 君たちもかい？』

エレンが弓人？とアタランテに視線を向けると、2人は否定しながら自身の名と「ファミリア」を名乗った。

『いや、俺は「アルテミス・ファミリア」団長の■■■■だ』

『同じく「アルテミス・ファミリア」所属、副団長のアタランテだ』

『へえ、そっちは純潔の女神... なるほど、なぐるほど』

そんな光景を見ていたハジメと香織は、彼等が言った「仕える神」に興味を示した。

「ハジメくん、弓人くん達が言ってた神様の名前って...」

「ガネーシャはインド神話、アストレアとアルテミスはギリシャ神話に出てくる神だな。けど『エレン』なんて神聞いたことねえぞ」

オタクであるハジメと、そんな彼と仲良くなるためにアニメや漫画

の知識を蓄えた香織は『エレン』という神がいたか記憶を総動員させるが、どの神話にも該当しなかった。

そんな2人を他所に、エレンは1人1人の顔を見てリオンに視線を止めた。

『エルフの君、面白いなあ』

『私が…？』

『うん、潔癖で高潔。しかし確たる答えを持たない…。そんな雛鳥のような君が、こんな時代に、どんな風に染まり【答え】を出すのか、興味尽きないよ』

悪意もなく、興味深く彼女を見るエレン。

リオンはそんな視線に居心地悪くしていると、アリーゼがリオンを抱き寄せ男神を睨み始めた。

『なんだかその言い方、いやらしいわ！リオン、きつとこの神様も『フヒヒ』とか笑い出す変態よ！』

『あ、やめて。本気で傷つくからやめて！俺そーいうモブ神とは違うからあん！』

『神様はみんなそう言いますよね！』

『ぐふう！ボーイツシュ元氣っ子だと思つたら…。さては君、天然だなあ？』

美少女達からの口撃に、エレンは涙目になりながら体をくの字に曲げる。

そんな情けない姿を見て、リオンは肩透かしを受けていた。

『お前らその辺にしとけ、こんなんでも神様なんだから…。』

『まったくだよ、もう少し俺に優しく…。えっ待って、今こんなんつて言つた？』

『まあいいじゃないですか、そんなこと』

『おつと良いのかい？それ以上俺をいじめると、良い歳した男神が公衆の面前で泣き叫ぶことになるよ？』

少女たち以上に雑な扱いをする弓人？に、エレンは自分を人質にするという新しい脅し方をした。

流星に男の号泣する姿という見苦しいものを見たくない弓人？は

エレンに謝罪をする。

『すみません、謝るので泣くのはやめてください』

『なら... お詫びとして1つ俺の質問に答えてほしい』

『質問?』

すると、エレンは先ほどまでの空気を霧散させ。その閉じていた目を薄く開き質問した。

『君にとって【正義】とは?』

『... なんで俺に聞くんですか?』

『そうだね... この中で、君だけが君なりの答えを見つけているから... かな』

そんなエレンに対して、弓人?は頭を掻きながら質問に答え始めた。

『そうですね... 俺にとっての【正義】は、【誰かの為に動くこと】... ですかね』

『なんで、そう思うんだい?』

『人間って... 結局は自分本位な生き物じゃないですか。自分が楽をしたいためとか、自分だけでも生き残りたいとか』

弓人?の言葉を、エレンは静かに聞く。アリーゼたちも、彼の言葉に聞き入っていた。

『そんな中でも、『誰かを愛したい』とか『誰かを守りたい、助けたい』とか考えれることって凄いことだと思うんですよ』

『へえ... 『愛したい』も、君にとっては凄いことなんだ』

『だって、『愛したい』ってその人と『一緒に生きたい』ってことじゃないですか。例えばそれが偽善であったとしても、自分本位な生き物が他の人にそう思えるって凄くないですか?』

そして、弓人?はまるで少年のような笑みを浮かべながら言った。

『まあ... あれです、こいつらは『みんなの笑顔』を守る為に戦ってるので、俺は『こいつらの笑顔』を守るため戦います』

『なるほど... うん、参考になったよ。ありがとう... じゃあ、またね』

そう言って離れていくエレン。その方向の先にはハジメと香織が

いて、2人をすり抜ける直前、その男神は呟いた。

『彼のそれは、『繋がりを見失いたくない』というものから来てる…もし、守りたい彼女たちから拒絶された時、彼はどうなっちゃうんだろうなあ…』

その言葉を聞いた瞬間、ハジメの脳裏には『あの光景』が浮かんだ。

—仲間が守れるなら、その仲間たちから拒絶されたとしても俺は構わない

あの時の寂しそうな背中と何か関係があるのだろうか

その答えは、この後見せつけられた光景で知ることになるが

ハジメと香織…いや、弓人以外の全員がこの過去を見たことを後悔することになる。

80星：運命の日【上弦】

『ヘルメス・ファミリア』の偵察によって、イギリス闇派閥の新たな拠点が見つかった』

景色が変わり、街の通路から大型の会議室の様な場所になった。

そこには様々な種族が座っており、それを仕切っていたのは金髪の少年であった。

「ライラちゃんもだったけど、あんな小さな子まで……」

「周りは気にしてないところから見て、かなりの実力があるんだろうな」

バルウム小人族の存在を知らないハジメと香織は、目の前の少年……「ロキ・ファミリア」団長フィン・デIMUMナ（当時35歳）を見た目通りの年齢だと勘違いしていた。

そんな2人に真実を伝える者は今はいないため、2人の勘違いが進んだまま進行していく。

『廃棄された施設を利用しているようです。これまでとは異なり、かなりの規模……それも3つ。内部までは探れませんが、一般人を装った見張りの数から見ても『本拠地』である可能性が高いです』
椅子から立ち上がり、情報を提供するのには水色の髪で眼鏡をかけた女性……アスファイ。彼女が説明を終えると、フィンが今回の作戦の説明を始めた。

『ヘルメス・ファミリア』の情報を精査し、ギルド上層部も敵の棲家であると判断した。そこで、この3つを同時に叩く』

『1つは「アストレア・ファミリア」が行くわ！』

フィンが攻撃の意思を口にした瞬間、アリーゼが真っ先に立ち上がり参加を表明した。

『まだ僕は何も言っていないけど？』

『本拠地に突入する「ファミリア」を募るのでしょ？都市最強の「ロキ・ファミリア」と「フレイヤ・ファミリア」が別れるのは当然として、残った1つには私たちが行くわ！機動力なら負けはしないもの！』

アリーゼの発した言葉に、ハジメと香織は自身の耳を疑った。

「え!? 弓人くんのいるファミリア? が一番強くないの!?!」

「あのフィジカルゴリラより上がいるとか... オラリオこええ...」
そんな2人を他所に、話は進んでいく。

アリーゼが参加の意思を伝えると、青髪の女性が手を上げた。

「なら、アリーゼたちには我々が『いや、俺たち「アルテミス・ファミリア」が行こう』 ■■■?』

『理由を聞いても良いかい?』

『シャクティたち「ガネーシャ・ファミリア」には本拠地周りにいる一般人の誘導をしてもらいたいからだ。都市の憲兵の指示ならある程度従ってもらえるはずだ』

弓人?の言葉にフィンは少し考える仕草をした後、弓人?に視線を合わせ頷いた。

『うん、なら1つは「アストレア・ファミリア」と「アルテミス・ファミリア」が、1つは僕たち「ロキ・ファミリア」が、最後の1つは... オツタル、君たち「フレイヤ・ファミリア」で良いかい?』
『良いだろう...』

フィンの言葉に、先程まで静かに聞いていた亜人の男が頷いた。

『作戦の決行は3日後にする。敵に語られないよう準備には細心の注意を払ってくれ... それでは、解散』

その言葉と共に各々が離れていく中、弓人?は席に座ったまま何かを考え込んでいた。

『何か気になる事があるのか?』

『リア... ちよつとな』

彼に声をかけたのは、緑髪が特徴の美しいエルフの女性であった。

そんなリアと呼ばれた彼女に弓人?は視線を向け自身の考えを話し始めた。

『なんか見落としてる気がしてな...』

『それはいつもの勘か? 仮に畏だとしてもそれを想定して動く決まっただろ』

『... 流石に考えすぎか』

『それより…っ、次はいつ【黄昏の館】に来るんだ…？』

リアの問いかけに弓人？は首を傾げていると。彼女は早口で捲し立て始めた。

『あ、あれだぞ！お前が最近授業を受けにこないせいでアイズが寂しがつているからで別に私が来て欲しいとかそういうわけではないからな！』

『わ、分かった。3日後の作戦が終わったら行く『本当か！』お、おう…えらい食いつくな』

『3日後だぞ！約束だからな！』

弓人？の言葉を聞いて、リアは上機嫌に離れていく。

ハジメと香織は、この朴念仁の女性関係についてもう考えないようにした。

そして景色が変わって、場所は路地裏。

空は緋色に染まっており、そこには様々な装備を身につけた者たちが忙しなく動いていた。

『副団長【ディアンケヒト・ファミリア】からの物資が届きました！』

『分かった、全員に行き渡らせる』

『はい！』

【ファミリア】の団員に指示を出すのは、団長の弓人？ではなく副団長のアタランテだった。

そんな弓人？は少し離れた位置で座り込み静かに目を閉じていた。

『少しよろしいですか？』

『リオンか、どうした？』

『■■■■…必ず勝ちましょう』

『—ああ』

そして、作戦が開始された。

『て、敵襲うううううううう！』

魔法により扉を破壊し、一気に突入する【アストレア・ファミリア】と【アルテミス・ファミリア】の者たち。

闇派閥の者たちは、突然の出来事に驚愕に襲われた。

『戦闘は副団長と■■■■■さんに任せて、私たちは倒した闇派閥を拘束するんだ!』

「アストレア・ファミリア」の者たちが先陣を切り、「アルテミス・ファミリア」のアタランテと弓人?が援護を、それ以外の者たちが拘束をしていく中、アリーゼが弓人?に話しかけた。

■■■■■! 私たちは一気に奥まで行くから、ここを任せて良い?」
「…待て、ここまで上手く行き過ぎている」

闇派閥の奴らは激しく抵抗しているが、ここは敵の本拠地。

味方の部隊に目立った損害がないことが、かえって不気味であった。

『これが畏だとしても、作戦続行よ! 相手も施設内の人員を大勢失つてる! このまま最後まで畳みかけるべきだわ!』

しかし、アリーゼは意志の統一を叫んだ。

その瞳には決して引かないという強い決意に満ちており、それを見た弓人?はため息と共に「アルテミス・ファミリア」の団員に指示を出した。

『聞いたなお前ら! ここをさっさと片付けるぞ!』

『『『『了解!』』』』』

『ありがとう! さあみんな、行くわよ!』

こうして2手に分かれて、敵の拘束を行っていく弓人?たち。

しばらくすると、1人の団員が驚愕の声を上げた。

■■■■■、■■■■■さん!? これを見て下さい!』

『何があった…って、なんだよ…これ』

彼の視線の先にあった者は、意識を失い倒れた闇派閥…の身体中に身につけられた赤い鉱石だった。

『奴らが『撃鉄装置』を盗んだ理由はこれか!』

『これ…全部『火炎石』じゃねえか』

『なっ!? こんなのが炸裂したら、こいつらだって…まさか!』

自爆装置

自身の命も顧みない闇派閥の者たちに、「アルテミス・ファミリア」

の者たちは恐怖した。

そんな中、冷静さを取り戻した弓人？は口早に指示を飛ばす。

『誰でも良い！このことを外にいる「ガネーシャ・ファミリア」に伝えろ！』

『な、なら自分が！』

『アタランテ、俺はアリーゼたちにこのことを伝えてくる！だからこの指揮は任せたぞ！』

『わ、分かった！』

そして弓人？はアリーゼたちが進んで行つた奥へと走り出す。

その通路には、倒れる闇派閥イヴァイルスばかりで爆発した様子はなかった。

こうして奥へと進んだ先には

闇派閥イヴァイルスを無力化していくライラたち

桃髪の女と戦うアリーゼと輝夜

そして、闇派閥イヴァイルスの少女へ優しく手を伸ばすリオンがいた。

『もう大丈夫です。だからそんな危ないものは捨てて下さい』

瞳に涙を浮かべる少女へ、優しく笑みを向けるリオン

そんな彼女に少女は、手に持つナイフを捨て。左手を自身の懐へと伸ばしていた。

「リオンさん離れて！」

自爆装置の存在を見ていた香織が必死に声をかけるが、当然聞こえる訳もなくリオンは少女へと近づいていく。

そして、少女の左手が懐に触れそうになった瞬間

「……………え？」

1本の矢が、少女の額を貫いた。

80星：運命の日【下弦】

「アルテミス・ファミリア」と一時的に分かれた私たち「アストレア・ファミリア」は、敵本拠地の奥へと進んでいく。

そこには、闇派閥幹部【殺帝】アラクニア ヴアレッタ・グレーデが邪悪な笑みを浮かべ佇んでいた。

『【殺帝】、施設内は制圧したわ！だから大人しく降伏しなさい！』

『ヒヤハハハハ！それを聞いてハイソーですかつて降伏する奴がいるとでも思ってたのかあ？殺るぞてめーら！』

その瞬間、潜んでいた闇派閥が私たちを取り囲んだ。

そして、乱戦に近い形で戦いの火蓋が切られた。

『おいおい、この程度かよ【紅の正花】スカレット・ハーネルに【大和竜胆】！』

オラリオでも突出した【Lv. 5】のヴァレッタに、アリーゼと輝夜が。

共に【Lv. 3】の2人はステイタスの差を『技』『駆け引き』そして『連携』でどうにか食らいついていた。

加勢しようにも、突入時にいた奴等より質の上がった敵兵が邪魔をする。

しかし、私は今回の作戦が成功することを確信していた。

あと少しで、彼が来る。

【Lv. 4】の彼が来れば、ヴァレッタも捕らえられることが出来るはずだ。

『あ、ああああ！』

突如、私の背後から聞こえる甲高い叫び声。

反射的に木刀を薙ぎ、背後からの攻撃を弾いた。

そして、私は目を疑った。

『あ、あああ…』

『い、こんな幼い子まで…』

視界に飛び込んできたのは、周囲にいる闇派閥の戦闘員と同じ頭巾とローブを纏う少女だった。

私たちより幼いのは瞭然で、少女はナイフを握りしめ瞳に涙を浮かべていた。

私は何度目になるか分からない怒りを闇派閥イヴァイルスに覚える。

すると、少女は私の顔を見て軽い悲鳴を上げ後ろに下がり始める。可哀想だが少し気絶してもらおうと木刀を振り上げようとした瞬間、彼の言葉が脳裏をよぎった。

―人を赦すのは… お前の『正義』に反するか？

そして私は、武器を下げ少女へ手を差し伸べた。

『安心してください。私は貴方を傷つけません』

『……』

『もう大丈夫です。だからそんな危ないものは捨てて下さい』

できる限り怯えさせないように笑いかけ、ゆっくりと近づく。

少女は、私の手と自信が持つナイフを交互に見た後ナイフを手放した。

『おとうさん… おかあさん……』

きつと無理矢理やらされていたのだろう、少女は私に手を伸ばしていない方の手を自身の胸元へと持っていく。

そして少女の手が私の手に触れそうになった瞬間

少女の額を1本の矢が貫いた。

私を狙った物なのか、それとも少女を狙ったのかそんなものはどうでもいい。

私は少女を殺した者を裁くため矢が放たれた場所を見る

『……… え？』

何故

何故よりによって

貴方なのか

――
先ほどまで剣戟が鳴り響いていたのが嘘のように静まり返っていた。

【アストレア・ファミリア】の少女たちは、ありえないものを見る目で彼を見ていた。

そんな彼は、まるで機械の様な表情で詠唱を開始した。

『【我が宿命、月女神に乞い願う】』

『…ちっ【三星の狩人】折角面白れえもんが見れそうになったのに邪魔してんじゃねえよ』

弓人？が詠唱を続ける中、【殺帝】と呼ばれていた女は不機嫌さを隠すことなく悪態をつく。

女と対峙していたアリーゼと輝夜はその言葉に疑問を持つが、女は構わず話し続ける。

『まあいい、『花火』はまだ残ってたよ！てめえらもさっさと始めろ！』

その言葉を聞くが否や、闇派閥の者たちは自身の胸元の撃鉄装置に手を伸ばそうとするが

閃光が走り、鮮血が舞った。

『やめてください…！』

敵を、短剣で斬り殺した。

『やめて…！』

敵を、弓矢で射殺した。

『やめろ…！』

敵を、拳で殴り殺した。

『やめろおおおおおおお！』

リオンが叫ぶが、彼は止まらない。

そして、『地獄』が作られていた。

『うっ…！』

「香織、大丈夫か？」

香織は、ここに来て何度目かになる吐き気に襲われた。

今回は前世の姿とはいえ、仲の良い幼馴染が人を殺している場面の為精神的ダメージも大きいようだ。

『くそ！使えねえクソザコどもがあ!!』

『後はお前だけだ…ぐほっ?!』

そして弓人？が女に近づこうとした瞬間、彼を包んでいた光が無くなり口から大量の血を吐き出した。

そして彼の体から、何かが千切れる音と砕ける音が鳴り響き始める。

それを見た女は、邪悪な笑みを浮かべる。

『ヒビ、ヒヤハハハハハ！なんだよ、私を殺るんじやねえのか？』

『くそ…ここでかよ…』

『お前のせいで最高のショーを見損ねたんだ。絶対に殺してやるよ』

【魔法】の反動により立っているだけでやっとの状態の彼を殺そうと、女は武器を振り上げ襲い掛かる。

アリーゼたちは彼の生み出した光景に放心していたせいで、反応が遅れてしまった。

しかし、女の武器が当たりそうになる直前、1つの人影が弓人？へ飛びかかり紙一重で助けた。

『■■■■！大丈夫か!？』

『ア、アタランテか…』

『【あの魔法】を使ったのか…全員、全力で■■■■を守れ!』

『『『『了解!』』』』

アタランテの指示で、弓人？を守る様に立ち塞がる【アルテミス・ファミリア】の団員たち。

不利だと感じた女は後方へ下がり忌々しげに彼を睨みつける。

『【三星の狩人】お前だけは私が必ず殺してやる…』

『なっ、待ちなさい!』

アリーゼが追いかけてようとするが、女は自身の持っていた武器を投げつける。

アリーゼが咄嗟に剣で受け防御するが、その時には女の姿がどこにも無かった。

『何故…殺したんですか…』

アタランテの肩を借り、どうにか立っていた彼にリオンは震える声で問いかける。そんな彼女の腕には、彼が最初に殺めた少女の亡骸が抱えられていた。

『お、おい落ち着けよりオン…■■■■にも何か理由があったんだろ…』

『それでも！殺す必要はなかったはずだ！』

『…… お前たちを守るのに、他に方法が思いつかなかった』

彼が発した言葉に、リオンは怒りを通り越し憎しみに近い視線を向け叫んだ。

『ふざけるな！こんな…… こんな血に塗れたものが【正義】なはずがない！』

『なっ、取り消してください！ ■■■■さんはこいつらが身に『やめろ』 ■■■■さん!?!』

『いい…… いいんだ』

【正義】それは、前の映像で彼が言った【誰かの為に動くこと】ということを指しているのだろう。

彼女の言葉を否定しようとする団員の言葉を、彼は遮る。

そして、何も言わずにリオンの言葉を聞き続けていた。

『私は認めない…… 貴方は闇派閥イヴァイルスと同じ、唯の『人殺し』だ！』

その言葉を最後に、突如ブレーカーが落ちた様に景色が最初の暗闇に戻った。

81星：いつも通りの笑顔

周囲が暗闇に包まれた瞬間、足元に魔法陣が展開され輝きが視界を塗りつぶす。

浮遊感に包まれ、光が収まると神殿のような建造物がある空間へと転移していた。

「ハジメくん、ここって…」

「多分、メイル・メルジーヌの住処だと思うが…」

神代魔法が手に入る解放者の住処に到着したが、ハジメと香織の表情は優れないままだった。

すると、2人が出た場所とは違う位置にある魔法陣が輝き出し光が爆ぜる。その先には、巨大クリオネから逃げる際一時的に離れ離れになっていたシアとティオの姿がそこにはあった。

「あつ、ハジメ…」

「シア… それにティオ… 無事だったか」

「う、うむ…」

魔法陣から現れた2人も、どこかよそよそしい。おそらく2人も『あれ』を見てしまったのだろう。

そして、先程シアとティオが現れた時のように別の位置にあった魔法陣が輝き始める。

光が収まった場所には、いつもの調子でいる弓人とそんな彼の手を握りしめ泣きそうな表情で俯くユエがいた。

「なんだ、先に着いていたのか」

「弓人…」

「ん？どうしたよお前ら」

彼の過去を見てしまった罪悪感から表情を暗くするハジメたちを見て、弓人は「そういうことか…」と呟いた後、自身の頭を掻き始める。

「あく… その感じだと見たのか？」

「… すまん」

「おいおい、なんで謝るんだよ？別に謝ることじゃねえよ」

全く気にしていない様子の弓人に、何故か苛立ちを覚えたハジメは思わず咳いてしまった。

「なんで言ってくれなかったんだよ…」

「いや、昔言っただろ？ほら、樹海の時に」

「けど… あんな事を言われてたなんて…」

「それに、別に言う必要もないしな。前世の事だしお前らには関係ないだろ？」

関係ない

その言葉に香織は思わず叫んでしまった。

「そんな言い方ってないよ！」

「香織？」

「ハジメくんに… 心配してくれてる友達に関係ないってそんなのな
いよー！」

「…… はあ」

「私だって！言ってくれたら「言って何になるんだよ」… え？」

「だから、仮にそれを言って何になるんだよ」

そう言い放った彼の表情を見て、香織は… いや、ユエを除いた全員が息を呑んだ。

その表情は『無』だった。

先ほどの調子が嘘だったかのように、その顔から表情が抜け落ちていた。

「どんな言葉を並べても、俺は自分の意思で闇派閥を… あの子を殺した」

「け、けど… あれはリオンさんを助けるために…」

「人を助けるためなら殺しをしても赦されると？」

「そ、それは…」

「それとも何だ？『あれは仕方なかったんだ、だから俺は悪くない』と泣き喚けばいいか？」

淡々とぶつけられる言葉に、香織は次第に何も言えなくなる。

それを見た弓人は、今度は自身の手を握っているユエに視線を移し

た。

「ユエもいい加減手を離せ」

「やだ…」

「お前も見ただろ、俺はお前が思ってるような上等な人間じゃない」

「やだあ…」

「…… たのむ」

ユエは駄々をこねるように首を横に振っていたが、弓人が眩くように零した懇願に嫌々手を離した。

その様子には彼はほんの一瞬顔を顰めたが、直ぐに元の無表情に戻りハジメたちの方へ顔を向ける。

「それより、さっさとあの神殿にいつて魔法と証を取ってきたらどうだ？」

「ユ、ユミト殿は来ないのかえ…？」

「どうせ行っても俺は手に入らないだろうしな… 後、少し1人にしてくれ」

「わ、分かったのじゃ…」

「安心してくれ、お前たちが戻ってきた時には『いつも通りの三星弓人』になってる」

その言葉に誰も答えることが出来ず、結局ハジメたちは弓人を残して神殿の方へと歩いていった。

そして残った弓人は1人天井の水面を眺めていた。

「かつこわり」

いずれバレる事だったのに、

目を逸らして蓋をして、

それでバレたら開き直って八つ当たり。

「ガキだな… 俺って」

あの光景は、今でも夢に出る。

吐きそうになる程周囲に漂う血と死んだヒトの臭い。

徐々に冷たくなってくる返り血の温度。

そしてあいつらに向けられた視線。

あの時

あの子を殺した時

自分の中にあつた何か大切だったはずのものが無くなった。

大切だったはずなのに、思い出せないなにか。

「アルテミス… 君なら知ってるか？」

思わずそんな事を呟いていると、魔法と証を手に入れたハジメたちが戻ってきた。

思いだぜ、俺はどんな風に笑っていたか

思いだぜ、俺はどんな風に喋っていたか

思いだぜ、俺はどんな道化を演じていたか

「戻ってきたな。で、どんな魔法だったんだ？」

だからそんな顔をしないでくれ

ほら、いつも通り笑ってるだろ？